

# SAO一黒剣と鼠

だけたけ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自分たちはまだ知らない。あの話のもしかしたら……アルゴの……ハキの……恋物語を……ボスを倒すと息巻いていたハキはアルゴの前で倒れてしまう。そこから嘔み合い出す歯車。この物語の結末は？

※素人なので結構グダったり、物語の展開が早かったりと違和感を持つかも……

# 目次

## SAO編

1話	SAO	1
2話	一旦の別れ	7
3話	修行	12
4話	再開	20
5話	成長	26
6話	ハキの現状	35
7話	黒の剣士	47
8話	ハヤト	61
9話	とっておき	75
10話	最後の攻略	85
11話	妹	109

## ALO編

12話	朋と言う人と真実	121
13話	リーファ	135
14話	感覚のズレと無口な少女	166
15話	ユキ	183
16話	アルン	193
17話	アルゴ(彼女)とユウキ(妹)	
	とデートの約束……何このシ	
	チュ……	209
外伝		
外伝	通じる心	222
外伝	新たなる創造主(1)	



## SAO編

## 1話 SAO

「いよいよ今日だな?!」

興奮気味で話しかけてくるのは俺、拓の友達の隼人だ。

「まあ、拓はシステムアシストとかいう奴は無理だろうけどな!!!」

……こいつは友達じゃない。断じて違う……

「ん?どちら様ですか?赤の他人ですよ?」

「ひでえ!!!」

「どつちがだよ!」

「あ、今日遅めにログインするから隼人、先にログインしといてくれ」

「ん?どしたんだ?… ってあれか」

「そうだ。あれだ」ニヤリ

俺はαテスターだ。周りには秘密なのではやししか知らない。正規版で色々特典が



!!!

色々な怒りの声が聞こえる中、1人の少女が人混でバランスを崩し転んでしまった。周りはそんな少女には気が付かない。いや、少女じゃなくて女子か?… ってそんなこと考えてる場合じゃねえ!!!色んな人に踏まれそうな女子の手を握り、強引に立たせ、人混みの外に連れていく。多分女子の目の前にはハラスメント表示が出るだろう。でもそんなことを気にせず連れていく。あー…………… またやつちまった…………… 直ぐに行動に移すのは悪い癖だ……………

「あ、ありがとナ」

オレンジ色の髪…………… いや、黄色か。っていうか髭のペイント? 可愛いな…………… ってそういう事じゃなくてだな……………

「お、おう、んで、これどうなってんだ? なんでみんなこんなに怒ってるんだよ」

思考が読まれている訳でもないのに何故か、恥ずかしくなり強引に話を変える。

「え? あの場にいたんじゃないの力?」

「ああ、リアルの予定合わなくてついさっきログインしたばっかだぜ!!」

何故か自慢げに言う男に女子は…

「…ぷツ… ニシシツ…………… 面白いやつだな!」

「お、おう、そうか?」

いきなり元気になり、驚いた。多分これが本調子：。でも無さそうだな。笑顔がひきつってる。返事をする。次は女子が口を開いた。

「アルゴ、ダ」

「ん？」

「オイラの名前だヨ。アルゴ」

女性：…… もとい、アルゴは自己紹介をした。

「俺はハキだ!!!よろしくな！」

「よろしくナ!とところでオイラは情報屋なんだ。今回の騒動のこと知りたいならこれはあるのか？」

親指と人差し指の先っぽをくつつけて笑いながら言う。

ま、まじか金あるかな：…… 窓を開いたらしつかり初期値：……

「なんてナ!こんな情報、価値もないヨ。ここの誰かさん以外みんな知ってるんだもんナ」

「お、おい!なんか意地悪だな?!

「ニシシツ、反応が面白いからだゾ？」

それからアルゴは話し始める。ログアウト不可な事。空に巨人みたいなやつが出てきたこと。そして……



デスゲームになったこと

~~~~~

「アルゴ、俺は今から直ぐにもうひとつ先の村に行く。良かったらついてくるか？」  
色々なことをアルゴに聞いてから俺が聞くと

「ン？オネエーさんに惚れたのか？」ニヤリ

「言つとけ、でもなんかここでアルゴのことを見捨てるよって考えると背中がゾワツてすんだ。」

フウ…… やつとからかわれない方法がわかってきたぜ……

「ふーん…… まあいいヤ。」

「そうか!!じゃあ……」

「お、オイ、まてよナ、そういう意味じゃ……」

アルゴは何か言ってるが、嬉しがってる俺の耳に届くはずもなく……

「良かったあー!いやあ、実はな?断られると思つてビビつてたんだよー!いやあー!ほんとに良かった!」

そう言うのと直ぐにパーティー申請を出して来た。

「え、えとナ……んああ!、わかつたわかつた!よろしくな!ハーフ!」

アルゴはニコニコしてみてくるハキに半分ヤケになつてOKボタンを押した。

「全く……… 大変になりそうだな………」

「なんか言ったか？」

「んや？」

「よっしゃ!!……… じゃあ、早速行くか！」

いきなり走り出すハキに

「お、オイ！待てヨク!!!ハー坊!!!」

これはハキとアルゴの出会い、そしてそのあとの物語だ。

## 2話 一旦の別れ

俺らは次の村に来てクエストを受けた。それも報酬が武器だというのだ。アルゴと違って、全て初期装備同然の俺は迷わずこのクエストを受けた……………のだが……………

「何やってル!!! 蔓の攻撃が来るゾ! 避けロ!」

…………… アルゴがスパルタだア!!! いやね? 言い訳じゃないけど俺は片手剣を使ってるんだけどなんか違和感があるんだよなあ……………

「はあはあはあ…………… やつと倒したあ……………」

ストレージを開いて水を出そうとしたその時…………… 見たことの無いアイコンが目に入った。

「…………… これ、何なんだ……………」

「オイ!!! ハー坊! 今のはなんだ!」

「…………… アルゴ! これ何か知ってるか?! なあ!」

アルゴはあまりの勢いに目を白黒させつつも可視化したウィンドウを覗き込む。

「…………… なんだ? このアイコンハ……………」

「出して見ればわかるだろ!!」

そう言うってから直ぐにオブジェクト化させる。

それから意識は暗転した。

~~~~~

「はっ……… ここはどこだ？おい！アルゴ！いるか?!」

その声は虚しくエコーのような響きを残り消えていった。

「おい!!アルゴ!!!居ないのか?!返事してくれ!」

例えるならば精神攻撃。途方もない虚無感に耐えられなくなり、涙を流し始める。

「ア……ルゴ………」

叫びすぎて声が出なくなった。もういいや………と諦めそうになった時……

「はあ………正直に言おう。絶望したよ。」

目の前にいるのは自分。ただ色がない。いや、ないと言うより見えない。ただそこには自分が居るのが何故かわかった。自分じゃない自分。自分の鏡写しのような存在がそこには……居る……

「それが俺か？武器も使えず、ただ振り回してるだけ。相棒には叶わなくて……しかもその相棒が女か。いやあー！滑稽で笑わしてもらったよ!」

クツクツクツと笑いながら近づいてくる。でも途端に雰囲気が変わる。

「でもな、そんなの俺じゃねえんだよ。分かるよな？情けなくて見てらんねえんだ。」

「で……でも俺には才能が……」

「あ？才能？必要ねえんだよそんなの。努力だ努力!!!てめえが守りたいものはなんだ!!努力せずを守る？笑わせんな！スキル？そんなの知ったことか。お前の守りたいものはなんだ？」

「……………アルゴ……………」

勝手に口から出てきた。自分でも驚くぐらいスラつと

「だよなあ？……………だつたら守りたいものに守られんのはどう思うよ？」

「情けない……………恥ずかしい……………自分で自分が見てられない……………そのせいで失うのは……………怖い……………」

感情が爆発しそうだ。でも……………でもこの気持ちは嘘だ。だつてそんなはずは無いんだから。

「いい目になったな……………お前は資格を手にした。選べ、絶望とともに力を望むか……………このままでまた愛しきものを失うか」

またつてなんだ？愛しきもの？誰だ？……………いや、自分を偽るのはやめだ。まだ出会ってから数日しかたつてない？知るか。俺は好きになっちまったんだ。アルゴのことを。自分は騙せない。例え、他人は騙せたとしても。自分だけは……………自分で着いた嘘は自分が一番わかっている。失う辛さは母親で知っている。父親で知っている……………

守ろう。愛しきものを。世界で一番好きなあの人を……

「俺に……俺にその力をくれ!!もう何も失いたくない!!」

「わかった、それには土台作りだ」

~~~~~

「出して見ればわかるだろ!!」

そう言うとオブジェクト化を選択した。したのだが、ハキが倒れた。目を開けながら。なんの抵抗もなく。

「ハー坊?……おい?冗談やめろヨ、なア!ハー坊!!ハキ!!」

何度呼びかけても返事がない。目の輝きは失われ、微動打にしない。現実の体が死んだのか?でもまだ数日だ……でも……とうかなんで前触れもなく倒れた? ナーヴギアの誤作動か?でもそれに限っては……

悪い考えが次々と浮かんでくる。アルゴの心を押し潰そうと。

「なん……で……守ってくれるって言ったじゃんカ!!」

涙を流しながらハキを背負いホームへと帰っていく。何度も転びそうになりながらも帰宅した。

ハキの部屋は入れないので自分の部屋のベットにハキを寝かせる。

「ハー坊……戻ってくるよナ?オネーサン寂しいぞ……冗談なら言ってくレ!今

なら怒んないゾ？」

優しく言ってみても目を覚ます気配がない。

「なア、きつくしたのも謝るかラ！ねエ！」

「なんだよ、泣いてんのか？」ということも無くただただ返事が帰ってこない時間が過ぎていくだけ。

「ツ……ハー坊………ハーくん………戻って………来てよ………」

ベットの端でアルゴは泣き続けた

## 3話 修行

「土台作り？」

「まあ……資格得たって言ってもその力は体に結構負担かけるからな、その力に耐えられるように、って感じ。」

「なあ……その力ってなんだ？後、性格変わってないか？」

「……記憶……記憶だよ。前世の。後、作ってたに決まってるだろ？それともあれが良いか？」

「いや、そのままでもいい。」

真面目な顔で言うもんだから笑い飛ばす訳にも行かず……

「ええ……と、俺の前世はなんだったんだ？」

「ん？それは……受け継いだ時に知るからいいだろ。」

胡散臭いが……自分だからだろうか？なんか嘘ついているような感じはしない。しかも、懐かしい……客観的にじゃない……自分のものだった気がする。自分

は……俺は何者なんだ？

「始めるか。」



自分じゃない自分は剣を構える。俺は自分の腰にさげてる剣を抜こうとした。が上手く抜けない。真つ直ぐ引つ張ってるのに抜けないのだ。

「な、なんで抜けない!!」

「はあ……よく見ろよ。直剣じゃなくて刀だろうが」

耳を疑いながらも見てみた。そしたら俺の初期装備……ではなく刀身の曲がった刀が出てきた。

「そいつは持ち主にあつた姿に変わんだ。ほら、あれだαテスター特典つてやつだ。」

「そうなのか……つてええ?!メツチャ強いじゃん!」

「そんないいからかかってこいよ」

テンション上がつてるところにそう言われるとさすがにイラツとする。

「……シツ!!」

「おら!!もつと早く!!おせえ!!」

そう言う自分じゃない自分は俺の背中に目に捉えられないほどの速さで一太刀入れる。

「グアツ……なんでそんなに強いんだ?……自分のはずだろ?……」

「はあ……まだ気が付かねえのかよ。俺は前世のお前だよ。」

心底めんどくさそうに言う。

「ほらかかってこいよ。こつちではあつちの時間の2倍ぐらいあんだ。要はこつちで2日なにかしてても、あつちでは1日しかたつてないんだ。時間はある。俺に一太刀入れろ。器としてはそれで十分だろ」

地獄が始まった。簡単に言うたアルゴよりスパルタだ。うん、これは剣を振る暇もない。これは気が遠くなるだろう。だがやり遂げる。絶対にあの娘を守るようになるために。

~~~~~

「お！アーちゃんじゃないカ！」

「あ、アルゴさん、ご無沙汰してます。ハキさんは……まだ気が付かないんですか……」

アルゴの顔が歪んだのを見て察したアスナは務めて明るく接した。

「あ、最近あつちの方にラーメンもどきが出る店を発見したんです!!行ってみませんか?」

「アーちゃんは相変わらず食いしん坊だナア?ニシシツ」

苦笑とも取れる笑いにアスナも微笑みながら案内をする。

「そう言えばアーちゃん、恋人とは上手くいってるのか?」

「だ、だだ……誰のことですか?!」

「ニシシッ……その反応……いるの力……あ、もしかしてキー坊力？」ニヤリ

しつかりとカマに引つかかったアスナは必死に取り繕おうとする。身振り手振りです得を試みようとするが……

「ち、違つ、違ひますよ!!!断じて違います!ぜ、絶対に!!!」

「アハハッ………思いどうり過ぎて笑いが止まらないぜ……アハハ………ありがとうナ、アーちゃん」

「え?なんのことです?」

「んヤ?なんでもないヨ」

そんなこんながあつてアルゴはホームに帰つてきた。相変わらずホームに入った途端に気分は暗くなる。最近わかつてきた。オイラ………いや、私はハキのことが好きなんだと………でもそのハキは意識がないまま。こつちでは何も出来ない歯がゆさに耐えられなくなり、なるべく一緒にいる時間が増えた。情報は集められなくなり、収入はあまりない。簡素な部屋に色々と家具を詰め込みあまりスペースはないしハキはベットを使つてゐるため、アルゴの寝るところは同じベットになる。

いつもどうり、ハキはベットの上で寝つ転がっていた。

「いつもの事とはいえ、は、恥ずかしいナ……／＼／＼／」

そそくさとベットのの中に入り寝ようとした。

「ねえ？ハキ？……もう1年だヨ？早く戻ってきてクレヨ……お願いだか

ら……ねエ……」

涙をこらえるためにハキにしがみつく。その温もりを感じながらアルゴは今日も眠りについた。

~~~~~

「はあはあはあ…… やったぞ…… 2年かかった…… やつとだ……」

「フウ…… ついにやったな、おめでとう。」

前世の俺は手を差し出してきた。俺はそれを掴んで起き上がる。

「あつちでは1年たってるんだっけ？アルゴは無事なのかな？はあはあ……」

「ああ、問題ない。別の人が守ってたみたいだな」

前世の俺は安心させようとしたのかもしれないが、今の俺からしたら逆効果だった。

「ナツ?!誰だ?!そいつ!もしかして…… アルゴの…… うわああー!!!過去の俺!

早く返してくれ!!あの世界に返してくれえー!!」

「お、落ち着け!とりあえず力を……」

「そんなの知るか!!いてもたってもいられん!!」

これが全く聞こえてない……一切聞こえてない。ので手刀を打ち込んだ……はずだった。というのも受け止めたのだ。死角から襲ってくる気配を頼りに。

「成長したな……あーあ……これでお別れか……拓、お前は守りきれよ？ 絶対にだ」

そう言うとき過去の俺は光となつて俺の中に吸い込まれて行つた。多分これが力の継承なんだろう。

ズキツ……

「ツ……頭いてえ……これは……過去の俺の記憶か？……」

フィードバックしたのは血だらけの女の子。アルゴではない。だが昔、愛おしく思つていた子……

『うあ……うっ……うわあー!! やめろ!! 辞めてくれ!! 俺から何も奪わないでくれ!! お願いだ!!』

容赦なく流れていく血の海。

『うわあー!! やめろおー!! やめてくれ!! もういいだろ!! 俺から奪わないでくれ!!』

俺の頭の中に入ってきたのは悲しい物語と才も無いのに剣で戦い抜いた男の物語。

「そうか……そうだったのか……過去の俺……いや、虚白、お前は……」

わかつた、守り抜く絶対にだ。だから安心して眠れ……」

右目だけから涙を流しながら、決意を新たにする。

血まみれの少女……アルゴに似た少女を見据えながら出口へと向かう。

~~~~~

「はっ……戻ってきたのか？」

久しい風と色。景色何もかも考え深い。そして甘い匂い……ん？甘い匂い？  
ギツギギイイ……という音がなりそうなほど恐る恐る右横に顔を向ける。何もな  
かった。

「フウ……」

安心したのもつかの間。起き上がろうとすると体に何かしがみついているような  
感覚があった。うん？なんだ？これ……

「え？」

黄色い何かが見えた。アルゴだ……ってええええー?!?! 待つて?! え?! アルゴさん  
積極的いー!!……じゃなくてだな!! え? どういう状況?! つか離してくれないん  
だか?!

試行錯誤していると……

「んんー……ハー坊……」

アルゴの目は涙で濡れていた。抵抗する気も無くなり、一言だけ声をかけた

「ゴメンな、ただいま、アルゴ」

## 4話 再開

朝、目が覚める。いつの間にか寝てたようだ。目元に涙の感覚が残っている。昨日、しがみついたことを思い出すだけで顔が赤くなる。さてとベットから出て家事をやるか。

「ふあああ……」

「起きたか、アルゴ」

耳を疑った。聞こえないはずの音が聞こえた。いや、もう聞けないかと思っていた愛しき人の声が聞こえたのだ。急いで振り向く。そこにはハキが笑顔で体を起こし座っていた。

「……………ハキ?……………」

「おう!ハキだ!」

おちやらけて返事をされるのも久しぶりだ。全てのことかどうでも良くなった。ハキが起きた……………ついに起きた……………そう考えると涙が溢れ出て来て目の前が上手く見えなくなった。

「…ツ…ハキ……………ハキ!!!どこいってたんだ!ずっと心配してたんだゾ!もう……………」



もう一生氣が付かないのかって……このバカ！バカ！バカ！」

感情が一気に膨れ上がってくる。泣きながら……力なくハキのお腹を殴りながら……今までの気持ちをぶつける。

「……………アルゴ……………ただいま……………ゴメンな、心配させて」

「……………ハキ……………おかえり……………もう……………次はないゾ？」

そう言うときアルゴは抱きついてきた。ん？だき？え？ええー?!アルゴはどうなっちゃったんだ?!ん?!ってそこじゃねえー!!

「あの……………アルゴさん？」

「……………なんダ？……………」

多分それぐらい寂しい思いをさせたのだろう。体が小刻みに震えている。

「……………いや、なんでもない……………」

そう言うってから抱き締め返す。正直すごい勇気がいるんだが？っていうか俺って正解だったのか？ビクツと体をふるわせたが慣れてきたのか、次第に体を預けて来る。フウ……………どうやら正解だったらしい。っていうか、か、可愛い……………いや、天使か?!ってそうじゃない……………どんだけ俺は脱線するんだ……………

「アルゴ……………俺は絶対にお前を守る……………絶対だ……………」

新たな決意をする。あきらめそうになったあの頃とは違う。もうこの手は離さない。

さらに強く抱きしめる。

「…………… うん…………… ありがとネ、ハーくん……………」

「おう……………」

「…………… ところでハーくん、オネーサンを抱きしめるのはセクハラだゾ？」

「あ！おま、ズリい！俺からもやり返しするからな！」

「へえ！何すんだろうナ？ニシシッ」

そう入ってもまだ心の準備が…………… ま、まずは深呼吸して… それから… も、もう

1回しとくか？ど、どうしようか…………… ああー!!! 混乱してきた！

アルゴが不安げに見つめてくる

ぬアアー!! そんなめで俺を見ないでくれ!! さらに言いずらくなる！だアアー!!!

「…………… だ」

「ん？何だつテ？」

「アルゴ、お前のことが好きだ!!!」

「ふええ？」

いきなりのことで目を白黒させる。言葉をあたまのなかでもう1回再生したのだから。みるみるうちに顔が赤くなっていく。

「お、オイラ…………… いや、私もす、好き…………… です…………… / / /

え？今、私って？え？キャラ作ってたの?!ん？でもいや、作ってるのは（私）の方か…… ええーい！男だろ！俺！根性見せろ！

「つ、付き合ってくれ!!!」

「え、あ………んと………よ、喜んで………／／／」

アルゴは恥ずかしそうにして、それから俺が見た中で一番の笑顔を見せた。

「ところでハーくんって？ハー坊じゃないのか？」

悪戯っぽく言ってやった。すると

「だめか？」

上目遣いはずるいです。アルゴさん 可愛すぎるだろ……

~~~~~

「ええーと……… ハキくんだったかしら、私は血盟騎士団の副団長のアスナです」

「ど、ども」

アルゴに連れられてここまで来たんだけど…… 誰？いわゆる攻略組ってやつ？

「ハキは1層からボス攻略でてないし知らないのも無理ないナ」

「そうなのか、あ、次から俺はボス攻略出るぞ!!!」

「ハキ君はダメ！レベルが足りない！」

そうだ、ずっと体は寝たつきりだったのでレベルも上がってなく、15レベだったの

は記憶に新しい。だが…

「安全マージンは階層数プラス10レベだろ？俺の今のレベルは60レベル、55層まで進んでるからあと5レベか」

「ハーくん?!いつの間にかそんなにレベル上げたんだ?!」

「いや、情報収集の合間にアリの巣もぐったりして…」

正直に話す。やっぱり無茶なこととしてた自覚はあるだけにこのあとが怖い、隠すとあとが怖い。

「ハーくん…なんでそんな無茶したんだ!!!またオイラの前からいなくなるの力?!もうやめテ!!!」

「わ、分かったよ…ゴメンな、アルゴ」

アルゴが泣きそうになり、頭をポンポンと優しく叩く。

「むう…帰ったら話し合いだゾ。」

「わーたよ(苦笑)」

途端に笑顔になる。一連のやり取りを見ていたアスナは複雑な顔で…

「なんて言うか…仲良いのね…アルゴさんがそんな反応するなんて…」

「そりゃ付きあつ…ムグッ」

「あー!!あー!!!そ、そうダ!!!アーちゃん!!!あそこ行こうヨ!!!」

アルゴは俺の口を押え誤魔化すように強引に話を変えた。：  
それは……………  
つてか、無理あるだろ

「ふふふ……………いいわよ、行こう!」

その返事を聞くとアルゴはあからさまにほっとした顔になり、俺の手を引つ張つていく。いや、嬉しいんだけどな?隠した意味ないぞ?な?ほら、アスナも微笑ましそうに見てるし……………これ言ったらアルゴに意地悪されそうだから言わんとこ……………

「お、おいアルゴ待って」

こうして俺たちは普通の：でも無いが生活を取り戻した。

## 5話 成長

俺たちはあれから色々話しあった。今後のこと、それからボス戦のこと。

「ハーくんはまだ実践が足りないナ。いくらレベル上げたって戦い方がなつてなかったら一緒だヨ?」

ニヤツと笑いながらしごきカナ?と続ける。

「ああ〜多分大丈夫だぞ?とりあえず行こう!」

「お、オイ!!!どこ行くんだヨ!!!」

俺はアルゴの手を引っ張りながら目的地まで走っていく。アルゴは顔を真っ赤にしてハキは一心不乱に。目的がクエストって言うのでなければバカップルと言われても文句は言えないだろう。現に周りの反応は…:

「リア充め!」爆発しろ!!!むしろ爆裂しろおおー!!!」

などなど、アルゴは美少女なのだ、こんなものを見せられたら非リア達は激怒も必然だろう。2人はその様子に気が付かず、周りにピンク色の空気を振りまきながら走り去っていく。

~~~~~

「このクエストって…… 中ボスクラスじゃない力!!無理だヨ!!」

「1つ目の巨体が棍棒を振り下ろしてくる。」

「んー…… この程度か? …… 遅いなあ……」

「何言ってるんだ!!!こいつ強いゾ!!!」

アルゴから見たら速度はそこそこだが力が強すぎてパリィも出来ないと思う。これは逃げるしかない。

「クオオオオ!!!」

「1つ目の巨体がハキを吹き飛ばした。地面がえぐれる。地面が悲鳴をあげてクレイターを作った。」

「ハーくん!!!」

「途端に足の力が抜ける。全てのことかどうでも良くなった。もう逃げれないし勝てない…… さっきの一撃でハキの体力はイエローまで落ちただろう…… もうダメだ……」

「1つ目の巨体が無常にも動けなくなったアルゴに棍棒を振り下ろしてくる。アルゴは来たる衝撃を予想して目をつぶった……」

「ゴメン…… ハーくん……」

ガキッ!!!

金属と木製の何かが当たった音がした。恐る恐るアルゴは目を開ける。黒い剣を持ったハキがしつかりと棍棒を受け止めたのだ。

片手で持っているだけで。

巨体が繰り出す連撃に怯まず次々といなしていく。それはまるで舞のような無駄のない流れるような動きで……目を奪われた。あの剛撃をただただ淡々と捌いていく。最後に大きく弾いて隙を作る。その間にアルゴの元に戻ってきた。

「アルゴ！大丈夫か?!」

「え……あ、も、もちろんダ！」

アルゴも短剣を構える。ハキはその前に身を挟み、

「アルゴ見ててくれ。お前を守るって証明させてくれ……」

「えー？オネーサンが信用出来ないの力？」

わざとからかうように言ってる。

「ダメだ!!……ごめん……」

語気が強くなったことに謝った。アルゴはと言うと、さっきのハキが見せた表情が頭から離れなくなっていた。辛そうな顔だった。どこか地獄を見てきたような……

全てを任せようと思った。そう思わせるぐらいの顔だった。



「シツ!!!うおらアアー!!!」

ークオオオ!!!ー

徐々にボスのHPが削れていき、もう少して決着が付きそうだ……祈るしかない……そう思い、アルゴは呟いた。

「頑張れ、ハーくん」

~~~~~

アルゴが棍棒をくらいそうになっている……目の前で……また失う……うしな……ってたまるかアアアー!!!

体が動かない?甘ったれんな!あいつとの戦いはもつときつかった!動かないはずがない!!!なんのために俺は2年も修行をした?!なんのために剣の使い方を覚えた?!誓ったはずだ……2度と失わないと……

心の中の炎が燃え盛る……システムを超えて……全てを支配下に……これが受け継いだもの……物語だ……

うおおおおおおお!!!

心の中で叫ぶ。システムを支配下に置き自分のストレージを開かずに武器を実体化させる。

ー(黒い剣)ー

αテスター特典だ……… 効果はどんな武器にもなる。望んだ武器種になる。

時間が惜しい……… 時間がゆっくりと流れる。でも時間が無い……… アルゴには棍棒が迫ってきている。システムの支配によってウィンドウ操作をせずに刀から細剣に変化させる。

「……ッ!!!」

無音の気合いを入れ、地面を蹴る。記憶とともに受け継いだ。俊歩を使って……… 無理やりアルゴと棍棒の間に体をねじ込む。

お、重いッ!!!

咄嗟に狙いをパリイから受け流しに変え、刀身を片手直剣に変える。片手剣の上に棍棒を滑らせる。

『よしっ!!!よくやった!!!拓!』

「なっ?!虚白?!」

頭の中に直接響いてきた。数日ぶりの声。酷く嬉しい………

『いやね?その剣出してくれんと喋れんねえんだよ。まあ、俺がサポートするから、あくまでサポートだぞ?間違えんなよ?』

「おう!!!」

嬉しくなり、体をさらに早くした。

『無駄が多い!!!右だ!!!やるじゃねえか。俺いらねえんじやねえか?』

「ほんとに思ってたんなら出てこないよな?」

悪戯っぽく言ってる。アルゴの小悪魔が移ったかも……………  
 い!!!  
 つてそんなことはない

「2人で倒そうぜ」

ぼそつと言ってる。すると剣から嬉しそうな雰囲気が出てきた。うん…何  
 言ってるかわからんがそんな感じがするんだ…

『つたく、しょうがねえやつだな……………拓は』

かっこつけて言ってくる。言ってくるのだが……………  
 い……………  
 気になってしようがな

「ぶツ……………全然上手くないぞ?そのダジャレ……………ぶつ……………」

『う、うるせ!!』

今度は恥ずかしそうな雰囲気が出てきた。

30分後見事打ち勝ってみせたのだった。

~~~~~

「フウ……………大変だったな……………無事か?アルゴ!」

無言でコクコクと頷くアルゴの頭を撫でながら考えたのは……………

「マジで可愛い……………」

と思った……………

「ふええ?か、可愛いなんて、オネーサンに行つていいのかナー?」

なんて強がつているが、顔赤いし取り繕つてるのはバレバレだ…………… つていうか、え?声にでてた?心の中にだけと思つてたのに声出てた?!恥ずかしいー!!!やばい顔から火が出そう……………

2人は顔を赤くしてしばらく俯いていた……………

すると疲労がピークになりハキは気絶した。

「は、ハーくん?!」

体制が体制なのでアルゴの方に倒れ込んでしまった。アルゴとハキの体がもつれ合  
いアルゴは倒れ込んでしまう。

どきッ

「ハーくん?!ネエ!ハーくん!!!」

呼びかけているとハキの刀が光とともに形を変える。人の形に

「その、たく…………… じゃなかったな、ハキは大丈夫だ。疲労で気絶してるだけだ」

アルゴは驚きで言葉が出ない、何せ剣が人になったのだ。しかもハキと瓜二つの。

「ハキ………なの、カ？」

「ん？ああー………」

返答に困った……… どう答えればいいだろうか……… 前世の俺？それじゃ伝わらないだろう………

「んー……… 2年間……… いや、こつちじゃ1年間か。こつちの世界だとこいつ眠ってただろ？」

そう言いながら気絶したハキを見ずえる。

「あ、ああ、それと関係あるのか？」

「ん、まあな、アア……… 調子狂うな………」

そう言って頭をかきながら面倒くさそうに

「俺はこいつのもう一人の自分だ。前世のな。」

ほら、キョトンとしてやがる………

「目が覚めなかったのは俺と剣の使い方を学んでいたからだ。こいつの剣は見るに絶えなかった。」

呆れたように、お前もそう思うだろ？と続ける

「俺は………」

不安そうに、でもこれだけは誇りを持って……  
「異世界の過去の人間だ……」

## 6話　ハキの現状

「俺は異世界の過去の人間だ」

何言ってるんだ？このハキ……いや、この人。異世界？ほかのゲームの事か？いや、……嘘の言っていないハキの顔をしている……

「ハキ……なの力？違うの力？」

同じ問をしてしまった……いや、知りたい……この人はどういう存在なのか……別人では無い気がする……と言うかなんで剣から？ハキが吹き飛ばされた後に見た時にはあの黒い剣……この人に変わっていた……

「そうであると言えるし、違うとも言える。これから説明するから聞いてくれ、那稀」  
「ええーと……那稀って誰ダ？」

「ああー……すまん、忘れてくれ。いや、これから話すから待ってくれ……」

ハキじゃないハキは罰が悪そうに頭をかきながら何か決意を固めたような表情で言った。

「虚白だ。」

「え？」

「虚白だ、俺の名前。」

「虚白……………カ……………」

ズキツ……………」

何かが頭の中で暴れている……………なんだこれは……………痛い……………頭が……………  
痛い……………何かが奥から出てくる……………

「し、しつ……………もん……………答えてくれ」

「ああ、まずな俺は異世界つて言っても多分想像しているものとは違うと思う。魔法もないしましてやスキルなんてものは存在の概念すらなかった。今の時代で言うところのなんて言ったつけか……………そうだ、パラレルワールドつてやつだな。」

「パラレルワールド……………」

無言で頷くハキ、もとい、虚白。

「こつちにはない存在といえは神……………だな。あそこには絶対なる神がいた。」

辛そうなのを全てを憎むような顔で言い放った。それはとても怖くて……………でも可愛そうで……………気がつけば虚白の頭を撫でていた。

「オネーサンがついてル……………だからその泣きそうな顔直せよナ？」

ビックリした顔を見せながらも虚白は言い放った

「つたく、ほんとに調子狂うな。」



表面はウザそうにしてもアルゴには分かる。照れてることが。ハキと似てるのだ。仕草が、行動が、根が。だから分かる。虚白が言ってることが嘘ではないことを……

「俺は魂を追って神に大事なものを代償にこの世界に連れてきてもらった。」

「大事なものってなんだ？」

「体だよ。俺は肉体を持たない精神体。宿るものがなければ消滅する。らしい……」

「魂……誰なんだ？その魂って」

「……………」

虚白が口ごもった。言いたいことはすぐ言いそうな性格してるのに。ああ……

「聞いちゃダメな事だったのか……」

「多分だが…… 那…… いや、アルゴの母親、だと思う。」

「え……………」

聞き間違いかな？オイラの母親？魂が？

「な、なんでそう思うんだ？……………」

「俺は精神体になったことで他人の精神を色で見ることができてる。那稀の魂を追っている時に見たのにそっくりなんだ…… だけど何かが混ざってる…… 知らない色が混ざってる。だからそう思った。」

「そ、そんなの信じられるわけないだろ!!!」

心の中から出てきた言葉。否、無意識に出た言葉。ああ、そうか、やっとわかった。虚白の話を信じられるのではなかった。信じたかったのだ。ハーくんに似てるから……でも明らかに違う……自分に素直になる。すると見えてきた。ハキとは明らかに違うところを。

「…………… だらうな……」

虚白は苦笑した。悲しそうな顔で。

「現実離れしすぎてル…………… 何が何だか分からないんだ。」

「ああ、だらうな」

「ゴメン…………… 少しずつ、信じれるように頑張るか……」

謝った。自分のせいで……たとえ信じられないようなことを言われたからといえ、ホントのことを言ってたとしてギズつけたことは事実なのだから……………

……………

「ううーん……………」

俺は気絶していたようだ…… っていうか…………… 頭の下が柔らかい……………

「ええーと…………… どういう状況？アルゴの顔が至近距離にあつて…………… 頭の後ろが

柔らかくて幸せ状態……………」

「あ、起きた力、ハーくん」

いや………… ええー?! いや、ちよつ………… あ、あ、あ、アルゴさん?! だ、大胆………… じゃなくてだな! これっていわゆる…………

「膝枕つてやつだな」

ああーそうかあ………… つてええ?! なんか聞こえてきたぞ?………… え?…………

「虚白?! なんでここにいんだよ?! つてちよつと待て………… 俺とアルゴの時間をじやまするなあー!!!」

「いきなりなんだよ?! 後、その体勢で言っても説得力ねえよ!」

「ああ?! 離れたらこの幸せな感覚がなくなるだろうが!!!」

当のアルゴは顔を真っ赤にして耐えてる。でも、それに気がつくはずもなく…………

「知らねえよ!!!」

「ぶツ………… アハハ!!! オマエら、仲いいんだナ!」

「どこがだ!!!」

「アハハハハハハハ!!!」

アルゴの笑い声がボス部屋に響き渡った。それから5分間ぐらい笑い声が耐えなかつたという。

~~~~~

「あ………… 時間らしいな、つてことで俺は少し眠るわ」

そう言って虚白は剣の姿に戻った。わざわざ俺の腰に吊られてる状態で。ん？ツンデレか？男のツンデレ需要ないぞ？虚白さんよ。

『うるせ』

「うおっ驚かすなよ。起きてんのかよ」

『寝ようとしてたらお前が悪口言ってたんだろが』

「あー………… ツンデレ？」

『ぶつ殺すぞ？』

いや、こええよ。つてかこんなに可愛げのないツンデレ見たことないぞ？いや、モテたことないから知らんけど。これはツンデレなのか？いや、ツンデレか………… でもツンデレって………… ツンデレ………… ツンデレ…………

『だああー!!!寝ようとしてんのにうるせえー!!!ツンデレじゃねえつて言ってるじゃねえか?!それとも何か?!それで押し通すつもりか?!』

え………… え、ええーと………… テヘペロ!

『おえー………… キモっ…………』

「な、何おう!!!確かに自分でも少しはきもいと思っただが!!………… いや、キモいな………… ん?!俺、黒歴史作った?!」

心の中で会話する俺は現にアルゴの膝枕から一ミリも動いてない。そこで強引にも

意識を現実世界に戻す。

『あ?!ま、待てよ!!』

虚白が何か言ってるが気にしない、気にしない

『何が気にし……だ……お……』

~~~~~

嗚呼……最高かよ……何?ここって天国?ヴァルハラ?ここから動きたく

ねえ……一生このままがいい……

「天に召されてもいい……」

「ふえ?!や、やめ口!!!縁起の悪いこと言うなヨ!!!」

アルゴが焦ったように言ってくるのだが……それはそれで可愛すぎる。

「だつてな?アルゴの膝枕って凄く幸せなんだよなあ……」

「な!……そ、そうか?な、ならここだつたらゆつくり……出来ない……だ口?

続きは家で……ナ?」

か、可愛い……え?!続きっていいの?!え?!

「あつ!!!続きって言うのはそういう意味じゃないゾ?!な、なあ?!聞いているの力?!」

聞こえな……聞こえな……!!しかもそういう意味ってなんだ?俺知らな……い知ら

な……!!

「そうと決まればいざレッツゴー!! ひやつふうー!!」

アルゴを抱っこして全力疾走。移転結晶をふんだんに使い早く帰ることに専念する。ふつつつつつ…… モンスターにエンカウントされても知ったことかアア!!! 全部ふりきってやる!!! 俺は変態じゃない!!! 断じて変態ではない!!! はーはっはっはっ!!!

アルゴの軽率な言葉で一人の人間が壊れた。

~~~~~

アルゴはもう既に説得を諦めていた。説得できずに自分たちの部屋に着いてしまったからだ。ああー…… 覚悟を決める。そう念じながら部屋の中に入る。

「よしっ!!! アルゴー」

き、来た…… 覚悟はしてたけどこんなはやくとは思っても……

「早く膝枕してくれ!!!」

せめて順序だけは!!! って、え? ええー?! 待つて?! ちよつと待つて?! はあ…… なんか悩んでたのが馬鹿みたいだな……

「…… はいヨ……」

安心した…… そう安心したはずなのだ…… だが奥から違う感情が湧き出てくる。最初はハキの幸せそうな顔を見て堪えていた。だが次第にそのダムが決壊しそ

うになる。本音が漏れ出てしまった……

「ナア…… ハーくんは男子だよナ?……」

「ん? 何言ってるんだよ…… 当たり前だろ?」

「その…… とかにきよ…… の力?」

「ん? なんだったって? よく聞こえない。」

「顔が熱い…… 今にも爆発しそうだ…… もう既にダムは決壊している。もう手遅れだ。」

「その…… ハーくんは…… そのえ…… エツチなことに興味はないのか?」

「い、言っちゃった!! 痴女みたいになっちゃったよ!! いや、待て?! まだ間に合う!!! ああー!!! やっぱ間に合わない!!! ってかオイラは何言ってるんだ?! ああー!!! 恥ずかしい!!!」

ハキは真剣に考えるような素振りをしたあと……

「ないって言ったら嘘になる…… な」

アルゴの中で何かが切れた。恥ずかしくて混乱してたのに一瞬にして違う感覚が体を支配する。

「それは、オイラが魅力的じゃないのか?」

「は? いや、待てよ!! そうじゃない!」

「だってそうだよ?! オイラはあんな事言ったんだ!!! 間違ったとしても!!! 言い方を間違っ

たとしてもダメ!!なのニ!.....なのニ!.....」

..... 違う、こんなことを言いたいんじゃない..... 違うんだ..... ハーくんが嫌いなわけじゃない..... むしろ好きだ..... 傷つけたくない..... 傷つけたわけじゃない..... 違う..... 違うんだ.....

アルゴは混乱する心の中で思った。

「あんなに!!あんなに嬉しそうにしテテ!!間違つたとしても恥ずかしいだけで嫌じゃないからって覚悟も決めてたんダメ!!。なのニ!!なのニ!!.....」

「アルゴ.....」

「.....」

ダムの中を全てだしきつた.....

「俺はアルゴのことを傷つけたくなかつたんだ.....」

ハキはポツポツと語り出す。

「俺は..... この世界ではすべきじゃないと思う..... そういうのは..... 俺の勝手だけど..... 生き残つて、リアルでも付き合つて、関係を深めて..... 結婚して..... それからだと思つたんだ」

最後の方は恥ずかしそうにしてハキは言いきつた..... それはどんなに勇気がいるだろう? あんな剣幕で愛する人に怒鳴られて、それに自分の意見を言う。オイラには



無理だ……

でも…… そうだったよな…… ハーくんはそういうやつだった……

「…… ゴメン…… 言いすぎタ……」

「んや？ 意見を言うのはいい事だしな！ 俺は逆に言ってくれて嬉しかったぜ？ こういうのも必要だと思う。」

ああ、そうか、やっとわかった。オイラは…… 私は…… ハキのこう言う所に惚れたのか……

「…… そうだな…… 好きタ…… ハーくん……」

~~~~~

あれから一日がたった。関係はすっかり普段どうりだ。

「ハーくん!! その皿とつてくれ!!」

「はいよ、よつと……」

「ハーくん、よくとどいたナ」

意地悪な顔で言ってくる。でも、もう昔の俺じゃない!

「アルゴは届かなかったのか?」

「つな?!…… ずるいゾ……」

あてが外れたと言うように顔を顰めて

「はっはっはっ!!!もう昔の俺じゃないんだよ!アル!」

「アーア…… からかい概がないナ……… ん?今なんて?」

「ああー!アルゴだからアルだ!ダメか?」

「い、いや、いいと思うゾ……」

顔を赤くしてる。可愛いなあ……

「ほうか!」

「こら!ハーくん!!!口にもものが入ったまま喋るナ!」

でも……… と続けて

「ぶツ……… ハーくんのネーミングセンス……… ぶツ……… アハハ!!!」

「う、うるせー!」

俺の前だけで見せる屈託のない笑い。心を許してくれていると思う。それが嬉しくて……… そして壊したくない………

「んー……… でもアルはないなあ……… 何にしよう………」

最後の最後に優柔不断なハキだった。

## 7話 黒の剣士

「アッ、アッ……… 疲れたあ………」

なんの意味もないのにつぶやく。

「ハーくん、おじいちゃんっぽいゾ？ニシシ………」

アルゴは普段道理にからかってくるし……… まあ、いいか。こういうアルゴも可愛  
いしなあ……… おっと、なんだっけか……… 何か言いたかったような………

「アーちゃん、17は立派なじいちゃんだ、多分………」

「なんだヨ、それ。っていうか17歳だったの力？」

驚いたように言ってくる。ん？あれ？言っただけ？ああ……… ここ  
じやリアルなことは厳禁だもんな。

「ああー、言っただけだったか？ここで1年、お陰様で17歳になりました。」

そうおちやらけで言っただけ………

え？なんか、アーちゃん震えてる？え?!怒ってるの?!待つて?!どこに怒る要素が?!  
あたふたしているよ、

「ハーくん……… なんて言ってくれなかったんだ!!!」

「え?!なんで怒ってるの?!」

あ…………… しまった…………… 声に出ちゃった…………… アーちゃん、怒りそうだなあ……………

「そうじゃない!!!同い歳なんだヨ!!!」

途端にペアと顔を輝かせるアルゴは普段では考えられないほどウキウキしている。

「へえ…………… ん?!え?!マジか?」

最後は冷静に質問する。無言で首を縦に振るアルゴ

いや、奇跡かよってかマジかよ……………

「マジか……………」

すると不安そうに顔を覗き込んでくる。可愛いかよ…………… いや、可愛いな

「ああー!!!マジで嬉しい!!!どんな偶然だよ!!!」

そう言いながらアルゴの脇に手を入れて持ち上げた。うん…………… 若いから仕方ないんだ…………… たとえ外だとしても、仕方ないんだ…………… 多分…………… いや絶対!!!

何があつてこんな嬉しいこと行動に移さずになんとする!!!

「アーちゃん!」

「ふええ……………」

「大好きだあああああ!!!」

うん……仕方ないんだ……仕方……な……くはないな……  
 あとから思い出し勝手に赤面するハキだった。

~~~~~

「もう!!ハーくん! 恥ずかしいんだ!!! 辞めてくれ!!!」

「うっ……… すまん……」

俺たちは家に帰ってきていた。そう、俺らは家を買ったのだ!!! 25層に!!! つとそんなことよりアーちゃんだな、何とかなだめない。アーちゃん、勝手に自滅していくから。

「あんな事、大勢の前で大声で言うなんて…… // // //」

ほらな? って言ってる場合じゃない。

ハキは行動に移す。全てはじぶん…… いや、アーちゃんの為!!

「ごめんな? アーちゃん」

そう言うとうハキはアルゴのことを抱きしめた。いい匂いが鼻をくすぐる。

「あ……… もう!!! しょうがないやつだナ / / /」

あ、アーちゃんデレた。いや、いい匂いすぎて死ぬ。うん。

「昇天する………」

あ、声でちゃった。まあいいか、本心だしなあ……… アーちゃんも恥ずかしそうに

してるし……

「もう！／＼／＼あ、そういえば今日、仕事入ってるんだったナ」

「お、まじかあ…… 早く終わらそうぜ!!」

やる気満々のハキにアルゴは苦笑しながら立ち上がる。それから俺たちは25層の街に向かい…… 移転門の前で待っている黒づくめの…… 少女?…… に向かうアルゴについていき、話しかける。

「よう、お嬢ちゃんが依頼者か?」

「ぶふっ!……」

ん?アルゴと少女が吹き出したぞ?どうしたんだろ……

「ぶくく…… キーぼ…… キーちゃん…… ひさしぶりだな…… ぶくく……

アハハっ!!」

堪えないというように腹を抱えて笑い出すアルゴ。シヨック受けたような少女?に戸惑うハキ。カオスな風景に周りが目線を飛ばしてくる。

「辞めてくれよ…… これでも男だ……」

「ふーん…… え?!…… マジ?」

無言で頷く少女…… もとい、男は頷きながら器用に心外というように肩を竦めてみせた。そして……

「にやハツハツハー!!!」

アルゴが限界を迎えた。

~~~~~

アルゴが落ち着いた頃には俺たちは意気投合していた。

「でもさ、クリティカルは力じゃない、だろ?!」

「おう!! やっぱ1番はタイミングだ!!」

「話わかるな!!」

と言った具合に……

「はあ…… そろそろいいカ?」

「あ、すんません」

見事に被った。…… うん、息びつたり。

「えつとナ、こつちが黒の剣士ことキリト。で、こつちが…… 黒剣ことハキダ」

うんうん…… ン? 黒剣つて? え?! 俺にもふたつ名あるの?! 攻略出てないぞ?! ど

ここまで攻略進んでるかわからないレベルだぞ?!

「ちよつと待て?! え? 俺つてふたつ名あったの? 知らなかったんだけど?」

「ん? ああ、あれだな、攻略の時1人で階層主倒した口? 軍のヤツらがそれ見てたらしくてナ」

ふーん…………… 納得はしたけどそんな大層な名前……………

「黒剣…………… ハキ、デュエルしないか?」

「ん?」

正直言おう。トップレベルのプレイヤーにデュエルを挑まれた。うん、言葉だと軽く聞こえる…………… 正直に言おう。

すげえ嫌だだアアアー!!! こわいいいいー!!! ギやあああ!!!

よし心の中では叫び終わった。あとは覚悟を決めて…………… プライドを捨てて…………… この丸ボタンを…………… 無理ゲーじゃね?

「ホいつとナ」

ポチ……………

え? 嘘でしょ?



あ、アルゴさん？アーちゃん？ねえ？俺、勝てるわけないじゃん？

「ハーくん、頑張つてネ！」

上目遣いはずるいつて〜……………

~~~~~

「はあ…………… 最初から本気でいいだろ？キリト、」

「ああ、来い！」

俺は虚白を抜く。まずは様子見だ…………… リーチの長い槍に変化させて突いていく。

「シツ!!!」

「おおー!!変形できるのか？その武器！だが、負けるわけには行かない！」

相手の黒いほうの剣を主に使つて切りかかってくる。

実にやりづらい…………… 二刀流か…………… 伊達じゃないな。それにしてもなんで白

の方の剣を使わないんだ？

そう考えながらどんどん切りあつていく。高速で。轟音と静音の戦いだ。あるものは立ち止まり、あるものは心を奪われ、あるものは憧れる。

流れるような動きと舞のような動き。違ったものに聞こえても似通つた部分はある。だからこそやりづらい。ハキの剣は癖が変わり続ける。武器が変化するからだ。一方、

キリトは癖は変わらないが、自分でそれを理解し補っている。現に、決め手がない。ここだ!!と思つて打ち込んでみても白い剣が邪魔をする。それに……キリトの一撃が重い……こっちはどんな武器でも使えるように幅広く鍛錬してきた。だがキリトは一途に……二刀流だけを極めているのだろう。

——だがそれがどうした?——

——そんなんじゃ俺は折れるのか?——

——自分の守りたいものはなんだ?思い出せ。そして……——

——喰らえ——

ハキの雰囲気が変わる。変化は凄まじかった。黒い剣から黒いモヤが出る。それは生きていたのかのようにハキの体にまとわりつき、堕天使のような黒い羽の着いた装備になった。



い。諦めた？いや、そんなはずは……いや、俺はあいつの何を知ってるんだ……今日あったばかりだぞ……でもあきらめはしないと思う。

キリトは謎の信頼をして2振りの剣を振り下ろす。

~~~~~

虚白に警告を出され目の前を見るとキリトが俺に剣を振り下ろしている最中だった。

「白いの!!!ボーとしてんじゃねえ!!!」「そんな終わり方認めねえぞ!」「おい?」

声援が聞こえる。冷静に突っ込む奴もいる。

みんなの熱援を、感情を、勇気を

喰らう。

少し話をしよう。異世界ものに限らずSFモノにはみんなの声援が届いた瞬間、絶望的な状況から一撃で覆す、という物が沢山ある。ヒーロー、勇者、それらの主人公のお決まりだ。いや、ただ単に俺がそう思ってるだけかもしれない。ただある人は言った。偉大なあのヒトが……混濁する意識の中であの者が言った。あのモノが言ったのだ。それは前世の記憶。虚白の記憶。みんなが尊敬するあの人は言った。勇者なんて生易しい存在ではない。人間の枠を超えたただ一人の……

英雄が言ったのだ。

俺には関係ないかもしれない。ただ英雄が残した言葉は魂を超えて。世界を超えて今伝わった……

《おの子の意志の中には……人間の意思には全ての理の中にある。全てを理解し精応者になった時、あるものは死か生かだけだ。》

ハキはいばらのみちを進んだ。見返してやろうと……愛する人のことを。全てを

「ハーくん!!!」

アルゴの声<sup>!</sup>が聞こえた。システムには感知できない不確定なものを乗せて。

感情を乗せて。ひとえにいえば………全能感。

なんの関わりのないヒトからの言葉によって更なるシステムの中での覚醒を促した。才能でしか到達できないもの。自分にはなかったものを………

~~~~~

周りの時間が引き伸ばされる。背景がなくなる。虚白の世界のようなものになっていく。不安は感じない。どんどん時間が遅くなっていき周りは停止した。いや、僅かに動いてはいる。………

「何が起った………んだ?………」

戸惑いながらも剣を弾く。そう

間に合わないはずの剣を弾いたのだ。

『はあ………使うのか………持たざる者の自爆術を。』

痛い………全身が痛い………骨が軋む。だが………俺はこいつに勝ちたい。勝

たなきや………意味が無い………だってこんなにも楽しいのだから。

~~~~~

ハキはソードスキルを使う。傍から見ると完全に使い所を間違えた発動だった。キ

リトは迎撃の体制に入る。

剣を青いライトエフェクトが……覆わなかった。代わりに覆ったのは黒いライトエフェクト。どこまでも深い黒だ。

剣が一気に加速する。挙動はバーチカルアーク。片手剣だ。

最後の一撃を弾いた後、勝ちを確信した瞬間、攻撃に移行した。

キリトは勝ちを急いだのだ。だから気づかなかった。エフェクトがまだ消えてないことに。

それからは一方的だった。完全に後手に回ったキリトは防戦一方。ハキはシステムを支配し、ソードスキルを好きなようにいじった。いや、いじってしまった。

このままではハキが勝つと皆が思った。勝負が着いたのは唐突だった。

ドサツ……

ハキが倒れたのだ。口から、鼻から血のようなライトエフェクトを出しながら。

~~~~~

「ハーくん!!!」

アルゴが駆け寄る。ハキを抱きおこす。

アルゴは自分を責めた。なんで止めなかった？無茶はしていると思った。でも止めることが出来なかった。

頭にポンポンとされる感覚を感じる。ハキだ。もう大丈夫だと目線で訴えてくる。それから……

「あー!!!負けた負けた!!!我ながら無茶したわあ!」

「お、おい、ハキ大丈夫なのか?」

心配そうにキリトが尋ねてくる。

「ん?ああ、大丈夫だ!!この通り!」

腕を回してアピールするハキに向か**つて**周りから大歓声が……それはこの塔が揺れる程の。

「!!!わあああああああああー!!!」

「と、とりあえず場所変えようぜ。」

「「だな(ナ)」

勝負はキリトの勝ちで幕を閉じた。この2人が外を出歩けぬほど有名になることを3人はまだ知る由もなかった。



## 8話 ハヤト

今日は特別な日……とは決まっていけないのだが、アルゴがすごく甘えてくるのだ。もう鼠の原型もないぐらいに。

「ハーくん? どうしたんだ?」

ほらな? 俺の足を枕にして寝っ転がってる……いや、俺も嬉しいよ? でもねえ……年頃の男子の俺は……どう反応すれば……

「むー……」

お? 諦めたかな? 寂しいような、ホっとしたような……ギョっ……

あの、ちよつと……アーちゃん? ねえ? 今日どうしたの?! ねえ!!! いや、嬉しいよ?! 嬉しいんだけど……!!! 場所考えてー!!!

ハキの心の叫びはみんなに届くことはなかった。

~~~~~

アルゴが甘え出す数時間前、俺はアーちゃんにあることを聞いていた。

「ハーくん、そういえば知ってるか?」

「知らない」

「まだ何も言っていないゾ?! って………… おねえさんをいじって楽しいのか?」

また懲りずにからかつてくるアルゴに俺は…………

「ん? 当たり前だろ? いちいち可愛いアルゴが悪いんですよ!」

「ふええ?」

よし、返しもいい感じだ。っていうかその驚き方好きなのか? 可愛いやつめー!  
心の中でも最大限にふざけながらアルゴの頭を撫でる。

「もう!」

怒っているように見えて怒っていないのを俺は知ってる。

そう、俺らはイチチャついていた。

「でナ? さっきの続きなんだけどナ? 階層主が見つかったんだつて。」

「なっ?! どこだ?!」

いちやつきながら驚く。緊張感もくそもない…………

「落ち着けつて、ええーとなんて言ったっけ………… ハヤトって言ったっけナ…………」

「隼人?!」

隼人とはリア友のSAOに俺より早くログインした奴の事だ。しかしリアルネームを………… いや、あいつならやりかねない…………

「(ブツブツ…………)」

「お、オイ? ハーくん?」

「あ、ああ、なんでもないぞ…………」

訝しげにアーちゃんが見てくる。うん、かわいい。間違いない、世界一だな。うん。

親バカならぬ、彼氏バカを発動させながら思考を回す

「そのハヤトは仕事依頼してきたのか?」

「ああ、今日会うつもりだ。」

「え?!」

ガタツ

勢いよく立ち上がるハキに驚き、アルゴが固まる。

「……………」

「なんだつテ?」

「今すぐ行く!!!!」

そう言ううとハキはアルゴの手を掴んで家を出た。

~~~~~

移転門の前に見覚えのある奴がいる。うん、確定だ。隼人だわあれ……

「よウ!!!」

声をかけるアルゴに返って来たのは拳だった。ハキは咄嗟にアルゴの前に出てその隼人が放った拳を止める。

「…… どういうつもりだ？隼人。」

ドスの聞いた声で言い放つ。心無しかハキの体からは虚白では無いオーラがまとわりついていた。

「…… 殺すぞ?」

友達に本気で言ったのはこれが初めてかもしれない。俺らは仕事の仕様上、逆恨みとかよくあるのだがそいつらに向けて言っていたものを咄嗟に出してしまった。

「ちよっ！ハーくん!!!待って?!待ってー!!!」

頑張つて拳の作つてた方に抱きついて俺を止めようとするアルゴ。

可愛いかよ。でもさ、冷静になったのはいいけどさ、それに気を取られて……つてそうじゃねえー!!守んねえと!

「はあ………… もう一回聞くぞ? どういうつもりだ?」

アルゴを自分の後ろに隠しながら言う。

「…………… おい…………… なんでも来た。」

「あ?」

何言ってるんだ? こいつ。

「遅くログインするって言ってたじゃねえかよ。なんでここにいるんだよ。」

震えてるのか? 大丈夫か? こいつ。情緒不安定?

「なあ!! お前、妹はどうしたんだよ!!! なんでそんな冷静でいれんだよ!!!」

「ああ…………… うん…………… それは…………… 心配だよ。」

「なら! ならなんでそんなに冷静なんだ!!!」

要はあれか? 俺の事や俺の妹の事を心配してんのか? でもなんでアルゴに攻撃を?

「答えろ!!!」

ハヤトの言葉に俺は意識を現実に戻した。

「アルゴがいたからだよ。悪いか?」

あつげに取られたような顔で俺のことをみてる。

「アルゴとは始まりの町からの付き合いなんだ。いつもアルゴが居たから頑張れた。いなかっただらとつくに死んでるだろうし、生きてたとしても今みたいな幸せはない。だか

ら全てはアルゴが救ってくれた。」

ハキの…… いや、拓は心の底から言った。伝えたのだ。

言いながらアルゴの頭を撫でてやる。

「ふーん……」

「で、こっちの質問だ。なんでアーちゃんの事を攻撃した？」

「ん？いつもの絡みだからに決まってるんだろ？」

は？いや、え？

疑問に思い、アルゴの方に視線を向けると、首が壊れそうなほど頷きまくっている。可愛い…… くそ、訳わかんねえけど許してやるか。

「アーちゃんに感謝しろよ？」

「ん？なんで？」

ボコッ！

あ、つい…… まあいいか

アルゴの無言の庄により……

いいわけないよなあ…… と考え直した。うん、アーちゃんが正しい。

「と、とりあえず場所変えよう。な？な？」

雰囲気を変えなければ……

「ところでさ、なんで攻略来ねえんだよ！もう62層だぞ？そろそろこいつて。情報とかもあればもつと安全になるだろう？」

そう行ってくる隼人、いや、ハヤトに俺は……

「……ダメだ……」

「ええー？いいだろ？情報くれるだけでもいいからさ。どれくらいで売ってくれる？な？な？な？」

おちやらかながら言ってくるハヤトにまた俺は……

「ダメだ!!!」

怒鳴ってしまった。

「ハーくん、そこまでダ。」

「……悪い……」

アルゴに制止されて冷静を取り戻した俺は冷静に……… 冷静に………

「……… 攻略に毒を入れれば逆に足を引つ張る。必ず動きが鈍る。総崩れする。心に余裕ができる。最後のはいいことだと思いかもだが、余裕は油断と紙一重だ。キリトから聞いたが1層でもそうだったんだろ？」

「ああ…… えと…… もうちよい分かりやすく……」

「真偽のわからない情報は売らないんだ。オイラたちはナ。毒は間違った情報ってことだヨ。まあ、半分建前で情報屋の意地だけどナ」

それがわかってない奴が情報屋すると直ぐにお陀仏ダ、とアルゴが続ける。

「そうか…… ゴメンな、」

「おう!!言つたの俺らでよかつたな!他の情報屋が聞いてたら怒り狂つてたぜ?」

わざと明るく振る舞う。

「でも攻略に來ないのはなんでなんだ?」

「俺は行つてもいいけど、アルゴはダメだ。これだけは譲れねえ」

「ハーくんは行つたらダメダ!!!これは譲らないゾ?!」

「つてことで行かない。」

この期に及んでイチャついてるアルゴとハキ。それを見てうんざりしたような顔で。

「はあ…… ナカムズマジイコトデ……」

話し方が変になりながらも言うハヤト。それに対して……

「ほう…… ?羨ましいのかナ?ハヤつち?」

「べ、別に羨ましくねえし?俺もガールフレンド欲しいなんて思つてねえし?」



どもりながら返事をする友達…… いや、寂しい友達。どんまいだな、ハヤト。

心の中で親指を立てるハキ。それを第六感で感知したハヤトは急いで制裁に加えるためにハキの元に行こうとする。がある人物が邪魔をする。

「頼むから店の中で暴れるのはやめてくれよ？はい、お待ち！招待客専用パフエだ!!!」  
そう言つて来たのはエギルだ。しかもいつものと同じパフエだし……

「チエンジで」

「ちよ、おい……」

あれ、よくわからないで使つたけど違う意味だった気が…… まあいいか。

アルゴの頭撫でとこう。ああ……… なんてこんなに手触りいいの？俺、天国行くよ？ねえ………

「おい！無言になるな！本気になるだろ！……… もしかして本気で言ったのか？」

「ん？あ、パフエチエンジで」

「はあ……… あいよ」

あからさまにほっとした顔になると、奥に引つ込んで行つた。

カランカラン………

「お？あれ、キリトとアスナじゃねえか？」

「ほんとだな、ちよつとからかって来ようぜ？」

「お？いいな…… ハヤトも行くか？つと面識あんのか？お前ら」

「まあ、攻略だな」

「じゃあ行くぞ!!」

そう言つてハキはキリトたちの方に行つてしまった。

~~~~~

「おい、キー坊とアーちゃん、ここでデートカ？にししつ……」

「ちよつ!!!アルゴ?!… つてことは……」

「やつほー!!!俺もいるぜー。ヒューヒューお熱いこつて!」

2人の顔がみるみるうちに赤くなつていく。トマト？ねえトマトになるの？まあ、頑張れ!!!…… ふざけはここまでで、マジなのか……

「マジなのかよ…… おめとさん」

「へえー…… この情報いくらぐらいになるかな？」

意地悪な笑みを浮かべながら言い放つ。

ねえ？アーちゃん？もうやめたげて？俺だったらそのからかいもかわせる自信はあるけど俺だけだからな？久しぶりにからかえるって張り切りすぎじゃないか？まあ、楽しそうだから俺も乗っておくか!!

『おい？』

なにか聞こえた気がするが気にしな—い。

『またこのパターンか……』

~~~~~

散々からかったあと、みんなでワイワイさわぐことになったのだが……キリトつてコミュ障とか言つてなかったっけ？なんでこんなにも女子の知り合い多いの？—んと、あいつがリズであいつがシリカとか言つたっけ？あいつが呼んだ男、クラインとか言う残念なやつしか居ねえじゃねえか。

「おい、キリト!!!お前コミュ障とか言つてなかったか？」

肩を組み、威圧しながら言つた。

「ん？コミュ障だろ？—こんなしか友達いねえんだから。」

「はあ…… おーい!!!アスナ!!!こいつ、たら（ぶごっ……）」  
 たらしになるぞって言おうとして、キリトに口を塞がれた。  
 すると、

「おーい!!!アルゴ!!!こいつ他の女子にで（ぶふおー!）」

こつちも塞ぎ返す。あつぶねえ…… 何いやがんだ…… こいつ（デレデレし  
 てるぞー）とか言おうとしたに違いない。

「んー?ハークンがどうしたつテ?」

「ど、どうもしてないぞ!!!」

（今度ケーキ奢るから!）

（よし、忘れんなよ?）

っていう会話が あつたのは誰も知らない。

まあそんなこんながあつて、アルゴはお酒を飲み、酔つ払つていると言うね。いや、可愛  
 愛 い ん だ け ど…… 甘 えて くれ て あ り が と う だ け  
 どっ…… 俺の理性がもつてる間に離れてくれえええ!!!

「アーちゃん?離れてくれないか?俺、結構来てるんだけど……」

「んーや!離れないゾー!」

うん…… ダメだ。離れないな。

「アルゴがこんなになるなんて……前に飲んだ時はここまでになんなかったのに……」

ん？今、ハヤトなんて言った？前に飲んだ？ん？

「なあ、前に飲んだってなんだ？」

「ん？ああ、情報交換のついでに一緒に飲んでたんだ。」

何それ!!羨ましい!!!何？こいつ、たらしになったの?!キリトになっちゃったの?!

「アーちゃん？どういう事だ？」

「んー？いや？ただ飲んでただけな気が……するゾ？」

ん？ちよつと待て？今なんて言った？気がする？じゃあ、そうじゃない可能性もあると……

「そうか……ハヤト、お前そんなやつだったんだな……」

俺は顔を伏せながら……

「ハーくん？」

不安そうに覗き込んでくるアルゴ。酔ったらこういうふうになるのか。可愛すぎるだろ……でもあいつはアルゴを……

殺す!!!

理不尽な殺意を当てられるハヤト。

キリトとアスナは思った。  
理不尽だ………

そして、この場にいる当事者以外の心が一致した。

## 9話 とつておき

「お前、そんなやつだったんだな……………」

「ハーくん？」

うん、可愛すぎるだろ。反則だアアアア！！！！

「でことで、しばく。」

「ハーくん、今日、一緒に寝よーぜー？」

アアちゃん？その発言場違い！！だけど可愛い……………

「アルゴナイス!!!」

「……………あ？」

「すいませんでしたアア!!!」

おお……………ダイナミック土下座……………でも許さん!!!

さあ……………何してやろうか……………アルゴにあんなことやこんなことした罪は重

い……………

ハキは無言で剣を振り下ろす。ちゃっかり、システム支配で相手を麻痺状態に。完全にいたぶる前提のセッティングだ。

「……………」

「ちよつ!!ちよつと待て!!待つてくれ!!俺はやつてない!!断じてそんなことやつてない!!」

「ああ?そんなことつてなんだ?いつてみるよおおおお!!」

ハキは顔を上げる。血の涙を流して……

「ぎやああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

店の中で絶叫が響き渡った。

~~~~~

「なーんだ、そんなことなら行つてくれればよかつたのに!!!」

「し、死ぬかと思つた……………」

「ん?ヤルつもりだったよ?」

「ねえ?!酒入つてるからだよね?!いつものお前じゃない!!怖い!!!」

ハキは適当にあしらつてからアルゴの方に向かつていく。

「ハーくん♪」

「なんだよー!可愛いなあー!!」

もう止まらない域まで来ていた。もう手遅れだ……………」

「かアアア!!キリトとかには春が来るのになんで俺は……………」



クラインの声はみんなが無視しようとう本気で泣き出すマネをしだした。それでもみんな無視し続ける。

「ああー!!!もう理性なんて知ったことか!!!」

「それは捨てたらダメだ!!!」

はい、満場一致。仲良いな。でも俺は捨てる!!!

「ハーくん?」

不安そうなアルゴに対して俺は辛うじて理性を取り戻す。

「……って、俺何言ってるんだ!!ふう……危ねえ……」

「「「ホッ……」」」

「ハーくん?大好きダー!!!」

プチン……

何かが切れた音がした。

「だあああー!!!アーちゃんは可愛いなあ!!!な?な?な?!!そう思うよな!!!みんな!!!」

あまりの勢いに固まる一同。それに追い打ちをかける。

「思うよな?」

ドスの聞いた声で繰り返すハキに向かって無言で頷き返す。

「だろ?!」

と言いながらアルゴにハキが抱きつく。

「むあ!.....にやへへ.....」

普段のアルゴなら怒りそうなことをしてるのに怒らないどころか嬉しそうにしてる.....こんなに人懐っこいアーちゃんは初めてだ.....

「なんだ!この超生物!!!天使か!天使が舞い降りたアアアああああー!!!」

「二ついに壊れた.....」

みんなの発言が被るとそれを合図に、2人は.....

「チュ.....」

「ファーストキス.....だったんだゾ?」

「俺もだよ。」

「もう!////」

「もうどうにでもなれ!!!うわああー!!!」

クラインが男泣き?をしながら店から出てく。それを見ていた人達は心の中をひとつの思考が渦巻いていた。

(((((バカップル(め).....))))))

「んんー……なんだ？朝か……いつの間に寝たんだ……ッ!!!」

頭いてえ！気持ち悪い……ヤバい……そう言えば昨日なにかあったよう  
な……なんだっけ……忘れちゃいけないような事だった気が……

虚白、何あったかわかるか？

ー……聞かない方が見のためだぞ？ー

本当に何あったんだよ……

「……っとうわっ!!!」

隣でアーちゃんが寝ている。いや、それはいつもどうりだ。でも……ニツト着てる  
だけ？いや、まてまてまて……待てよ？さすがに……

もう1回布団を途中までめくる。

……ねえ?! 待って?! なんでズボン履いてないの?! 際どいよ?! ねえ!! 俺の理性が  
!!! ああー!!!

アーちゃん、なんつう格好してるんだよ……誘ってるのか?……つて、もしかし  
て昨日したことつて……

ーそれは無いー

だ、だよなあ……………

「ふああー…………… あ、ハーくん起きたの力? にししつ…………… 昨日は激しかったナ?」

意地悪な顔で言ってくる。

つて待つて?! 過去の俺!! 何してんの?! ねえ!!! ねえつてば!!! 返事しろよ! 過去の俺!!!!!!

ーはい!!!

いい返事!!!…………… じゃねえよ!! 誰が前世まで遡れつて言った!!! うわああー!!!! 俺

は…………… 俺は……………

「にししつ…………… 今日はこちらから返して来ないんだナ?」

からかい…………… そうか…………… からかいか…………… からかいだったの

か…………… つて納得出来るか!! なんなんだこの気持ち!!! ほつとするはずなのになんか

悔しい!!! 二つの意味で!!

「はあ…………… 久しぶりに手応えあるからかいが出来たヨ」

「…………… さいですか……………」

もういいや…………… 疲れた……………

「二度寝するか……………」

「…………… なんダ? 寝ちやうの力?」

寂しそうに言うアルゴ。

「ああ、お前と一緒にな。」

そう言ってからアルゴを抱きしめてそのままベッドに倒れ込む。最初は体がこわばっていたが、しばらくすると次第に体の力を抜き、身を預けてくる。

「あ、倫理コードダ……………」

「押すなよ?!ふりじゃないぞ?!」

「押さないヨ、相手はハキだからナ……………」

うん、もう死んでもいい。ってかいつそのまま耐えてる俺を褒めてくれ…………

安心出来る距離がだんだん縮んでる。信頼関係が…………愛情が確かに大きくなっているのを感じながら眠りにつく。

~~~~~

そう言えばイチヤイチャデー（仮）途中で終わってた…………仕切り直しだな。

「ハーくん!ご飯出来たゾー」

「おー!今日は何だ?」

「シチューだゾー!」

シチューか…………上手いんだよなあアルゴのシチュー…………

「おお！美味そうだなー！いただきます!!!」

「いっぱい食べてくれ!!!」

うんうん。美味しい！すごい美味しい…………… あ、いいこと考えた。

「アルゴ、」

「ンー?」

「あーん」

そう言いながら俺はスプーンをアルゴの方に持っていく。

「あ、あーん」

ぱくつと擬音付けたくなるような可愛い食べっぷり。いやあ…………… 可愛い!!!  
って語彙力なくね?俺。んとな、天使が舞い降りた…………… も前言ったし、んー……………

「やっぱ可愛いとしか言えねえ!!!可愛いのが悪い!」

「ええー?!いきなりどうしたんだ?!」

あ、やべつ声出ちまった…………… あ…………… そうだあれがあつたんだ。とっておき

のあれが……………

「な、なあ…………… 頼みがあるんだけど…………… これ…………… 付けてくれ……………」

そう言いながら共通化してる画面を映し出し、アルゴに見せる。

「え?!こ、これつけるのか?」

「お、おう……ダメか？」

「ま、待つててくれ!!」

あれは絶対かわいい…………… ああー!!早くみたい!!

妄想という名の思考の海に溺れるハキはそれだけで15分たっていたことに気が付かない。

「お、お待たせ……………」

そこには猫耳と尻尾を着けたアルゴが立っていた。因みに服装はベッドの時から変わってない。だから…………… だから…………… 仕方ない。もうどうしようも無い。

「うわあー!!可愛い!!」

ハキは抱きつく。そして耳を触る。

「うにゃアー!」

何それ…………… 俺を萌え死にさせる気か…………… なあ…………… もうダメだ……………

ハキは耳だけと言わずしっぽも触って行く。

「うにゃ……………」

気持ちよさそうに目を細めるアルゴ。ほんとに猫みたい……………

「アーちゃん!!にゃあって言って!!お願いだ!」

「え?!……………に、にやあ……………」

ぐほつ……………もうダメだ……………我が人生に悔いなし……………

ーアホかー

何おう!!お前!!那季がこの格好してたらどう思う?!

ーどう思うって……………最高だな!!!ー

だろ?!これで可愛くないって言う方がおかしい!!!

謎の信頼関係が生まれた。

「ああー!!!さい……………こう……………」

また抱きつく。

「にやあ!!……………いきなりはやめろヨ……………」

「ああー!!!最高!!にやあ!!だつて!!ねえ!!!もう無理!ああー!!!」

壊れた。ハキが……………



## 10話 最後の攻略

家でいつもどうりイチャイチャしていると家のドアを叩く音が聞こえた。

コンコンコン……

「なんで、今なんだよ……いい所なのに……」

憂鬱だなあ……このまま猫アルゴとベットのカビになりたい……ごめん、やっぱカビはやダ。

「はあ……仕方ないから俺、出てくるね」

「オイラが出ようカ？」

待て待て!!猫化してる(猫耳としっぽ付けてるだけ)アルゴを誰かの目に入れるだど？看過できない!!!笑止千万!!!

「い、いいよ、どうせすぐ追い出すし。そして早くこの続きやろうな!」

「おう!」

はあ……適当にあしらってからばばと帰ってもらおう……

ガチャっ……

「どちら様で?」

「私、アスナだよ!!今、ちよつといい!」

え?なんでアスナがこの家を知ってるんだ?って言うか、なんでそんなに慌てるんだ?重要な事なのか?アスナなら今のアルゴ見せてもいいか? :

「と、取り敢えず中入れ!」

扉を大きく開けて、中に招き入れる。すると後ろから声がした。

「アーちゃん!何があつたんだ?」

「攻略が!攻略が! : : : っでなんで猫耳つけてるの? : : :」

「一旦落ち着けて!」

お茶を飲み、落ち着いたようだ。でも、アスナはアルゴの猫耳が気になるようで :

「ゴホン!! : : : ぞ?攻略がどうしたって?」

強引に話をそらした。それはもう不自然感満載で。

「あ、そうだったわね、はつきり言うわ」

ここで唇をお茶で湿らせてから言う。

「攻略に参加して。」

は?この人は何言ってるんだ?俺は行かないと何回も : : :

「昨日、ボス部屋の偵察隊が15名、消息不明。生命の碑を確認し正式に死亡が確認され

たわ」

短い言葉だった。でもそれはハキ達の心に深く突き刺さった。

「脱出は出来なかったのか？」

「攻略来てなかったからわからないかもだけど……」

「ああ……… 結晶無効空間力……」

「ええ、多分ね」

一気に暗くなった。雰囲気だ。

「分かった。会議はいつだ？……」

「今日よ」

「は？なんでもっと早く来なかった？つてくそつ、偵察隊の事か……」

アスナの事だから昨日は別れたあと、本部に行った時にそれを知って今までですつと探していたのだろう。生命の碑の名前を。

「……… アーちゃん、待っててくれ。すぐ終わらせてくるから。」

「……… オイラも行くゾ……」

「ダメだ、何が起るのかわからない。俺が守ることも出来ないかもなんだ。そこにアーちゃんを連れていくわけに行かない。」

「………」

アルゴは黙りこくる。

「それにアーちゃんは速さ重視のステータス割りだろ?..... 分かってくれ.....  
俺は二度と失いたくないんだ.....」

「... 二度と?」

「ああ..... 言つてなかったか?俺の両親、居ないんだ。」

「ッ!.....」

アルゴは何かをこらえるようなしぐさを見せ、アスナは黙って聞いている。

「免疫不全症候群だった。しかも、SAOに囚われる前から妹にもその症状が出て  
な..... 俺らがここから出る時にはもう..... そう思うと俺は今でも震えが止ま  
らないんだ.....」

「だから夜な夜な起きたりしてたの力?」

「気づいてたのか?」

「..... まあな.....」

「..... そうだな..... 悪夢を見るんだ..... かあちゃんも..... 親父

も..... 妹も..... それにアルゴが離れてく..... その後に残されたのは孤独

だけ..... そんな夢だ..... 普通少し経ったら夢なんて忘れるのにな..... こ

れは頭から消えやしねえ.....」

そう言うとハキは苦笑してみせる。その顔は寂しさに満ちていて…

「お、オイラはハキから離れな「わかつてるッ!」ッ?!」

「分かつてるんだよ……………」

それからハキは気づ付いたような顔になって言った。

「アーちゃん、ごめん…………… アスナ行くぞ……………」

その後に取り残されたアルゴは小さく言った。

「… 何が失いたくないだ…………… オイラの前からたつた今いなくなったのはハーくん

じゃないカ…………… ばか……………」

アルゴは玄関で泣いた…………… 夜まで…………… そして……………

決意をした。

~~~~~

「さあ、今日は集まってくれてありがとう。私の事はみんな知ってると思う。」

とヒースクリフが言った。そして……

「さて、早速本題に入ろう。一昨日、我らが血盟騎士団がボス部屋を発見した。そこで緊急的に偵察隊を編成、送り出した。それが昨日だ。そこから半日かけても連絡がなく、生命の碑を確認し全15名の死亡を確認した。」

ここまでではいいか？と続けるヒースクリフに言葉を返すものはいなかった。それだけ衝撃的だったのだ。会議はシーンとした雰囲気に進んだ。

（ああ…… あんなこと言っただけでアルゴになんて言えば……）

ハキは会議などそっちのけでそんなことを考えていた。

「さあ…… その事らを踏まえて準備してきたまえ。決行は明日、この時間に集まって欲しい。今回はフルレイドで挑む。今のうちにレイドメンバーと組んでおけ。以上」

そう言うとヒースクリフは壇上から降り、本部の方に入っていく。

（でも…… うーん…… 怒ってるよなあ…… というか、何でアーちゃんにあの話を話したくなっただろう…… うーん……）

「…… わっ!!!」

「ぬおっ?!」

肩を掴まれたような感触を感じてから直ぐに脅かしの声が聞こえ割と本気でビビった……

「何難しい顔してんだ？」

「……なんだよ、キリトか……」

「どうしたんだ？」

「……ちよつと……な？」

「そうか……」

それから少し間をあけて

「……仲直りなら早めの方がいいぞ？」

「なっ?!」

キリトめ……… なんてわかった……… って言うか、なんでそんなこと知ってる………

「ああ……… そうだ、ハキ、パーティ組もうぜ？」

「ほう？他のやつ居ないのか？オニイさん以外居ないのか？ん？ん？」

さっきの意趣返しにアルゴ（うざさMAXモード）バージョンで言い放つ

「ははは、まあ頼むよ」

ハッ………

「だから鈍感とか言われんだよ……」

「なんで?!」

あ、口にててた? まあいいか……

「まあ、俺からしても願ったり叶ったりだからな、よろしく頼むよ。」

「そういや、アルゴは? …… すまん……」

ハキの顔色が悪くなったのを見て即座に謝るキリト。

「キリトクーン! あ、ハキ君、今回はよろしくね?」

「ああ……」

アスナがいつもどおりに接してくれている。事情も知ってるはずなのに……でもそれが嬉しい。

「あ……」

「どうした? キリト。」

「いや、あの外套羽織った人……パーティもう組んでるらしいけど昔のアスナを思い出すなあ……と……」

「ああ……… つてえ?! もしかしたら、迷宮区で鬼のように敵倒してたあの人か?」

「あー……… 多分そう……」

「多分そうだね……」



「マジか……俺声掛けたのに「だから何？」で全て返されて終わりだったもんなあ……」

「あはは……あの頃は冷めてたもんなあ……アスナは……」

「も、もう！キリトくん!!それにハキ君も！」

「はい……ごめんなさい……」

「お取り込み中わりいんだが……俺も入れて？」

クラインが後ろから現れた。

そして当日が来た。

~~~~~

「それでは、行くぞ!!」

ヒースクリフの号令でボス部屋の中に入る。それぞれ移転結晶を握りしめて。

「お、おい……ボスが出てこないぞ？」

「そんな訳あるか!!!もう光は灯ってるんだぞ!!」

ボスが居ないことにみんなが混乱し始める。そしてハキは見てしまう。上の方を……

「う、上だアアアあああー!!!」

ハキは咄嗟に叫んだ。それと同時にボスが落ちてくる。

「た、退避ー!!!」

前衛の1人が叫んだがもう遅かった。

敵は骨のムカデ、名前は《スカルリーパー》

スカルリーパーは前衛に鎌を振り下ろす。砂埃がまう。ガラスが割れた音が連続で聴こえる。

パリンパリンパリン……

そこには何も無かった。人の影もボスの姿も

「なん…なんだ。なんなんだよアイツ!!!そんなの聞いてねえぞ?!」「一撃?………前衛だぞ?」

そう、前衛をするにあたって1番必要なのはHPの総量だ。それらが一瞬にして消え去った。タンクもだ。それだけで皆の恐怖を煽るのは十分だった。

「うわあああー!!!逃げろおお!!!」

1人が扉に駆け寄るが岩のようにピクリとも動かない。



頼もしいこって……

そう心の中で会話を重ね、虚白を抜く。そして……虚白は人の形になる。ハキから片手剣を手渡され、2人でダメージディーラーの役目を果たしに行く。さあここからだ……

~~~~~

「はあはあ……精神的にももうきついかな……」

小さくハキが眩く。

「虚白、ボスの体力、2本ぐらいいけると思うか？」

「無理だな、バグ処理プログラムに引つかかる。」

「そうか……」

システム支配で強制的にボスの体力を削ろうと思ったのだがバグ処理なんちゃらに引つかかると言われた。何言ってるかわからんが引つかかったらなんかなるのだろう。

そう考えていたら攻略の時の外套被った人が攻撃を喰らいそうになっていた。

「マジか……くそっ!!!」

無理やりボスと外套の人の間に体を滑り込ませる。

「虚白!!!」

「わかってる!!!」

すると俺の傍にも虚白も来て衝撃に備える。ハキが攻撃を受け流し、

「虚白!!! スイッチ!!!」

「おう!!!」

双子かと思うぐらい似てる2人に心の中で感謝をしてその場を立ち去る外套の人。

それから1時間……

バリン!!!!!!

遂にボスを倒した。

「「うおおおおお!!! やったぞ!!!」」

「なあ……… 虚白、」

「わかってる」

すると3人は自分の獲物をヒースクリフに投げた。そう、自分らの他にもキリトが投げたのだ。すると案の定自分たちのカーソルがオレンジに………なることは無かった。変わりにヒースクリフの体はなにか障壁みたいのに守られており表示されたのは、

《Immortal Object》の字だった。破壊不能オブジェクト。皆の視線がその字に釘付けになる。

「やっぱりな……」

「お前もか、キリト。」

「あいつには不可解なことが多かった。今回のボス戦も。」

「確かにな。だろ？ ヒースクリフ……いや、茅場晶彦！」

「そう言い放つハキにヒースクリフは苦笑し、周りは混乱する。」

「茅場晶彦？ なんで団長が？」 「そんな訳……でもあの表示……」 「嘘よ……」

その茅場を更に貶めるべく、言葉が続ける。

「本で見たよ。ゲームをただ見てるだけ程つまわないものは無い……… だったっけ？」

「…… 聞こう、なんでわかったんだ？ ハキくん」

「簡なさ、戦う限り、HP半減は逃れられない。なのに、イエローに陥つたのを見た事がない？ ふざけてる。HP50%固定ダメージをしてくる敵もいるつてのに。だから変だとは思ってたさ。でも今回で分かった。お前、ボスにありえない程の速さの攻撃を入れてた。システムアシストの度を超えていた。だから攻撃したのさ。分かったか？」

「ははっ…… 名推理だハキ君。ただ……… その先までは見通せなかったみたいだね。」

「その先？」

「ああ、はつきりと言おう。私が100層のボスだ。」

~~~~~

「…… シャレになんねえな。希望の光が一転、ボスカよ……」

「ああ、だが正体を見破った褒美に、1回チャンスをやろう。私を倒してみろ。もちろん不死属性は解除するし、倒せたら皆を解放しよう。」

「その勝負受けた。」

「おい！ハキ!!!」

「大丈夫だ。みんなは見てる。俺がやる。」

「はあ…… 俺もやるぞ。」

「キリト…… はあ…… きちんと合わせろよ?」

「ああ、茅場もいいよな?」

「ああ、問題ないさ。」

そう言うのとヒースクリフもとい、茅場はウィンドウを操作し全損デュエルを申し込んでくる。それをハキは受諾する。それと同時に俺ら以外の人達は体が動かなくなっただのか、なんの抵抗もなく倒れ込んだ。キリトはデュエルには参加しないが共闘って形だ。

「かかってこい。」

「じゃあ、お言葉に甘え… てッ!!!」

ズバン!!!

ハキの斬撃はバカでかい盾によつて防がれる。それから何回もソードスキルを織り交ぜ、キリトとスイッチして……

縦、横、横、切り返してまた横、縦…… 何回攻撃しても茅場の盾に防がれてしま  
う。

「シッ!!!」

「キリト！スイッチ!!!」

声をかけてしまえばその後の動きがバレる。相手は人間だ。言葉を発せば必ず対応  
をしてくる。なら、

反応できないほど速くすればいい。

ズバンズバン!!!

速く……

ズバン!!!

もつともつと……



ズババババ!!!

黒いオーラが立ち込める。ソードスキルのエフェクトが黒く変色する。  
速く……強く………強く………もつともつと………

システムを支配し、速さ、力を最大限に強化する。黒いエフェクトに赤い稲妻が迸る。  
《システムに異常発生、システム復帰を検討、失敗、内部からの攻撃を確認、排除を検討、失敗。予備システムに切り替え、失敗、カーディナルシステムフル稼働準備に入りま  
す。》

突然の事だった。皆の頭に直接響いたこの声は無機質な響きを残して消えた。

「驚いたな………どんな手品を使ったのか聞いても？」

「手品？ いや、無いね、そんなものは。これからだ。勝負は」

「はアアアアアア!!!」

ハキは怒号の連撃を繰り返す。それはヒースクリフを圧倒していた。

「ぐっ……重いな………チートを使ったのか？」

「いや？ シツ!!! 真正正銘、俺の力さ。」

ヒースクリフ。どんどん追い込んでいく。そしてついにハキとヒースクリフのゲー

ジが同じぐらいになった。

ハキは戦ってる…。なのになんで動かない…。俺の足！

キリトはヒースクリフとハキの間に入れずにいた。

いや、本当はわかっている。足を引つ張るのは目に見えているからだ。だから俺は動けない。

頑張れ、ハキ……

「これで終わりだアアア!!!」

渾身のソードスキルを。自由自在に軌道が変わるソードスキルを……。無限に叩き込もうとする。そして

盾がハキを攻撃した。

「くそっ!!!盾にも攻撃判定あんのかよ……」

ハキの体力はもうレッドだ。

くそっ!!!立て!次が来るぞ!

ハキは次に備えて立とうとする。だが、

立てなかった。、

自分の体力ゲージの上に何かアイコンが出ている。《転倒状態》（スタン）だ。

こつ……こつ……

茅場が近づいてくる

「これで終わりだな……意外と楽しかったよ。ハキ君？さようなら」

茅場が剣を振り上げる。

ああ……死ぬのか……色々と今まであったな……ごめんな？アーちゃん……俺よりいい人見つけて幸せになってくれ……きつとたくさんいるはずだ……

茅場の剣をオーバーアシストの光が覆う。

つて、諦められるかよ……諦められるわけねえよ……こんなところで死ぬなんて……せめて……せめて……アーちゃんに見守られながら……

死にたかったな

ゆつくりとコマ送りのように茅場の剣がハキの命を絶とうと迫ってくる。そしてその剣は……その先は見るのが怖くなり目を瞑ってしまった。

いくら待っても切られる不快な感触が来ない……もしかしてもう俺死んだのか？  
？  
そう思い恐る恐る目を開けてしまう。

目の前にはハキの代わりに切られた、

アルゴが居た。

近くには外套が落ちている。

「ハーくんは世話がやけるナ……………」

ぎこちなく笑いで返すアルゴは力なく倒れた。ハキが抱き起こす。見る見るうちに……無情にもHPが減っていく。元タイエローだった体力はレッドに差し掛かっても勢いは止まることを知らず、あっという間に数ドットも残さず無くなった。

「ハーくん……………ごめんナ？」

そう言い残してアルゴはガラスのようにエフェクトをまき散らしてその場から永遠に消えた。

ハキは今虚無感が心を蝕んでいる。その虚無感は怒りへと代わり、矛先は言わずもがな、茅場に向いた。

「茅場、今、俺はどう思ってると思う?」

ドスの効いた声で茅場に問う。茅場はあまりの迫力に答えられずにいた。

「酷く冷静なんだ。目の前で愛する人が殺されてもだぞ? 気持ちわりい……なん  
でだろうな、悲しみも限度を超えると何も感じやしねえ……だがな……お前は  
殺す。」

そういった後直ぐにハキが発する威圧感が変わった。圧倒的に濃厚な殺意に。

《システム第1障壁、破られました。同じく第2、第3も同様。カーディナルシステムフ  
ル稼働準備完了。フル稼働開始。攻撃によりフル稼働停止、バグ修復出来ません

一瞬で茅場の背後に回り込んだ。剣で切り付ける。盾に阻まれ、茅場は3メートルほ  
ど吹っ飛ぶ。

そして、手元の剣が砕け散った。

だからどうした？武器が無くなったなら次は体で、体でもダメなら心で……あいつには絶対勝つ!!!

ハキの手刀は黒いオーラが覆い、盾も貫通し、茅場の胸を貫いた。

「見事だ……」

「あの約束本当なんだろうな？」

「ああ、皆をログアウトさせよう。」

「俺はお前を許さない……」

「ああ、許されるとは思ってないさ、ただ……いや、今はやめておこう。さらばだ、力強き少年よ」

茅場は派手なエフェクトを残して消え去った。同時にハキの纏っていたオーラも消えてなくなり跡形もなくその雰囲気も消した。

《バグの抵抗消失、バグを走査………確認、排除を検討、成功。システム復帰、ゲームはクリアされました………》

「おい？ハキ、やったんだよな？」

「ああ、あとは頼んだ、キリト」

そう言うハキの体は透き通っていき今にも消えそうだった。

「ははっ……… そんな顔すんなって、ただ、システムがバグを見つけてそれを処理するだけだ。簡単だろ？」

「簡単なわけあるか!!!」

「はあ……… お願いだから行かせてくれ……… もう、疲れた……… アーちゃんが居ないんだ。もう生きてる意味はない……… 俺と関わった大切な人はみんな消えていく。そういう運命なんだ。……… あっちでアーちゃんと待ってるよ。あまり早く来すぎたら怒るからな？」

そしてこう続けた。

「じゃあな、みんなによろしく言っといてくれ………」

そう言うハキはぎこち無く笑いながら消え去った。跡形もなく。

「……… 泣くぐらいなら行くなよ……… 馬鹿野郎………」



## 11話 妹

ああ…………… 終わったな…………… アルゴ、今行くぞ……………

「…………… ん…………… ハー君！」

「うん……………」

気づいたら白い空間にいた。なんだ？懐かしい感触…………… 頭の後ろに柔らかいのが…………… 自分からもう遠ざかって行った存在の気配…………… でもそれは無い…………… 俺の前で消え去ったのだから。目覚めた途端に悲しさが込み上げてくる。

なんで今更こんな夢見るんだよ…………… 辞めてくれよ……………

もう……………

「もう…………… こんな夢なんて…………… こんな希望に縋りたくないんだ……………」

そう…………… あいつは目の前でポリゴンに…………… もう嫌だ。全てが嫌だ。何も信じられない…………… 離れないって言ったじゃんか…………… なんてだよ…………… なんて俺をかばった時笑ってたんだよ…………… なんて満足そうに微笑んだんだよ…………… 俺が殺したんだ…………… 最愛の人を。アルゴを。なんで動けなかった？なんでだ？俺はアルゴ



驚きのあまり涙が止まったハキは希望に縋る顔になる。

「ああ…………… オイラだよ…………… 見てたヨ。頑張ったナ」

「ツ!…………… もう離れるな……………」

「うん」

「もう居なくなるな……………」

「うん」

「俺を一人にしないでくれ……………」

「うん」

短く答えるアルゴに心底安堵しそして……………

「…………… 紺野 拓だ……………」

「え?……………」

「俺の名前だよ。東京の世田谷区だ。多分その病院にいると思う」

「オイラは帆坂 朋ダ。同じく東京の世田谷区だよ。偶然だナ?」

「マジか…………… じゃあ病室に戻ったらすぐ行くよ。」

「体動かないかもヨ?」

「車椅子でもあるだろ?」

「変わらないナ、待ってるゾ？」

「ああ、待ってる」

2人は軽いキスを交わして、それぞれの現実世界に帰っていく。それは優しく…… 労わるように…… お互いの存在意義を確かめるかのように……

~~~~~

戻ってきた…… 一気に感覚が重いものになった…… 多分現実の体に戻ったからだろう。腕が上がらないどころか、まぶたも満足に開かない…… いや、ダメだ!!泣きごとと言って何になる!!逢いに行くんだ…… アーちゃんに…… 朋に……

「あ…… う…… お……」

喉が動かない…… 声が出せなくなってる…… 息が苦しい…… でも!!!  
ハキもとい、拓は体をむち打ち、ベットの隣に置いてあつた電動車椅子に乗り病室を出ていく。

バカでかい病院をしらみつぶしに探すわけにも行かないので、もう消えかかった記憶を辿りカウンターにたどり着く。

「帆坂朋さんの病室ってどこですか？」

震える手で頑張つて紙に書き、伝えようとしたが上手く書けない…… 形にならない…… しょうがなく、しらみつぶしに探そうとする。すると……

「拓君?!なんで起きて…………… ってことはSAOはクリアしたのか?」  
倉田先生だ。

「あ…………… あう……………」

「喉が動かないのか…………… よし、前教えたやり方でやりますよ?」

ハキは頷いた。

「あ、か、さ、た、な、は…………… はですか。」

そう、まぶたの動きだけで言葉を特定するやり方だ。

「は、ひ、ふ、へ、ほ、ホですね?」

瞼を動かす。実はまぶただけでも辛いのだが…………… でもアルゴに会うため

だ…………… 泣きごとなど言つてられない。

それから数分後。

「ふむ…………… 帆坂朋さんの病室ですか…………… 分かりました。本当はダメなんです

が、行きましょう。」

そう言うのと車椅子を押すために後ろに回り、押してくれる。

「そう言えば妹さん、病氣治りましたよ?」

ん?何だつて?今なんて言つた?妹が?治つた?エイズが?これはアルゴの後に会いに行かないとだな……………

顔に嬉しさをにじませた拓を見て倉田は自分の事のように嬉しそうに微笑んだ。

「着きましたよ。では私は報告があるのでこれで……………」

ここに……………アルゴが……………覚悟を決める……………俺はそのために来たんだろ

?すう……………はあ……………よし

ガララッ……………

「……………」

この部屋にはベットが2つある。そのうちのひとつはもぬけの殻だったが、もうひとつの方にはカーテンがかかっていた。懐かしい雰囲気だ。確信した。ここにアルゴが……………朋が居る。

しやあぁ……………

カーテンを開ける。いや、自動で開いた。そこには色ボケたナーヴギアを膝に置き、座っているさつきぶりの姿があった。いや、髪の色は違うか……………でも愛おしいのは変わりない。

体は痩せこけている。骨ばった手を拓の方に伸ばす。

「は……………くん……………」

朋は辛うじて話せるようだ。

「あ……………う……………お……………」

アルゴの名前を呼ぼうにも声が出ない。喉が動かない……………

「ハー……………くん……………いや、たつくん……………でいいか？」

喉が本調子じゃないのか、いつもの鼻声ではない……………いや、これが本当の喋り方なのか？ いや、そんなことはどうでもいい……………帰ってきたんだ……………ここに……………叶ったんだ……………ここで、現実世界で会うという事が……………

その思いを噛み締めて朋と拓は抱き合う。拓は涙を流すアルゴに懸命に手を伸ばし、抱きしめる。弱々しいが確かな感触に朋は涙が止まらなかつた。

~~~~~

あの出来事から数ヶ月、俺と朋はデートをしていた!!!

ねえ？ 天使の隣歩くって拷問？ ねえ!!! 嬉しい拷問だな!!!

拓はすっかり元の調子を取り戻していた。

「ナア、ナア!!! これどうダ？」

朋は黄色いニットを持ってきて体に合わせる。

「お、おう、似合うぞ!!! それはもう天使だ!!!」

あ……… またやらかした………

「もう!! やめろつて言ってるだ口!!」

「す、すまん……… 天使すぎるのが悪い………」

よし、責任転換……… つて朋の様子が……… どうしたんだ?

拓の鈍感ぶりは磨きかかっていた。周りからは、

「リア充死ね………」 「くそつ、うらやまめしい!!!」

「なんだ……… あそこだけ空気が違う!!」 「なんで俺わアアア!!!」  
 という感じ。 うん、大半は予想どおり。 でも………

「ちよつと、あの人かっこよくない?」 「ちよーイケメンなんですけど? やばなーい?」

「クソ、カノもちかよ………」

うん、自覚ないだけで拓もモテモテであった。

「たつくーん!!!」

「ん? 何?」

「あれ食べようぜ!!!」

朋が指さしながら腕に絡みついてくる……… つてか、俺の腕に当たってるんですけど? いや、何とは言わないよ? 言わないけど……… 年頃の俺としては……… いや、



嬉しいぞ?!ここは譲らん!!!だけど理性が!!!

「当ててるんだゾ？」

「思考読まないで?!」

耳元で囁くように言ってくる朋、ねえ、小悪魔ぶりに磨きかかってません？

「はあ………行くか！」

「お？賢者モードカ？」

「朋こそ発情期？」

「ナっ?!」

よし、返しは衰えてないな。ふっふっふっ………顔赤くしてるな………仕返し

だ。にししっ!!!あはっはっはっ!!おっと、ポーカーフェイス………

「その笑い方気持ち悪いゾ？」

「だから思考読まないで?!」

幸せな日々が過ぎていくのでした………

~~~~~

「あ、朋、妹のお見舞い行くんだけど行くか？」

「ああ、そろそろ挨拶もしたいしナ。」

そう、俺がSAOに囚われたあとに、妹は奇跡的な回復を見せたという。もうほぼ元どおりということだ……ちよつと悲しいのか嬉しいのか……だつてそうだろ?!俺要らなかつたつてことじゃん!!俺居なくなつたら回復つて、俺嫌われてるの?!ねえ!!!でも回復したのは素直に嬉しい!!!うん!!

「じゃあ、10時に迎えに行くよ」

「分かつた。待つてるゾ!」

うん可愛い、天使、女神、創世神!!!

急いで迎えに行こう!うん!!!

家に着い手からがすごく大変だつた。何せ2年何もせずに置いてたんだからな。ホコリだらけ……黒光り野郎もいるしな。ああ……よし駆除しよう……

色々あつて集合場所の時計台の前にバイクを止めて待つていた。いやあ……許更新めんどかつた。何?あれ、そんなん覚えてるわけねえだろ。2年も乗り物とは無縁だつたんだ。なんか新しい標識増えてるし……まあ、無事取れたけどな?まあ、俺つてば天才?ん?ん?

「天才ではないゾ?」

「のわアアア!!!」

後ろから声が………  
つてか耳元は反則ですよ………  
アル………  
じゃなかった、  
朋さん。

「にししっ……… まあ、ハーくん………  
じゃなくてたつくんは天才じゃないけど、オ  
イラの大切な人だからナア………」

「あー！あー！も、もういい！もういいから！行くぞ!!」

うん、誤魔化せた………  
わけないよな。現に俺の顔は耳まで赤くなってるだろう  
し………」

「つて朋も赤くね?!」

「な、なんのことかナア………」

「ごまかせてねえ………」

そんなこんながあり………

雑談しながら病院を向かう。

「でナ?言つてやったんだヨ」

「おまつ！それ俺に言えよ!!! すごい危ねえじゃんか!!!」

「何も無かったから結果オーライだな」

「だな．．． じゃねえよ！何かあつたらどうするんだよ！」

「みたいに話していました。やつべつ．．． 楽しいなあ．．． ご、ゴホン．．． そして．．．」

「おーい、来たぞー。」

「あ！はいはい!! 待っててー！」

うん、元気いっぱいだな。いつも通りだ。

「げ、元気いい子だな．．．」

「アーちゃんはなんか驚いてるなあ．．．．． うんなんか圧倒されてるって感じ。まあ、みんなの第一印象は元気いいで評判の可愛い妹だからなあ．．．．．」

「ほーい!!! 今空けるよー!!」

中から出てきたのはショートヘアの茶色がかつた髪と目、拓とは似ても似つかない可愛らしい子だった。

「ボクの名前は紺野木綿季！拓にいの妹だよ!!」

## A L O 編

## 12話 朋と言う人と真実

さあ…… うん、朋が…… 朋の性格変わった……

ん？何が起きたって？こっちの生活に慣れてきた朋は2年前のS A Oに捕われる前の性格に戻ってきてる…… うん、やっぱりロールプレイしてたらしいな…… からもいも少なくなつたし。

「たつくん、ここの食器片づけるよ？」

「ん？ああ、お願い〜」

「ああ」

うん、もう1個大きく変わったことが…… 朋がうちに住んでる…… いやあー!!! うれしいいいいい!!! あと、語尾の鼻声が消えてて字ズラが男みたい…… いや、可愛い、カワイイんだけどおおお!!! いやね？、俺は一人暮らしだったんだよ、で俺の家に住まないか？って言ったたら、嬉しそうに頷いてくれたんだよなあ…… それにもう1人……

「ただいまあー!!!」

玄関から元気な声が聞こえる。

「おー、木綿季おかえりー」

「ユーちゃんおかえりー、ご飯できてるよー」

そう、我が妹の木綿季も順調に回復して、もう、病院から退院したのだ……。でもずっと病院暮らしで自分の行くところがないとかで俺の家に来たのだ。賑やかになつたな。

「あ、明日、用事あるから朋、俺ら帰り遅くなるわ」

「ああ、分かった、墓参りか？」

雰囲気は落とさないように最後はわざとSAO時代の喋り方にしたのだろう。もうその癖は治ってるはずなのに……。気使わせてしまったか……。

「そうだよ、学校終わりに行くから先帰っててくれ。」

「なるべく早く帰ってきてよ？」

「努力する。」

「いやあ、扱にいたちはラブラブだね!!!」

「あつたりめえだ!!」

胸を張りながらふざけて返すと、

「もう! 2人とも……」  
／／／／

うん、可愛い…… 凄く女子らしくなったというか…… いや、俺の彼女（夫婦だった）最高かよ…… もう死んでもいいよね？ね？もう満足…… 俺は幸せ者だ…… 作者（扱は爆ぜろ）

なんで?!俺の行動全部お前のせいだよ?!でもあざっす!!!最高の彼女と妹を…… つと、雑談はそこまでにして、朋がやばい……

「ラブ：ラブラブ…… ふふっ…… // //」

「おーい？朋さーん？アルゴさーん？」

ソー…… 帰ってこなそうだな……

「我を忘れて妄想に走っている朋、うん幸せそうな顔はすごく可愛い…… ひかれてたら嫌だな…… !!!けど木綿季が居ることも……」

って、声にでてた!!!やばい、朋、どんな反応するかな……

「か、かわっ…… 扱が可愛いって…… // //」

あ、ダメだこりや…… 妄想に拍車かけちゃった……

幸せな気持ちになりながら3人は夜を過ぎした。

~~~~~

学校終わりに木綿季を迎えに行こうと校門に向かうと木綿季と共にもう一人誰かが

いた。それは……

「あ、たつくん、オイラも行くよ、挨拶したいしね。たつくんの両親に……」

「…… そうか、みんな喜ぶよ。」

正直に言おう、今凄く嬉しい。挨拶つて、もう故人の親にだ…… そんなことをしてくれる…… そう考えるだけで幸せな気持ちになった。

「そうだね！お姉ちゃんも喜ぶよ！」

「え？姉なんていたの？」

「ああ、らんねえの事だな……」

俺の姉ちゃん、ランつて名前だったんだけどエイズでランは亡くなった。その時は俺も木綿季も荒れて家のもの壊しまくったな…… 最後まで耐えてたのがらんねえだっただけに結構精神に来てた。その時にαテストにスカウトとされたんだっけ…… 終わった時に木綿季もなつて精神が…… いや、ダメだ、木綿季は治ったんだから…… そんな話はやめろ……

「じゃあ行くか、」

これからすることがすることだけに気分は暗い。息が詰まる。でも、行ってあげたい。俺らはちゃんとやってるつて。彼女もできたんだつて…… 上手くやってるつて……



「たつくん？大丈夫？」

「え？」

気づいたら頬を暖かいものが伝ってくる。涙だ。意識すればするほど出てくる。それは止まることを知らずただただ流れ、やがて嗚咽で静寂を破る。いつの間にか墓地に着いていた。

「うっ……… ああ……… ごめん……… な……… こんなところ……… 見せて………」

「沢にい！泣いたらダメだよ！」

「何言ってるんだ…… お前も涙目じゃねえか……… でもそうだな………」

意識を切り替え墓地に入る。

「ここなの？」

「ああ、俺の家族が眠ってる場所……… まずは綺麗にしないとな………」

墓石を丁寧に……… 柔らかい手つきで拭いていく。いつかしむように……… そのあとは墓石の周りに生えている雑草をむしり取り、石の前で手を合わせる。隣の2人もそれに習い手を合わせる。

「ー会いたいかな？ー」

「ッ?!虚白か?!」

「ーああ、もう一度言う。家族の3人に会いたいかな？ー」

…… 会いたい…… でも3人でだ。じゃないと行かない。いや、行けない。

——ああ、やっぱりあの世界でもここでもお前はお前か…… ————  
慈愛に満ちた雰囲気の声が聞こえる。

——いいだろう。着いてこい。——

そう言うのと目の前が花畑に…… 否、この世のものでは無いと直感が告げる。それほど現実離れた光景だった。いつの間にか、2人が隣にいる。

「綺麗だね……」

「ああ、綺麗だな……」

朋は思わずSAO時代の喋り方になった。木綿季はすごく嬉しそうに言った。2人ともそれほど衝撃だったのだろう。

そのうち、人影が向こうから見えるようになってきた。

「あれは誰だ？」

目を凝らしてみる……

徐々にその人影が鮮明になってきた。そこに居る3人が手を振ってくる。

『見えるか？あれがお前の両親と……』

虚白の言葉を俺が受け継ぐ……

「らんねえか……」

懐かしい……………そして……………

嬉しい……………

『久しぶりだね、択、木綿季』

姉ちゃんが言うその声はとても懐かしいもので……………

『元気にやってるか？ 択』

父さんが言ってくる。

「… 父さん…………… 元気だよ……………」

やばい…………… 泣きそう…………… ダメだ… 泣くな…………… 心配させない……………

「そ、そうだ、紹介するよ!!! この人は朋、俺の彼女だ。だから心配しないでいいよ？ ちやんとやってるから。」

「択にいと朋さん、ラブラブなんだよ!!!」

「ちよつ！ 木綿季!!!」

『はははっ、元気見たいね、これは大丈夫かしらね……………』

『だね…………… 朋さん、択を頼みます。』

だんだん声が遠くなつていく。だが……

『俺はずつとお前ん中いるからな。何かあつたら出て来てやるよ』

はあ…… 虚白らしいな…… でも頼もしいや。よし最後に元気に……

「じゃあね！また来るから！」

『~~~~~』

もう何言つているかわからないが…… でも暖かかった……

『あ、あと、ここに來てることは記憶から消すからな？』

は？それを先に言えよ!!!

~~~~~

戻つてきた…… ん？戻つてきた？なんでだ？なんか咄嗟にそういうふう pensando

しまったが…… なんだ……？

「たつくん？大丈夫か？」

「ん？何が？」

「涙で出るよ？」

朋に指摘されて初めて気づいた。

「な、なんでだよ…… 止まっただけだよ…… みんなの前では泣かないって…… 決めた

だろ……」

本当に決めたのか? : わからない : わかっているのは俺の心の中には寂しい気持ちと暖かい気持ちと同時に包んでいた。

顔を柔らかい感触が包む。朋に抱きしめられたのだ。正面から。

「オイラがついてるから……泣くナ……」

~~~~~

ピロピロピロピロ

電話の着信がなる。今日は休日だぞ? 誰だ?

画面には見たことのない番号からかかってくる。うーん : まあ出てみるか

『あ! 出た! おい!! 俺は和人だ!!』

「はあ : : : で? 和人さんがなんの用で?」

『なんで他人行儀なんだよ!!』『おい、キリト、一旦落ち着けて。』あ、ああ』

「待て? キリトなのか?」

『ああ、そうだ。』

「マジか!! で? アスナは元気か?」

『ツ…… 明日菜はまだ目覚めてない……』

「…… は？目覚めてないって…… クリアしただろ!!俺らで!!」

キリトの言葉に驚きを隠せなくなった…… それほどの事だったのだ。そんなことも知らずに俺らは呑気な生活を送っていたのだ。そんなことは考えてなかった…… いや、考えないようにしていた。でも…… よりによって親しい人がなるなんて…… 「クリアはした…… したはずなんだ…… いや、確かにした。でも帰ってきてない奴が200人ぐらいいるんだ。」

「マジか…… その中で誰も帰ってきてないのか？」

「ああ、誰一人もな……」

なんでだよ、あいつは全てのやつがログアウトされるって言ってただろ…… 嘘だったのか？でも、確かに大犯罪は侵したがそんなことをするやつでは無いはずだ……

そんなことを考えながら直ぐに家を飛び出した。焦りながら…… 最悪なことを次々と頭に浮かぶ。心底そんなことを考える自分が嫌になった。

俺は…… 俺は間違えたのか？100層まで攻略すべきだったのか？…… あの場合で俺は要らなかつたのだろうか…… ダメだ、考えが暗くなる。

暗くなりながら俺は朋と一緒に夜道を走った。

~~~~~

「おい!!キリト!!!」

「ハキ?!おせえ!!!!」

「うるせえ!!なんでもっと早く連絡しなかった!!!なんで今になってそんなこと言い出したんだ!!!」

俺は無我夢中に聞いた。攻めるような口調になっていたかもしれない。でもそれだけ拓には余裕がなかった。いや、余裕を作れなかった。

「まあまあ、2人とも、少しは落ち着けよ」

「エギル……」

「おう、エギルさんだ。で、キリト。」

「あ、ああ……」

場をなごますように少しエギルはおちやらけてキリトに話すように促す。

キリトからの言葉は全て信じられないものばかりだった。200人もログアウト出来てないのは電話で知っていたが……まさか、アスナもその中に入っていると

は……………これは……………なにかの不具合か？正規の攻略法を採らなかつた故の……………そうなのだとしたら……………俺は……………俺は……………

「ッ……………」

不意に頭を撫でられる感覚がした。それは優しく……………包み込むように……………

「顔が悲しそうだよ？拓らしくない……………オイラがいるから……………何があつても味方だから……………ね？」

朋はあだ名ではない名前と呼んできた。それだけ心配させたつてことか

「ああ……………ごめんな、ありがと……………立ち直るまでこのままでもいいか？」

「ああ、いいよ？」

キリトとエギルは驚いたような顔になっていた。なんでそんなに驚くんだよ。俺ら付き合ってるんだからこれぐらい当たり前だろ？

「なんか……………どこから突っ込んでいいかわからないけど……………アルゴの喋り方、普通だったらこういう感じなんだな？」

「ああ、最近はSAOの頃の癖も抜けてきてね、まだ時々くせが入る時があるけど大体は治つたよ。」

「そうか……………」

「はあ……………それで？話の続きは？」



「いや、お前らその格好で……いや、もういや。」

そう。今の体制は俺が朋に寄りかかって朋に頭を撫でて貰ってる感じ。うん、天国。昇天する……けど罪の意識は消えてくれないか……消えてもらっても困るんだけど……

「たつくん」

「ああ、わかってる」

また悲しそうな顔をしていたのだろう。俺は心配させてばかりだな……

「……話戻すぞ」

またキリトが話し出す。それは主にリアルでの事だったが……

「写真か……確かにアスナだな」

「……アーちゃんだね」

そうその写真は世界樹？とかいう木の枝に吊されたカゴの中を撮ったものだが……画像が荒くて詳細はわからなくなっている……

「写真のゲームの運営会社……それと須郷か……黒幕はそいつだろうな……多分」

「そうだね。でもそうならゲームのサーバーの方も怪しくなるよ？これは全部ひっくり返して1から調べた方がいいかもね……」

「……だな……」

そこに繋がるとは思ってなかったのか、ポカンと口を開けてこちらを見てくる2人。

「……流石は凄腕情報屋コンビ……」

「よせよ、まだ合つてると決まった訳じゃねえんだ。これで警察とかに訴えてしまいました……とかシャレにならない。」

「これはあれだな？」

「ああ、情報屋の基本、情報の裏付けだ。なあエギル、このゲームのハードつてなんだ？」  
「ナーヴギアでも出来るぞ？今出てるアミユスフィアはセキュリティ強化版だからな。これもやるよ」

そう言ってエギルは何が長方形の薄いものを投げて寄こした。その箱には「アルヴへイムオンライン」と書かれていた。

「ありがとう。助かった。」

待つてろ……攻略法の勝手な判断してしまった落とし前は俺がつける……

## 13話

## リーファ

「ふいー…………… まずはアルゴとキリトを探さないとな……………」

そう俺は今、アルヴ Heim オンラインに来ている。体を動かすには問題ないようだ。戦闘の感を取り戻さないとな。

「えつと、ステータスってどう見るんだっけ？」

「やっべー!!! 説明飛ばしてた!!! え? ステータス見れない生活始まる? 待って? 無理だよ?! 無理無理!!! アイテムも取り出せねえし!!!」

がむしやらに指を動かしていたら……………」

ピロン

「あ、開いた…………… 今どうやったんだ?」

ええーとヘルプはどこだ? 下の方か? あ、あつた。

「へえー S A O とは逆の指で開くのか。てかこのステータスウィンドウの開き方の説明ってステータスウィンドウの中にあつたら誰も見れないんじや……………」

うん、考えたらダメだな。さすがに運営会社全体が無能ってことは…………… キリトが言うあいつが運営してるなら有り得る……………」

「さてと……………アルゴ探すか。」

「読んだか？」

「うおっ?!」

マジか、後ろにいたのかよ……………

「このっ!!!驚かしやがって!」

お返しにアルゴを抱きしめる。いやあくこういうことしたの久しぶりだなあ。家には木綿季いるしな。仮想世界にはSAO以来、来てないし。って、え?!アルゴの頭に耳が……………それだけじゃない、尻尾も……………え?最高じゃね?ねえ?俺の事殺す気?可愛すぎて死ぬよ?俺。いや、もう死ぬ……………昇天する。

無意識に俺は耳やら尻尾やらを揉んだり撫でたり……………とにかくしまくった。いや、しようとした。まあ実際は3回ぐらい揉んだだけだったけど。手触り最高かよ……………

「うんっ……………や、やめっ……………／／／ハーくん、う、後ろ……………」

「ん?後ろ?」

何があるんだ?…ってマジか……………まあ、見られてしまったのなら仕方ない。いや、なんで俺はこんなに冷静でいられるんだ?

そう、ハキの後ろにはポカンと口を開けてみてくるキリトと興味深そうに見てくるユイがいた……

へ？ユイがなんでこんなところにいるんだ？そしてキリトがなんで居るんだ？

「や、やあー！」

「お、おう」

うん、ぎこちないな……でも……俺は聞きたいことがある……

「なんでユイがこの世界にいるんだよ!!」

「ん？なんかストレージに入ってたんだ。ほら、ナーヴギアに保存しただろ？」

「ああ、でもなんで……ってそれどころじゃねえ!!!」

ユイがここにいるなら俺のストレージにも!

どこだ?!どこだよ!……ユキ!!!

~~~~~

あれから数十分探したのだがそれらしきものは一切ない。でもスキルやらなにやらはSAOの頃を引き継いでいるかのような数値だということに気づいた。あ、ユキの事は今後説明するから待ってね?……誰に言ってるんだ?俺

「ハキ兄さんとアル姉さんのストレージのアイテムもデリートしたほうがいいですよ？ GMに見つかったら垢BANされるかもです。」

「ああ……」

そう返事したはいいものの思い出の品もあるわけで……

「あー!!これも捨てるのか…… あ!これ懐かしい!!」

盛大に捨てられないものが増えていった。が……

「もうめんどくさいなあ……」

ポチッ……

「え?何?何してんの?ねえキリトさん?」

「ん?一斉デリートだけど?」

「何してんの?!何してくれてんの?!感傷にぐらい浸らせてよ!!」

「だって遅いから…… ああ!すまんすまん。つい…… な?」

「つい…… な、じゃねえよ!!ああ、思い出の指輪が…… アルゴに貰った品の数々が……」

キリトもここまで落ち込むとは思ってなかったらしく、珍しく戸惑っている。すると不意に



「おい!!!聞け!!!」

よし、深呼吸して、

「赤いの!!!助太刀する!!!」

は?ここどこにいるみんなの心はひとつになった。

「「「いや、なんでだよ!!!」」」

「そんなに強く言わなくてもいいじゃん。冗談なのに……」

思ったよりもみんなに強く言われたので心に来たハキは……

「今のは冗談だ!!!」

大声で誤解を解いた。うんダサイな……いや、自分でもわかるよ?さすがにね。すべってもないのに

「ゴホン……さてと、覚悟はいいか?」

カツコつけて言うハキに周りの人達は呆れた表情を浮かべ、

「見たところ初期装備のインプのお前が俺らに帰るとは思えないが……」

「それはどうかかな?」

そう言うハキは腰に提げた刀を掴む。

「なあ?居合つて知ってるか?」



「ああ？いきなりなんだ？あれだろ？抜くと同時に切る奴」

そう答えたリーダー。ぼいやつにハキは……

「ちよつと違うな。過去の侍達が神速の斬撃を出すために考えられたひとつの型だ。」

そう、覚悟を持つて放つ技なのだ。現に居合自体、考えられた当時は振り抜いたあとの動作のことは考えられていない。真正正銘一騎打ちのための型だ。だが……そのあとも刀を連続的に振るう為にあらゆる型が考えられた。それが……

「居合（乱）」

虚白が俺に伝授した技のひとつ。居合の後に普通不可能なそのままの速度で連続的な斬撃に繋げる技

気づけば敵の反対側に来ていた。そこに姿を現した瞬間、一呼吸置いて敵が1人を除いて赤いライトエフェクトに変わる。

そう、システムでさえ反応が遅れたのだ。仮想世界などという処理能力が必要となるものの為に開発された物がだ。そんな技に人が反応できるわけもなく、なんの抵抗もなく。

死んだ。

「うーん…… やっぱ3撃が限界か…… あ、リーダーさんで良かったか？」

そう言うのと怯えたように答えてくる。腰を抜かして立てないようだ。

「あ、ああ」

「そうか、君も戦う？それとも…… その金髪のお嬢ちゃんが俺と戦う？」

そんなふうには俺はわざと戦闘狂のようなセリフを吐いたせいも赤いやつはより一層怯える

「てい」

後ろから頭にチョップを食らう。見てみたらチョップをする為に頑張つてアルゴが背伸びしていた。

「ふざけるのはそこまでだ。ハーくん」

「わーたよ。楽しかったからついな」

あーあ楽しかったのになあ…… でもいいか、アルゴの言うことは聞かないとな……ん？尻に敷かれるの一直線だつて？知るかそんなもん。

「い、いや、辞めておこう。勝てるわけないからな。デスペナが惜しい。」

「ははっ、素直な人だな？」

意外と根つこの部分は綺麗なのかもしれない。女襲つてたけど…… 襲つてたけど。

パシツ

あ、またチョップされた。ごめんなさあーい。反省してないけど……

パシツ：パシパシパシばしばしばし!!!

「ちよ！ちよつとアルゴ!!!い、痛い痛い！」

「だって……ハークン構ってくれないんだもん……」

え？何？この超生物。この人をダメにする超生物何？いや、やべえ、可愛すぎて溶けちやうスライムになつちやう!!!転生したらスラ〇ムだった件でか？やかましいわ!!!つてやかましいのは俺だ!!!

「ごめんなく？…よし！キリト!!!あとは頼んだ!!!」

「え？ええー?!」

俺はアルゴに謝ってからキリトに丸投げしてアルゴと一緒にイチヤイチャしまくった。うん、しまくった

その空間はブラックコーヒー必須の空間になったという。

~~~~~

「さてとアルゴとの時間は終わり。これからはアルン？とかいう例のでかい木の所まで

この子が案内してくれるらしいから、」

ええ？嘘だろ？この幸せな時間を手放せと？こいつ悪魔か？魔王か？この人でなし！！  
女つたらし！！

「えー？まだいいだろ？この女つたらし……（ボソツ）」

「なっ?!俺は女つたらしじゃないぞ!!」

あ、聞こえてた？てへぺろ！キモいつて？ほつとけ。あのなあ？アルゴがやったらめつつちゃ可愛いんだぞ？これだけは分かる。アルゴ、可愛い！（確信）

「嘘つけー」

「なっ?!……いいから行くぞー!」

「ええー？まだこの時間を堪能したい!!!」

「そーダ、そーダ!」

「だーめ!」

「ちえ」

「なんか、すごい仲いいんだね?」

金髪ロングの子は言ってきた。

「「良くない!!!」」

「はあ… 仲いいんだね…」

呆れたように金髪の子は言ってくるそして…

「私はリーファ、よろしくね！」

「ああ、よろしくな(ナ)!!!」

そして、キリト許さん。

この女つたらし、人でなし、悪魔、何かのクズ紙にでもなつちまえ

「な、なんか凄い寒気が…」

体を震わせてそう言うキリトに俺は

ふっふっふっ… この怨念あいつに届け!!! そしてこんな事をした後悔をするんだな

!!!

「はあ… まあいいか、ほら、行くぞ？」

は？ 何考えてるの？ こつちに手なんか伸ばして… まさか？!

「お前!!! ついにアルゴにまで手を出すつもりか?！」

アルゴを抱きしめながら器用に自分の背中にアルゴを隠す。

ぜってー渡さねえ。キリトの毒牙には絶対かからせるもんか!!

「もう、こいつらどうにかしてー!!!」

キリトの絶叫が響き渡る。

~~~~~

「ユイから聞いたんだけどアルゴ達が言ってたサーバーも怪しいってやつあったろ？」  
いきなりそう言い出したキリトは深刻そうに言ってくる。

「ああ、あれだろ？ んーと、ユイの姿をトレース出来てることとこのゲームの制作期間をネットで見ただけでもそれも含めて多分、S A O サーバーのコピーか？ でも、それだったら基盤が同じってことはグラフィックのパターン形式も………ダメだ、俺からしたらこれが限界か。」

「ハーくん、オイラもそれは考えたけど、グラフィックがS A Oの時と比べると僅かに落ちる気がするゾ？ 多分ベータ版のS A Oのデータコピーじゃないか？ 正規版のS A Oよりも動きの正確性も少し落ちてるしナ」

「ああ、たしかにな、それはあまり考えてなかった。」

俺らで討論を始めているとキリトが信じられないような目で俺らを見てきた。

「お前らのリアル、探偵だったりする？」

「な訳あるか、アホ」

キリトは何故か動揺していた。リアルのことは御法度ということのを忘れるほどに。でもなんで探偵？ 解せぬ……

「だって推測がユイの行き着いたこととほぼあつてるんだ。情報屋ってここまで推理で

きないとダメだったりするのとか？」

「ん？そんなことないと思うヨ？情報仕入れて裏付けするだけだからナ」

「そ、そうか」

何に驚いてるんだ？誰でもこれぐらい出来るだろ？まあ、少しはこういう推理系、好きではあるけど。

——相変わらず仲良いんだな？——

虚白か？

——おう、あまり驚かないんだな？——

なんか、S A Oから帰ってきた後にも会ってる気がして……まあそんなわけないんだけどな？

——そうか、記憶が消え切ってないのか？まあ分からないけどな——

記憶？消える？なんの事だ？

——ああ、気にすんな？どうでもいい事だから——

そうか？まあいいけどな。

——おい、とりあえず前見た方がいいんじゃないやねえか？ぶつかるぞ？——  
ぶつかる？なんの事だ？

そう思いながらも意識を戻すと目の前に壁が現れた。

「あらら…… 塔にぶつかっちゃってるよ……」

見事にハモった2人の喧嘩が隣から聞こえてくる。

「大丈夫か？ ハーくん」

「ああ、何とかな…… いてて……」

「にししっ…… ドジだな？ ハーくん」

「うるせ、」

少し乱暴にアルゴの頭を撫でてから立ち上がる。

「よし、今日は遅いし明日からアルンに行くか？」

「そうだね、そろそろ家族のご飯も用意しなきゃだし。」

「俺はもうちよつと居れるぞ？」

俺が提案するとリーファとキリトが答える。

「じゃあリーファはまたな？」

「ええ、またね？」

リーファはそう言うてから自分の部屋に戻った。多分自分の部屋でログアウトする気なんだろう。

「さてと、キリト、リアルの集合場所はどこにする？」

「ああ、エギルのとこでいいだろう。飯食ったら行くよ。」



「分かった待ってるから来いよ？」

そして俺はログアウトした。……… ってあれ？エギルの店ってどこだっけ？

~~~~~

「いや、まさかたつくんがエギルの店を忘れてるとはね。」

「行く時必死だったからしようがないだろ……」

そう言い訳する俺が居るのはエギルの店だ。なんでかって？リアルでキリトと待ち合わせとちよつとな。野暮用だ。

「さてと、キリト来ないな？」

「だね、あ、ほら！あれ、来たよ！」

肩を叩きながら言ってくる朋。キリトはなんか女子と男子1人づつと一緒に歩いてくる。それを見ながら俺は考えていた……… アルゴ………

「マジで可愛いな？」

「む、だれが？」

ちよつと怒ったような顔になり不機嫌そうに言ってくる。

「お前が」

「なっ?!／／／あ、ありがとね」

「おう、そういう所も可愛いんだよなあ」

うん、しみじみ思う。あ、

「そうだ、今度旅行行くんだけど、アルゴも来るか？てか強制な？」

よし！これで朋も来るだろう。朋がいれば10倍は楽しくなるぞ?!最高じゃね？

「えっと……家族水入らずで言った方がいいんじゃないの力？」

なんか寂しそうに言ってくる。って、え？何言ってるの？

「アルゴもほぼ家族みたいなもんじゃん。一緒に暮らしてるし……それに一緒に行きたいから誘ってるんだぞ？」

「そうか？ならオイラも行くぞ!!!」

良かった良かった。これで3人だな。俺はこの3人で行きたかつたんだ。ふう……朋と行きたいからバイトしてたのにパーになるとこだったぜ……

「あの一……そろそろいいか？」

「ん？キリ……和人と……和人の妹ってどこか？その女の子は。あと、誰だ

？誰だこいつ」

「誰だろーナー？」

しらばつくれる俺たちに男は反応を見せる。

「おい！絶対わかってるだろ！」

「んー？なんの事かなあー？」

うん、これで押し通そう。楽しそうだ。恨むなら自分を恨みた前。弄られる方が悪いのだよ。隼人君。

「よしつ、そつちがそんな考えならこつちにも考えがあるぞ？ いいのか？」

「ん？ いいよ？ 後ろめたいことなんてないからな!!」

「……… みんなー!!!ハ……… 拓と……… んーとなんだっけ？ ああ!!!いいや、アルゴと

ハキは同じ家に住んでいマース!!!そして夜はあんなことやこんなことを………」

「してないわ!!!」

あ、しくった……… たしかに一緒に住んでることは隠してたんだった。その後

われたことしか否定してねえ……… てことは………

「え?! 拓つて朋と一緒に住んでるのか?!」

ほらあー!! やつぱこう来たよ……… どう応えよう……… うわあー……… う

ぜえー……… 隼人のにやけ顔うぜえ………

「ええーと……… な、どう言えばいいん「ああ、そうだよ?」」

「ちよつ! 朋?!」

おおーい!!! 何してんだよー……… 隠すつて話したじゃんか? まあいいけどよ。て

か、妹さんどうしたんだ?

「あの……… 和人の妹つてどうしたんだ? 様子がおかしいけど………」

見てみると、ハキって……それにアルゴ……と、うわ言のように繰り返していた。

「もしかして、お兄ちゃんがキリトだったり?」

「え?そ、そうだけど……どうしてスグが知ってるんだ?」

お?衝撃の事実、キリトを知ってるとは……つてもしかして……

「たつくん?気づくの遅いよ?」

「つてことは……」

もしかして、本当に?

「私だよ!リーファだよ!」

「え?リーファってスグなのか?」

とれそうなほどブンブン首を縦に振るスグと呼ばれた人。

「ゲームの中で会った人が運命の人とは……キリト、やるな?」

「ぶっ……、運命って!?!妹だぞ?」

「知ってるよー?んー?何を想像したのかな?」

やべえ、からかうの楽しい。アルゴもこんな感じでからかってたっけ……口調

戻ってからも減った今じゃ、少し寂しくもあるな……後でお願いしてみるか。

「拓……お前……あのことをバラしてもいいのか?」

「へ?あのこと?なんの事だ?さつきみたいなの虚偽報告はノーサンキューだ」

キリトが耳元で内容を言ってくる。

え？ちよつ、待つて?!それはダメだ!

「ごめんなさい、すいませんでした。」

「よろしい」

アッアッく!!!……く!つ!じよ!く!屈辱!!!!

「お兄ちゃん達仲いいんだね?」

「おう!心の友だよ!」

「脅迫する側とされる側です。」

また人頓着あつたのは言うまでもない。

~~~~~

談笑が続き、その半ばで……

「なあ……朋、あのさ……」

今の拓は朋から見てすぐく罰の悪そうな顔をしているのがありありと分かった。

「ん?何?なんでもたつくんのことなら聞くよ?」

だから優しく、聞く。受け止める。たとえば、どんな願いでも聞き届ける。

「あ、あのさ…… 朋も苦勞して口調直したのは分かる…… でも、俺からして見たらやつぱなんか違うなって……」

どういふ事だろう…… 不安になってきた。私は嫌われたのだろうか……

「俺が出会ったのはSAOの頃のアルゴであって、SAOの頃と今の朋、どっちも同じぐらい好きだ！ 比べ物にならないくらい好きだ！」

そうか、嫌われてはいなかった。それがわかっただけで安心して聞ける。安っぽい女だつて？ 馬鹿言え、たつくんだからだよ。

「だから…… 例え、ゲームの中ではそうだととしても、SAOの頃の方も居ないとさ…… さ、寂しいんだよ…… だから……」

そうか…… そういう事か。時々顔に影が指すのは。だつたら私は…… いや、オイラは……

2 回目の告白を受け取った朋は……

~~~~~

「だから…… 例え、ゲームの中ではそうだとしても、SAOの頃の方も居ないとさ…… さ、寂しいんだよ…… だから……」

朋が顔を俯かせて考えるような仕草を見せる。

嫌われただろうか？ 鼓動がうるさい…… 静まれよ…… いつその事止まれよ…… 嫌われた？ 引かれた？ そうだよな…… まだ昔にこだわってるんだもんな…… 女々しいよな…… これから俺はどうすればいい…… まずは……

「な、なーんてな、忘れて「こうか？ ハーくん？」…… へ？」

朋は顔を上げて声をかけてきた。懐かしい声で……

「へ？ とはなんダ？」

「だ、だつて俺は朋に嫌われて…… 引かれたから……」

「はあ…… ハーくんはバカだナー…… オイラが大好きなハーくんを嫌うわけないダロ？」

ヤレヤレと手を持ち上げわざとらしく首を振ってくる朋に俺は、  
「そ、そうか…… ありがとな、朋。」

万遍の笑みで抱きしめた。すると横から3人の声が……

「あのさ、俺たち（私たち）のこと忘れてない？」

「ヒューヒュー。見せつけるねー!!!リア充ってどうなるか分かる?特に男の方。」  
「知るか。」

うん、このいい雰囲気の水刺すやつは……今に見てるよ?

「んー?朋ー、なんにも聞こえないよなー?」

「そうだなー、なんも聞こえないゾー?」

そう言いながら俺らはナーヴギアを被り、からかってから逃げるようにアルヴハイムに逃げた。

それからしばらく経ってキリト達と合流し、ただし隼人は居ないが……

「いやー、流石にこのいい雰囲気の水刺すやつなんか居ないよなー?」

「居ないよナー?」

俺はアルゴをお姫様抱っこしながらキリト達に近づいていく。周りの視線が痛い……  
が!!!知るか、そんなもん!

ふっふっふっ…… どうだ…… 制裁じやい!!!

「なっ?!…… アルゴはともかく、ハキまでアルゴみたい……」

苦しそうに胸を抑える。



「…ブンブンうるさいな？ハエか？」

キリトが膝を地面につける。

「…ハーくん、それくらいにしといた方がいいんじゃないか？ゲームの中にハエは居ないゾ？それにそろそろキリトが泣くゾ？」

「泣かないよ！……」

それからしばらくキリトをからかい続けた。うん最後の方は涙目だったね、いやーあれは泣いてた！泣いてたに決まってる!!

「泣いてないって言ってるだろ！」

…… なんて考えてることわかった？

…… ハキはこの日からキリトをエスパと呼ぶことに決めたのであった。……

作者コノヤロー、俺は呼ばないからな？

「おーい、その3人？着いたよー？」

「おおー！綺麗だな……」

ーおおー……… 凄いな…… ー

虚白か？

ーおう、あ、そうだ俺は今から少し用事あるからこれから話しかけられても反応で

きないからー

え？ちよつとまてっ

ーじゃあなー

おおー…… おーまいがー……… なんだよ用事って………

「虚白が居なくなつた………」

声に出して確認してみたが、そんなに虚無感は感じない。てか、最近、虚白何も話してなかつたんじゃ……… マジかよ………

~~~~~

「なんか、なんというか……… 怖くて飛べねえ………」

塔の窓から首だけ出して言い出すハキ。それを見かねたアルゴとリーファは

「ほら！男なら早くいけヨ!!」

「ほら！お兄ちゃんも!!」

「うそーん!!!」

アルゴは俺を、リーファはキリトを窓から放り出す。

必死になって飛んだ。うん、今までに無いくらい心の臓がバクバク言ってるぞ?!い

や、嘘!!!アルゴが酔ってる時に迫られた時の方がバクバク言ってきました!!!って誰に俺は言ってるんだ!!知るか!!

心の中でハキは1人漫才を繰り広げているとふと塔から出てくる人影に気付いた。

「シグルド……」

いつの間にか横に來たリーファがそう呟く。

「って、アルゴ何やってんだ?」

アルゴは窓から身を乗り出しては中に身を引いてを繰り返していた。

「アルゴ……まさか?俺にあんだけ言っというて飛べないとか……らしいな……」

俺はリーファとキリトとその他一名を置いて俺はアルゴに駆け寄る。もとい、飛び寄る。

「アルゴ、大丈夫か?」

「ハーくん……」

あー結構高所にやられてるな……

アルゴの顔を見て考えるハキはアルゴの背中に腕を回し、膝裏にも手を回して、お姫様抱っこしながらキリトの所へ戻る。

「前から思ってたんだけど、ハキくとアルゴさんって、どういう関係なの?」

そりやそうなるか、こんなにイチャついてたら。うん。ちよつとからかってみるか。

「ん？ ああ、夫婦だったんだ」

「ちよつ！ ハーくん?!」

「ん？ 嘘じゃねえだろ？」

「そりやそうだけどナ……………」

勝った。何について……………何にだろ……………あつ、おい、今そこで笑った

やつ出てこい？

「はあ……………始まった……………持病が出たか……………」

なつ……………失敬な、俺は楽しくからかっているだけだつての。俺は持病なんて何も

持っていないぞ？

「そういうところが持病なんだよ。」

「ナチュラルに心読むのやめて?! ねえ、なんで誰もかも俺の心読むの?!」

「なんか、聞いたらダメなこと聞いたよね？ ごめんね？」

なんかすごく丁寧に謝ってくれる子が居るんですけど？ 何このいい子。なんでこんな子がキリトの妹なんだよ。勿体ないだろ？ 不釣り合いだろ？ 俺にだつてこんなにいい

い子が妹に1人は欲し……………いや、しつかり者だったら俺は

大学でバカやれないのでは？え？いや、でも大雑把だったら家散らかるし……………うん  
木綿季が1番俺にはちようどいいな。キリトにはリーファが1番なんだろうけど。

「なあ、ぷツ……………ス、スグ、」

「ん？何お兄ちゃん……………」

やばい……………俺、やりすぎた？なんかしおれた花みたいに縮こまっちゃってるんだ  
けど……………

「……………ハーくん？……………」

「分かったよ……………そんな目で見ないでくれ……………リーファ、さっきのは嘘でもないが  
ほんとでもないんだ。」

笑いながらそう言ううとリーファが

「そうなの？」

と聞いてくる。わざとらしく大袈裟にうなづいて、ハキは

「ああ、S A Oで結婚してたつてだけなんだよ。だからまだリアルでは恋人同士って訳  
だ。どうだ？安心したか？」

「安心したかじゃないだ口?!こつちも不安になったじゃないカ!!!」

悪い悪いと反省してない返しをしないとアルゴの頭の感触を確かめる。

「うん、SAOの頃より感触の再現がなってないな。」

「むー…………… まあいいカ」

諦めてくれたみたいだ。でも気持ちよさそうにしているのを見ると…………… あつと、あかんあかん、理性が飛びかけだぞ…………… ん？空飛んでアルゴを抱えてるのになんていう風に頭を撫でてるのかつて？そりゃ抱っこして…………… あ、そう言えば胸らへんにやわらかい感触が…………… おおッ!!!俺の理性よ戻ってこい!!!

「むー…………… 何か変なこと考えてるだ口?……………」

「ん?!な、何が?!」

てか、(むー)て…………… 天使かッ!!!いや元々だ!!!ああつと、俺の理性よどこに行くのだ?……………

「おい！お前ら!!どれだけ俺を無視すれば気が済むんだ!!」

ん？なんか声掛けてきたぞ？こいつ誰だ？なあ、なんだつけ…………… ナグルゾだつけ？随分、喧嘩腰だな。まあこいつのおかげで俺の理性は保たれた。

「んで？ナグルゾさんが一体なんの用で？」

「誰だ！それは！！俺はシグルドだ！！」

「そうかそうか、でなんの用？」

シグルドだったか。いやあ、惜しかった惜しかった。で？俺ら急いでるんだけど？早くしてくれませんか？アルゴとのイチャイチャ時間を返せ!!!

「リーファ、お前、領地を捨てるのか？」

捨てる何言ってるんだ？遠出するだけだろ？

「ええ、捨てるわ」

え?!ちよっお前も何言っちゃってるの?!これって俺のせいだよね?!このゲームのことはよくわかんないけど、それって重大な事だよね?!

「待って?!待って?!それって俺らのせいだよな!!!謝るからアー！俺、そんな重大な「もういいの!!!私が決めたんだから!!!」さ、さいですか」

あつという間に解決だよ。

「で？ナグルゾさんは何を言いたいんだ？」

「違うわ!!!私はシグ「ハイハイ、で？さつきから俺は聞いてるけど、俺は黙って首切られるなんの用？いい加減答えろよ」」

うん。我ながら理不尽だな、自覚はある。でも話が前に進まないんだ。だからさつき

使ったのは許してくれよ？ナグルゾ。

「ハキ、なんでニヤニヤしてるんだ？」

「ん？してたか？」

「もう、兄ちゃんたち、うるさい!!!」

「すいませんでした……」

怒鳴られてしまった。これもあれもナグルゾのせいだ!!

「なんなんだ、お前らは……」

「心の友と妹です」

「脅迫する側とされる側とする側の妹です。」

「はあなんなんだお前らは……」

「ナグルゾさん、それ二回目」

「はあもう突っ込まないぞ……」

「で？要件は？」

「今から言うわ!!!」

うん。ナグル……シグルド……不憫

シグルドは一呼吸置いて言った。



「リーファを引き抜くなら俺と戦え。2人ともだ。それで勝ったら引き抜くことを許す」

そう言つて剣を構えた。

## 14話 感覚のズレと無口な少女

俺を倒してからいけ…………… 見たいな奴ほんとにいたんだ……………

「えつと…………… リーファとナグ…………… じゃなくてシグルドって付き合ってるの?」

「な訳あるか(ないでしょ)!!!」

ですよねえ…………… なわけないですよええ……………

「でもじゃあなんで?」

ん…………… 解せぬ…………… だつてさ?! そんなにここにいて欲しいって思うのって独占欲でしょ?! 俺だつてアーちゃんに対してもあるし…………… そうじゃないって言うのは……………

「自慢じゃないけど、私ってランカーなのよ。結構古参なの、私」

リーファの実力でランカー…………… ランカーって意外と普通? 攻略組にも何人かいたけど…………… いや、まだ原石か。サラマンダーと戦つてたのを見て思ったけどな…………… キリトと俺とアルゴで鍛えればおそらくは…………… よしつ…………… まずは……………

「俺がやるか…………… ほら、来いよ、シグルドさん?」

ハキがアルゴを離して安定したところで口を開いた。

「お前倒したらいいんだろ？」

暗に俺の方が強いと伝える。するとそれに苛立ったのか、俺に口調を強めて構えていた剣を方に担いでこつちに喋りかけてくる。

「ほう？そんなに大口叩くならそれなりに強いのだろうか？」

「おいおい、方に担いだら反応出来なくなるだろ？その癖やめろよ。ソードスキルある訳じゃないし……」

「…… ツ…… 知ったような口を!!!お前にはこれで十分だ!!」

凶星らしいな。分かっただけ上々か……

「 So that's it…… try to prevent it (なるほど…… なら防いでみる)」

最大限の煽りを込めて英語で返してやると意味がわかったのかわからなかったのかさらに怒り出した。

あちや…… こいつはダメだ…… こんなんで取り乱すとは……

「はあ…… じゃあ行くぞ」

「ふん…… 引導渡してやる。」

それを聞いた時が最後だ。

ハキがそう思いながらも最大限の力を使い、移動を開始した。

「って、あれ？」

ちよつと待って?! 上手く動けねえ…………… 感覚が…………… いや、動けるはずなんだ…………… 何故かアバターが言う事聞かねえ……………

「ヤバっ…………… 現実に慣れすぎた……………」

2年間ずつと仮想世界に居たとしても現実世界に半年もいて、仮想世界にほぼ触れなかった。ハキは半年のブランクを背負って戦っている。

「ん…………… これじゃ手加減できねえ……………」

この手加減と言うのもアニメとかマンガとかに使われるものとは違う。ここで言う手加減は力が加減できないのだ。つまり……………

「力が0か100しか出せない……………」

「何ブツブツ言ってる!!! クソっなんで攻撃が弾かれるんだ!!!」

傍から見たら子供ががむしゃらに振った棒を大人がその場から動かずに軽くあしらっているような…………… しかも暇そうにハキはあくびをしながら。

「貴様!! 舐めているのか?! なぜ動かない!!!」

「だって思いの外弱すぎて動いたらお前一瞬で終わるだろ。今は手加減できねえんだ。俺だって上手く動けねえから止まってた方が確実だろ?」

「なツ…………… クソおおおお!!!」

その叫びさえもハイハイ、ガンバ？と言って軽くあしらう。

ハキ達はSAOというデスゲームでのランカーだったのだ。経験の質が違う。

「じゃあレッスン1だ。俺らはSAOでのなんだっただけでしょう？」

「知るか!!!」

「ブッブー。正解はランカーのTOPスリーのうちの一人だ。まあ攻略にはあまり出でなかつたが……」

自慢するでもなくただ、悲痛な顔で言うハキは続ける

「レッスン2、SAOでのランカーとはどんな意味があるでしょう？」

「ちっ……こうなったら……」

無視を決め込んだのか、俺が動かないことをいい事に距離をとって詠唱を始めるシグルド。それにハキは愚策と言うように初めて自分から動いた。だが……

動いた瞬間シグルドの背後に来てしまった。

やっべええー!!! やっぱ加減出来ねえわ!! 寄りにもよつてすぐ後ろかよ!! 惜しかったけど惜しくねえ!! こうなったらカツコつけさせてもらうぜ!

「こ、答えはな…… 背負うものだよ。」

「なっ…… 一つの間後に後ろに……」

「いいぞおー？意外と失敗がかっこ着いた？」

「なあなあ、アルゴ、あれってただ単に加減間違っただけだよな？」

「そうだな…… それになかったことにしようとしてル」

「かっこついてなかったアアア…… はっず!! 恥ずいわ!!!」

「攻略には背負うものが山ほどある。羨望、嫉妬、信頼…… それに命だ。皆は色々心の中に気持ちを押しとどめてそれらをトップの連中に押し付けてくる。それはデスクゲームだからこそでそれには多大なプレッシャーになつていた。」

「現に死んでつたやつなんて山ほどいたしな…… と続けるハキにシングルどがついにたまらず質問をする。」

「…… 何が言いたい」

「経験が違えんだよ。2年間ほぼずっと戦ってたんだぞ？そりゃ経験なんて嫌でも身につく。」

「それは俺だつて長くこのゲームで戦ってる!!」

「それは死ぬつていうプレッシャーが無い所でだろ？」

「いつの間にか剣戟は止んでいた。ただただ、2人の声が響くだけ。」

「SAOのプレイヤー……主に攻略組は死ぬ可能性のプレッシャーを二重に抱えて耐えてたんだ。モンスターに殺されるかもしれない。明日は生きてないかもしれない。明日、現実世界の体が死ぬかもしれない……」  
「……」  
「……」

シグルドはただ、黙るしかなかった。それは理解していたとしても、してないとしても。

「それにトップの奴らは大体βテスターかそれに関わってたヤツら……誹謗中傷、あらぬ噂、嫉妬、暗殺……そう言う普通のやつらなら病んでも仕方ないようなことにも耐えていた奴らだ。そんな状況で攻略に参加するなんて並な勇気じゃねえよ。」

「帰ってこない兄を待ち続けてる家族が居たり、SAOから帰って来た兄を元気づけるために難病から復活した妹が居たり、まだ会えてないSAOでできた親友が居たり、SAOで知り合って一緒に生活して思い出を作ったのにまだ帰ってこない人が居たり、それを待っている人が居たり……」

ハキは一緒に頑張つて、泣いて、喜びを共有し合った仲間たちのことを考えながらポロポロと次から次へと口から出てくる。

「それらを全て背負って戦ってきた奴らがいるんだよ。それをお前は貶した。それぐらいでなんだ?と思うてるかもな。だがこれだけは言っとくぞ?」

ハキは剣を振り上げ今までに一番の憎悪を滾らせ言った。

「死んでもいいゲームなんてぬるいんだよ。人はアイテムじゃねえぞ?」

そう言つてハキは剣を振り下ろした。あつけなくなんか光つたものになった。

「おーい!リーファ、なんか遊戯王で言うところの死者蘇生的なのないの?」

結構昔のゲームだな……俺が幼稚園ぐらいのやつだ……あれ?じゃあわかんないんじゃない?

「遊戯王?……死者蘇生なら……でもここではハキさんの攻撃は効かない筈なのに……」

「ああ、それならなんかシステム支配してデュエル仕様にした。」

あ、伝わったらしい、良かったあ……なんか驚いてるけど無視だ無視……説

明めんどいし。あ、生き返った。

「さてと、リーファは連れていくぞ?」

「クソつこの俺が……」

なんか言つてるけどあれだけ言つて聞かないなら無視だ無視。

「はあ……皆、行くぞ。」

「ああ、ほら、キー坊達も行くぞ?」



「あ、ああ……」

「う、うん」

先を飛んでいるハキを追いかけようみたいにみんなが着いてくる。

「なあなあ、リーファ」

「ん？何？」

「なんか、ごめんなさい……… 大変なことになったみたいだから………」

「あ、ああ、いいよ、別に……… 元々外には出るつもりだったし………」

そう言いながらリーファはキリトの方をチラチラと盗み見するのを俺は見逃さな  
かった。

これは……… ほうほう、そういう事か……… ふっふっふっ

「そうか……… そう言ってくれると俺も嬉しい………」

「まあ、これからよろし」ところで！」

ハキが遮るように声をかける。

「最近、キリトとはどうだ？」

意地悪な笑顔を向けて言い放った。

「ちよっ!!!ハーくん?!!」

アルゴがなんか言ってくる。うんアルゴも気づいてたんだな？

ハキは耳元で言い放つ

「これをからかわずには居られないだろ？」

何を考えたのか、アルゴは顔を赤くしてしまった。

「こ、こちよばい……………」

あ…………… そういう事か…………… 道理でその反応なわけだ…………… これは……………

からかいチャンス!!!

「はむっ……………」

「きゃッ……………」

ふっふっ甘噛みはどうだ？ 反応が可愛くてヤバいんだが…………… 続けよう!!

「ハムハム…………… ん……………」

「あっ…………… いやっ…………… きゃあ……………」

あ、俺の理性がやばい…………… どうしよう…………… 手放そうか…………… バイバイ俺の

理性!!!

「あ、ええつと……………」

あ…………… リーフア困ってるな。でもおかげで理性を…………… 俺、今惜しいことし

たんじやないか？ ログアウトしたらエギルの店…………… これ完全に損してるじゃん!!

いや、今ならまだ間に合う!!!

「あ、あのさ、アーちゃん。ログアウトしよ?」

甘噛みしていた口を一旦避けて言ってみる。すると……

「あ…… どうして?」

切なそうな声を上げた後、アルゴの口調も忘れて聞いてくる。

「ん? 今日、イチヤイチャしたいから。まあ、いつもしたいんだけどさ……」

決まってんじゃん。いつもできるもんならやつてるわ!どこかで必ず邪魔が入るんだよ!!前だつてアスナが押しかけてきて邪魔入ったし。クソつ…… 俺だつて偶には彼女に甘えたい…… だつて男だもん!!

「…… ん…… いいゾ…… ただし、これ終わつてからだからナ?」

ええー…… っつて言いたいのを必死に堪えた。それも甘噛みしながらこらえた。まあ、腰を下ろして、後ろは木だからみんなには甘噛みしてんの見えてないだろうけど…… 位置的にリーファは見えていたが……

「…… わかった…… どっちみち家は一緒だからな、時間ならいくらでもある。」

そう。俺らは一緒に住んでいるんだ!!もう一回言うか?

俺らは!!一緒に住んでいるんだ!!

「ニシシツ…… 楽しみにしてるヨ、ハーくん。」

お？動揺が収まったか？そうかそうか……………それは良かった……………

ハキは口をアルゴの耳から離す。

でも、このままじゃ物足りない……………

「アーちゃん、声出すなよ？」

「エ？」

1回念を押しとかなきやさすがにバレるからな……………

ギユ……………

前からモフりたいと思ってたんだ。前は何回か揉んだだけだから。でも、変な感じつてどんな感じなんだろう……………今度聞いてみるか。

「つー……………ふ、あ……………あー！」

「へ？」

今の反応で変な感覚の意味がわかった気がする……………なんかごめん

「せめツ……………て、あつ……………ちで……………」

あつち？え?!このままモフっていいの?!

「ハキさんは何をやっているのですか？」

なつ?!なんでここにユイが!!!

「あつと……………ええつと……………ゆ、ユイちゃん？その笑顔は……………」

すごい満遍の笑顔……

「ALOでの猫妖精のしつぽの感覚のサンプリングは現実世界のせいこ「あ~~~~ユ  
イちゃん！ストップ！！ストローップ！！」はい？」  
!!!!!!

何この子供！！凄い怖い！！なんでも知ってる感がすごい！！コーワイ！

「人には色々あるの！！あまり突っ込まないでくれ！！」

「そうですか…………… 変なこと言っすぎてごめんなさい……………」

「え、あ……ちよつ…………… 俺も言いすぎた……………」

「いいえ…………… こちらこそごめんなさい……………」

ど、どど…………… どうしよう?! 女の子泣き止ませるスキルなんて持ってない!!! この場合精

神的に!!!

「いや、俺が悪かったんだ!!! えつと…………… 飴…………… いる?」

「…………… はい!!」

よ、よろしつ!!! 危機は乗り越えた!!

「ハーくん…………… それはないと思うゾ……………」

…………… 乗り越えてなかった……………

「じ、じゃあアーちゃんならいい案あるのか? (耳元で)」

「え、えつとナ…………… あ、そうダ! ユーちゃん、今度肩につけるやつで色々現実世

界で連れて行ってあげるから許してクレ！」

「アーちゃん……………」

アーちゃんも大概じゃねえか？ やっぱアーちゃんは尊い…………… だって今まさに恥ずかしそうにしているもん。こいつに惚れないなら誰に惚れる!!! ってぐらいに可愛い…………… けど誰にも渡さん!!! キリトには触れもさせん!!!

「む…………… しょうがないじゃないカ!!! 泣いてる女の子を慰めるスキルなんてオレっちにあると思うの力?！」

「…………… いや、可愛いからプラマイゼロ。寧ろプラスに振り切ってる。」

「何言ってるんだ?！」

分からないかあ…………… 自分のことは気づきづらいつて言うからな…………… 俺はそういうアーちゃんも可愛いと思ってる。(?・ω・? ??キラン

「いや、可愛い……………」

「この人達、会話になってないです……………」

ユイちゃんがなんか言ってるけど、こっちはアーちゃんの可愛さを心という名のアルバムに刻むのだ。

ー…………… どんだけお前はデレてんだよ…………… ー

あ、虚白。お早いお帰りで……………

——なんで残念そうなんだよ……

——

ん？だって、虚白がない間、真に2人つきりっていう感じがして……なんて言うか……ね？

——ね？じゃねえよ！俺は邪魔者つかか？！俺は剣に宿つてんだから剣を目の届かないところに置いたらいいだろ……

——

その手があつた……

——はあ……まあいいや。本題に行くぞ？単刀直入に言つて、ユキの修復がやつと終わつた。——

……え?!今なんて言つた？

——だから、会えるんだよ。ユキに——

……冗談じゃねえよな？

——当たり前だろ……そんな深刻な嘘はつかねえよ……

——

ハキは現実世界に意識を戻した。

——あ、おい！まだ話し……

俺はそれどころじゃねえんだ……ユキに会える……ユキに……ユキに……会える。

「アーちゃん……ユキに……会える」

~~~~~

「アーちゃん……………ユキに……………会える」

アルゴは目をまん丸く開きこう言った

「なっ!!!本当力?!」

「ああ、虚白が言ってた。」

遂に……………遂に会える。長かった……………日々が地獄だった……………思い出さな

かった日は無かった。

「呼び出し方法は？」

「……………」

聞くの忘れてた……………でもユイちゃんと同じパターンなら……………どうやったら出

てきたのか聞いてよかった……………

ハキは黙ってアイテムウインドウを開く。下にスクロールしていくと……………

「あ、あった……………」

そこにはMHCP000（メンタルヘルスカウンセリングプログラム試作0号）とい

う名のアイテムがあった。それを取り出すと淡く光り出す。

「これが……………ユキなのか？」



答えはかえってこない。ただそこには確信があつた。少なくとも俺には……………  
「アーちゃん、行くよ？」

覚悟を決めて……………

「アア……………」

お互いの意志を確かめ合い

「よし……………」

いつの間にか、周りにはキリトたちが集まっている。が関係ないとばかりに無視しそのアイテムに向かって2人で囁く。

「帰ってきて（くれ）…………… ユキ」

辺りを真っ白の光で覆い尽くす。今までの全てのことを洗い流す様に…………… 今までの孤独を拭いさろうと……………

色々と考えているうちに段々と光が弱まっていく。人影が浮び上がる。中から現れたのは中学3年ぐらいの背丈の女の子。髪はロングの白髪で後ろで束ねてそのまま下ろしている。

「ただいま…………… お父さん、お母さん……………」

そうやって僅かに微笑んだ。

## 15話 ユキ

「ただいま……………お父さん、お母さん……………」

俺は思わずユキに抱きつく。ずっと待ち望んでいた再会。一年以上の会えなかった日々はアーちゃん居たから耐えられたもの、居なかつたら今ごろ俺はどうなっていたのか……………」

「ユキ……………おかえり……………」

アルゴもユキに抱きつき、涙を流しながら……………懸命に口を動かしながら掠れた声で言う

「ユキ……………おかえり……………」

同じ言葉……………それしか言えないのだ。嬉しすぎて……………安心して……………彼らにとつてその言葉は気持ちを最大限に伝えようとした結果出たものなのだ。それはユキにも分かっていた。だから……………」

「……………ん……………」

元から無口なのもあるが、簡潔に……………そして感謝の気持ちを込めたものだった。それはハキ達にも伝わった。

「ただいま……」

そうして、ハキとアルゴを抱きしめるユキという少女は満たされたように少し微笑んだ。ユキは普段表情を表に出さないだけにかなりレアな事だがそんなことは微塵も問題にならないらしい。

ただただ、ハキとアルゴは再開の喜びに浸り、ユキの温かさを感じていた。

~~~~~

んー…… やっぱりユキはユイと同じナビゲーションピクシー扱いなのか？

そうハキが考えをめぐらせるとユキが首を振って察して答えてくる。

「ううん…… 私は…… プレイヤー扱い。プログラムが、欠損してたのが問題みたい……」

「そうか、そうだ。おーい！キリト！」

「ん？どうし……」

キリトが固まる。ユキを見たまま。そりやここに居ないはずの人を見たりしたらそうなるわな……

「ラグってんの？それともユキに惚れた？でも渡さん!!!」

「そうじゃねえよ!!!」

ユキをさつき離れたのにも関わらずまたキリトから守ろうとユキを抱きしめる。すると……

「ん、お父さん、なんか目の前にウィンドウあるんだけど……」

ん? あ、そうか、強く抱きついたから…… って結構前からじゃね?! それ! 絶対そうだよな?! 最初に抱きついた時からだよな?!

「ユキ! それは押すな! お父さんがBANされる!!!」

焦って頑張って説得しようとしていると……

「お姉ちゃん!!!」

ユイが突撃してくるじゃありませんか……… 何処のリフォーム番組だよ。

「ちよつ?! ユイちゃん! まっ……… グホッ………」

ユキに突撃して来たユイに横から抱きしめていたせいで脇腹にユイちゃんの頭がクリーンヒット。痛いです。まあ、ユイちゃんは痛くなかったらしい良かった良かった……… 良かったのか? いや、良かったんだ。呑み込め。それが事実………

意味不明なことを考えているハキには天罰を……… (B Y 作者)

「む………」

「え? あ、あの……… アーちゃん?」

なんか唸っているアルゴにハキは居心地が悪くなりユキを離す。

「んー!」

アルゴが腕を広げて俺の方に向けてくるんだが…………… どういうことだ?

「え、えつと……………」

「抱きしめて」ってことだろ? 気づけよそれぐらい。」

一言多い方が人化した虚白。もう1人はキリト。そして……………

「え、えつと…………… その……………」

キリトをちらちら見てモジモジしてる人が1人……………

つて、え?! 何このカオス状態!!!

うーんと? ちよつと状況を整理しよう……………

①ハキ、アルゴはユキと感動の再会

②アルゴが抱きしめるのを強請ってくる

③ユイがキリトを見てモジモジしてる

もう一度言おう。何このカオス状態!! いや、アルゴが俺に強請ってくれるのはすごい嬉しいよ? で、問題はユイだ! 焦れたいなあ……………

「キリトー、ユイが抱きしめて欲しそうに見てるぞー? ヒューヒューアツアツだねえ?」

ハキはアルゴを抱きしめながら言った。すると当然キリトも言いたくなるわけ  
で……………」

「お前にだけは言われたくないわ!! だいたい俺らは親子……………」

「…………… パパ?」

「これからキリトがながーい話をしようとしたんだろう…………… だが……………」

「あーあ、ユイちゃんを泣かせたく。この情報はいくらかなあ……………」

「5万ぐらいじゃないか?」

「地味に高いわ!! くそお…………… 売らないでください、お願いします」

速攻で謝ってきてる。変わりみ早…………… でも、いやあー気分がいいなあ? ふつ

ふつ…………… もつと遊んでやるか……………」

「ユイちゃん? キリトの胸はどうだい?」

「すぐく遅し…………… (ハッ!)」

「にししつ…………… ユイちゃんも大胆になったナ?」

「もう、嫌だア……………」

キリトがなんか言ってるけど無視だ無視。

「えい……………」

「あの…………… ユキ? なんで俺の頭をチョップしてるの?」

「んっ……………」

俺に向かつて腕を広げてくる。

「つたく、うちの女達は甘えん坊だなあ……………」

そう言つてハキはユキとアルゴをまとめて抱きしめる。

「それにしても、アルゴつて変わったよなあ？前はからかいが生き甲斐！つて感じだったのに」

どうしたんだ？落としに来たのか？なあ？アルゴを墮としに来たのか？！

「キリト…………… てめえ、ついに本当にアルゴまで……………」

「え?!え?!なんでなんで?!」

しらばつくれるなよ?てめえの魂胆は見え見えなんだよ……………

「アルゴに手を出したらぶっころ「んっ!」あ、あの…………… なんで俺は2人にチョツプされてるの?」

「キー坊が女つたらしなのは今に始まったことじゃないだ口?」

「うん…………… うん……………」

「そうですね、パパ!浮気はダメですよ?もつと自重してもらいたいです!」

お、おっふ…………… 結構な重攻撃…………… 俺がくらつたなら立てなくなる自信しかな

い…………… 現にキリトは膝から崩れ落ちてるし……………」



「え、えーと……………どんまい……………キリト」

「うつつうつ……………お前のせいだよ……………」

俺のせい？なんの事かなあ？

「ねえ、私たち、完全に空気なんだけど……………」

「だな……………」

「所で……………貴方誰？」

「俺は……………説明めんどい。ここは小説の世界……………ならこれも伝わるだろ

う……………かくかくしかじか四角いムーブって訳だ。」

「事情はわかったけど小説って？」

「……………わからん」

こんな会話があつたのは2人以外誰も聞いてなかった。

~~~~~

「お父さん、抱いて」

「ぶふあつ!!!」

口に含んでいたコーヒーまがいの液体を勢いよく噴射する。

「な、なんて言った？怒ってあげるから言ってみて？」

「……………て……………」

「ん？」

「構って……………」

ん？あ、そうか……………寂しかったんだな……………そりや、すごく時間が空いたからな……………1年か？

「はあ……………そんなに回りくどいこと言わなくても……………ほら、」

そう言つてハキは腕を広げて膝にスペースを開けてこつちに来るように……………誘うように言う。

「……………んー！」

少し微笑みながら俺に抱きついてくる……………ってか、突進……………

「んぐっ……………」

何とか勢いを殺して受け止めるハキは鈍い息を吐いてからほっと安心する。

「おい、勢いがあります……………ぎ……………る……………」

どんだん声小さくなる。尻すぼみになっていく。原因は……………

「……………グスっ……………おとう……………さん……………寂しかった……………」

腹の辺りに水つけを感じたからだ。そう、ユキは泣いていた。

「…………… ユキ、ゴメンな？もつと早く迎えに行くはずだったのに……………」

「…………… ううん……………」

強く、強く抱き締めて何度も何度も

「ごめん…………… ゴメンな？……………」

「ううん……………」

何度も何度もユキに伝える。

「会いたかった…………… お父さん……………」

「ああ、俺もだ…………… 俺も」

一呼吸開けて言う

「会いたかった。俺もユキと…………… 会いたかった……………」

会いたかった…………… ずっとずっと3人で……………

「暮らそう……いつまでも……」

「私、AI……」

「わかってる。」

「私、ゲームの中でしか……」

「必ずリアルにも来れるようにする。」

「絶対だよ？」

「ああ……」

確かな約束をする。確かに覚悟し、確かに誓った。今はまだ叶わないけれど、確かに決意し守ろうと……

## 16話 アルン

「ユキ！初期動作見ればどこ狙ってるかはわかるんだ！目をつむまないで相手の動きを見ろ！」

「……………」

こくと頷くユキ。それを見てまた剣を交じ合わせる。ユキの成長速度は目まぐるしいものがあつた。なんでも1回で吸収して動きに反映させる姿は圧巻としかいいようがない。

「いやあー、本当にすごいナ？」

「そうですね……………プログラムだからでしょうか？」

そうリーファが言った瞬間隣にいたアルゴが苦い顔をした。

「そう……………だナ。でも余りユキやユイちゃんのことをプログラム扱いたくないでく

レ……………変かもしれないケド、オレっち達と同じ知性を持つてるんだ」

「あつ……………ご、ごめんなさい！」

そう言われてはじめて気づいたのか、リーファが慌てて謝る。

「いいサ、まあハキもオネエさんも最初はそういう感じだったからナア。人には言えないんだケド……」  
リつちやんだから特別ね！」

そう暗い雰囲気吹き飛ばすように務めて明るく振る舞うアルゴそれに対してリー  
フアは……

「り、リつちちゃん?!」

「ん?嫌だったカ?」

「い、いや、そういうことじゃないですけど…… そう呼ばれたことがないの  
で……」

「ほうほう…… とりあえずこれは情報料取るようなものじゃないな……」

「え?もしかして売れそうだったら売るつもりだったんですか?」

「そりやそうサ! なんだって鼠のアルゴと黒剣ハキはコル積まれたら自分のステータス  
だって売ってたしナ!」

「俺は売ってねえよ?!」

ハキが稽古が終わったようでごつちに来る。それはそれは可愛らしく剣を前に抱い  
て歩いてくるユキと一緒に。

「え〜?……」

「なんだよ、その“え〜”は! 現に売っちゃったらレッドギルドからアルゴを守れねえ

だろうか……」

「あ、そうだったネ？にししっ……」

最近、アルゴの小悪魔っぷりがすごい増えてきた気が……嬉しいけどからかい甲斐が無い……もう、ウブなアルゴは居ないのか……

「あー、所でアルゴ……ユキの成長速度早すぎて軽く自信なくすんだけど……」

なんとなくいたたまれなくなつて話題を強引に変える。

「そんなになのか？ユキすごいナア？」

「よしっじやあ次は俺と……」

「……キリトはユキでさえ落とすそうだからダメ」

「なんで?!」

あらら……でも、アルゴもユキの可愛さに陥落ですか……

「あ、そう言えば絶剣つて知ってます？」

「なにそれ、体育会系チツクな名前……」

「ゼツケンじゃないですよ！絶剣!!!」

お、さすがリーファ、キリトの妹だけあつてツツコミ冴えてるうー

「最近すごく強いプレイヤーらしくてさ！通つてる喫茶店あるらしいんだよ！それで、行つてみない？」

「ってか、あれ何があつたんだ？あの、洞窟で別れた時のやつ。」

そう、俺らは一回アルゴと俺、リーファとキリトで別れてアルンを目指すことになった。そして、今ここでまた集結したのである!!! って大仰なことの様に言つたけど、実際なんで別れたかなんて知らん。

「え?! あ、いや…………… インプには関係ないかなあ…………… なんて……………」  
「ひどつ……………」

「オレツチは知ってるけどこれは流石に漏らしたらケツトシー全体に迷惑かかるからナア…………… ごめんね？ハーくん。お詫びつて言つたらなんだけど、アーちゃん助けたらめいいっぱいイチャイチャしようナ？」

「よオつし！元氣百倍！ミミも落ち込んでないもんねえー!!」

この場にいるアルゴとハキ以外…………… ユキやユイまでもが現金なヤツ…………… と  
呟きそうになつたという。

「…………… が噂の何とか剣つて人が通つてる店なのか？」



「うん！そうだって聞いた！」

聞いた…………… 一気に信憑性が無くなった…………… つてあれ？まさかつ！

「あれつてもしや木綿季か？アルゴどう思う？」

「髪の長さは違うけど間違いなさそうだね……………」

アルゴも驚いているようで素の喋り方に戻っている。

「紫単調の服装、目が赤い…………… 特徴が一致してる！あの人が絶剣だよ！」

「へえあの人…………… 強いのかな……………？」

リーファとキリトがなんか言ってるがこの再無視だ。なんでこのゲームやってるか  
問い詰めてやる！あ、優しく聞くってことね？ユウキは元気だけど溜め込んだりして傷  
つきやすいからね、ちゃんとやさしく……………

「よっ、木綿季！」

「えっと…………… お兄さん、誰？」

おっふ…………… アバターが現実と違うからか…………… 髪の毛とか、インプで肌色も濃  
い……………

「俺だよ、俺！」

「これでわかるでしょ……………」

「えっと…………… もしかしてナンパ？」

「実の妹をなんばする奴がいるかつ！」

俺はナンパ兄なのか?..... 結構シヨック..... うわあ.....

「え?もしかして拓にい?」

「そうだよ..... ナンパ兄か..... 俺はなんばしてない..... ナンパなんてしてない..... でも妹が可愛いことには違いない.....」

「えつと..... ごめんね?」

「あはは..... いいんだよ。それより、木綿季アバター名教えてくれ!リアルネームは色々とまずい..... 俺はハキだ。」

「えつと..... アバター名はユウキです.....」

..... は?え?いや、え?リアルネームそのまま?身分バレとか怖くねえの?いやいや、え?でも呼び慣れてて良いんじゃないかなろうか.....

「そうか、ユウキ、手伝って欲しいことがある。」

「へえ、そういうことならボクも協力するよ!」

世界樹のことを話し終えた瞬間ユウキは話に乗っかってきた。それも.....

「世界樹かあ……………強い敵いるのかな?……………」

……………結構重度なバトルマニア（戦闘狂）だったからだ。お兄ちゃんは悲しいよ。あんなに可愛かった妹がキリトと同類なんて……………いや今も可愛いんだが」

「ちよつ!ハキ?!俺は戦闘狂じゃないぞ?!」

「あらら、ハーくん、シスコン発動させちゃってるネ……………」

俺ってシスコンなの?いやいや、そんな訳……………思い当たる節がありすぎる。いや、ユウキが可愛いのがいけないんだ。俺は悪くない。次いでにランねえも可愛かった!

「いつ行くの?!今?!ねえ、拓にい!」

「あ、ちよつ!揺らすなよ!あと遊びじゃないんだぞ?」

「分かっているって!それより、そのアスナ?って人がいる所まで早く行かなきゃなんですよ?早く行こうよ!」

随分やる気だな。まあいいや、早いに越したことはないからな!

「……………行くか、キリト。先走るなよ……………つておい!!」

声をかけた瞬間キリトはユイと一言づつ言葉を交わした後、真上に飛び上がった。

「アスナ……………アスナアアアア!!!」

そう叫びながら我武者羅に突き進むキリトの体は何か弾かれたようにバランスを

崩し下に落ちてくる。

「…………… はあ、どうしたんだよ？キリト」

「この上にツ!!!この上にアスナが居るんだよ!」

そう言いながらまた飛び上がる。だが、俺は首根っこを掴んで言った。

「冷静になれ、ズルできないように障壁でもあるんだろう？ユイちゃん、声だけでも届けられないか？」

「ああ、それなら行けるかもナ」

いつの間にか隣に来たアルゴがそう呟く。それに対して俺はだろ？と言つて視線をキリトに戻すとユイちゃんがそれを実践しているところだった。

「ママーママー!」

それを見ながら絶対助けると覚悟を決めていると上から何か降ってくる。カード？

「…………… キリト行くぞ。早く助けるんだろ？」

「…………… ああ」

「ゼアアアアアア!!!」

「オラアアアアア!!!」

キリトは大剣を、俺は黒剣（虚白）を持って目の前の大群に切かかる

「えつと……あの二人バケモノですか?」「アチャク……あの二人が本気になつたら出来ないことがないって本気で思つちやうヨ……」「パパ、ハキさん、かつこいいです……」

そう、2人は無双していた。

「スイツチツ!!!」

「おうツ!」

キリトが声を上げた途端後ろからハキが出てくる。荒々しいプレイスタイルのキリトに流れる様な剣技のハキ。それが合わさって芸術とも劣らないものが出来上がっていた。それに……

「ユウキ!!!」

「りよ〜かいツ!!!」

ズバンツ!!!……一際大きい音が鳴る。だが、まだ敵の向こう側が見えない。前に出ていたハキがしやがむ。するとそのすぐ上からキリトの剣が振り抜かれる。

「き……れい……」

「にししっ……あの二人は息が合うからナ。恐ろしい程にネ。それにしても、ユーちゃんがこんなに強いとは思わなかったナ、やっぱり血かナ？」

そう呟くりーファを見てアルゴはそう言い微笑む。ユウキは他人に合わせるのが圧倒的に上手いのだ。もう、キリトの動きを見てちよくちよく援護入れるくらいには。ハキとは言わずもがな、やっぱり兄弟だと言わんばかりの連携のうまさだ。

「チツ！拉致があかねえ！キリト！俺とユウキで道開けるから突っ込め！！」

そう言うのと、飛行限界なのを無理やりシステムに干渉して時間をリセットする。鋭い頭痛がするが気にしない。

——無茶しやがって…… ——

うるせえ、大事な人が帰ってこないって想像しただけですごく辛いんだ。現にそんな立場のキリトもつとだろう？ならせめて手伝えるところは手伝わねえとな。

——はあ…… そう思っても実際に実行出来るやつは限られてるってわかってるのか？ ——

俺はそんな大層なやつじゃないってことだけな。唯、やりたいことには嘘をつかない。欲望に忠実ってことはわかってる

「行くぞッ！」

「おう！（うん！）」

ユウキと俺は突っ込んだ。

まず俺が一陣目を担う。横薙ぎに切り込み、その後にはパリイした敵ごと他の敵も切り伏せる。その先に見えたのは弓を構える敵（雑魚）だった。

「ユウキッ！」

「任せて！」

すぐさま後ろに引きユウキを前に行かせる。今までの戦いぶりで戦闘センスは俺らと拮抗しているのは分かっていた。俺は状況判断に優れ、キリトは反射神経。ユウキは圧倒的VRとの適合力。つまり、電磁パルスのやり取りが俺らと比べ物にならないほどに早い。

「お前の妹すげえな……俺の二刀流で勝てるかどうか……」

「……正直俺も驚いてる……」

やっぱ兄妹だな。と呟くキリトに声が掛かる。

「お兄さん！」

「おう!!!……ん？」

どっちだ？ユウキが呼んだのはどっちだ？俺か？俺だな。俺以外ユウキが兄と呼ぶのを俺は許容しない。

キリトも自分が呼ばれたと結論を出したのか、何故か、2人で突っ込む。

「てめえの出番は無え!!!」

「なっ、俺が呼ばれたんだろっ!」

……… 両者は譲らなかつた。ハキはプライド?を、キリトは合理性を。

「さつきもやってたんだからハキは引つ込んでろっ!」

「うるせえ!!!ユウキが俺の事呼んだんだ!ユウキとアルゴが呼べばどこだって行くんだよー!」

ハキの後半の大半は惚気だつた。それを聞いた周囲の反応は次のようなもの………  
つまり、呆れだつた………

「……… 拓にい、シスコン………」

とユウキが………

「……… ハーくん、重いよ………」

とアルゴが………

「あはは……… なんか凄いですね、ハキさん………」

とリーファが………

「妹にそこまで肩入れできるって……… すごいな………」

とキリ……… いや、ほっとこう。

「ゼアアアアアアア!!!」



それはともかく、圧倒的な速さで敵をなぎ倒し、引きちぎりを繰り返す2人の中にさらにオーバーな戦力が加わる。

「……………ボクもっ!!!ほら!アルゴさん、リーファさん!行こ?!!」

そう言つて腕を引っ張るユウキはもう他の意見を聞く様子がなかった。

ガギツ!

「ツあつぶねえ……………ありがとうな!ユキ!」

そこには敵の剣を防いで切り伏せたユキの姿があった。だが、褒められたのに関わらず顔は冴えない。

「むう……………わたしの……………ためには来てくれないの?」

そう。拗ねていた。ハキはやつちまったと心の中で頭を抱え、弁明に移る。

「いや、ユキの為に駆けつけるよ?ただ、俺は四六時中ユキと一緒にいるから駆けつけないまでもなく守れると思つたんだよ……………ごめんな?」

「……………そう……………」

短い言葉だったが顔は緩みまくっていた。ハキはホツと安心し、敵に視線を戻す。ごまかせた様だ。

「見えたぞっ!!!」

扉が見えた。後、10メートル。

「撃てええええええ!!」

後ろから大きな声と共に大火力の魔法が放たれる。それと同時に後ろに影が出来たと思つた途端に後ろからもうひとつの攻撃が降ってくる。

「サクヤさん！」

「リーファ、遅くなつた。済まない。」

「やつほく！スプリガンとウンディーネの大使さん？会いたかつたヨク！」

誰だ？あの二人……………いや、その前に……………

「アルゴとキャラ被つてんじゃねえか!!」

「……………」

全員がハモつた。この場にいる各領主とハキ以外がだ。

「あ、拓にいい！せっかく出来た道が閉じちゃうよ！」

ユウキが鋭い声を飛ばす。その声に釣られ振り向いてみると敵が倒され、一直線にできていた道が次々に湧いてくる敵に塞がれつつあつた。

「くそつ……………爆発付与、大火力広範囲攻撃（大）……………」

システムに干渉してまた無茶な改変を行う。それが終わったあと、すぐ扉に向かつて手に持つていた武器を投げ込んだ。それが着弾した途端に武器自体が爆発し、あたりの敵ごと吹つ飛ばした。

「うぐっ……………」

脳が耐えられなかった。頭痛が酷くなる。意識が朦朧としてナーヴギアでは無くア  
ミユスファイアでログインしていたならあともう少しで強制ログアウトされる寸  
前……………」

「ハーくん！」「拓にい！」

「……………アルゴ……………後、ユウキ」

アルゴに支えられユウキに前から抱きしめられる形になり、お陰で意識が戻ってきた  
ハキは名前を呟いた。

「何？拓にい……………」

ハキはユウキのおでこにデコピンをする。

「イタイ……………何すんのさ！」

「リアルネーム禁止……………」

「あ……………」

やっと気づいたようだ。そして……………」

「アルゴ、ありがとな？」

ユウキも。と続けて限界の脳を酷使しシステムで扉の奥へと進む。

「ロックされてるとか……………救いようねえな……………」

扉があかなかつたのだ。だから使うしか無かつた。

「うグツ……… いけよ、キリト……… これで連れてこなかつたらただじゃ置かねえ………」

ガチツ

鍵が空く

そう言つて羽の力を抜き背中から落ちていく。ALLOのメンタルシステムに強制口グアウトされるのであつた。

## 17話 アルゴ（彼女）とユウキ（妹）とデートの約束……………何このシチュ……………

「……………これはどう言う状況？」

目の前には現実世界の明日菜に抱きつく木綿季の姿が……………そう。救出は成功した。須郷とかいうクソ野郎は刑務所行き。これで全部丸く……………とも行かない。少なくとも被害にあった者たちは1年の観察期間を言い渡された。実害がなかったとはいえ、仮にも脳を弄り回されていたからだ。だが、アスナは……………いつも通りだろう。「えつと……………あはは……………」

誰も説明できないらしい。いやね？別に相手が男じゃなきゃいいんだけど……………だけどね？

「……………仲のよろしいことで……………」

そうとしかいいようがなかった。ちやつかり呼び捨てで呼びあつてるし……………しかもちよつとキリトの複雑そうな顔が面白い……………

「ぶツ……………か、かおつ……………ぶふつ……………」

「たつくんわかるけどちよつと抑えよう？」

朋に怒られているうちにリズ達も合流したらしい。これでやつとフルメンバーだ。

「それにしてもお兄ちゃん、周りに女の人居すぎじゃない？」

「キリトはタラシだもんね？ 私の事だつてさんざん.....」

アルゴ..... あ、キリト死んだ。お疲れ様。来世で会おう。つと..... 俺は木綿季に言いたいことあつたんだ。

「木綿季？なんでキリトのことを兄と呼ぶのかな？」

向こう側でキリトが言葉という名の暴力でフルボッコにされている中俺はそう尋ねた。

「え？あつと..... その.....」

黒い笑顔を貼り付けた拓の顔に木綿季は怯えてしまう。

「な、なんと..... なく？」

小首を傾げる木綿季。

ツ..... ちょっと待て、待てよ？俺は今怒っているはずだ。決して可愛いから許さうとか思っていない!!思つて.....

「ツ..... そ、そうか、何となくか.....」

ぬアアアア!!!俺の口、言うこと聞けよ！俺の顔だろ?!俺の顔のパーツだろ?!なんで許す方向に言つてんだよ!!!

「……………キリト……………ぶっ殺す。」

「え?! シスコンがすぎるだろうが! 今の流れでなんでそうなる?!」

「はあ?! 見ろよ! あの凶悪的な可愛さ! 怒れるはずねえだろ! だつたらこの苛立ちどうすれば良い? キリトに当てればいいんだよ!!! 大人しくお縄につきやがれ!!!」 「てイ」へぶっ……………」

後ろから朋がチョップを繰り出す。拓が起こしかけた暴走を止めたのだ。だが……………拓の頭から煙が出てることももう明白だろう。そう、チョップが強すぎたのだ。現にチョップした本人も痛がっている。そんなカオス空間に木綿季と明日菜、そしてキリトは苦笑いを隠せなかった。リズは面白そうに笑っているが……………

「あ、あんたら情報屋より漫才師の方が向いてんじゃないの? ぶっ……………」

「痛い……………」

相変わらず朋は涙目で痛がっているが、一応大丈夫らしい。そう考えたところで意識が飛んだ。体が糸の切れた人形みたいにガックリと……………その後すぐに起き上がる

「……………はっ……………は……………って朋?! どうしたんだよ?! 泣いたりして! ど、どこか調子でも?! き、救急車ー!!!」

「落ち着け!」

そういうキリトはまた拓の頭をチョップをする。朋がしたところと同じところに。

結局また気絶した。

「あ……………」

「ううん……………俺は一体……………ん？」

えつと、説明します。某小説みたいで悪いのですが……………

まず、俺の頭の後ろ側にはなんとも言えないやわらかさが……………そして温もり。俺の視界の先には愛しの朋の顔と木綿季の顔が……………

「……………マイ、エンジェルワールド……………」

「え?!ちよつと朋さん!やっぱり頭おかしくなってるよ!」

とユウキが言った途端に朋が慌て出す。

「トドメさしたのは私じゃない。キー坊。私じゃない私じゃない……………」

「何の話してるんだ？」

「え?拓にい?えつと……………まとも……………なの?」

は?なんだよ、その質問。そんなまともなわけねえだろ!!こんなにも可愛い朋と木綿季に膝枕されてまともなわけがねえ



「…………… 朋と木綿季が一緒にいてくれるだけでまともではいられない。」

「拓にい…………… やっぱり……………」

え？何この反応？てつきり苦笑いかと……………

「たっくん、ごめんね！ごめん!!」

なんで?!なんで朋がそんなに謝ってんの?!なんかもう思考が追いつかない。

「えつと…………… 俺がふざけただけでなんでこんなにカオスに……………?」

ふざけたって言うか、もう外に出さなきや尊さのダムが…………… ってアレ?なんで俺

はこんなにキモイ考えをするようになってるんだ?

「…………… え?…………… ふざけた?」

「…………… たっくん?」

「え?なんか悪いこと言った?」

何度振り返って見てもいつももの絡みと何ら変わらないような……………

「バカアアアああ!!!」

「うぐほッ……………」

腹パンされました。はい。地味に痛かったです。

「あわわ!ご、ごめんね?拓にい!つい……………」

「…………… シャレにならないよ…………… そのふざけ方は……………」

なんか……………ごめんなさい……………俺が悪い気がしてきた……………

「あ……………拓、ご愁傷さま……………」

「あはは……………」

笑ってないで助けてよ……………キリトに明日菜……………まあ、それでも最近の俺らは前にも増して仲良いんだけどね……………早く家帰ってイチャイチャしたい。

「あ、拓にい、今日ボクアスナの家に泊まるから！」

……………ふあ?!

泊まるってことはアスナと寝る……………百合引!お兄ちゃんは認めんぞ!!そういうのに偏見は持つてないけど認めん!!!シスコシスコ言われようともこれだけは……………

「拓にい?……………」

あ……………アアアああ!!そんな目で見るなよ!俺が悪いみたいじゃんかよ!シスコンの何が悪い!!!

「たつくん?……………」

え?朋もどうしたの?!まさかアルゴも……………

「……………朋も明日菜の家に泊まるのか?」

「いや、ノリだけど……………」

ノリかい!!!びつくりしただろうが……………いや、俺ひとりで寝るのが寂しいわけじゃ

ないけど……………俺の抱き枕が……………幸せの根源が……………いや、我慢してるなら  
 朋の要望を尊重したい……………

「……………我慢してるならいいぞ？俺ら家族だし……………」

「なっ?!／／……………我慢なんてしてないよ……………それに……………」

言葉を区切つてから俯いてた顔を上げ拓を見る。

「わ、お、オイラはハーちゃんと一緒に寝る方が幸せだし……………／／／／」

……………ちーん……………

ーおお、死んでしまうとは情けない……………ー

あれ？今なんか虚白の声が……………気のせいか？あ、そうか。天使を見て昇天したん  
 だった。あれ？俺の天使はどこいった？それと胸の辺りに幸せな感触が……………

そう、拓は朋のことを抱きしめていた。

「な、ななっ／／／／」

「うおっ！いきなりすまん!!!……………あれ？いや、もう恥ずかしがるようなことでもな  
 いのか？」

悟りだよ悟り。これを使いこなせば俺はスーパーサ○ヤ人に……………

「は、ハーくん?／／／／」

「ごめん、可愛くて我慢できなかった。」

「なっ?! / / / /」

この一時はもう最高。溶けそうだよ精神的に。つてか、もう最高すぎて死ぬ。無防備のまま抱きしめたから朋の体のやわらかさがモロに……。あ、理性……。どこ行くんだー？

より一層腕に力を入れる拓。それに朋は……

「きやつ / / / / / / / /」

「俺達のこともう頭にないよな？あれ」

「そうだね……」

「妹の前でやるのはちよつと控えて欲しいんだけどなあ……」

それからしばらくピンク色の空気に包まれたらしい。当事者以外は全員ブラツクコーヒーを買いに行ったと言う。それからというものの、そのイチヤイチャが終わってからは和人（キリト）と明日菜のイチヤイチャが始まったという。真偽の程はわからない。

「デート？」

今は家にいるんだが……

「……………男一人と女2人はデートと言えるのか?」

そう。三人なのだ。デートの定義は知らないが俺は男女の2人で行くものだと思う。

「え?あ、いや……………その……………うん。まあ、出かけるって感じで……………」

すごいしどろもどろになって返してきた。何が目的なんだ?……………

「いや、まあいいけど。で、どこ行く?」

「えつと……………ん……………」

そう言つて木綿季が手渡してきたのはひとつのパンフレット。

「有島遊園地……………」

片方の手で我が妹の頭を撫でながら1番目立つ文字を音読する。遊園地だ。

「うん、なんで?」

正直いつて遊園地なんて俺は嫌だ。怖いもん……………(小物感)

「ええ〜?!行こうよ!絶対楽しいつて!」

「どこかの戦闘民族か……………はあ、仕方ねえ、可愛い妹と彼女の頼みだ。行くか。」

腹は括つた!あのSAOの恐怖よりはマシだろう!

「腕、ブルつてんぞ?」

今なんか虚白の音が……………?まあいいか。それよりあれだ。

「たつくくん？震えてるの？」

意地の悪い顔で聞いてくる朋は現在とても危ない格好で.....

「ふ、震えてねえし！」

朋の格好のご紹介をしよう。まず、下はショートパンツ。上はダボツとしたパーカーで姿勢は前かがみ。当然襟元から胸あたりが見えるわけで、何故か、下着をつけておらず.....大きめのパーカーがショートパンツを隠し下を履いていないように見え.....

バゴツ.....

「え?! たつくくん（拓にい）?!」

「いや、ちよつと朋に対して邪な思考をしそうになつたから.....」

彼は自分を殴る。これ以上考えないように。だが、逆効果だった。なぜなら心配した朋がさらに近づいてきて見えるものが本当に見えてしまったのだ.....

「あ..... ああ.....」

そうなつてはもう男という名の狼を抑える理性は残っているはずもなく.....

「よ、邪..... えつと..... // // //」

その後少し離れてくれたが萌え袖の左手を口元に持つていった格好でさらに理性を削られついに彼は抱きついてしまう。

「ごめん、もう俺は我慢できないみたいだ……………」

「えっ?／＼／＼／」

スパアアアン……………

心地よい音が彼の頭から鳴った。驚いて後ろをむくと片手にスリッパを持った木綿季の姿が……………

「あ、あわわっ…………… そ、そういうことは妹のいない所でやってよっ!／＼／」

「…………… あ、ごめん、助かった……………」

何故か、彼が助かったと言い、逆に彼女は不満げな声を出す。

「むう…………… ハキのバカ……………」

「なんで?!」

え?!俺は襲ってしまいそうになったけど未遂だよ?!つてか、それ以前に抱きつくぐら  
いなら今までも結構してるし…………… なんか嫌だったのかな?……………

拓はあからさまに落ち込んだ。それを見て2人は焦る。いつも通り?の日常が流れて行つた。

「——ほんとにいつも通りか?——」

虚白…………… ?やっぱり居るんだな。この穀潰しが。

「——俺、何も食べてないよ?!——」

なんとなくだよ、なんとなく。今イライラしてるからサンドバックになれ。

——理不尽ッ!!!——

「え、えつとごめんね? 拓にい、でも妹の前であんなことをやろうとするのは.....」

／／／

「あ、あう..... 嬉しかったけど場所は考えようナ?／／／／」

「.....ごめんなさい.....」

今回は完全に俺の失態だ。理性をコントロール出来なくなった時点で俺の負けなのだ。何と戦ってるか知らんが.....

兎にも角にも2人が改めて可愛いということにはわかった。向ける感情はそれぞれ違うが.....

「さてと.....」

「ん?行くの?」

ユウキが聞いてくる。息場所は毎回恒例のあの場所だ。

「ああ、どうせならみんな誘った方が良いだろ? どうせなら2回行こうぜ。一回目は3人で。そして、2日目はみんなです。その方がいいだろ?」

「おお? さすが私の彼氏。やるう!」

「つたく、調子いいな。まあ、これは家族への甲斐性か.....」



「か、家族……………／＼／＼」

「どうでもいいけど2人のどこでもイチヤつく癖どうにかならない？つて言うか、大体拓にいいから始まつてるんだけど……………」

「あ……………すまん……………」

確かに妹が彼氏と俺の近くでイチヤイチヤしてたらいい気はしない。多分殺○。（相手を）

「えつと……………彼氏は居ないからね？」

「なんで心読むの?!つて言うか、作るなつて言ってるんじゃない、ユウキに見合う相手だったらいんだよ。」

うんうんしたい言い寄ってくるのは可愛さに引かれただけのホコリやろうだからな。多分。いや、知らんけど。

「えつと、具体的には？」

「俺より強くて、優しく、ユウキの隣歩いてても見劣りしなくて……………」

「もうそれキリト（キー坊）しか居ないじゃん」

「キリトは俺より弱いからダメ。」

負けず嫌いを発動させる拓。それを見て2人は長いため息をついた。まあ、結局誰にも渡さないということ……………」

## 外伝

## 外伝

## 通じる心

「なあ、アーちゃん？今日って何かすることあったっけ？」

俺はのんびりと聞いた。そう、2人ともだらけきっていた。ソファアーさの上に横になり、俺の上にアルゴが横になっている。

「ソー？んとナー………… あ、アルゲートでスキルについて教えて欲しいって依頼があったナ…………」

「そうかく…………」

「なんだ？おねえさんがいなかったら寂しいの力？」

おっと、ひとつ訂正。アルゴはからかうことにおいては休む気は無いみたいだ。

「当たり前だろ？」

「ム………… 最近思いどうりの反応が帰ってこなくて悲しいゾ…………」

ふつつつ………… 俺だつて成長はするもんねえー！躲し方ぐらい覚えませうよ。

ハキはアルゴの頭をなでなでして言った。

「躲し方ぐらい覚えるよー。あと、俺も行くからな？」

「いいよー、オイラだけで出来るような事だしナ。ただ……」  
 アルゴは顔を赤くして……

「あー…… どうしたんだ？」

「あ…… あうっ…… 一緒に…… はいらないカ？」

「ん？」

なんて言った？どこに入るんだ？

「だから!!終わったら一緒に風呂に入らないかって言ったんだ!!!」

ああー、そういう事ね？……

ん？ん？待て？待て待て待て?!?! どういう事?! アル

ゴさん?!大胆!! って、俺はどう答えば?! ねえ、これ本心で言っているの?! これ、本心でいいのか?! ねえ! 助けて!!

作者さん!!!

作者(その位置変われ)

つ、使えねえー…… って、マジでどうすればいい? って、これ、からかいか? なあ!  
 !どつちなんだ?! そんな顔で見ないでくれ!! 俺だつて困惑してんだ!!!

「な、なーんてナ、からかつてみたけどこんなふうに通うとはナアー……」

なんでそんな泣きそうなんだよ…… そうか、からかいじゃなかったんだ……

そうと決まれば……

「忘れてくれ、じゃ、行って「風呂ならいいぞ? いやな、困惑して返事遅くなったけど、いいぞ?」てか、こんなことお願いしてくるとはなあ?」

俺の上から降りようとするアルゴに努めて明るく返すと、その行動を辞めてアルゴはリングゴになった。ん? ああー…… リングゴみたいになった。

「ん…… あうっ…… あ、ありがとうナ……」

「おう!何かあつたら連絡くれ!!!」

うん…… 心の準備をしなきゃな……

~~~~~

「よウ!待ったか?」

アルゴが話しかける。その目の前にいたのは……

「いや、全然待ってないのでござる」

生粋のロールプレイングプレイヤーだった。

「2回目のご利用ありがとうダナ? で? スキル何が聞きたいんだ? あのスキルのことならダメだゾ?」

「スキルは建前…… 本意は呼び出した所にあるでござるよ……」

「ああ…… じゃあなんダ?」

そう言うのと相手は顔を上げてアルゴを睨む。

「復讐……復讐でござる……」

「誰へのダ？」

相手の言葉を聞いて顔を顰めながらアルゴは言う。

「着いて……」

その一言だけキャラのなりきりをせず負の感情をめいっばい詰めて言葉と目線で訴えてくる。

アルゴは圏外に連れてこられる。そう、ダメージが通る圏外に。それが判断の誤りだった。

「どこまで行くんだ？」

「どこでいいでござるな……」

そう言うのと素早く相手はアルゴの後ろに回りこみ、上から袋を被せられる。中でアルゴは暴れるが出られるわけもなく……

「何すんだ!!!出せ!!!」

「ダメでござる。ヤシヤマルのかたきでござる故……」

静かに怒りを含ませる、ヤシヤマルの敵と言う人はシロマルと言うらしい。

アルゴはハキにインスタントメールを送ろうとするが、迷宮区だったのを忘れてい

た。袋に入れられただけなのでハラスメントも出ない……

助けて…… ハーくん……

~~~~~

ー助けて…… ハーくん…… ー

「アルゴ?!」

今、アルゴの声が聞こえてた気が……

ーごめんね…… さよなら…… ー

「は?…… ふざけんじゃねえ!!」

何がさよならだ!!! なんでメッセージ来ねえーんだよ!!! いや、迷宮区か? 待つて

ろ…… 今行く…… 待つてろよ!!

ハキは走り出す。

~~~~~

「な、何するんだ!!!」

鎖で繋がれながら…… 抵抗しながら言う。

「お前のせいでヤシヤマルが死んだ…… いや、お前が殺したんだ」

「え……」

今、なんて言った? この男はなんて言ったんだ? オイラが殺した? いや、殺してな

い……でもこの人はすごい勢いで怒っている。

「お前が殺したんだ。あの時スキルを……体術スキルの体得場所を教えてくださいなば……あの時ヤシヤは死ななくて済んだんだ!!!」

ヤシヤマルをヤシヤと呼ぶシロマルは怒りが今にも爆発しそうな程激情に心を支配されていた。

「あの時……武器を手放してしまったヤシヤが体術を使えば……あの時死ななかつた!!!」

なんだよ……それ……それって

「八つ当たりじゃないか!!!」

「事実だ!!!」

そんな……そうなのか?……いや、そうだよな……オイラが殺したんだ……なんで……オイラが……事実……か

「鼠には同じ苦痛を受けてもらおう……」

「なっ……やめ口……!!!辞めてくれ!!!」

「ヤシヤも最後はそう言っていた!!!」

「ツ……!!!」

2人とも話題が微妙にすれ違っていることに気づかない。

アルゴは困惑していた。オイラが殺した。でも殺してない。なんでだ？……殺してないはずだ……でも……

思考は永遠のループに入る。

そのアルゴの目の前には既に剣が迫ってきている。

ごめんね…… さよなら……

ハーくん

~~~~~

「アルゴ!!!」

ハキの声が聞こえる。でも……そんな訳はないか……あと体力も3分の

1……本格的に死ぬなあ……



「アルゴ!!! 起きろ!!!」

「なんなんだよ……もうオレッツちは死ぬんだ……最後ぐらい色々と思いきや  
せてよ……」

ハキが必死に語りかけているのにアルゴはそれを現実だと受け止めれない……  
心がかたくなに受け入れようとしないのだ。でも……

「んうっ?!」

いきなり弾力があるものに唇を塞がれた。そこから何かが流れ込んでくる。  
体力が回復していく。

「んっ…… 気がついたか?」

「なっ／＼／…… 何すんだヨ…… びっくりするだ口? これでも…… 一応、女の子  
なんだゾ?」

「ん? 知ってるよ?」

「カーソル…… オレンジに……」

「ん、知ってる。」

「はあ…… もう、ばか……」

その途端にアルゴはハキに抱きつき泣き始める。体を張って助けてくれた人にお  
尋ね者になってまで守ってくれた大切な人に。弱い所を見せてしまう。

「……怖かった……死んじやうかと思つた……もう……もう離れ離れは嫌だヨ……」

「俺はどこでもお前のことを守る。だから心配すんな？」

「うん……うん……」

アルゴは口から嗚咽を漏らしながら落ち着くまで一緒にそこに居続けた。それから少し経つて……

「あのナ？さつき死んじやうと思つた時、思い出したことがあるんだ。ハキの事が好きになつたきつかけ。」

「ああ、きかせてくれ……」

「んとナ、あれはまだ一階層の頃かナ、」

それからアルゴは語り始めた……

~~~~~

「あれは1階層の時だヨ」

そう続けるアルゴは昔を思い出すように話し出す。

「アルゴ、戦闘での立ち回りは……」

「極力前に出ずに、戦いもしなけりやしない方がいいと思うゾ。戦いの実績がいるなら、適当なモンスターを騎士さんに弱らせてもらって、それを倒せばいいんじゃないか？」

騎士とはディアベルの事だ。

「それ経験値泥棒じゃ…… まあもし、不意打ちとかで万全の状態の魔物との戦闘になつたら、とにかくいのちだいじにで。とはいえ、表層の魔物なら、俺とアルゴの二対一なら問題なさそうだけどな」

「油断は禁物だヨ？ ハー坊」

戦闘時の動きを確認しあつたり……。

「それにしても、部屋の中ってやることないナー」

「確かに、やることやっちゃうと暇だな」

「というわけで、オイラは寝ます。ハー坊、膝かりるゾー」

「え、あつ、ちよー！」

「お休みなさーイ。んっ……すやあ」

「寝るの早くないか!？」

昼寝にかこつけていちやついたりしながら夜をすごした。

それからハキたちは、始まりの街の宿屋に泊まった。迷宮探索は明日からである。最初は初めのあたりの比較的安全な所を攻略する。まずは実戦の空気に慣れよう。ということだ。

ハキとアルゴは相部屋だった。男女で同じ部屋なのは問題があるのでは……と、思われたが、何も言わなかったのでなし崩しである。若干一名、クラインが二人を目の笑っていない笑顔で見つめ、エギルに引っ張って行かれていったが、決定は覆らなかった。

「おー、普通の部屋だな。野宿は背中が固くて落ち着かないんだよナ……」

「そうだな……。というか、アルゴはこの状況に何か言うことないのか?」

「んー……。ハキと同じ部屋で寝るのケア……。あつ、夜中にござござって物音がしても、ちゃんと気づかないフリするから、安心しろ!」

「何も安心できない! そうじゃなくて、男と同室とか嫌じゃなかったことなんだが……」

「……ああ、そんなことカ」

「そんなことって……。重要じゃないか?、こういうのって」

「そんなことだゾ？ハー坊の心配事はナ。にししっ……オイラ、ハー坊と同じ部屋でも、全然嫌じやないヨ？」

そんなことを、無邪気な笑みを浮かべながら言うアルゴ。絶対からかっているのはわかっているのだが……ハキの頬がさつと赤くなった。うん、しようがないのではなからうか……

「そつ、それならいいんだけど……」

「あれーエ?? ハー坊、ほっぺが赤いゾ？もしかして、照れてル？照れてるの力??」

「て、照れてない！照れてないから！」

「にやははッ……必死になってるハー坊、可愛いナ！」

「なっ……もうからかうの辞めてくれ……」

「ゴメンゴメン!!!いやーア、反応が面白くてナ？」

そう言いながらアルゴはベットに座ってる俺に背中を預けてくる。

「ち、ちよつ！あ、アルゴ?!」

それに俺はびつくりして素っ頓狂な声を出してしまう。

「ん？なんだ？ハー坊？」

自分に体を預ける女性の体は小刻みに震えていた。それを感じとった俺は……

「……んや、なんでもない……」

「：：：　そうか、ありがとナ？ハキ：：：」

意識はしてないだろうが、あだ名じゃなく名前で呼んだことから、も心は無事じゃなかったということを実感すると共に、気づかなかった事に対しての歯がゆさが心の中で渦をまいていた。それ故に、

「：：：：：　アルゴ：：：：：」

「ン？」

こちらを振り向くアルゴはとても可愛らしく儂げで：：：：：　思わずドキツとしてしまった。可愛いと綺麗が同居した様子に心打たれた。そのなんとも言えない気持ちに戸惑っているあいだに体は知らず知らずのうちにアルゴを抱きしめていた。

「：：：：　ハー坊？」

男にいきなり抱きつかれたのにも関わらず一切取り乱さないアルゴに心配になる気持ちと残念な気持ちが入り交じり複雑な気持ちになった。

「：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～  
るから」

「なんて言ったノ？」

柔らかくアルゴが聞いてくる。それに俺は：：：：：

「アルゴは俺が守るから：：：：：　今はアルゴよりも弱くても：：：：～　強くなつて、絶対にア

ルゴを守るから……」

それを聞いたアルゴは僅かにビクツと体を震わせて言った。

「……うん……」

そう言いながら俺はアルゴを後ろから抱きしめる。アルゴは抱きしめているハキの腕を優しく掴んでシンプルに返してくる。ハキにはまるでアルゴに自分を受け入れてくれたみたいで嬉しくなった。

「そんな事もあったナ……でもアレがなきや今のオイラ達は無かったかもダナ……だってその時にハーくんのことを好きになったんだからナ！」

そう言いながら眩しいくらい笑顔で俺の事を見ってくる。少し頬を赤くして。

「赤くなるんだつたら無理して言うなよ……でもそうだな……俺も……あの時はなんで《守る》って言葉と嫌われるかもなのに抱きしめたのか……いつの間にか口から出てきたのか分からなかったけど、今思えばあの時に俺はお前に恋したのかもな……」

しみじみと思う。これは紛れもない俺の本心だ。そして今も変わらない気持ちだ。それをアルゴに素直に伝えた。

「あとは、アレだな。ハーくんが目覚めたあとのやつ。あつた口？」

「ああ、あれか……」

「おーい!!!アルゴ!!!お待たせ!!!……… つてアイツら誰だよ……」

ハキは耳を澄ませる。するとその連中の声が聞こえてくる。

「なあなあ、嬢ちゃん……… 少し俺と遊ぼうぜ?」「いいだろ? いいこと教えてあげるからよ。」

なんだよこれ、デスゲームなのによくナンパする余裕あるな。

ハキは1年、意識がなかったことでまだ攻略に必死になって取り組んでいる奴と街に閉じこもってる奴とで別れてる事を知らなかった。

「結構ダ、待ってる人がいるんでナ、失礼するヨ」

そう言うときアルゴは男共の間を通ろうとする。しかし、男がアルゴの腕をハラスマントが出るか出ないかの強さで掴む。



イラッ……

ハキはもう爆発寸前だ。

「おい、お前らちよつといいか？」

全く笑ってない目で笑いながら話す。

「あ？なんだお前？部外者は引つ込んでろ!!!」

「はあ…… だから馬鹿は……」

呆れたと言うような仕草を大袈裟に見せて相手を煽る。

うん少しはスッキリするかと思っただけど全然しねえわ…… てかコイツらなんなんだ？絡むしか脳のない蛇か？ネズミか？害虫代表ですかー？ぷッ、お似合いですね？  
心でめいっばい煽ってから行動に移す。

「あのな？手を出してる人、嫌がってるだろ？」

第三者みたいに言ってる。すると狙い道理に勘違いしてくれたようだ。

「第三者が出しやばるんじゃねえ!!!」

「はあ…… だから馬鹿って言ってるんだ……」

「あ？少し顔がいいからって調子乗んじゃねえぞ？ヒーロー気取りか？」

なんなの？マジで、コイツら煽んなきゃ気がすまねえのかよ。じゃあ教えてやるよ。俺はアルゴを掴んでいる腕をひねり上げ、開放されたアルゴの腕をこちら側に引く。もちろんアルゴは抵抗しないで俺の背に隠れる。

「てめえら!!俺の女に何してくれてんだ!!!いいご身分だな?!人の、しかも知らない第三者が奪うか?!あ?!第三者がでしゃばんじやねえ!!!」

完全なブーメランだった。それは清々しいほどに綺麗にその言葉はナンパ男に突き刺さった。あまりの衝撃にナンパ男は黙り、周りは何だなんだとこつちをジロジロ見ってくる。

「なんだつけ？部外者だつけ？お前ら頭の構造どうにかなってんじやねえのか？大丈夫か？(トーン)」

ハキは自分の頭を人さし指でトントンと叩く

「だいたいな、何？自分モテるとか思ってたのか？思い上がりも甚だしいわ！自分で鏡みてからナンパできるか考えろ!!」

そう言うアルゴが恥ずかしそうに言ってくる。

「ハーくん?..... その..... 周りみてるしこの位で..... ナ?」

「いや、ダメだな。」

そこに復活したアルゴの腕を掴んでいた男は驚きから復活したようで俺にまたつつ

かかってくる。

「おい！てめえ！よくもやったな?!」

そう言いながら殴りかかって来る男を見ながらハキは

「アーちゃん、少し待っててね、」

そう言つてハキは殴りかかってきた男の腕を掴み、相手の勢いを利用し、腕をつかんだまま、その腕をその男の背中に押さえつける。

「はあ……懲りないな……」

そこから少しシステムを弄り、ペインオブザーバーのレベルを落とす。もちろんこの男にだけだが……それからハキは押さえつけている腕を少し上にずらす。すると男の口から絶叫が漏れ出す。

「痛てえ!!!痛いわけねえのに……グアッ!!!」

「はあ……根性ねえな?これくらい自分で骨折つて逃げるくらい根性見せろよ。どうせすぐ直るんだしよ……」

「わ、悪かった!!!謝るから!!!だから離してくれ!!!」

「ダメだね、まだ足り「ハーくん!!!もう辞めてクレ!!!」アルゴ……」

ハキは渋々腕を解放し、ペインオブザーバーも元に戻す。

「アルゴに感謝しろよ?俺は許してねえからな。アルゴ、行くぞ。」

そう言ってハキとアルゴは去っていき、残ったのは地面に座り込む男とそれを呆然と見る男。それと周りのギャララーだけだった。

~~~~~

「あー！またあれを思い出すと腹たつてきた……」

「にししつ、でもかつこよかつたゾ？流石、オイラのダーリンだな!!!」

そうふざけながら言うてくるアルゴの頭を撫でながら俺らは話を続けた。その日の夜はその部屋から聞こえる声は絶えることがなかったという。

## 外伝 新たな創造主(1)

俺は誰だ？なんのために生まれた？その理由を探すために生きていると誰かは言った。だが、だからなんだ？最初から与えられたものじゃ無きや本当にその理由であつていいのか分からないじゃないか。

「……………クソつったれな世界だな……………」

拓はそう吐き捨てる。部屋のベットでうつ伏せになりながらも頭は回転したまま。そのまま寝落ちするのが日常になりつつあった。

「……………俺つてとことんひねくれているよな。」

自覚はしてる。ひねくれている理由もわかっている。ただ、治らない。世の中の条理を見るとどうしても考えてしまう。父親、母親、そして姉も亡くそうとしてる……………俺は寄り付く場所がない……………こんな格差の産む世界なんて無くなればいいと何回思ったことか……………口には絶対出さない。出せば天国の父さんと母さんに悲しい顔をさせてしまう。

人は上下つけなきや生きていけない生き物なのだから……

~~~~~

「はあ………なんか訳分からずに叔父のつてで？α？テスターつてのになつたはいいけど………どうせまた下らないんだろ？」

「ううん！ボクは拓にいに行つて欲しいんだ!!」

「はあ………わかつたよ。行くだけ行つてみる。」

とことん木綿季には弱いな。でもこんなにひねくれている俺にもちちゃんと接してくれるあたり救われている部分はある。まあ、言葉には絶対出さないが……

「あー！また何か考えてる!!!ファイトだよっ！拓にい!!」

「ハイハイ………あまり動くと体にさわるぞ？」

「えっ?!だ、ダメだよ………まだお風呂………入つてないし………」

………え?!勘違いしてないか？それは言葉の意味が違う……

「触るじゃねえよ！体調悪くなるつて言つてんだよ。」

「えへへ………ドツキリ大成功？」

なんで疑問形なんだ……って言葉は言わないどいた。代わりに頭を撫でる。

木綿季は普通の場合面会なんて出来ないのだ。ただ後先短いのと、木綿季が頼み込んだのが医者的心を折ったのだ。

「さてと……姉ちゃんのとこ行ってくつか……」

「あ！待って？ボクも行く!!」

「じゃあ待ってろ、車椅子持ってきてやる。」

そう言つて外に出ていく拓の背中を見ながら木綿季は呟いた。

「はあ……心配性なんだから……」

と、頬を赤くしながら言った……それは部屋中にこだましてそして虚しく消える。

そう何事もなくことが運び、この日の面会は終わりを迎えた。

「じゃあな、またくる。」

「うん!!待ってる!」

~~~~~

この世は理不尽ばかりだ。弱者の声は正しい正しくない限らずに一蹴される。人と

運命はどっちが強いか…… 答えは運命だ。漫画とかで運命に立ち向かう!!とか言うてる奴いるけどバカかって思うね。

「?α?テスト……………か……………」

俺は昔、プログラミングをしていた事がある。まあ…………… 人に手伝ってもらってだけどな…………… 気になんないといえ嘘になるし…………… もう一度やってみるか……………

「唐突だな……………」

自分でも思う。ただ無性に今は現実から目を背けたい。

プルルル…………… プルルル……………

ベットの上の携帯が鳴る。知らない番号からだ。

プルルル…………… プルルル……………

「めんどくせえな…………… はあ…………… もしもし?」

『おめでどう。』

はあ? 何がおめでどうだ? 意味がわからないしまずこいつ誰だよ。

『自己紹介が遅れたな。「ほんとだよ」……………』

電話の向こうで苦笑する雰囲気がある。意外と俺の嫌いなタイプかもしれない。

『では、改めて…………… 私茅場晶彦。?α?テストをするゲームとハードの作成者



だ。』

「…………… はあ…………… そうですか…………… それで？」

『日時と場所を伝えるに電話したのだ。』

「すいません。それ俺じゃないです。じゃ」

ピッ……………

やっぱりやめよう。あんな元気なやつところでテストなんてしてられっか……………

ピンポン…………… ピンポン……………

誰だよこんないらいらしてる時にきやがって…………… まあ、友達だったら追い払おう。まあ、友達は隼人しか居ないんだけどな。

「はい、なんの用？」

「電話切られると思って来たんだよ。随分捻く《ボタン

》行つてやつてもいいが、条件がある。」

!!!!!!

《あらら……………

》…………… なんだい？」

そう来ると思わなかったのか、時間を開けてから返事をする茅場晶彦。そのまま聞いてくる。

「俺にAIを作らせてくれ。それを正規版に反映して欲しい。」

茅場は目を見開く。

「勿論、クソみたいなやつだったり、全く要らないものだったら反映しなくて結構だ。ただやりたいだけだからな。」

「……でも素人では……」

ああ、渋ってたのはそういう事か。

「……はあ……俺が作りたいのは汎用AIじゃない。固有AIだ。作る前から言うのは嫌だったんだが……重要性はないと思うが？」

なんだろう……プログラムの勉強といい、AIを作ることと言い……久しく忘れてたな……この気持ち。

楽しみだ……

茅場晶彦は顎に手をあて、考え込む。

「…………… 色んなデータが必要な汎用じゃ無く、1点の役割に特化したAIを作るってことでもいいかな？」

「ああ。後、言語化エンジンのサンプルも要らない。全部1から俺が作る。」

これは俺の意地だ。せめてこのゲームに俺の痕跡を残したい。それが俺の……………これが俺のやり方だ。これで俺の生きる意味が見つかればいいんだけどな……………

「わかった…………… その条件で飲もう。」

「助かる。」

そう言つて茅場晶彦と握手を交わした。これがあんなことになるとは思ひもせず……………

「さてと…………… 早速伝えに来たことを聞いてもいいか？」

「ああ、まず日時は丁度2週間後、場所は友愛市まで来てくれ。」

「東京じゃねえんだな？」

「東京だと回線は混むし維持費が馬鹿にならないのでね。」

そういう事か…………… 土地代なんてやばいくらい高いしな。知らんけど。

「さてと…………… それまで何してるか…………… 作るしかないよな……………」

そう言いながら部屋に戻つていく拓はいつもより少し早足で歩いていった。

~~~~~

「ふう……… ついに完成した。あとはデータの蓄積だけか……… 取り敢えずメンタリストのネット情報全部詰め込んで……… あとは……… 最低限の言語化機能はつけて他のAIとやり取りさせれば勝手にデータ蓄積してくだろ……… 手始めにSiriからだな。」

そう言いながら黙々とPCのデスクに齧り付く。

ピンポーン……… ピンポーン………

はあ……… もう来たのかよ………

「茅場!!!ちよつと待て!!!今終わる!!勝手に入ってこい!!!」

そう言いながら高速タイピングを続けていく拓は気づかなかつた。いや、気づけるはずがなかったのだ。

「はあ……… これは凄いな。こんなプログラム初めて見たよ。独学かい？」

「うわっ!!!」

既に入ってきてることを………

「いやあー、すまんね、タイピングの音が聞こえて居てもたつてもいられず……… それ

にしても…… 《メンタルヘルスカウンセリングプログラム試作型YUKI》か。これは汎用AIより難しいのにこれまたどうして……」

「ネットで真偽の照合プログラム作ってそれで真って出たやつだけAIに吹き込む。あとは言語化の難しいやつは前からあるAIと喋らせてデータ取ればもう完成も近いだろう?」

「でも、それは私から言語化プログラムを貰えば良かったんじゃないかね?」

「それだったら固有性が無くなるだろ。全部同じ喋り方だったら。俺はひとつしかないAIが作りたいんだよ。」

「…… なかなか君も変わってるね……」

そう…… なのか? 俺は俺の家族も神から見捨てられた奴だぞ? こんなものはただの俺の自己満だ。まあ、神ってもんがホントにいたんならな……」

「まあ何もともあれ、時間だ。そのデータ持って来てくれ。外に車を用意してある。」

車を…… ね? 用事してるって言葉は誰かに運転でもさせてんのかね……」

「あー…… ハイハイ。なるべく早くしてくれよ? これ展開したいからさ。あとは外見のデータはこれに入ってるから何とかしてくれ。」

「随分アナログだな……」

俺が渡したのはUSBメモリーのスティックだ。もう10年近くも前に使われなくなってきたているものだ。

「悪いかよ。こっちのファイル形式の方がやりやすいんだ。ファイル形式変換が必要ならフィルター通せば一発だろ？」

「そんな簡単に……」

「やれるのか？やれないのか？」

「……いや、元々SAOのサーバーはメンテが必要のないように設計されているし唯一のメンタルヘルスも機械に任せてみるってのもいいかもしれない」

「なんだよ結局やるのかよ。まあ、こっちも願ったり叶ったりだけだな？」

「なんて、考えてる俺は相当ひねくれてんな…… 自覚何度目か知らんけど」

「ん？何か言ったかい？」

「んや？何も。と返す拓の顔は優れないまま自虐的に成るだけだった」

「何はともあれ、やっつた。俺の作った初めての本格的なAIまだ不完全だが、あとは学習させるだけ。これが失敗していたら……」

「エラーで自壊する……」

「とまあ、バックアップはとつてあるし気にする事はないんだがそれでも今までの努力

が報われないとなると少しばかり悲しいがそれはそれで俺の能力が足らなかつただけだ。つまり今回のゲームに搭載されてないだけでその改良版が他のゲームに配備されるだろう。色々とつらつら並べたが失敗しないことに勝るものは無いのも事実。成功して欲しい。

「……………ふむ、私が見た限り問題は無いだろう。このまま取り込み作業に入ろうか。」  
茅場専属の運転手が車を動かす中、茅場はパソコンを取り出して複雑なプログラム群を読みといていた。

「ただ、このプログラムはなんだい？まるでループしているような……………」  
「ん？……………ああ、そこは人間性……………いや、個々のAI性をつける部分だ。トップダウン型じゃなく、ループ型……………という感じか……………ほら、この部分に経験や他人の思考パターンを自動ではいるようになってそれを元に言動、発言の方向性を変える。ゲームリリースすぐは多分このリソース取り込みが主になるから役に立つ様になるまで1年ぐらいか……………」

長々と説明していた気がする。その甲斐あって何とか茅場には理解して貰えたがここで言動を間違っていたら採用はされなかつただろう。

「ふむ……………成長するAI、か。」

多分茅場も考えてはいたのだろう。ゲームの件が終わったら手をつける気だったの

かもしれない。だが、俺は完成させた。寝る間も惜しみ、4年前から手をつけていたプログラムを完成させた。俺の勝ちだ。ナーヴギアという世紀の大発明をした男に勝った。これ程嬉しいことは無い。

「…………… ループ…………… ああ、そうか。だからこのプログラム……………」

気付いたようだ。ループとは性格を変えるためのもの。さっき言ったような人の経験や思考パターンを記録し、自信を変化させ続ける。その上で古い思考パターンを削除し、新しい常に新しい物へと変わり続ける。経験、ゆっくり変化、古いものを削除、経験 e t c. といった感じにループし続ける。

「思想が面白い。どうだい？私の研究チームに……………」

「悪いが断る。それだといつまでたつてもあんたを越えれない。俺は自分の限界が見て見たいんだよ。」

とカツコイイことを言ったは良いが、正直勝てる気がしない。茅場ははつきりいって才能の化け物だ。

「…………… ふう…………… さてと。着いたよ。拓くん。」

それから一泊置いてからもう一度茅場は口を開いた。

「ようこそ、我が研究室へ。歓迎するよ。短い間だが共に仕事をできることを嬉しく思う。」



大袈裟に腕を左右に広げそうのたまう。その姿は道化そのもので：：でも様になつていた。だがこの時点で拓の人生はいい方向にも悪い方向にも揺れ動く。今更感はあるがその原因の一部をここに記そうと思う。

## 外伝 新たなる創造主（2）

嬉しく思う、そう言われた。ここがVRMMOのサーバーが置かれている所か。そんな感想しか出てこない。

「早く案内しろ。」

なんの感慨も感情も湧いてこなかったゆえの返答。ほかの人から見たらさぞかし滑稽に見えただろう。無礼にも見えたと思う。

「はは、釣れないなあ…… まあいい。こつちだ。ついてきたまえ。」

自信からか僅かに茅場の歩幅が大きくなったのを俺は見逃さない。俺も詳しくは知らないが、ナーヴギアの性能が高すぎてそれ故にマップ創造、物質の感触やら匂いの設定。味など全てにコストがかかりすぎた。それ故にMMOというRPG系のもはまだ出てきていないらしい。だが、またしても茅場は作り上げようとしていたのだ。偉大な発明とやら、つまりフルダイブ式のMMOをだ。

「これに乗つからない訳には行かない……」

ボソツと呟く。最近は退屈をしなくなった。AIの事を考えていれば大抵のことは考えずに済むからだ。現実逃避と言ったらそれまでだが、そこら辺で親のスネをかじり

ながら閉じこもる奴らに比べればまだマシだろう。いや、逆かもしれない。スネをがじれる親がいるからな。

「はあ……… だからダメだつて……… ったく。」

思考が暗くなる癖。それを強引に立て直す。

「ん？ どうしたんだい？」

前を歩き先行している茅場が聞いてきた。その声音は特に興味を持たない、つまり形式上のものだった。

「何も。AIの3Dモデルの形式がわからなかったから原案だけ持つてきた。」

どうせ形式なんて今までにないものなのだろうがな。仮想世界をリアルに見せるための情報量。そしてそれを読み込む速度。全てをとつても既存のファイル形式じゃ役不足だ。

「ふむ……… 本当に頭は回るんだね。」

「……… 喧嘩売つてんの？」

それに対して茅場は首を振りながら苦笑して言い募る。

「いやいや、そういうつもりは無いさ。ただ改めて感心しただけだ。その歳でよく先も見えている。」

まるで大人と接しているみたいだと、そう続けた。俺からしたらそんな柔らかい言い

方でなくても捻くれていると自覚しているから良いのだが、いい言い方をすると達観している……か。

「……ほんとに滑稽な話だ。」

そんなつぶやきは誰の耳にも届くことなく天井に吸い込まれていった。

あの日から数日たった。3Dのモデル基盤はできた。さすがにリアルフォントは自分では作れないのでほかの作業員にお願いしたが、それでも自分でも傑作だと思う。白髪で髪はそのまま下ろしている。背丈は成長しきっているかいないかの狭間くらい。151cmぐらいが妥当だろう。

「拓さん。こんな感じでしょうか？」

仕事が一段落し、あとはモデル完成を待つだけとなった頃。何回か注文を追加して自分の望みの姿に近づいたモデルサンプルがいに出来上がった。

「よし、これで行く。」

それからどれくらいたっただろう。色々な不安と色々な期待が織り交ざり感じてい

た時間は一瞬。刹那に思えるほどに早く過ぎていった。

「…………… 展開、完了したよ。挙動のシステムはほかのAIと一緒にだからね。」

「…………… ああ。ありがとう。」

「…………… さてと。君にも役目を果たしてもらわなければな。丁度いい。基本データは埋め込ませてもらった。ここ数日でスタッフとやり取りをしてもらったしコードネームユキも人格を持っている頃だろう。ナビゲーションとして連れていってくれたまえ。」

おそらく特別措置だろう。俺が作ったAIが役に立つのかの確認もあるのかもしれない。

「αテストか…………… わかった。これか？」

研究員が持ってきたナーヴギアを目線で示しそう問うと大袈裟に茅場はうなづいてみせる。

「…………… どうした？」

彼があまり見せない驚いた顔でこちらを見てくる。

「いや、疑いなく被るとは思わなかったからね……………」

俺を騙す理由がないし、それに俺だって疑いたい訳じゃない。そこまで捻くれてないし、ひねくれる気もない。

「まあ、そんなことどうでもいいから始めよう。ちゃんとAIが動いているのを確認したい。」

「はは、相変わらずだね。電源入れるよ。じゃあ行つてらっしゃい……」

そのつぶやきとともにリアルの五感が遮断された。初期設定はもう済ましてあるようだ。相変わらずの化け物さに引く。

「はあ……… めんどいな………」

「ようこそ、始まりの町へ。」

気付けば目の前には大きな街。後ろには草原が広がっていた。門の前にいるNPCに定型文と思われる言葉を投げかけられ、中に入るのを促される。

「これ、本当に仮想なのか？」

それ程の衝撃だった。一つ一つのオブジェクトにどれ程のデータが詰まっているのだろうか？これはゲームという域を超えている。もはや芸術じゃないか。

周りにいるのは全てAI。ほぼ全てのNPCが同じAIプログラムに接続している

とはいえ、これを作り上げるのにどれだけの年月がかかったのだろうか？自身の勝負をしているところが低いところにあるようで落ち着かない。

「つたく、何が誰にも作れないようなAIを作るだよ。それ以前に俺、負けてたんじゃねえか。」

「…………… だい、じょうぶ？」

拙い言葉が聞こえた。声は高く澄み、本当に心配をしているような声。

「ん？あ、俺が作ったAIか。」

「ん。コード、ネーム。ユキ。」

「ああ。ユキ…………… ね。」

文句を言わせない圧が凄かったのでとりあえずその呼び名のままにしておく。

「調査内容、わかる。」

だいたいわかった。彼女は無口だ。いや、たどたどしいと言うべきか？この世界においてこのしゃべり方は特異だ。四苦八苦俺の作ったAIで合っているだろう。ユウキから真ん中の『ウ』を撮っただけの安易なネーミングだが、気に入っているようだからよしとしよう。

「触って。」

そう言われる。目の前の彼女は掌を上に向けてこちらに突き出しているが、その上に

は何も載っていない。

「……………何を触ればいいんだ？」

「……………ん。」

これ。と言うように腕を動かし、掌を強調するユキ。さすがの俺も混乱が隠せない。

「……………掌、握って。」

……………は？いや、待って？たとえ相手がAIだったとしてもそれは余りにもハード

ルが高い。

「触覚調査。」

なるほどね？……………

「それ、そこら辺の男性モデルでも良くね？」

「男性と女性の質感、違う。そして女性モデルは論理コードが発動するから」

ほうほう。聞いたことあるぞ？決まった秒数触ってたら吹き飛ばされるってあれだ

な。ん？

「……………それ、ユキでもダメじゃね？」

「私、あなたに作られた。だから、いい。」

「そう、か……………ん？」

疑問が腫れてない気がしたがもう手遅れ。体は動き始めていた。相変わらず無表情。



特に物腰も大人しい。でも人と関わるのが嫌ってことではないみたいだ。人見知りでもない。まだ人との話の経験が足りない弊害なのか、拙いがある程度の意思疎通ができるのは分かった。だいたい相手はプログラムで意識する方が間違っている。

「……柔らかい……な。それにサラサラしてる。」

「……ごめんいくら捻くれててもこれは無理……実際、プログラムだとしても見た目は美少女だし、なんとというかこう……保護欲？を掻き立てるような見た目をしてるわけで。まあデザインしたの俺なんだけど……。」

「罪悪感ハンパねえ……。」

それに尽きる。俺みたいなめんどくさい男に手を握られて嬉しい女子なんかいるわけないことぐらい自覚しているのだ。

「パラメータ……変える。いい所……で言ってる。」

そう言うなり目をつぶるユキ。より一層の罪悪感に押しつぶされそうになるが、鋼の意思で乗り切る。手のひらを意識してみれば少しづつユキの肌の質感が変わってきている。

「……」。サラサラなのは変えなくていい。」

「……ん。わかった。」

そう言っておずおずと手を離そうとすると何故かユキが離すまいと指を絡めてくる。

俺だって年頃だ。そこまでやられて動揺しないわけが無い。

「な、何やってんだ？」

「……話して？」

いきなりだった。一瞬何を言っているのかわからなくなった。混乱する頭の中からどうにかして引つ張り出してきた言葉は……

「……何を？」

疑問だった。誤魔化すような言葉にユキが反応しないわけが無い。案の定敏感に反応したユキは顔をしかめながら言う。

「私、カウンセセルプログラム。感情、読める。」

見透すような視線でこちらを射抜いてくる。反論は許さないとでも言うように「あなた、何を？って言った。なんの事？じゃなくて。」

つまりこう言いたいのだろう。本当に何も無いならなぜ、あるようにも取れる言葉を使ったのかと。心当たりがあるんだろ？と。

「……話せ、ない？」

「……色々と理由があるが、プログラムだからとか子供だろとか。他にも挙げようとするれば沢山ある。」

これは嘘ではない。遠慮でもなんでもなく、捻くれを発動させた訳でもない。ただこ

れは人に話す内容じゃないってだけ。それだけなのだ。

「家族…… だったら話せるの？」

「ん？ ああ……」

思わず、言葉をろくに聞かずに返事をしてしまった。考えている時こんな悪い癖が出てくる。

「…………… 娘？」

見た目5歳くらいしか変わらない子供を持つというのはあかがなものか……………

「いや、なぜ疑問形？……………」

一生の不覚だ。一瞬でも可愛いと思ってしまった…………… 目の前で小首を傾げるこの子を。

「…………… 娘にも話せ、ない？」

「…………… はあ、嫉妬だよ。努力しても天才に追いつけないっていうな。ほら、くだらねえだろ？ それより次のテストやらないのか？」

不満気な顔でこちらを見てくる彼女はとりあえず目の前のことを優先するようだ。この後質問攻めされるかも知れないが、とりあえずは難を乗り越えたと見ていいだろう。

「…………… 次は動き。ジャンプ、ダッシュ。色々試して…………… みて」

現実との差異を調べるのか。色々と思うところはあがるが1番最初よりもまだ健全だ。試しに1歩踏み出してみよう。

「ツ…………… 早速1個」

「……………ん。」

「重力の掛かり方が変。慣れないと転びそうになる。」

「わかった。」

転ばないように注意をしてに寝めを踏み出す。思ったより前に足が出ない。その原因は肩を回してみたりと色々と動いているうちにわかった。

「関節の可動域が狭い」

「……………ん。」

次々と問題点をあげていく傍らでユキはつまんなさそうに岩に腰をかけている。完全に暇な子供そのままだ。

「……………パパ？」

「ツ?!…………… え？」

「いや…………… 違う。お父さん？うん、こつちだ……………」

どうやらしつくりくるものを見つけたようだ。だがこちらとしては心中穏やかではない。ユキの一言一言、何故かこつちも反応してしまうのだ。

「ち、ちよつと…………… え？お父さん？」

「ん…………… ダメ、だった？」

そんな言い方されたら言葉に詰まってしまう。返答なしに黙った俺を見て何かを納得したようにユキは1人頷く。

「…………… お父さんは…………… 懐に入ったら、甘い…………… わかった。」

思わずずっこけそうになる。自分でも分からないような弱点を見つけられたからもあるが、結構策士だと言うことにだ。

「…………… 次は何をやればいい？」

「…………… 遊ぶ。」

「は？遊ぶ？…」

「…………… ん。」

このゲームをつて事か？つて言うか、こんなもんどどう遊べと？なんの説明もなしに何をやればいいのかも分からない状況で何ができるんだよ。

「…………… 髪、邪魔。留めたい。」

「…………… そりゃあ悪うござんした。モデルデザインしたの俺でごめんなさい。パークのフード被れば邪魔にならないんじゃないか？」

心のこもつて無い謝罪をしたあと改善案を出すと案外すんなりとユキはこちらを

じつと見てくる。

「……その手が……」

なんか驚いてるし。目をきらきらさせながらこっち見て来るのやめて？ なにか期待されても何も出ないから。

「……ほんとにAIかよ。」

もろ人間じゃん。というつぶやきは何とか心の中でつぶやくに留めたが挙動といい、言動といい。どこを取っても普通の人間と同じところしか見当たらない。

「……もしかして裏で動かしてる人がいる？」

「……む……私は私。」

本当に怒ったように言ってくるが如何せん表情が動いてないので感情が読みづらい。

「……じゃあ、人間じゃできない事やって？」

表情を変えず左手をあげる。萌え袖気味の手を猫の形に丸めて顔の横に持つていき  
子首を傾げる。

「……にや〜？」

と一言。内心はもう暴れそうなくらい悶えています。はい。ゴメンなさい。正直舐めてました。悔ってました。AIだからSiriと同じレベルだろうと思ってました。ごめんなさい。尊いです。確かに普通の人間はこんな表情なしで出来るわけないもん

ね。ごめんね？疑って…………

「………… お父さん？」

「ごめんなさい。今俺の顔見ないで？ちよつと親愛という何かが芽生えてそれが暴れようとしているから。多分顔は君の………… 俺の娘の尊さで表情筋ユルユルだろうから。」

「…………… 感情表現………… システム、壊れた？」

「え？…………… な、なんで？」

「お父さん………… 幸せのパラメータ、限界突破。」

「…………… ごめんなさい。それ、間違いないです。俺、自分の事、捻くれてる。って思ってたごめんなさい。なんか知らんけどユキの前だと自然体でいられる。何言ってるんだ、俺。」

「…………… そこ、座って？」

地面を指さしてそう言う。どうせ、テストだろうから素直に言うことを聞く。

「あぐらでいいか？」

「ん。」

許可を貰ったので座るといきなり、ドサツと言う音と衝撃と共に俺の足が何が柔らかいものに包まれた。

「…………… ン。パラメータ、壊れてない。また上がった。ロリコン？」

「ち、違うわい!!」

不名誉な称号をつけられるのを未然に防ぎ、自身の心の中で今までの行動をふりかえってみる。膝に乗つかられるだけで上がるパラメータ。手を握るだけで意識するぐらいのピュアボーイ。パパとか、お父さんって言われて嬉しいこの精神。

「……………やばい、否定しきれない……………」

大丈夫。多分…………… 151cmはロリじゃなくね？大丈夫だよな？誰聞いてんのか分からないけど……………」

「ほら、データ撮り終わったなら降りてくれ。」

「……………ん、気持ちいいから……………この、まま。」

「ごめんなさい。降りてください。俺の心が持たないです。もちろん邪な感情ではないけれど。」

「ツ……………降りてくれ……………」

「……………分かった。」

少し不満げな顔をしてからいそいそと俺の足からおりる。

「……………ユキはAIだ。俺が作った。」

「……………ん。」

「俺をからかうな。」



「ツ……ごめん、なさい……………」

罪悪感がない訳では無い。だがこの線引きをしなければまた俺は間違いを犯してしまう。昔を繰り返してしまう。お互い、嫌な思いをしたくなければこうするしかない。

「……………ちぐ、はぐだね……………お父さんは。」

だからこそこの眩きは俺にはこたえた。まるで俺が責められているような気がしたから。ユキからしてみたら純粋な興味だったのだろう。感情パラメータと言動が一致しないことに対しての疑問。それ。ただ口に出したただけなのだろう。

「ツ……………お前っ!!!」

でも、俺の過去はそれを許容できなかった。それ故に暴発した。感情の嵐が外に出ていく。

「……………」

ユキは珍しく感情を表情に出していた。その顔は……………

酷く怯えていた。

その顔を見た瞬間一気に頭が冷めた。俺は今何をしようとした？ AIだとしてもこんな年端も行かない女の子に掴みかかろうとしたのか？

自問自答だ。自己嫌悪だ。後悔と申し訳なさだけが残った。この状況。俺はこの後に言う言葉を持ちあわせていなかった。でもやらなければいけないことはわかる。

「ツ……………ッ、ごめ……………」

「え？」

俺が謝ろうとしたタイミングでユキが声を出した。その内容は皮肉にも俺と同じ言葉で、体を振るわけながら目の前の俺に必死で伝えようとする姿を見て俺はもう何も言えなくなった。

「ご、めんなさい。私、ま、まだ人がどうしたら怒る……………とか分からなくて……………何が良くて何が悪いか、分からない……………」

「あ……………」

言葉が出ない。まだ産まれたばかりの彼女は知らない事ばかりのはずなのに俺は全て、知っている前提で話して、関わって。そんな浅はかな行動が今に繋がるのだとしたら。俺はどんなに愚鈍なことをしたのだろうか？

「……………わ、私、プログラムだから、思考だって……………多分おとう……………あなたと違うし……………どう考えればいいか、分からない……………」

ユキの顔から光る雫が落ちる。それが涙だとわかるまでにそう時間はかからなかった。感情に任せて怒鳴り、怯えさせて、そして謝罪させているこの現状。俺はどんなにクズで馬鹿でそれでいてこんなことしか思いつかない俺は……………」

「……………ごめん。ユキは悪くない。俺が感情に任せて怒ったのが悪いんだ。ごめん……………」

俺は……………」

「嫌いに……………ならない?」

「ああ、ならないさ。でも俺の事怖がらないでくれ。」

俺は……………」

「うん……………」

「これから、色々と教えてやる。もう俺は怒鳴らないし、怖いことはしない。」

だから俺は……………」

「本当に、ごめんな?」

ユキの頭を人撫でして抱き締める。

だから俺は甘い言葉でしか贖罪できない俺自身が嫌いなんだ。

## 外伝 新たなる創造主（3）

俺はクズだ。ユキも薄々気付き初めているだろうか？全て察されているような気がする。新たに浮かんだ疑問をふとユキに聞いてみたことがあった。それはαテスト2日目。

「おは、よう。おと……拓さん。」

他人行儀な言動。行動。全てにおいて俺とユキの間にぼつかりと溝が出来てしまっていた。その現実はあまりにも残酷でこの挨拶をきたいた時は思わず膝を折ってしまいそうになった。

「……ああ、おはよう。」

声を出す俺。罪悪感に打ちひしがれながら必死に隠す。どうせ、パラメータとやらで無駄だろうが……。

ともかく、俺は後悔をしていたのだ。あの時は自分自身が嫌いだ等と思っていたが、一日頭を冷やして考えている内に俺にはそう思うことすら許されない。そう考えさせられた。

「……なあ、なんで君はあんなことした俺に着いてきてくれるんだ？」

希望が欲しかった。システムから命令されているのはわかっているが、救いが欲しかった。それがどんなに愚かで卑しいことだと知っていても。

「……………」

頭を下げて謝れもしない俺はこんなことを望んではいけないのに。無言になるユキを見れない。気まずい。そんなに自己中心的な思考しか出来なくなっている俺には一方方向しか見れない。

「……………怖い……………から。」

理解できなかった。俺が怖いならなぜ着いてくるのか。なぜそれが理由足り得るのかが。希望が、救いが消えていく。自業自得。そんな言葉が頭をよぎる。

「……………どこまで行っても俺は愚者……………か。」

そう。愚者にしかかなれない。あの人生を狂わせた事件から何も変わっていない。大人ぶったって、何をしたりって本当の大人にはなれなかった。自身を追い詰めて。被害者面して。見殺しにして。折れて逃げて。

それでも成長できなかった俺は愚か以外の何物でもないのももうわかっていたことのはずだ。

「そう……………だよ。分かってたんだよな……………」

でも、その仮面もユキと会って本当に心を許せる存在に出会えたと思った瞬間俺から

拒絶した。

「ほんとに……ほんとに滑稽だよな。」

いつか呟いた言葉をもう一度口にする。もう口癖になりつつあるその言葉は口に馴染み、嫌でも自分がどれだけ堕ちているか実感させられる。

「…… 周りが、怖かった。」

唐突にユキが口を開いた。またもや理解が出来なかった。周りというのは俺も含まれているのだろうか？それとも俺だけのことを言っているのだろうか？と。

「周りは、予想出来る言葉しか話さ……ない。」

そう続ける。昨日、ユキは俺の事。人間の事を理解出来ないと言った。なのに予想出来る言葉しか話さない？

変。

ただそのぼんやりとした疑問だけが浮かんだ。希望の光がまた見える。餌を得た犬の様な浅はかさに辟易するしかない。また自身の思考に吐き気がしてきた。

「当たり前前の会話、出来ない。だから……怖かった。」

そんな俺の思考を置いてきぼりに彼女の独白は続く。疑問が晴れない。ポツポツと

俯く彼女から発せられる音は俺には届かない。真意が分からない。察せないのだ。次の言葉を聞くまでは……………

「街<sup>A</sup>の人、みんな同じ……………作り物の表情、動き。」

全てが怖かったと続ける彼女の顔は俺が怒鳴ってしまった時以上に酷い顔だった。その表情を見た瞬間場違いにも思った。

ーユキは……………ユキは強いんだな。ー

と。俺が偉そうに言えることでもないし、考えることでもないけどでもそれだけしか出てこなかった。そんな感想しか。

覚悟を決めた。今までさんさん情けない所を見せて、ユキを追い詰めて、酷いことをした俺だけ。そこまでユキに話させて、疑問ばかりを一方的に聞いて……………。先に言葉を発さなければならぬのは俺なのに。遅いかも知れない。いや、『かも』じゃない。もう遅い。けれどこのままじゃ後悔してるだけで俺が望んでいる成長は得られない。

「だ、だから拓さん、がこの世界に……………来た時は嬉し……………ごめんなさいッ……………」え……………」

これ以上彼女を傷つけない。その一心で声を出した。結果的にユキの言葉を遮る形になってしまったけれど。

「……え……な、何して……」

俺の姿を見てユキは赤くなつた目を見開き驚いている。本当に優しいと思う。こんなことをした俺にもそんな目を向けてくれるなんて思つていなかった。

「ごめん……」

今しているのは土下座。部屋の中で俺とユキ2人だけ。こんな格好とこんな言葉しか俺には用意できなかったけど最大限に謝る。ケジメはつけなければならぬ。

「怖がらせるようなこととしてごめん。八つ当たりしてごめん、関係ないのに私情を持ち出して混乱させて、紳士に向き合つてくれていた君にどんな仕打ちをしたか。」

まとまつていない言葉で懸命に伝える。愚者は愚者のまま愚者らしく謝る。今はそれしか出来ないが、それができるならやらない手はない。それが俺にとってどんな結果をまねこうとも構わない。それが俺としての。彼女との関係に対しての転換期になるなら。

「俺にはユキと一緒にいたいなんて言えないし、言う資格も無い。でも最低限の償いはしたい。こんなことになつたのは全て俺のせいだ。君が人を知らないとか、そういう問題じゃない。」

彼女が気に病まないように。優しい彼女が悩まないように。もうAIなどは口を割いても言えない。それほど彼女からはこの短い間に沢山教えて貰つたし、伝えてくれ



たから。

「言つてくれ。俺は……俺は君に何をして償えばいい？何をすれば気が晴れる？」

だから、二度と近づかないでと言われたらそうしよう。殴りたいなら殴られよう。罰という名の罪滅ぼし。あまんじて受けよう。

「……なん、でもいいの？」

そう聞いてくる。覚悟を決めていたとはいえ、怖いものは怖い。

「あ、ああ……」

それしか言えない。言えなかった。伝わつただろうか？俺の覚悟は。

そう考えてるだけで俺はまだ愚者なのだと思う。フィクションのように少しづつ変わっていけばいいなどと思つては少しも変わらないことはもう嫌という程実感させられた。

「……じゃあ……」

途端に周りがスローモーションになる。ユキの口の動きが鮮明に見え、その目の前には裁きを待つ俺がいる。

「じゃあ……また、お父さん……つて呼んでいい？」

緊張していた故に言葉を飲み込むのに時間がかかった。言葉をゆっくり噛み砕く。理解した途端そんなのでどこが罪滅ぼしに……と思つたが、彼女の顔を見るとその考

えも消し飛んだ。今までに無いくらいに泣いていたからだ。

「……もう、孤独は嫌だ。私を、否定しないで…… 1人は…… もう嫌だ…… 私を…… 私を家族にして……」

高い声でそうすすり泣く彼女を見て俺が思ったのはただ1つ。

「また、泣かせた……か。」

「うぐ…… ひつく…… うう……」

気づけば頭を撫でていた。その手はぎこちなく動き、それに合わせて少しユキの頭が揺れる。

「……こんな、こんな父さんでいいなら……」

「うん…… うん…… うんっ！大好きっ！」

そう言っつて抱きついてきた彼女は前よりも俺に心を許しているようでなんととも言えない気持ちになると同時にになにかむず痒いものを感じた。

「…………… 恥ずい……………」

今に言えたことではないが、散々醜態をさらした手前、ユキの事を正面から見る事が出来ないでいた。

「お、お父さん、かつこよかつた……よ？」

フォローは嬉しいが、今、そのフォローをされると余計に惨めに感じるから少しやめていただきたい……

「私は……元気なお父さんが好き……だな……」

、  
、  
、  
、

そ、そんなこと言われたらさ？元気出さない訳にも行かないよね？（チヨロい）

「……ごめん、気分転換に冒険でも行くかつ！」

「……うん！」

やばい。俺の娘が可愛い件について。さっきのシリアス返せって？ごめん無理。

「どっか、行くの？」

「あ……」

ジト目で俺の事を見るユキ。親しくなった代わりに遠慮も無くなってきたよう

な…… いや、割と序盤から遠慮なかったな。

「と、取り敢えず外の人に何をすればいいのか聞いてくるよ。遊べって言われても何をすればいいか分からないからね。」

そう。次のテスト内容は『遊べ』というなんともふざけた内容だ。遊ぶ仕事ってなんだよ…… と言いたくなる。

「戻って…… 来るよね？」

「おう、一、二分で戻ってくるから待つとけ？」

悲しそうな顔をするユキの頭を撫でながらそういうとコクンと頷く。それを見届け、指を振りログアウトボタンを探す。

「お、あつたあつた…… 一日ぶりのリアルだな。」

前日はゲームの中で寝たのでプチ旅行みたいなものだった。内容はとてもそうとは思えないけれど……

「…… ん、待ってる。」

頭をひと撫でしてからログアウトのボタンを押す。徐々に崩れていく景色を見ながら…… 最後までユキの笑顔が頭から離れなかった。

―何があっても守ってやるからな……

今度こそ、堅固な決意を胸に抱き意識を現実世界に浮上させる。

「……………い？」

なにか声がある。まだ遠い意識が何科に引つ張られるような感覚。遮断されていた体の感覚が戻る。

「現実と仮想。見分けが着くだけで安心するな……………」

随分と遠い所に言っていた気がする。現実だが、現実ではない。そんな感覚。

「楽しんでくれたかい？」

さっきの声が今度こそちゃんと音になって耳に届く。声の方向を向くと相変わらず張り付けた微笑み顔の茅場が立っていた。

「ツ……………達観してる感じが気に食わない……………」

「はは、まあこつちにも色々あるからね……………所で予定外のログアウト。何があつたんだい？」

あまり話したくないのだろうか？この男にはあまり興味がないから今までそんな気にはいかなかったが……………

まあ、そのことを聞きたかったところなので素直に流れになっておこう。

「遊べ……… つてまだこのゲームの概要やら何を目指せばいいのかとか聞いてないんだが。」

「ほう……… コードネーム《ユキ》には何も聞いてない？」

「……… 詳しい内容はインストールされてなかったらしいぞ？」

コードネームと聞いて少し不快になるが、話を途切れさせてはいつまでたつても話が進まないので我慢しておく。ここも自分で実感できるほど変わった部分だ。もうユキをプログラムとは見れない。

「ふむ……… いいところを見せたい、か……… 名譽挽回かい？」

「なッ……… 見てやがったのか？ 趣味悪いな………」

正直この男に弱みを見せてしまったのは悔しい。つてか、純粹に怒りさえ感じる。

「はは、覗きをしてしまったことは謝るよ。事実だからね。」

掴みどころがない。第一印象で抱いたものであり、それは今も変わらないようだ。何を考えているのかが分からない。それは彼故なのか、それとも俺が人と真剣に関わってこなかった故の弊害なのか。分からない。分からないことが多すぎる。

「さてと、冗談はここまでにして、目的は最上階到達。としているが正直に言うともデリングは最下層のボス部屋までしかできていない。取り敢えずそのボス撃破が目的か

な。」

悪気がなさそうに話を続ける彼に俺は怒ることもバカバカしいと思い始めてきた。

「居るとなると……あの塔か……」

フィールドに出るといつも見えていたあの天井に続く高い塔。多分そこだろうと当たりをつけ言葉に出してみたが結果は当たりだったようだ。

「ああ。でも今のレベルだと間違いなく瞬殺だろうから……」

「わかってるよ。MMO初心者じゃあるまいし。集団戦が想定されて作られてるなら軽くレベルはマージンの4倍つてとこだろ。40レベルくらいか……」

ブツブツとつぶやく俺にただただじつと見つめてくる茅場。言葉じゃ言い表せれない様な微妙な空気感の中で次々と思考をめぐらせていく。

「決まったなら戻ってあげないの？すぐ戻るって言ってきたんだろう？」

もう隠すつもりもないのかそう俺に問いを飛ばしてくる。かくいう俺も忘れていた訳ではなく、多くの知識を茅場から引き出そうとしての行動だった。多分見破られているのだろうか……

「……ああ。そうするよ。」

コンビニのおにぎりを大口を開けて二口で平らげる。1日も何も食べていなかったので腹も減っていたゆえの行動だった。

「……………リンク・スタート。」

「……………ん。おかえり、お父さん。」

「ああ、今帰った。それより目標がわかった。この階層のボス撃破だとよ。」  
「そうユキに言ってるやると黙ってしまった。」

「……………お父さん、弱い。」

「あ、ああ。レベル上がってないからな。」

いきなりの罵倒にたじろぐが何とか冷静に返す。

「素の、運動神経……………ない。」

「う、うぐつ……………ま、まあゲームだしなんとかなるんじゃない。」

「だけど、お父さん……………負ける。」

「そうだ。ゲームがそんな不公平なものであつてはならない。みんな平等なスタートだから楽しいのであつてスタートがバラバラなのは全てクソゲーと相場が決まってる。」



「つて言う理論もこのVRじゃ意味ないんだけどな……」

このゲームは今までのリアルでの経験が生かされる。そんな気がする。

「食事以外ログアウトしないつて言うのも考慮しなきゃな……」

そう。第一、俺がログアウトしようとするときが普段あまり動かない表情筋を動かして必死に止めて来るのだ。その泣き顔も可愛いのだが、ずっとみていることも出来ない。なのでこの世界で暮らすというのは元々選択肢の中に入ってはいた。

「さてと。塔に向かいますか！途中でいいレベリングスポットがあったらそこで永遠と敵を倒しまくつ45レベを目指す。」

長い道のりになるだろうが行けないことは無い。αテスト1週間の間にできるだろう。多少無理すればだが……

「ん。塔はこつち。」

見えている塔を指さしながら手を引いてくる姿はなんとも可愛らしい。でもひとつ言わなきゃいけないことがある。

「ユキ、初日は俺一人で行かせてくれ。今の俺じゃユキと一緒にいくと多分守りきれない。俺はリスポンするからいいけどユキは違うだろう？」

多分ユキも復活はするのだろう。でも記憶が残っているかは別だし、そもそも同じ存

在なのかどうかはまだ分からない。というか、もう一度ロードされるなら四苦八苦同じではないだろう。

「……私も、戦う………」

そう言つて近くにあつた斧を持つとすると斧自体がユキを拒むように青い光が弾けた。

「ツ……?!」

「おい、ユキ！大丈夫か?!」

そう心配の声を掛けるとヨロヨロと起き上がるユキ。心配させまいと思つているのはわかっているが無茶はしないで欲しい。今のは防ぎようが無いのは分かっているが、それでもそう思つてしまうのは親心というものなのだろうか。

「だい、じょうぶ。」

そう言いながらも一回掴みに行こうとしていたので腕を優しく掴みその動きを止める。

「無茶はするな。もっと自分を大事にしろ。それでも無茶するようだったら俺が強くなつても連れて行けない。」

「ツ……わかつた……」

よしよしと頭を撫でてやる。少し厳しい口調になつてしまったためこういう所で釣

り合いを取らないと俺の方が罪悪感に押しつぶされそうになる。まあシンプルに言う  
とエゴだな。

「んう……くすぐりたい……」

……え？え？何この子。なんか色っぽい声出してるんですけど……俺そん  
なにいかががわしいことしてないよね？え？してないよね？（混乱）

「おっと……ごめんな。」

クールに……そう、クールにだ。対応を間違えれば俺は社会的に死ぬことになる  
ぞ？茅場が見てるんだからあながち間違いじゃないだろう。ってかあいつだけには見  
られたくない。

「もう見られてんだらうけどなあ……」

「?……」

不思議そうな顔で俺の事を見てくるユキは色々吹っ切れたせいかな今までよりも親愛  
の意味で愛しく思えた。

## 外伝 新たなる創造主（4）

ここからは話が一気に飛ぶ。戦術、技術共に拙いまでもレベル差でゴリ押しができるようになった頃。

「……………もう4日か。長いようで短かったな……………」

レベ上げに邁進していたこの頃。ユキが拗ねるので一日ごとに一日中ユキに構う日を作り実際は2日間しか冒険をしていないが、残りの時間はあとわずかだ。1週間という話だったので残り3日。

「ん。まるで、ダメ。イメージに体がついて行っていない。」

分かってるんだ。これが付け焼き刃だってことも。せめて体を自動的に動かす決まったモーションがあれば……………

「無い物ねだり……………か。」

「ん。ボス倒すの、無理。」

今のレベルは42。茅場に聞いた話だと45でカンストらしい。迷宮区のモンスターは武器を振り回してれば勝てるからここまで来れたが、ボスだけがいかんせん勝つイメージが湧かない。

「あの太った犬ところめ……………」

「私、連れて行ってくれない……から、知らない。」

少し拗ねた顔になりながら此方を見てくる。でも仕方が無い。失うのはもうこりこりなんだよ。

「……………ごめん。でも……………」

「ん、今の、意地悪だった。私もゴメンなさい。お父さん。」

距離縮まったよね？ちゃんとしてるよね？これ。なんか色々あっただけに感慨が深い。事実、この数日でユキの喋り方がこれでデフォルトになりつつある今、言葉足らずではあるものの自身の考えを伝えようとする事が多くなった。いい傾向だと思う。

「俺のpsでこれしか行けないならカンストさせたところでたかが知れてるよなあ……………はあ、体を動かす才能はないってのに……………」

「……………複数からデータ、取れない。から、お父さんがどれくらいなのか……………分からない。」

まあユキの言ってることも分かるさ。でもこのままだと撃破どころか、一方的にリンチされて終わる事実は変わらない。かろうじて1回の攻略で5回の攻撃が最高である。壊滅的だ。

「だいたいあの巨体であのスピードは理不尽だろ……ゲームバランス、絶対おかしい。」  
 そう愚痴を吐く。まあ本当はわかってるんだけどね。才能がないことぐらい。

「……ん、元氣出す！」

自分の前に腕を持っていき両手で小さくガッツポーズをとるユキを見ていると闘志では無く、微笑まじさが先に出てしまう。でもこれを口に出すとユキが怒るので言えないのが残念だ。

「……まあ、行ける……かな。3日もあるんだし……」

自信なさげに言うとうキが座っている俺の前に来て頭をなでなで。気を使わせたり……というより、1種の俺らのスキンシップなので前みたいなのマイナス思考は起きない。つてか起こしたら今度こそユキに嫌われる気がする。

「……うしっ！元氣だしますか!!!」

「……」

いきなりテンションを上げた俺を怪しむような目で見てくるユキ。うん。あまり見ないで？まだこのテンションは慣れてないから。自分を変えようと思って性格改編を試みた結果だから……ほんとに恥ずい……

「……コホンッ……さてと……またレベ上げ行くからユキも着いてくるか？」

咳払いをひとつ。

迷宮区じゃ無ければユキを守る自信があるので最近は連れて行っている。何せ、剣を振り回してれば当たる。当たればレベル差で相手が勝手に死ぬ。大胆な話、ユキを背負いながらも戦えるってことだ。

「……………ん。行く。」

短く返事をした。無愛想だがその中にも信頼があるのがわかる為、なんともむず痒い。それはともかく俺の上着をつまみながら着いてくるユキを連れて宿を出た。

「キャインツッ！」

悲痛な悲鳴をあげてポリゴンを散らしていく狼。《フォレストウルフ》を狩りながら周りを見渡しユキが万が一にも襲われないように注意する。滅多に出れない外という事もあり、表情と声とは裏腹に足は年頃の子供みたいに跳ねている。

「ウオラッ！」

力任せに振った剣は運良く狼を両断した。実に7空振り1ヒットだ。ほんとに才能がないと落ち込みそうになる。まあしよげてはいられないんだが。

「お父さん、お父さん。これ……………」

指を指していたのは草むらだった。剣を鞘に入れ近くに行く。するとそこにあつたのは……………」

「アクセサリー？」

装備品かと思いいンドウで操作してみるも、出てきたカテゴリー表示は《貴重品》細いチエーンの先にひし形のクリスタルのような石が付いている。そして肝心な名前  
は……………」

「…………… 無い。なんでだ？」

見事に何も無い。空欄だったのだ。

「からっぽ……………」

「ん？」

ユキが何かを呟いた。吸い込まれるようにこのネックレスに視線を向けて只只呟いた。心做しかユキも感情を落としてきた様な雰囲気。心配になりユキを抱きしめてみるも何時もの子供っぽい反応もなし。

「これ、か……………」

鍵はこのネックレス。試しにユキから見えないところ。つまりストレージにしまつてみるとあつさりユキが元に戻った。





いたらユキに当たっていてもおかしくない。

「ちッ……この……待って！」ッ?!

俺がさやから剣を引き抜き攻撃をしようとするとユキが普段出さない大きな声で止めてくる。普段なら止まらなかつただろう。でも今回は動揺していたからか、止めてしまった。それが命取りになるということをおぼわっているはずなのだ。

「……この子、雰囲気……違う。」

確かに攻撃もしてこないし何か、周りの奴らと違う気もする。

「……笑って、無い。」

本来、笑うという行為は挑発。捕食欲の表れと言われており、野生の動物は皆獲物を追っている時は笑っているのだとか聞いたことがある。それが本当かは分からないが、確かにこの狼は笑ってなくてさっきまでの狼は笑っていた。

「でも、そこまでゲームに正確性を求めるか？」

声に出すほどの疑問。茅場の狂気的一端に触れた気がした。キャラのモデリングの正確性。動きの自然さ。全てがリアルに再現されているとはいえ、モンスターの生態まで再現しているとは思わなかつたのだ。

「データ、参照……状態、タイム待ち」

ユキが声を発する。サーバーのデータベースにアクセスしたのだろう。

「タイム……………ね。ゲームではオオカミには肉が王道だけど……………」  
「私、やりたい……………」

オオカミと戯れるユキ……………うん。ありだな。つてか可愛い。

「よし、じゃあこの肉でいいか？」

コクリとうなづいてから小走りで狼に駆け寄っていく。

「くうん……………」

お前は犬かと思うくらい可愛く鳴く狼。尊厳はどこへやったのだろうか？そう考えるも答えは出るはずもなく気付けばユキが狼の背中に乗ってこつちに來る。

「その狼仲間になつたのか？」

敵対行動を取らない時点でだいたい予想は着いているが念の為確認をする。結果……………」

「……………お手。お座り……………」

成功していたようだった。言い終わったあとにわしゃわしゃと狼を撫で回す。ツツコミどころはそこでは無いのだが……………」

「えつと……………何一つ言うことを聞いてないんだが……………」

「可愛い、から。大丈夫……………」

「それでいいのか、娘よ……………」

俺の子は少し天然が入っているようだった。

4日目のαテストも終わり俺のレベルは44。あと1レベルでカンストなのだが、今日はテスト始まって1回目の帰宅の日。茅場に家まで送ってもらいドアを開ける。ちなみにユキはスマホに落としてきた。これでスマホ通話のかんかくでしゃべることができきる。

「ただいまー……………」

部屋は暗い。妹はまだ帰ってないのだろうか？

「あ、拓にいい！おかえり！」

愛しの妹がこちらに飛び込んでくる。いつもの事なのでこちらで妹……………もとい、木綿季ユウキを怪我させないようにと優しく受け止める。

「ツ……………」

「ん？どうした？」

「う、ううん。なんでもない！」

少し表情が曇った気がしたが、気の所為だったみたいだ。今日はユウキが料理の当番だったみたい。木綿季のご飯は個人的に美味しいと思うから楽しみだ。だが、年齢的には思春期真っ只中だ。筈だ……筈なのにこんなにも兄妹仲がいいのは凄いのではないだろうか？と最近は考える余裕が出てきている。

「そうだ。木綿季。」

「ん〜？どうしたの？拓にい。」

いつものテンションでキツチンにいる彼女は返事をした。元氣ないつも通りの声。でも、少し声が震えているのは気の所為だろうか？

「俺、娘出来た。」

疑問を棚上げし爆弾を投下する。

ガシャンツツという音がキツチンから聞こえてくる。視線を向けると真っ赤な顔でこちらを見ながら目をまん丸に開いた妹が居た。

「…………… え？ご、ごめん。もっかい言つて？」

「娘が出来た。」

「…………… は、」

「ん？」

「はあああああああああああ  
?!?!?!?!」

絶叫が家の中にとどまらず近隣に響き渡った。キッチンから走って出て来る。俺の寝っ転がっているソファアの背もたれに手を着いて俺の顔のすぐ上に頭を出してくる。距離だけ見ればバカツプルのそれだ。兄弟だが……………

「拓にいー、いや、お兄ちゃん！」

「お、おう？」

昔の呼び方に戻る木綿季を見て若干狼狽える俺。それを知ってか、知らずしてか。激しく攻めたてるような口調で俺に問い詰めてくる。

「相手は誰?!どんな人?!ボクも知ってる人なの?!いつ?!いつからそんな関係になった人が…………… というか高校生でそんなのはやすぎるよ！」

あ、わかった。これ盛大に誤解してるやつだ。というか俺の発言ってこんな誤解しか出ない言い方だな。反省反省。

「娘はユキって言うんだ。」

「雪ちゃん?!いい名前だね!ってそうじゃなーいつ!なんで言ってくれなかったのさ!ぼ、僕がお姉ちゃんになるだなんて…………… なるだなんて…………… えへへ……………」

「お、おーい?悪ふざけしたのは謝るから。娘って言っても俺がプログラムしたってだけだから! AIだから!」

「へ……………」

誤解は解けたようだ。さつきとは違う意味で目をまん丸にしている。顔はさつきまでの興奮で赤くなつたままだが。

「へ、へえ…… お兄ちゃ…… 拓にいにそんな趣味が……」

さつきの恥ずかしさを紛らわせるためか、半目になり俺の事をからかってくる。

「う、うん。そこに関しては弁明したいが、取り敢えずひとつ言いたいことがある……」

「ボクは何を言われても聞かないからね？ さつきのは事実としてネットに……」

「やめて?! 社会的に死ぬの必至だから! 頼む! 後生だから……」

ネットのさらし者になればもう俺の人生はお陀仏だ。最悪、自殺まである。しないけど。

「イツ……」

腕を掴むとなにかに驚くように腕を引き戻し自分の胸に持っていた。

「え……?」

「えっと、あはは…… コーヒー入れるね?」

嫌われたかと思つたがどうやら違うようだ。そうならば考えうるのは一つだけ。

「お前……」

後ろから抱きしめる……なんてことは出来ない。だけど大体は察した。優しく

手をとる。距離を置こうとする木綿季を物理的に止め、こちらをむくことを強要する。こうでもしなきや俺の妹は弱音をはこうとしないからだ。

「……何があつた？」

「……… な、なんの事？」

この期に及んでまだ言い逃れしようとする木綿季に視線を合わすと取り繕っていた仮面が少しづつ取れて行く。

「……… 話してみろ？」

「………」

口を開かず、ただ佇みながら顔を歪ませていく木綿季。強引に聞き出すのはしたくないし木綿季も傷つくかも知れない。そんな博打は打ちたくない。

「……… 俺にも、話せないか？」

「ッ………」

そう言うのと木綿季の足元に透明な水滴が。さつきからずっと我慢していたのだろう。元気という仮面が剥がれた今、目の前にいる彼女は感情をむき出しにする準備就をしていた。

「はあ……… よし、じゃあこうしよう。先ずはその怪我、処置しようか。その間に話しか、話さないか決めていいよ。」



「気付いて…… たんだ？」

「そりや変だとは思ってたさ。歩き方とか変だし。何時もなら駆け寄ってくる位なのに今回は抱きついてきたし。何かあつたんだなあ……位には。まあ確信に至ったのは腕挿んだ時の反応だけど……ほら、腕出せ。」

そう言ううと俯きながらコクンと頷き萌え袖ぎみの服をめくる。

「ツ……酷い……な。」

「……」

俺の目に入ったのは青白いアザがいくつも出来た痛々しい腕だった。赤く腫れてるだけだったらまだ良かったと言えるくらいに腫れて、折れてるんじゃないかと思うくらいに細い腕に打撲、裂傷。痣。見ていられないほどに酷い有様だった。

「……ちよつと痛むぞ？」

傷口を消毒する。少し顔を顰めたが声は発さずじまい。少し踏み込みすぎたか？と反省しかけたが、まだ早いと思ひ直す。

「傷口の処理は分かるが、青痣って冷やす以外どうすればいいんだよ……」

とりあえずハンカチで包んだ保冷剤と一緒に包帯で巻き、患部を冷やすだけで落ち着く。素人だからこれぐらいが限界だろう。

「この後、少しでもこの腕で違和感があつたら言えよ？最近、まとまった金が入ったから

病院代とか気にしなくていいんだからな？」

「…… うん、ありがと」

それ以外話そうとしないので話さないことに決めたのかと諦める。ここで踏み込みすぎたら多分木綿季も精神的にもっと追い詰められるだろう。はつきり言つて想像は着いているし、イラつかないと言えば嘘になる。むしろ、激怒だ。

だが、今、木綿季が欲しいのは自分のために怒つてくれる誰かではなく、自分自身を見てくれる人だと思う。今まで、木綿季のメンタルケアをしていたランねえに変わつて俺がしっかりとしないといけない。

「木綿季、風呂はどうするんだ？」

「先、入つて……」

「……… 了解」

完全に仮面が取れた木綿季は上手くも無い作り笑いでそう言った。雰囲気が悪くしたいわけじゃないんだがなかなか上手くない。

「人間関係はやっぱ難しい……」

妹のことを考える兄は次の手を考え始めた。いつか妹が悩むことが無いようにするために。

## 外伝 新たなる創造主（5）

「つて言うことがあつたんだけど……」

『…… ゆうき…… お姉ちゃん。』

今、俺は風呂場にて湯に浸かっている。木綿季の体の痣を見て聞いてみたものの見事にはぐらかされ、今こうやって一人でお風呂に入っている。

傍らにはスマホが。そこからユキの声が流れてくる。

『どう、して…… 私に？』

「いや、同じ女子だし俺より女心をわかつてるかなあ……と。」

『…… 安易』

サラツと毒を吐くユキ。それに対して全く微動打にしないのが紺野拓。話にでてきた木綿季の兄だ。

『でも、お父さん、怒ってる。』

「ん？ああ。こんななへらへらしてないと物に当たっちゃまいそうなんだよ。理性が働いてるなら制御できる時はしないと。」

流石、ユキだ。一瞬で見破ってくる。俺はただ物が壊れたらお金がかかるという一点だけで頑張っているのだが……。がめついが、叔父叔母にお世話になっている身。できるだけ節約し、負担を減らさないと。

『……あの時、怒鳴ってきた……のに……』

「うぐっ……それは……ごめんなさい。」

謝る姿に父の威厳はない。でもそれがユキには心地よかった。思わず微笑みがもれる。面と向かっていないのが功を奏し拓にはバレはしなかったが……

「まあ、ユキには感謝してるよ。」

『え?』

いきなりだと拓は思った。でも伝えるならここだと。誤りはせど感謝を伝えたことは1回もなかった。だから伝えるのは今だと考えた。

「こんなに心が軽くなったのは久しぶりだ。今でこそイライラしているとは言え普段の生活でここまで感情が動くことなんてなかった。だからありがとう。」

捻くれていた時期……なんて言ったら恥ずかしいが、周りにいっぱい迷惑をかける俺にストツプをかけてくれたユキには感謝してもしきれない恩がある。

『……好き、なんだね。ゆうきお姉ちゃんのこと。』

「好き……とはちよつと違うかな。恋愛の好きじゃなくて親愛の好きかな。ライクの

方。そういう意味ではユキに向ける好きと木綿季に向ける好きは同じだな。」

小さい時はよく木綿季が『将来ボク、お兄ちゃんと結婚する!』なんて言ってくれていたが鈍感とかはなんでもなく、今はちゃんと親愛と恋愛の区別は着いているだろう。「あいつは……木綿季は凄いいんだ。両親が無くなった時、いち早く立ち直ったのがあいつだった。一番泣いていたのもあいつだ。でも、俺は薄情で涙も出なかった。」

『……苛立ちが先に来て?』

「ツ……そうだ。なんで俺達を置いて逝った? つてな。まあ根本的には寂しいって感情が先に来ちゃった。そして後から悲しいって感情が来て部屋に閉じこもりっぱなし。」

『学校は?』

「行かなかったさ。いや、行けなかった。まともに通いだしたのは中三の秋からだ。」

『……』

ユキが黙り込んでしまう。さすがに暗くなりすぎたか? と反省し、務めて明るい声で話を続ける。

「でもさ? 閉じこもってる俺の部屋の前に毎朝毎晩。来るんだよ。木綿季が。学校行く? とか? とか? 飯一緒に食べよう? とかな。」

『……』

ユキに隠し事をしたくない一心で話すあまり、ドアの曇りガラスに映る人影に俺は気づけなかった。

「勿論、申し訳なく思つてたさ。俺を説得するために毎回学校にはギリギリなのも知つてたし、夜中までドアに背中を合わせてウトウトしながら待つてたのも知つてた。俺はなんで俺みたいなのやつに構うんだらうって会う疑問と同時に凄いなって思つた。」

風呂場なのに唇が乾燥してカサカサになつてしまふ。お湯を掬い顔にかけ、1回湿らせてからまた話し続ける。

「あんなに泣いてたんだから悲しんでいるはずなのに誰よりも早くあんなに取り繕つて……今までそんなに積極的じゃなかったやつがいきなりあの性格になるなんて考えられなかった。明らかに無理してる。そしてそんなに追い詰めたのも原因の一端に俺もいるのだらうと思うともう顔を合わせるなんて出来なくなつてた。」

『お父さんは……ゆうきお姉ちゃんの事、どう思つてるの？』

「元気で可愛い大切な妹だよ。当たり前前に悲しむことが出来て当たり前前に喜ぶ事が出来て。正直に言うのと引くかもしれないけど親愛じゃ無くて、恋愛の面で好きになつた時もあつただんだけ？」

ガタツとドアの向こうから音が鳴るがものが落ちたのだらうと特に気にもせずユキの反応を待つ。ちなみにその恋を初恋カウントはしていない。妹だったからって言

うふぎけた理由だが、親愛と同じカウントだ。

『……なんて……言ったらいいか、分からないけど……ロリコン?』

「なんでそうなる……木綿季は2回俺の事を救ってくれたんだ。両親が亡くなった時と……去年……だな。」

『去年?』

「ランねえがエイズを患って入院した時。」

そう言うとすぐにユキが謝ってきた。大丈夫だ。そう返して話を続ける。

「このままだったら木綿季はクラスで一二を争う美少女になってただろうし実際そうだしな。」

”このままだと”という部分にユキは突っ込まなかった。それが有難い。これは俺が勝手に話している事じゃないからだ。

「とまあこんな感じで俺は木綿季に救われ、守ってくれた恩返しをしようと部屋から出て支えてあげようと思ったわけだ。できてるか分からないけど……。」

そう言いきった。清々しく、なんの疑問もなしに唯信じて疑わないように。その彼を見てユキは眩しいものを見たように目を細め優しく微笑んだ。

拓にいに話す覚悟が決まり今お風呂場のドアの前に居る。でもいぎ話すとなると言葉が詰まって…… 思うように声が出なかった。

「た、たく……」

拓にい。その声を出したいのに喉が震えない。か細い吐息と一緒に音にならない声が出ていくだけ。その時だった。

『あいつは…… 木綿季は凄いな。』

そうお風呂場から声がした。

誰かと話しているのだろうか？なぜボクの話題が出る？

色んな疑問が頭の中を駆け回る。不安とともに動かなくなる体が恨めしい。色んな思考が刹那に駆け巡る中、拓にいの会話は続いていく。

『閉じこもってる俺の部屋の前に毎朝毎晩。来るんだよ。木綿季が。学校行こう？とかご飯一緒に食べよう？とかな。』

心当たりがある。ラン姉ちゃんに同じことをやられてボクも立ち直れた。だからきつと拓にいにも効くと思つてやつただけなのだ。でも本当はそれをすごく迷惑に思つていたのだろうか？付きまとわれている感覚だったのだろうか？



『俺を説得するために毎回学校にはギリギリなのも知ってたし、夜中までドアに背中を合わせてウトウトしながら待ってたのも知ってた。俺はなんで俺みたいなやつに構うんだろうっていう疑問と同時に凄いなって思った。』

「す……い？」

何を言っているのか分からなかった。ただただあの時は必死で寂しさを紛らわすために拓にいの部屋の前に行って話しかけて。そんな私のわがままみたいな理由でしていた行動なの？ 訳が分からなかった。

『お父さんは……ゆうきお姉ちゃんの事、どう思ってるの？』

女性の声だ。途切れ途切れの言葉はコミュニケーションが下手と言うよりこれがデフォルトだと分かる言葉遣い。拓にいが女性と入ってるのか？ と思いつ体が動きかけるが、A-Iの娘が居ると言う言葉を思い出し踏みとどまる。大方スマホで会話をしているのだろうと当たりをつけて。

『元気で可愛い大切な妹だよ。当たり前前に悲しむことが出来て当たり前前に喜ぶ事が出来て。正直に言うのと引くかもしれないけど親愛じゃなくて、恋愛の面で好きになった時もあつたんだぜ？』

今度こそ体がビクッと動き近くの小さい時に遊んでいたアヒルのおもちやを蹴飛ばしてしまう。なかなか大きめの音が鳴るが幸い中に居る彼には聞こえなかったようだ。

ボクに対して恋愛感情抱いていたなんて聞いて反応しない人がいるだろうか？ いや、探せばいるのだろうが、少なくともボクはそれに当てはまらない。

「初耳……………だよ……………」

不思議と嫌な感じがしなかったのはボクがそういう感情を昔に拓にいい対して抱いていたことがあるからだろうか？ もしかしたら同時期なのかもしれない。今はその分の愛が全て親愛に変換されているとはいえ、そんな言葉に照れないなんてことは出来ない。

『ロリコン……………？』

思わず吹きそうになる。さつき悩んでいたのがうそのようだ。緊張は不思議と消えて体の震えも消えている。その変化に自分自身驚きながら耳を風呂場の中に傾ける。

『なんでそうなる…………… 木綿季は2回俺の事を救ってくれたんだ。両親が亡くなった時と…………… 去年…………… だな。』

話が一気に暗くなる。それにつられてボクの気持ちも沈みかけるが次の一言にまた気分が良くなる。

『このままだったら木綿季はクラスで一二を争う美少女になってただろうし実際そうだしな。』

上げて下げてまた上げて…………… この性格の拓にいい女たらしになりそう……………

そんな危機感が頭をよぎるが、すぐにその思想を消して静かに部屋に戻りある準備をしに行く。脱衣所を出る過程で風呂場から『守ってくれた恩返しをしよう』と部屋から出て支えてあげようと思つたわけだ。できてるか分からないけど』と聞こえ、ニヤけが止まらないまま出ていく。その足取りは入ってきた時とは違い軽く弾むようだった。

「つてこんなに暗い話じゃなくてもつと明るい話にしよう。そうだなあ……俺、ボスに勝てない疑惑について。」

『疑惑…… 確信じゃなくて?』

「ユキ、なんか今日辛辣じゃない?」

『鈍感お父さんが、悪い。』

言っている意味がわからない。まあ多分俺の気づいてないことにユキは気付いているのだろうということは分かった。

『それよりも、覚悟決めた方が…… いい。』

「え? なんのかく」

いい切る前に勢いよく風呂場のドアが空く。勿論ポルターガイスト……なんてことは無くそこに居たのは……

「ゆ、ゆゆ、ゆゆゆ？ゆ、木綿季ッ?!?!?!?!」

「入るよ〜!!拓にい!!」

「入るよ〜じゃねえよ?!お前には羞恥心というものが無いのか?!」

そう。入ってきたのは木綿季。俺の妹だった。ビキニを着ているがここはお風呂。妹とは言え俺は仮にも思春期真っ只中なので反応はしてしまう。

『………… お父さん、切るね。』

「え?!ち、ちよちよ、ちよつと待つ（ブチッ…… ツーツー…… アカン奴やん…………）」

速攻で気を使わせてしまった。でも2人きりは色々ときつい所がある。思い俺の精神状態が。

「えつと………… どうしたの?拓にい」

「なんでお前はそんなに冷静でいられるんだよ……………」

「昔一緒に入ってたじゃん?」

「いつの話だ!!」

ほんとに何考えてるんだ?悪くなった雰囲気回復させるにも、もつとやり方があつ

ただろうに。

「話に来た！」

「……………は？」

え？話に来たつてあの事を？ここで？

「ち、ちなみにリビングに移動という案は……………」

恐る恐る聞いてみると案の定な返答が帰ってきた。

「ない！」

「さいですか……………はあ……………んで？」

視線と言葉で先を促す。木綿季が務めて明るく振る舞うなら俺もそうしよう。暗いままだと話が続かなくなるし俺もいつイラつきが爆発するか分からない。

「いじめられてるんだ。ボク、エイズだから。」

「……………」

「黒板消しを紙に擦り付けられたりとか、トイレしてる時に上から水とか。」

何とも捻りの無いいじめだった。根源は1人であるとはノリとか嫌われたくないとかそんなくだらない理由だろう。集団に伝播する思想とはこんなにも恐ろしいものだとは。

「……………ごめん。俺にはどうすればいいか分からないんだ。聞いてやるって偉そうなこ

と言った手前すごく情けないことだけど……」

「…… そんな事ないよ。拓にいは、ずっと味方だつて信じてるから。」

情けないことを言つて帰つてきた答えが全幅の信頼。兄の俺は立つ瀬がなくなる。信じて疑わないその瞳は何とも保護欲をそそらせるもので……

「…… 木綿季、お前なら大丈夫だ。」

情けない俺はそんな言葉と裏で行動するしか出来ないが、木綿季を助けるためならどんな人脈でも使おう。それがたとえ褒められたことじゃなくてもだ。

「…… うん。もうちよつと頑張れそう。」

「ああ、もうちよつとでいい。お兄ちゃんが必ず助けてやる。」

ビキニを着ているが故に全身の打撲やら怪我やらがむき出しになりさつきよりも痛々しい姿になった妹を見て密かに拳に力を入れる。

「…… だから、言つてくれ。お前が俺に望むのはなんだ？それが聞ければ俺は覚悟を決める。」

俯いた木綿季が顔をあげた時にはさつきまでの笑顔はなく、ただ必死さが滲む表情で声を出してきた。

「…… 助けて…… お兄ちゃん！」

「任せろ。」

助けを求める妹に手を差し伸べない兄はいるのだろうか？いや、いるのだろうか、俺はそんなクソ兄にはなりたくない。必ず助けてやる。木綿季を気づつけたヤツら、年下だからって容赦しねえぞ……

## 外伝 新たなる創造主（最終話・長編）

## 《木綿季救済編》

木綿季が俺に助けを求めてきて1時間後。猶予は今日だけ。明日にはまたαテストに戻らなければいけない。木綿季の為なら辞退することもやぶさかではないが、このバイト代が出ないとなると生活も危うくなる。完全な板挟み状態だ。

「教育委員会は……ダメだな。」

どこの委員会か忘れたが隠蔽していた過去がある。あまり頼りにしてはいけないだろう。

「となると……はあ……余りこういうことは教えたくないんだが……」

『私の…… 出番？』

俺がユキに頼むしかないと考えついたと同時にスマホからユキの声が聞こえてくる。もうこれしきのことと驚くことは無いが、どうしても前置きは欲しい。通知音鳴らすとか。

「ユキ、頼めるか？」

『お父さんの…… 為なら。私は何をすれば良い？』



「教育委員会は隠蔽して逃げるかもしれない。だが、俺らが手を直接下したら禍根が残って更に木綿季の立場が悪化する。ならどうすればいいと思う？」

そう質問する。ユキにはゲームの中だけでなく、外のことも知って欲しいからだ。こんなきつかけになったことは何とも複雑だが……

『誰かに、やらせる？』

「確かにそうだ。だが足りない。然るべき所がやらざる負えない状況を作るんだ。」

『……もしか、して……』

「お？わかったか？」

さすが俺の子供。頭がよく回るらしい。答えを出すのが早い。元々これは俺が昔から考えていた方法だ。人脈がなくて達成できなかったが今回はユキが居る。

『教育委員会……？でもさつきお父さん、ダメだつて……』

「それこそ、やらざる負えない状態を作つてやればいい。誰だつて追い詰められれば単純になる。大量の証拠を見せる……とかな。」

然るべきところごとつた措置なら文句も言えないだろうし、子供がいくらピーチクパーチク言つたつて首になるかもしれないと思つたら何がなんでも木綿季を守らざる負えないだろう。

「見逃したら見逃したで…… あ！やたや、p \*首を切られるだけだ。評判を地に落

としたってな。」

『…………… 私の出番…………… ない?』

「ユキには仕上げをやって貰う。裏で情報操作だ。」

万が一に逃げられた時の為にユキには裏で手を回してもらおう。SNS、サイト。手段は色々あるしマス・メディアに知らせるって手段もありだ。兎に角、木綿季が傷つかなければいい。

「頼めるか?」

『やり方は…………… なんでも、いいの?』

「ああ、任せる。」

『…………… わかった。任せて。』

ユキがこつちに着くならもう怖いものは無い。これからはこつちのターンだ。

木綿季が虐められているという証拠を掴むため、久しぶりに不登校だった俺が学校に行く。幸い木綿季とは2歳差で教室も近い。別校舎だが…………… 俺は高二で木綿季は

中一。

「という訳で茅場、俺は明日少し遅れるけどいいか？」

『ああ、構わないよ。久しぶりの学校、楽しんでね。』

お前は俺の父さんかと言いかけたが、ここでそるをいってしまおうとせつかく成功した作戦を壊しかねないのでグツと我慢する。

「ああ。じゃあな。」

『ああ、また明日の夜に会おう。』

よし。バイトには話をつけた。休むのはこの際仕方ない。一日延長の話もつけたから給料は大丈夫だろう。次は木綿季だ。行くとはいえ、木綿季も年頃の女子だ。木綿季を助ける為とはいえ一緒に登校したり、一緒に行動するのは嫌がるかもしれない。だから事前に聞いておかなければ……

「うん。いいよっ」

「そうだよなあ…… 流石に兄と一緒に行動は…… いいの?！」

思わずアニメみたいな反応をしてしまう。いや、確かに木綿季なら…… って予想してはいたが、そんなにあっさりと許されるとは思っていなかった。と言うか、むしろ嬉しそうでさえある。

「…… お前…… いや、もう何も言わない。明日は宜しくな。」

「うん！ありがとうね？拓にい！」

守ろう。この笑顔。

夜ご飯も食べてあとは寝るだけだが、久しぶりに孤独だ。近くに抱きついてくる某娘も居ないし、モフモフの狼もいない。いや、狼とは一緒に寝たことは無いんだけど……

「久しぶりに一人か……寂しい……な。何時ぶりだろう。こんな気持ちになったのは。」

『……私、居るよ？』

「うくん……話をして癒える寂しさじゃないと言いますか……人肌恋しい？つて言うのか？」

『うくん……あ、そうだ。ゆうきお姉ちゃんのところ、連れて行って？』

そう言われたのでとうとう愛想をつかされたかと思いい人ナーバス状態に入る。ユキが必死で説明をしてくるのを途中から楽しみながら廊下を歩く。

『…… お父さん、嫌い。』

拗ねられた。結構なダメージを受けるが鋼の精神で何とか耐える。

「…… ごめんなさい……」

『…… ふんっ……』

姿が見えていたらきつと頬をふくらませてそっぽをむいておるのだろう…… あれ？なんか可愛い……

「と、とにかく木綿季の部屋の前に来たけどどうするの？」

『はいつて……？』

仰せのままにユキ様。

「という事で木綿季、起きてるか？入るぞー？」

ノックしながらドアを開ける。中には木綿季がベットに入って小説を読んでいた。

「木綿季……？」

「え…… あ、拓にいい。どうしたの？」

さてと。どう言ったものか…… 俺は知らないって言ったらそれこそ怪しまれるだろう。それこそ本末転倒だ。これ以降の計画と俺の精神が狂う。

「あ…… うん…… どういったものか……」

『…… 初め、まして。ゆうきお姉ちゃん。お父さんの娘の…… ユキ、です。』

俺がどう伝えようと四苦八苦しているとユキが喋りだした。この場合俺はどうすればいいのか分からない。完全に空気だ。

「あ、は、初めまして！」

『お父さん、寂しいらしい……から、一緒に寝て欲しい』

「ふええ?!」

「ぶふうッ……は、はあ?!お、おまえ、な何言つてんだよ?!」

ユキが爆弾発言をしたせいでこの部屋で居場所が無くなるどころか、この家でなくなるんだけど……とりあえずあの世界に行ったらグリグリ刑だな。教育も親の義務だ。賢すぎて今まで必要なかつたけど……

「い、いいよ……」

「ごめん。木綿季のことが嫌いとかそういうんじゃないんだが、それは兄としてダメというか終わると言うか尊厳が無くなるとかそんなこんなで色々あるからちよつと遠慮する。」

早口で捲し上げて部屋を出る。廊下をしばらく歩いた所でスマホを忘れたことを思い出し、来た道をもどる。

「はあ。勇気が変な事言うから焦って出てちまったじゃねえか……。無理がある。妹と一緒に寝るとか危険臭しかしねえ……」

この歳になってまで一緒に寝るのはプライドが許さないのだ。確かに大きくなった木綿季に興味が無い訳では無いが、そんな目では見れないし見たくない。

「木綿季は妹なんだから……」

木綿季は友達と関わってこなかったからそんな話も聞かないし、知識もつけていないだろう。警戒心が足りないし天然じゃないのに恥じらいが足りないところがある。反抗期が来ていないのは頼れるのは俺とランねえしか居ないからってどこか……

「と……とん人生狂ってんな……」

考えれば考えるほど腹立たしくなっていく。今まで押えていた分が今にも爆発しそうだ。木綿季を虐めていたやつ。それを見て見ぬふりをしている先生。教育委員会。地域の人に社会。全てが憎くなる。そいつらのせいで木綿季の病気の進行は早くなり寿命が縮む。あいつらは木綿季の首を締めているのだ。

「許さねえからな。こんなクソツタレな世界……俺が助けてやるよ。抗ってやる。木綿季が知ろうが知らまいが関係ない。俺は俺のやり方で木綿季を助ける。誰にも文句は言わせない。」

「……… つたく、世話がやけるな………」

なにか声が聞こえた気がした。それは懐かしい声だった気がしたが、ぼんやりしてて今ではもう声も思い出せない。

「はは…… まあいいか…… 待ってるよ。お前らは木綿季の人生をめちやくちやに  
したんだ。逆にされてもしょうが無いやな？」

そう誰もいない廊下でつぶやく拓の顔はかつて無いほどに歪み、憎悪を浮かべてい  
た。

「飯野 咲」

「はい。」

「今野川 太陽」

「うーすっ！」

ここは小中高一貫学校。来るのはこれで2ヶ月ぶりになる。前の定期テストに出た  
時以来、来ていない。勿論結果は惨敗。見事に赤ペケがいっぱいだった。

「今川 隼人」

「おーす」

「紺野 拓…… は居ないか……」

勝手に結論つけてこのまま流そうとしたので俺は驚かしてやろうと後ろを取り耳元



で…………

「居るよ？先生…………」

「うおッ！紺野?!」

「プククッ…………」

おい、隼人。笑っちゃうのはわかるけど我慢はしてやれよ。そして先生も驚きすぎだ。俺、影薄いキャラじゃないんだからよ。

「つて事で出席も知らせたし、俺は妹見に行くんで…………」

「え？あ、は？お、おい待て！」

なんか言ってるけど聞こえないふり。第1今日をもつて多分俺はシスコンやら、ストーカーやら、変態やら。まあ色々なあだ名が着けられるだろう。まあもう学校来ないからいいんだけど………… 必要なら高校卒業試験受けに行けばいいし…………

「つて事で木綿季の教室は…………」

ん？あんな所に黒板消しが…………

「あ………… 成程。ほんとにベタだな。芸がない。いや、芸を求めても意味無いけど…………」

不意にガララと音がなりドアが開く。その上にセットしてあった黒板消しは当然下に落ち頭に当たりそうになる。

「つと……危ねえな……」

「拓……にい？」

そこに居たのは木綿季だった。四苦八苦この物は木綿季を狙ったものだろう。上から受け止めて助けたのは運が良かった。

「少し、粉が髪に着いたな。大丈夫か？」

そう声をかけると家の元気さはなく静かになつた。学校ではずっとそうなのかと無理やり納得しながら頭を撫でる。

「この時間だとHRが終わった頃か……」

「うん……ありがとう。」

そう言つて俺の前からいなくなる。これは結構やられてるなと思いつつもその姿を見るだけしかできなかった。つくづく自分のことしか考えられていなかったということが身に染みてわかつたのだ。

「わかつてたことだけ……辛いなあ……」

教室の奥には舌打ちをする女子にオドオドする男子。その他取り巻きといかにも見方がいなさそうな構成だ。気が滅入るのもわかる。木綿季の後を追う女をつけながらそう独りごちる。

「あら……トイレ……どうしようかなあ……」

女子トイレに入る度胸はないが、木綿季が耐えきれなくなつて入つたことはほぼ確定だろう。

「つたく……………最悪俺、犯罪者かもな……………」

そう呟いて歩を進めた。

「この水上からかけたらどんな顔するかな?」「あの病原菌、洗淨した方がいいもんな?」  
クラスの女子たちが外で話し合っている。こうなつたらもう無理だ。四苦八苦上から水が降ってくる。その度にびしょびしょになりながら教室に行つて先生には見て見ないふりをされる。もううんざりだと何度も思ったが一向にいじめは収まらずにむしろエスカレートしていく。

「ほら行くぞー」「はい!のさんー、のにー、の……………」

あ……………今日も心配させないように拓にいが帰つてくるまでに着替えとかなければ。悩みを話したと言え、心配をさせたくないのは変わらないのだ。

「ツ……………な、なんでこんな所に男子が入つてくんだよ?!」

いじめっ子の声音が変わった。焦る様な、嫌がるような。遂に男子にさえいじめられるのか。ボクが……… ボクが何をしたって言うんだよ………

「ん？あゝ……… こっちの校舎久しぶりだから忘れちった……… ここ、女子トイレ？ってかお前ら何やってんの？」

「ツ……… で、出てけよ！先生呼ぶぞ?!」「き、キモイんですけど!」「そ、そのネクタイ先輩ですよ？後輩のトイレ見ようとしてたんですか？警察呼びますよ？」

酷い言いようだ。でも助かった。これで私が外に出ていけば水をかけられないで済む。

「ふむ……… 中に入っている子に水をかけようとしてた事を伝えてもいいならだけど。ほら、これ写真。正直、この学校退学になつても親の伝つ手あるからこまんないんだよね。」

耐えられなくなった。ここまでかばい立てされて相手がボクだとわかった途端に態度を変えられるのを何度も見てきた。でも、でもだ。こんな希望を毎回持つてしまう。今度こそはと。

ボタンツとドアを開ける。目の前にはいつものいじめっ子3人組と1人の赤いネクタイをした先輩が立っていた。その先輩は見覚えがあつて……… 不意に口から名前が飛び出でる。

「はや……と、先輩？」

「ん？あゝ……確か拓んとこの妹だったか？」

目の前にいたのは今川隼人その人だった。昔、拓にいとボクとこの人とでいっぱい遊んだ覚えがある。色々とツツコミどころはあるが、とりあえずお礼は言わなきゃ行けない。

「えつと……あ、ありが「いじめはダメだぞおー!!!」え……？」

入ってきたのは拓にいだった。随分と遅い登場である。色々と突っ込みたい気持ちを抑えながら疑問を口にする。

「えつと……先輩たちの間で後輩の女子トイレにはいるの流行ってるの？」

「いや……そんなわけではないじゃん。」

まさかのハモリでツツコミ入れられた。突っ込みたいのはこっちなんだけど。と言うか、なんで拓にいは来たの？まるで意味の無い登場じゃん。と言うか、流れるになんで隼人先輩が拓にいよりも早く来ちゃってるの？

「えつと……隼人？これってもう解決した？」

「ん？ああ。お礼言ってくれてもいいんだぜ？」

「いや、結構ガチめにありがとう。」

調子が狂ったように「お、おう」と返す隼人先輩。ずっと置いてきぼりのいじめっ子

たちと言うと勢いに押され何も発言できなくなっていた。

「はあ?! 女子トイレに男子が二人入っていった?！」

女性の先生の声が聞こえた。余りの怖さに身をすくめてしまう。先輩たちとは言う  
と……

「あ、やべっ……」

「木綿季は置いてつたらまた此奴らがいじめるし…… あ、そうだ。ちよい木綿季、勘弁な。」

「キャッ!」

そう拓にいが言うなり自分の体が90度回転する。所謂お姫様抱っこだ。そしてそのまま窓の外へダイブ。思わず拓にいの首にしがみついてしまう。1階なので大した高さは無いが、多少の衝撃は来る。

「ははっ! いやあやばかった!」

「久々にやんちゃしたなあ〜おい拓。このままサボっちまおうぜ?」

「そうしたいんだけどよ? あおいじめっ子らへなきやなんだわ。木綿季のことだから手を抜きたくないし今日はサボンねえ。」

「はあ…… お前妹のことになると容赦ねえよな。やりすぎんなよ?」

「保証は出来ねえな。」

当事者であるボクにとつてはこの話を聞くだけで気恥しいものがある。

「この場合だとあれだ。退学とか？」

「まあ、暴力じゃないならいいか………それだけの事をしてきた訳だし。」

「後、見逃してた教師は全員ぶん殴る。後でさっきの写真、くれ。」

「結局殴んのかよっ！」

「ぶっ………あははっ！」

やり取りがあまりにも昔と同じで笑ってしまった。あまりにも変わらない関係性に安心した。最近暗くなっていた拓にいつも明るくなり、元通り。これほど嬉しいことは無い。

「やっとなめた。っと。もう歩けるか？さっきの窓。もう多分誰もいないからそこから入るぞっ。」

「体育館の非常口開けといたんだ。そこから入ろうぜ。」

拓にいがそう提案すると「お前、天才か？」という表情で見る隼人。悪知恵が働くのは昔から変わってないようだ。

「あ、今日。全校集会あるんだっけか？」

「ん？あ………そんな話もあったな。まあ俺は寝るけど。」

「隼人先輩………」

いきなり指を指された。指を向けている本人の隼人は少し不満顔で抗議した。

「それ、昔みたいに呼んでくんないの？」

「……………でも……………」

「へえ…………… 恥ずかしいと……………？ふーん？」

挑発される。元来の性格が負けず嫌いなだけありこの挑発に乗らない手はなかった。

「は、隼人」

「よしよしよしー！」

頭を撫でられる。昔みたいに優しく。拓にいよりもゴツイ手だけど柔らかく。痛み物を扱うかのように。

「お前…………… 木綿季のこと好きなの？」

「…………… はあ？」

心底心外だという顔で言われてしまった。お前何言ってるんだ？と言うように。

「お前、俺が年上好きな知ってるんだろ？」

「知ってるよ。恋愛対象が高3からなのもな。」

「よくわかってんじやねえか。」

そんな会話が交わされた。実際。隼人のことはどうとも思っていないただの友達だ。お互いそんな目で見ていないし見ない事をわかっている。だから木綿季が隼人に惚れ



るとか、隼人が木綿季に惚れるとか微塵もない。あくまで幼なじみで一緒に昔から遊んでいたからこのスキンシップが当たり前化しただけなのだ。最初、よそよそしかつたのは虐められててそれどころじゃないのもある。そんな話をしながらそれぞれの教室に戻っていった。

そんなこんなで俺と隼人で木綿季を守り続けて昼休み。なんだかんだで重労働だった。

「取り敢えず、これで、証拠は集まったな。」

「うへえ……… よくこんなな一日で虐めれるな。ざつと5回超えてるじゃねえか。」

「え………？」

驚いたようなか細い声を上げたのは木綿季だった。知らないという事は………

「朝のうちにこんなになつたのは俺のせいもあるだろうな。でもだ。木綿季。お前にも味方はいたんだよ。」

多分そういうことだ。表立って助けるのは怖くて出来ないからできる限り裏で守っている存在が居るといふ事だろう。それを木綿季に伝えると俯いてしまった。

「……………ありがとう…………… お兄ちゃん。」

「おう。俺もだけど隼人と出来れば助けてくれたやつにも言っというてやれ。後は…………… 6時限目まで耐えてそこから勝負だな。」

覚悟はもうできている。言葉も考えてきた。表立って俺が手を下すのが悪手と言われても俺は納得できない。だったらズバツと言ってスカツとした上にいじめの主犯格と見逃してた教師が居なくなれば後腐れがないんじゃないかと。俺がやったって事が分かれれば抑止力にもなる。だからと言って俺を退学にすると評判が落ちる。

「後は…………… 耐えるだけ…………… わかった。」

「まあまだ証拠集めはやめないから昼休み前まではやろう。その後パソコンでスライド制作だ。機材の手回しは隼人に頼んであるし問題ないだろう。」

それよりもだ。それよりも今は守ることだけを考えなければ。失敗しつぱなしだ。ど今のところ木綿季に被害は来ていない。この調子だ。

「辛かったら泣きついて来い。慰めてやつから。」

「な、泣かないよ！」

「ハハッ、その調子だ。いいか？絶対助けてやるからな。これが終わっても辛いなら学校辞めてもいい。俺が養ってやる。だから遠慮なく言え。頼るための兄なんだからな。」

「うん。」

表情を見るに覚悟が決まった感じだな。大丈夫か……よし。

「ほら、帰った帰った。影で見てやるからこつてり虐められてこい！」

「なっ……意地が悪いよ？ 拓にいい。」

俺の冗談も通じるくらい回復したみたいだし、あともう少しは大丈夫だろう。この作戦が上手く行けばこのまま俺らに利益しかない状態でおわれる。万々歳だ。

「……さすがに今のは俺でも引いたわ。寄りにもよつていじめられて来いってなんだよ。」

「なに、ちよつとした確認だ。つて事で監視続けるぞ？」

「は？ お、俺もやんの？」

「何言つてんだ？ 当たり前だろ。巻き込んでやる。ほら、双眼鏡。」

「こんな何に使うんだよとか言いながら俺に着いてきてくれるあたりやつぱり優しい。」

「（今度見返りはするから……）」

と小声で言つてやった。案の定聞こえなかったみたいであ聞き返してくるが、俺はそれを無視。影ながら木綿季を見張っている。

余談だが、この行動のせいで俺は『中等部の後者を徘徊するやばい先輩』という名が

広まったらしい。なんで隼人は噂が立てられないのかが疑問だ。

そんなこんながあり、監視が終わった。昼休みになったのだ。案の定あれからも虐めは一向に止まず、その度に俺と隼人が止めに入っていた。

「うん。こんなもんでいいだろ。隼人には護衛について貰ってるし、俺が1人パソコン室でスライド作ってるなんて先公も思っただろうしな。」

そう独りごちていたら不意に扉が開く音がする。誰かが入ってきたのだ。

「(やべっ)」

ないとはいっていたが先生が俺の事かぎつけたのだろうか？そんな疑問が頭の中に浮かぶが、あいにく考えている時間はない。急いで机の下に隠れやり過ごすことを決める…………… 決めたのだが……………

「ここに拓にいは居るの？」

「つて言ってたんだけどな…………… あ、パソコンの電源ついてんじゃん。」

強ばっていた体が一気に緩む。入ってきたのは木綿季と隼人だったのだ。

「つたく、ビビったろ。先生が入ってきたのかと思ったわ。」

「お、いたいた。どうだ？進捗具合は。」

悪びれもなくその事に触れずに話題を変える度胸は少し認めてやってもいいかもしれない。見習いたくはないが……：

「まあ、出来っちゃ、出来た。後は木綿季がこの内容で大丈夫かって事だな。木綿季にとつちや自分がいじめられてる姿を全校に知らせるってことになるんだ。ここまでやってきた俺が言うのもなんだけど嫌なら言ってくれていいぞ？」

「ううん。大丈夫。覚悟はしたよ。」

ほんとに強い子だ。恐れはしているだろう。怖いと思う。これからのことに不安になつているのもわかる。でも変わりたいって覚悟を持つのは並大抵じゃできない。強引な形になったが、改めて兄としてできることはしてやろうと思う。

「よし。後は周回で乱入するだけだ。機材の運び役。頼んだぞ？隼人。」

「ああ。乗りかかった船だ。任せとけ。」

ほんとに心強い。良い友達を俺は持ったみたいだ。これで準備は出来た。チャンスは今日しかない。必ず成功させる。

『……………であるからして、今学期は今一度自信を見直し……………』

長い校長の話が終わる頃には俺は寝そうになっていた。心の中ではうつろな意識の中目の前の大人に対しての恨み言が沢山。末期だ。

——長えし、喋り方うぜえし、乱入する隙がないしでもう限界なんだが？と云うか、この話に興味あんのか？聞いてるやつ居ねえだろ。こんなの。——

……………もう一度言おう。末期だ。

『……………という事で長くなったが私からは以上だ。』

やっと終わった。15分に渡る熱弁。流石に舌が乾いたのか横に着席しては水を飲んでる。やるんなら今しかない。

『……………』

無言で隼人と目線のやり取りをする。すると隼人は分け目も振らず走り出し、体育館の出口へ。俺はそれと同時に立ち上がり、校長席のマイクをかつぱらう。

「な、なんだね！君は！」

「ちよいと借りますよ。校長先生さん？」

何やらわめきたてる先生と校長を無視して壇上へ上がる。生徒は混乱するもの。隣とヒソヒソ声で話すもの。色々居たがこの際、皆が起きていれればいい。

『あーあー…… マイクの調子はいいな。無駄に長い話で飽きてきた頃だと思ふ。そこでせつかくだから俺の無駄話に付き合ってもらおう。』

そう言つてマイクをスタンドにつける。その際、ボンツとノイズが走るが俺は気にしないで話を続ける。

『つとその前にひとつ言いたいことがある。無能共にだ。』

— そう言つて俺は先生がたむろしている一角に視線を向ける。真つ先に俺を止めようと壇上へ上がってきた担任が俺の肩を掴んで来たタイミングで言つてやった。

『お前ら。俺達が子供だと思つて舐めてたろ？最近では校内の治安がいいもんな？こんな事起きるとは思わなかつたんだろ？でもな。そんなお前らに言つてやる。いつまでも逃げられると思うなよ？』

— ここまでヘイトを集めるのにも理由があつた。隼人を追わせないためだ。比較的近くにノートPCとプロジェクターを隠してきたとはいへ、追われて止められれば説得力はなくなりこの作戦は水の泡だ。

『俺がこの場で言いたいのは一つだけだ。至極簡単。察しがついてるやつもいると思う。問題の中等部の件だ。』

幾人かの教師の息を飲む音が静けさに満ちた体育館に響いた。

『ふう……… 知つての通り、俺は不登校生徒だ。単位もろくに取つてないし、正直こんな学校なら自主退学、強制退学も屁でもない。だから誰も言えないことをなんのリスクもない俺が言つてやろう。』

このタイミングで隼人が機材を持つて壇上へ上がった。それを見た教師が三人がかりで捕まえようとするが俺の声に行動を止めた。

『生徒に暴力を振るつた。教育委員会にそう報告する。証拠もこうして撮つたしな。』  
そうして隠していたスマホをみなに見えるように掲げる。

『お、お前たちが周回中に妙なことを始めるからだ！そもそも学校内でのスマホ使用は没収だぞ?!』

『へえ……… やつてみればいいじゃん。皆が甘んじて受けてきた罰だよな。それが正当なら俺もそれに応じよう。』

『そ、それならッ!』

『正当なら……… な?』

言つてる意味が分からないとでも言いたげに担任は俺の顔を凝視する。今までの俺



の発言から下手なことは出来ないかと悟っているからだろう。だから俺の発言を待っている。

『俺だつて詳しくは知らない。でも、盗難？盗み？強制？どれが日本の法律に当てはまるんだろうな？』

「そ、そんなことほかの学校もなつてることだろ?!」

まあ、そうだよな。でも違うんだよ。違う。こんなことで時間を使つてつもりは無いかから手短に済ませよう。

『それで罪にならないのは生徒の方も没収されることに同意してるからだ。学校卒業して学校に勤務。何処のアニメとは言わないが、到底社会なんて経験してないからそんな甘つちよろいこと言えるんだろ。時間の無駄だ。失せろ。』

ズバツと切る。これでまだ反論してくるなら本当に腐つてゐることだ。そんな相手に説得するつもりもないしそこまで優しいつもりもない。

『……話がそれた。機材の準備が出来たみたいだからこれを見てほしい。』

体育館のステージ奥の壁に映つたのは1人の女子の靴がゴミ箱に捨ててあるところだった。名前もバツチリ写っている。

『あ、自己紹介が遅れたな。滅多に学校に来ないから俺のことを知らないやつもいるだろう。初めまして。あるいは久しぶり？紺野 拓と言います。まあ言つてしまえば

この上履きの持ち主。紺野 木綿季の兄だ。』

いじめっ子の主犯格はこちらを睨んでいる。取り巻きは顔面を蒼白にしてこちらを焦点のあっていない目でこちらを見て来る。今までのつけだ。それを見ながら楽しませてもらうか。

『ぶっちゃけ、この期に及んで学校に顔を出したのはこれをする為。学校の汚物を消毒するためだ。偉いだろ？俺。』

そのジョークは全くウケなかった。空気が重い。だがそれでいい。ウケてもらっちゃ、俺の理性が耐えられない。

『まあ次行こうか？』

次に映ったのは例の黒板消し。そして今回は動画を撮っていたためそれを切り取ってこまどりの写真にしてみた。写っているシーンは黒板消しがセットされているシーン。落ちてくるシーン。その一連が終わって笑ってみている3人組。この3枚。

『これはこのままだな。見てくれればわかる通り、虐め……だよな？これ。黒板消しの罨なんていつの時代だよ。頭悪いと思えない。』

もう誰も一言も声を発しない。当たり前だ。これ以上ないくらいの証拠を今、全校生徒に見せているんだ。どんなに学校が裏で手を回したとしても隠し通せるものではない。もうほぼこちらの勝ちは確定した。

『陰湿だ。やられて嫌なことはしないって言われなかったのか？ 親に教えてもらわなかったんならお前から少年院入ってその中で勉強し直してこい。』

誰かの歯ぎしりが聞こえる。まあ主犯格の奴らだろうけど。

『でも、その中でも誰かは分からなかったが、木綿季のことを助けてくれていた人が居たみたいだ。その人には感謝を。』

そしてここからが勝負どころだ。ここで間違えればまた木綿季に敵が増える。

『……………そして次。』

冷や汗が頬を伝う。映ったのはひとつの記事だ。題名は……………

ーエイズの感染実験。ー

『……………知ってるやつもいるだろうが、紺野家は両親に長女。そして俺の妹がエイズに感染してその内の2人が命を落としている。1人はもう末期で回復の手立てが骨髄移植しかない状態だ。』

不安を拭う。木綿季のエイズが感染しないと分かれば味方が増えるかもという諸刃の剣。失敗すれば学校は愚か、街にも居れなくなるだろう。

『この記事を見てくれるとわかる通り、この実験で空気感染、接触及び飛沫。血液や、体液を摂取しなければ感染のリスクはないと結論づけられている。汗や、唾液。それらにもリスクはない。第一リスクがあるなら俺はとつくに感染してる。』

後は学校の授業でやっただろうと説明を端折る。この話をする上で決して気持ちいいものではないからだ。それでも効果はあったみたいで敵意より、道場の目を木綿季に向けるものは少なくなかった。

『ふう……… 回りくどいことは言わない。どンドン行こう。』

疲れた舌を少し休ませ、いくばかトーンを落として話す。出てきた内容は、上から本を落とす。トイレで水をかける。といったものから、殴る、蹴るといった惨いものまで。色々な証拠を計7個提示された。どれもこれもあの3人がやった事だった。

『まあまだまだあるがこれで俺の掴んだ証拠は以上かな。一日でこんななんだ。俺らが護衛してない時なんてもっとやられることだってあっただろう。』

ざわめきが多くなっていく。いじめっ子たちには事情を知らなかった子から距離を取られ、知っていた子からは責めるような目で見られていた。

『さてと。こんな頻度でいじめが横行してて教師たちが誰も知らなかった……… とか言わないよな？ 一日で7回だぞ？ 1回は見た事があるだろう。』

そういうと1人の教師が口を開く。

「つ、追求して酷くなったらダメだと思って………」

『ダメだ……… ねえ？ 仮にも100歩譲ってその気があったとしよう。でもそれでどうなった？』

それだけ言うともう何も言えなくなったのか、黙り込んでしまった。

『はあ……… 黙ったままだな。もう俺から言うことはひとつ。今後こんなことがあったら教育委員会に報告。必要なら裁判。SNSに投稿してわざと炎上させるからな。分かったら解散。言いたいことはもう言った。後は無能どうし仲良く話しあつて決めろ。』

そう言つてパソコンからUSBメモリを取り外し、機器をそのままにして体育館を後にする。その際、ちゃんと木綿季を回収することは忘れない。あの中においても気まずいだけだろうからな。

そうやつて濃い一日は幕を閉じた。

## 後日談

「拓にい！ありがとう！学校で友達ができたんだ！」

家に帰り…… もとい、早退して早く帰ってきたことをいいことにリビングでゆっくりしていたらいきなりドアが開き、一言目に木綿季がそう言った。

「おー！それは良かったな！ちなみにそれは男子？女子？」

「ここは大事だ。そうとでも言いたげな真剣な表情になる。」

「男子！」

「よし、ちよつと殴り込み行ってくるわ。」

「あんなに男らしいことをした拓はちつとも変わることがなく、逆に悪い方……つ  
まり、以前よりもシスコンが極まつたらしい……」

《αテストクリア編》

空が灰色だ。あの向こうには今は無い次の層があるのだろう。第二階層。行つてみたい気もするが目的は1層のフロアボス討伐。こんな短時間でできるゲームバランスじゃない。と言うか、大勢で挑むものを1人というのが無茶だ。

「考えてみたら無理難題……… だよなあ。なんで引き受けたんだろ。」

「おはよう……… お父さん。」

ユキが寢室から起きてきた。物理演算やらモデル処理。全てが現実と遜色がない。現実世界が作ったもう1つの世界。その中に生きる者がいる。

「おはよう。前の件は助かった。ありがとう。」

「別に、いい。結局出番……なかったし……」

その様子から役に立ちたかったという気持ちがひしひしと伝わってきて思わず頭を撫でてしまう。

「んう……お父さん？」

この声にも慣れてしまった。別にいやらしいことをしているわけじゃないから動揺する理由がないでも思春期の男児にとって容姿が年下でも、来るものは来るのだ……これ以上はよそうか。

「あそこまで大胆に手を打てたのはユキがバックアップしてくれたからだよ？それにまだ無事って決まったわけじゃないんだから。」

「……ん。」

微妙に納得していなさそうだがこれ以上色々と言うと逆効果になりそうなので何も言わない。

「さてと……あと2日。頑張りますか……」

「1日で迷宮区攻略、2日目でボス討伐。」

..... え？あのバカ広い迷宮区を1人で？

「..... 客観的に聞くと結構無茶だな。これ。」

「ペースが、遅かった。ばか父さん。」

俺への呼び方がワンランク下がった今日この頃。反抗期が来たことに喜ぶべきか、悲しむべきか.....

「17歳で娘について悩むお父さんの気持ちが分かる..... 犯罪臭やばいな?！」

「..... 何となく考えてる事、わかる。けど反抗期とかじゃ無い。」

「へ、へえ.....」

さすがメンタルヘルス役。相手の気持ちを読むのもお手の物ってことか..... え  
?怖.....

「お父さんのことは好きだし、この世界でしか会えないの、悲しい..... けど。」

「お、おう?！」

え?何?これ俺の羞恥回ですか?俺何かした?嬉し泣きするよ?俺。と言うか、これはこれでいいと思っちゃうあたり俺はもうダメかもしれない。

「けど、お父さん。調子乗る..... から。上手くいくとすぐ死ぬ。」

「うぐつ..... 攻撃的じゃない?今日。」

「そんな事ない。」



「さいですか。最近ユキの喋りが流暢になってきた気がする。と言うか遠慮がない。まあ、いいこと？なんだろうけどさ。」

「よし、茅場にユキは死なない設定にしてもらったし早速行くか。」

そう。俺がさすがに1人で攻略つて言うのは辛いと言ったら相手の攻撃パターンの分析ができるユキを《ノンブレイクオブジェクト》として設定してくれた。その際、製品版は名前を改めると言っていたが……まあ今は関係ないだろう。

「あたり……前。来るなって言われても、着いていく。」

ある程度は守るが、守ると言っても守りきれないってこともあるだろう。そのための保険だ。死なない。ただそれだけでどれだけ気が楽か。

「迷宮区……よし。行くか。」

「オラッ！」

「……掛け声、ダサイ。」

ほんとに遠慮なくなつたな。まあいいんだけど。これくらいがちようどいい。

「お父さん、ごめん……………」

だんまりを怒ったと勘違いしたのか謝って来る。頭を撫でて違うと否定しておき、不安げな顔が無くなるまで撫でる…………… ことは出来なかった。

「…………… ツお父さん！後ろ！」

「ツ?!…………… 愛娘とのやり取りを邪魔するのはいい趣味じゃないな……………」

「まな…………… むすめ……………」

レベル差により、迷宮区のモンスターを一撃で屠る俺の後ろで何かを呟いているユキ。嫌われたくないので追求はしない。最近反抗期に入ったみたいだから。

「お父さん、おんぶ。ここら辺なら大丈夫そう…………… だから。」

「ん？ハイハイ…………… って、え?!嫌じゃないの?!」

「…………… ん。」

…………… 秒で反抗期が終わった。あれえ…………… こんな早く終わるものだったっけ？

あ、でもこんなこと言って俺が素直におんぶしようものなら

「でも、お父さんの背中臭い！とかい気持ち悪い！とか……………」

言われるかもしれない。

「…………… んー！」

有無を言わせない勢いで俺に両腕を差し出して来る。勢いに負け、今回は折れること

にした。

「ん〜……………ここはどっち行けばいい？」

「こつち。」

ユキが指示をしながら進む。元から完成されているマップを覗けるユキにとって、迷路なんてあつてないようなもの。ボス戦に役立ちそうなものだけ回収して、それ以外は無視していく。

「次、右はポーション。真っ直ぐで次の迷路。」

「ポーション取りに行こう。」

「……………物好き……………」

こんな感じ。正直、公式チートだ。無駄なく進んでいけば最速迷宮攻略になるって言う事もあるのか？最後に呟いたユキの言葉に疑問を持ちながら通路を進もうとする。

「ん……………降りる。」

そう言つていそいそと俺の背中から降りていく。何か俺の背中に不備があつたのだろうか？……………やばい。奴隷根性になりつつあることに危機感が……………

「こつち。」

「え？あ、ああ……………わかった。」

ごめんなさい。何も分かつてないです。嫌いになった？あ、反抗期？終わつてなかつ

た的な？ああ…… ツライ

「ん。ハイ……」

ユキが指を指していたルームに入ると真ん中に宝箱が一つだけ。それ以外は何も無かった。

「……ユキ、罨は？」

「ない。あれと、あれとあとは……」

3つ並んでいる宝箱を指さしてから言葉を切り壁へ向かって行ってしまった。ダメージはすべて無効化されているから大丈夫だろうけどまだ反射的に手を目の前に出して止めようとしてしまう。

「ツ……ダメだな。束縛って言うのは案外、俺とは切っても離れないらしい……」

この場合束縛というのは語弊があるが、心配だから俺から離れるな。と言うのは過保護だろう。

「あ……はあ。宝箱開けるか……」

人きしり唸ってから溜息をつき頭をガリガリと搔く。まるで何かを我慢している子供のようにだった。

「こっちはハズレか……ポーション、ポーションは……こっちもハズレ……」

残る宝箱の数は1。四苦八苦この中にポジションが入っているのだろう。本来感じるはずの攻略する面白さが無いため実感がないが此処はもうボス部屋の近くだ。ボス戦の準備段階としてこのアイテムたちを設置したのかも知れない。

「まあ、どつちでもいいけどな……………」

恐れもせずに箱に手をかけ開けてみる。すると中に入っていたのは……………

「……………え？」

中に入っていたのは小さく縮こまったユキだった。

「……………え？」

理解が出来なかった。なんでここに？とか、2人目のユキなのか？とか色んな疑問が頭の中に渦巻く能登は裏腹に体は1ミリも動いてくれない。それほどに衝撃は強かったのだ。

「……………やっと、来た。」

「ツ……………ゆ、ユキ……………その姿って……………」

そう。服装は変わらないもののおしりには獣の尻尾が着いていた。だが耳はない。なんとも言えないアンバランスが逆にユキを立たせていた。

「ん………これ、ポーションの効果。」

「あ、あく……身体能力上がる的な？」

こくんと頷くユキを見て思考の海に沈む。

——これは茅場の趣味か？いやでも、そんな趣味を持つているようには……。と言うか、そもそもこれはどの身体能力が上がるのだろうか？何故、ユキが宝箱の中に居た？箱の中に転移したならなにかの音は外に漏れていいはずだ。いや、防音か？どっちみち、目の前のユキは本物だ。当たり前のように俺と会話しているのもあるが、仕草の一つ一つが同じ。新種のミミックって訳でも無さそうだ。——

「これで……私も戦える。」

「つ………あく……よし。腹括った。」

そう言うってから頭を撫でてやる。背中を任せるであろう娘のを気遣うということは案外恥ずかしいことだった。

「危険なことはするなよ？一撃でもくらったら無理やりにも後ろにさがらせるからな。」

そう約束させる。親子だから最低限の躰は必要だ。特に最近になってやっと俺ら人

間の気持ちを理解してきたところなのだ。これ以上ないタイミングなのは間違いない。そうこうしてる内に時間はすぎていき、あつという間にモンスターとエンカウントしてしまった。

「……………目の前にコボルトだ。」

「ん。行く……………」

そういうなり止める暇もなく、駆け出して行った。というか、控えめに言っただけすぎる。移動スピードがありえないくらいに早い。

「……………ユキ、久々のレポート報告。そのポジション、1層にしては効果が高すぎ。」  
「ん、わかった。」

早々に殴るやら蹴るやらでコボルト達を片付けたユキにそう言ってやる。武器を使わずに殴打一撃だけで沈むとかいくらなんでもやりすぎだろう。カンストしている俺でも二撃だと思う。やった事ないけど。

「……………ユキ、フード被ってみて？」

「?……………ん。」

そこには猫耳が追加されたみたいにフードの耳部分がベストマッチしているユキの姿があった。

「……………どう、したの？」

「可愛い……………」

気がつけば口から出ていた言葉。愛娘に向ける最大の褒め言葉。親バカならもつと褒め称えるだろうが、俺は娘に嫌われてまでそれをする勇氣はない。

「ん。行(こ)？」

反抗期疑惑があるから反論して来るかと思つたが以外にもしてこなかった。頬を赤く染めたユキがやけに可愛く見えたのはここだけの内緒だ。

案の定、あの後すぐの所にボス部屋があつた。俺の勘つて結構馬鹿にできないのかもしれない。まあ、それはともかく相変わらず戦闘は上手くならない。まるで成長していない。ユキに聞くと言葉をにこらせるし多分 P プレイヤースキル Sは上がつてないのだろう。カンストした俺からしたら戦闘ではもうこのゲームを楽しめ無さそうだ。

「なんだかなあ……………」

先行するユキの背中にピッタリとくっついて護衛する。ユキも今なら戦えるので完全に気休めだが。



「ん……その先に2体。」

「……………了解。」

強い相手が来ないのをいいことに油断していた。それが行けなかったのだろう。上から技術もなんもなくただ叩きつけるだけの動作。もちろんステータス補正があるとはいえ、当然攻撃速度は遅い。

「なッ……………くそっ！」

次は横なぎ。ブオンと鈍い風切り音がなる。空気の抵抗ですこし斜めで繰り出された刀身は案の定起動をブレさせる。それでもお構い無しに振り切ると又よけられてしまった。

目の前にいるのはハチ型のモンスター。でも大きさがおかしい。大きいのだ。サイズ感で言うとお動物ぐらいだろう。猫とか小型犬とか。

「なんで当たんねえんだよッ！」

「ッ！」

無音の気合を入れたかのような鋭い音と共にユキがすぐ側を通り過ぎ、手に生えた爪で傷を与えていく。

「……………」

俺はそれを黙って見ているしかなかった。心の中では悔しいのか、羨ましいのか、嬉

しいのかよくわからなくなっていた。

「…………… ツーうおおおおおおああああ!!!」

気が付けば体が動いていた。どこに向けているかも分からない黒い怒りに任せて。切り刻む。音を聞きつけて来たモンスター諸共。ユキ以外の全てを蹂躪した。動きの清廉さ等そこには欠片もなくただ荒々しく剣を振り回すだけの姿がそこにはあった。

「ツ…………… お父さん!!!」

それを停めてくれたのは他ならぬユキだった。その強化された素早さを生かし後ろから抱きついてくる。

「落ち着いて!」

「ツ……………」

何も言えなかった。劣等感を娘に感じてそのどうしようもない怒りをモンスターにぶつけていたことに気がついたからだ。どうしようもなくそのダサイ行動を思い出し、数秒前の自分を恥じる。

「ツ…………… くそ……………」

「お父さん、今は落ち着いているように見えてずっと心が不安定だったのは知ってる。」

今までにないくらいスラスラとユキの口から音が出てくる。今までのたどたどしい口調はなんだったんだと思うようにくらくらいに。

「大丈夫…… 大丈夫だから。」

「ッ……」

ユキと出会ってからずっと俺はダサイところしか見せてない気がした。みつともなく取り乱し、ユキを悲しませ、自分を偽り、劣等感を感じて怒る。まるで成長していない。ワガママな子供のようなその行動に自分で辟易する。

「自分の望む姿……か。」

例えば目標があればこんな性格にはならなかったのだろうか？ 目指す先があれば自分のみつともなさを前面に出さないことが出来たのだろうか？

答えは返ってこない。当たり前だ。心の中で思っても言葉を返してくれる人はいないから……

「お父さんは、充分かつこいいよ。」

そう思っていたのに、返してくれた人がいた。人の心を読めるこの人は俺の心に寄り添って一番欲しい言葉をかけてくれる。ダメになりそうだった。このままユキに甘えていたら俺はダメ人間になるということを理解していたのだ。だから……

「…… もう大丈夫だ。ありがとう。」

もうすぐするのはやめようと思う。この弱い自分と決別するために。

俺がそう答えると俺の決意を読み取ったのか、いつも無表情の顔を動かし、微笑んで

くる。ユキは母性が強いのだろうか？包み込む力が半端じゃない。覚悟を守るには、甘やかさないように、引き込まれないようにする必要がある。骨が折れそうだ。

「よし立ち直った。ごめん。毎回迷惑かけて……………」

頬に1発活を入れ攻略を再開するように促す。

「ん……………行こう。」

ここからだろうか？数時間後、俺の精神が安定してきたからかユキの母性が薄まり、代わりに子供相応の表情、行動が目立つようになり微笑ましく思うことが多くなった。何度気を取られそうになっていたか分からない。普段よりは攻略スピードが下がっていることは自覚していた。色々な雑念を抱えながら最深部へと歩を進める。

「へえ……………？ここがボス部屋……………」

「ん……………扉、重そう。」

少しズレた返答をしてくるユキの頭を撫でながら俺は明日の対策を練るため少しだけ中に入ることを決意する。

「少しだけ見よう。大ききとか、形状から大体は想像がつく。」  
「ん……………」

俺と戦えるのが嬉しいのか満足気に頷くユキ。だが、俺的に本当は行かせたくない。それも当然だ。娘を心配しない親なんて居ないだろうしいたら頭おかしいとしか言いようがない。

「つたく……………よし、行くか。ユキは俺の後ろに居ろよ?で、見るだけだけど俺死んだら家まで走って逃げろ。」

「……………ん。了解。」

釘差しは済んだ。不死状態とはいえユキが攻撃を食らうと自分で自分のことを許せなくなるだろう。

ギギイ……………と甲高い音が聞こえ、少し隙間を開けて仲を覗き込む。中にいたのは……………

「ひ……………と?」

ユキが呆然としながら呟いている。上から覗いている俺の目にもただの人に見える……………いや、少し大きいだろうか?3メートル位だ。スーツを着ている。執事……………?

「……………クエストNPCか?」

「………… いや、ステータスは黒い。モンスター。」

人型のモンスター。それもカーソルが黒なら俺らよりも圧倒的に強いってことだ。

「………… か、てんのか？」

声がか細くなつて音が出ない。当たり前前の行動ができないほどの恐怖心。

「………… ユキ、逃げろ…………」

扉よりこつちには来ない。それは分かっている。そう出なきやゲームが成り立たないからだ。だけどアイツには常識が通用しない。本能が叫んでいる。逃げろと。

「かな、わない………… 逃げれ、無い。」

どうにも出来ない。これはどうしようも無い。あまりの圧倒的な存在感で死ぬ事を許容しそうになる。ユキを見捨てたくないのに気を抜けば足を後ろに向けてしまいうになる。

「………… これはこれは………… 皆さんお揃いで…………」

淡々と声を出すボスモンスター。羊の顔、着ているのは執事服というのだろうか？左腕にはタオルを下げ、自分の体の前に出している。その頭上に現れたカーソルは…………

「申し遅れました。私わたくし、イルファング・アルバトルイルファング・アルバトルと申します。以後お見知り置きを…………」

喋った。その事実には驚く余裕もない。この世界でかくはすの無い脂汗が全身からか  
ら出てくる感覚がある。今、現実世界の体は脈が早くなり、小刻みに震えているだろう。  
「お父……さん？」

俺の服を掴むユキは小刻みに震えていた。多分、俺の状態を訝しみ精神状況やら、バ  
イタル状態を見たのだろう。俺のありえないほどの恐怖心をもろに浴びて抵抗も虚し  
く伝播したに違いない。

「は、話ができる相手ではかつ……た。」

絞り出したのは心が籠っていない安堵の声だった。音は震えていたし、表情もとりつ  
くろえてなかっただろう。それを見ても笑みを絶やさずこちらを見ている得体の知れ  
ない相手を敵視するどころか、殺されるとまで思っている。はつきりいつて異常だっ  
た。

状況だけを見るとイタズラが執事に見つかって青ざめているシーンだろう。だが俺  
とコイツは敵同士、人とモンスターだ。相容れない関係。そして倒すことがクリア条  
件。

「……………また、戦いに来る。明日だ。それまで待つてくれ。」

ダメ元だった。こんな交渉なんて相手が受け入れるわけないとわかっていた。なの

に、なののだ。話せると言うだけで希望を持つてしまふのは悪いことだろうか？

「…………… ええ、勿論です。あなたの新たなる門出を私との戦いで彩る。なんと美しく、そして殊勝ことでしょうか……………」

うつとりした表情になり上を見上げる。その仕草は感情を必死に押し殺しているような我慢するような。そんなものだった。だが、唐突にこちらを視線を落とし、全てを見透かすような瞳に吸い込まれそうになる。

「…………… 明日、お待ちしています。この行事が終わる時には私はいないでしょう。あなたたちに倒されているだろうから。つぼみ達が咲く姿を見れないのは残念ですが……………」  
とやかく言つても詮無きことでしょう。」

靴底を鳴らしながらこちらに来るそれも、扉の透明な壁に阻まれてこちらまで来れなかった。でもそれを気にする様子もなくこちらを見てくる。

「いつまでも待ちますよ。この世界が終わりへと近づくのを防ぐのがカーディナル母に託された役目なのです。」

そう言うと同時に羊顔が歪な笑みに変わって行く。歪んだ感情が表に出ていくのが分かる。

「では、さきげんよう……………」

そういうなり、初期位置に戻っていくボス。近づかれてからただ黙って見ているしか



無かった俺はそつと扉を占めることしか出来なかった。

「あ……それが1階層のボス？」

はつきりいつて次元が違う。勝てる気がしない。見るだけで、敵意がない目を向けられるだけで萎縮して動けなくなる相手にどう勝つ。普通に考えて無理だ。

「…………… 1——さん」

「くそつ…………… 生まれよ震え……………」

「1——さん！おと1——さん!!!お父さん!!!」

何かが聞こえるが怯えている俺には何も聞こえないのと同じだった。頬に衝撃を受けるまでは。

パチーンと軽快な音になる。既にユキからは尻尾が見当たらない。強化時間が終わったようだ。不快な感覚が残る頬を打ったであろうユキの手を見るとかすかにダメージエフェクトが入っていた。味方には無敵化が効かないのだろう。

「…………… ユキ……………」

顔を見ると困ったような、心配しているような顔だった。ここまで表情が動くのは見た事がない。過去に色々と表情は動いたことがあったが、こんなにも全面に出すことは無かった。

「…………… 勝てる？」

「……かて……ない。」

「諦めるの?」

「……」

短いやり取り。ユキの表情が変わらない。だから、だからこそ悲しませたくなくて嘘をついてしまう。直ぐにバレてしまう嘘を。

「……いや、勝てる。あんなの雑魚だ。行けるさ」

さつきと反対の言葉。見事な程の掌返しだ。自分でも都合が良すぎて滑稽に感じる。それほどの下手くそな嘘。顔も怯えながら無理やり笑ったようなものになっているだろう。でも、それをユキは許してくれなかった。

「……強がりには要らない。お父さん、怖かったんでしょ?」

表情が良くなる所かより険しくなっている。何を間違えたのだろうか?分からない。全てが分からない。

「……」

認めれば良いのだろうか?そしたらユキは笑ってくれるだろうか?

「ああ、怖かった。足が震えたし、声もまともに出せなくなった。」

「……」

ユキはまた表情を険しくさせる。もう訳が分からなかった。

「お父さんは、私の事信用してない？」

「……………え？」

「私が、お父さんの娘になつてから私の顔色伺つてる。距離を感じて悲しい。」

ド直球に伝えてくる。耳の痛い話だった。自覚はあつたはずなのにいつの間にか後回しにしていた問題だ。

「……………す、すまなか「ほら、それ。私が何か注意とかしたら直ぐに謝つてくる。」……………」

もうユキの言いたいことを分からないフリするのは無理だ。当たり前のように顔を伺つてご機嫌取りしていると思われてもおかしくない。それどころか依存と言つていいほどに気にしてしまう。それは親愛だったり、スキンシップだったり。色んな形があつたがユキが不快だったのは行動や言動なのだろう。

「……………」

「人はね？ 苦しいから逃げるんじゃないんだよ？ 逃げるから苦しくなるの。お父さんは、今、精神的に参つてるでしょ？ 私はわかる。でも、それは私から嫌われたくないつて逃げから生まれたものなんだよ？」

たどたどしい口調はどこへやら。淡々と喋るユキの言っていることが途端に分からなくなつた。少しズレているような、自覚のないところで自分自身を追い詰めていたの

だろうか？

「…………… あく…………… そういう事か。」

考えた。そして理解した。なんとも不器用なユキらしい事だ。

「発破、掛けようとしてくれたんだな。途中まで事実を言っただけ最後が無理ありすぎだ。」

「…………… 楽に、なった？」

途端にユキの苦しそうな表情は柔らかく笑うものになり、緊張感が霧散する。

「ああ。でも、すぐ謝るのも自分が間違ってるって理解しているからだ。決して嫌われたくない訳じゃない。」

「嫌われ、たいの？」

「うぐつ…………… いや、容姿的には思春期なわけだし、反抗期ってことでお父さんのことを嫌いになるって言うことも…………… やばい、涙出てきた。」

クスツと、笑うユキを見ていると無性に頭を撫でたくなった。やっぱりこれは依存では無いのかもしれない。苦しいほどに愛おしいのだ。愛娘のことを考えるのが楽しくて仕方がないのだ。だからこれは依存ではない。家族愛が依存というのなら世の中の大半が依存者という事になるだろう。

「つてのは屁理屈か……………」

そう考えながらも帰路につく。明日の為に色々と用意する。それだけの事なのになぜ、こんなに奮い立たせてくれるのだろうか？ユキはクール小悪魔属性……いや、矛盾してるな。まあいい。とりあえず今は寝よう。

ユキが布団の中に入ってきたので快く中に入れてやる。そのまま意識をまどろみの中に意識を落として行つた。

「う、うん……」

耳元で聞こえた声で意識は浮上した。体を動かそうとすると腕と足以外の体前面が柔らかいものでおおわれている。顔には何か特に柔らかいものが当たっている感覚がするし、抱き枕にしては形が少々歪だ。恐る恐る目を開けてみると……

「真っ暗……」

顔が全面包まれているせいか声を出すと熱がこもる。意識が完全に戻っていないからか、頭は正常に回らず、この状況をまだ理解出来ていない。

「頭の後ろに固定具？」

無論、正体はユキである。魘されていたお父さんを安心させようと抱きついたままそのまま眠ってしまっていたのだ。非常に犯罪臭のする絵面である。

「なん……だ？この柔らかいの……」

顔を動かそうにもがっちり腕でロックされているので動かせないらしい。それが不幸中の幸いだった。

「んっ……ふあああ……」

「っ……」

一気に頭が冴え、反射で寝たフリをしてしまう。この行動がダメだったのだろう。

「んあ？あ、お父さん……だあ……」

より一層腕に力を入れてくる。離れるのではなくもつとくつきたいと言わんばかりの甘えっぷりだ。普段のクールなユキからは想像のできないほどの甘い声。正直に言おう。

「（か、かわええ……俺の娘最高かよッ!!）」

声には出さない。見つかったら一日しかないのにほぼ口を聞いてくれなくなりそうだったから。それよりもそろそろ苦しい。息が続かないのだ。鼻も口も全てユキの体に阻まれている。仮想世界で行きには必要ないと言っても窒息バツトステータスはあるのだ。意識が落ちそうになる。まだ堪えるが……

「むにゆう……………」

何その寝言、可愛すぎる。というか、普通に息苦しいのに幸せって初めてだぞ？

「お父さん、娘って言ってくれて……………ありがとう。大好き……………」

「……………」

娘にこんなことを言われて嬉しくない親などいるはずもない。かくいう俺なんてもう死んでもいいって比喻でもなく本気で思っているくらいだ。無意識に俺もユキを抱きしめてしまった。

「……………？んあ……………？」

様子からして意識が段々と浮上してきたみたいだ。みるみるうちにユキの体温が上がっていく。多分顔は耳まで真っ赤だろう。あくまで予想でしかないが……………

「……………／／お父さん、起きてる？」

「……………」

せめて俺は紳士であれ。そう願いながら窒息のバットステータスで意識を手放した。

「よし。一先ずありがとう、ユキ。」

「ん？……なんのこと？」

少し意地悪な笑みを浮かべながら横目で俺の事を見てくる。最近では表情が着いてきて人間性って言うのが随分と育ってきたように思える。

「発破の事だよ。俺の悪い所を指摘しながらも俺の自信が無くならないようにしてくれ  
たんだろ？」

「……え？」

シラを切るような声ではなかった。素で出た声だった。なんの捻りのない声。表情からも俺が考えていた意図は無かったのだと納得出来るような意表をつかれた顔だった。

「私は、お父さんに気持ち传达了だけ。あれはそんなに考えないで……勝手に口から出てった。意図して喋ったのは最後だけ。発破掛けるとこだけだよ？」

「なっ……じ、じゃあ本当に俺はユキから距離取ってたのか？」

「少なくとも私はそう、感じた。」

いや、確かにユキに構いすぎると俺は親バカって言うかなんかダメな方向に進んでしまいそうで我慢してたのだが、もしかしてそれのことか？

「我慢しなくていいのか？ユキ的には。」



「ん…… 親子なら当たり前」

「俺の事嫌いにならない？」

「…… めんどくさい彼女？」

それは俺も思った。でもそんなに的確な突っ込みを貰ったら俺何をいえばいいのかわからなくなるからやめようね？それにしても我慢無し。それだけで俺は長年背負っていた肩の荷が降りたかのような開放感で溢れる。

「よ、……」

「……？」

「よ…… しやあああああああ  
!!!!」

「ツ……?!」

ビクツとユキが体を震わすのを確認しながらも叫ばずにはいられなかった。

「これからはユキが可愛いって言ってもいいんだな?! 自慢の娘だつて周りに紹介したりとか、抱っこして、おんぶして…… あ! お姫様抱っこも捨てがたい……」

「あ…… 地雷、踏んだ？」

ユキが何か言っているようだが俺の耳には届かない。顔は興奮で真っ赤だろう。

数十分後。

「…………… 恥ずかしい……………」

「ああ…………… ごめんなさい。」

褒めちぎった結果、ユキが顔を真っ赤にして蹲ったところで俺は頭が冷えた。それももう完全に。それと同時に暴走していた最中に口走ったものは全て事実とは言え、穴があつたら入って埋めて欲しい位には恥ずかしい。というか、父の威厳とは……………

「…………… 本音出すのは2人だけの時。それ以外はダメ。」

「勘弁してくれ…………… 恥ずかしくて…………… いや、なるべく努力する。」

恥ずかしいからと言って我慢していたらせつかく指摘してもらったのに全てが無駄になる。

「え、えつと…………… 朝は可愛かつ…………… むぐっ?!」

我慢せずに頑張つて羞恥を押さえつけ、朝の寝ぼけユキのことを褒めようとする両手でユキが口を抑えてきた。

「…………… 忘れた? 忘れたよね?」

コクコクと頷く。それしか道は残されていなかったからだ。他の道は全てユキの無言の圧力によって通行止めになっていた。男の弱いところだ。

「そ、それにしてもあいつどうしようかな？」

「羊の執事？」

「……いや、睨むなってわざとじゃないのはわかってるから。でもその天然いいね。可愛いからもっとやって？」

そう言っ他にもかかわらず無視された。解せぬ。

「あの強化ポーションがあれば何とかかなりそうだけだなあ……って、あのポーション、このためにあつたんじゃね？」

「……」

ユキがいつの間にか飲んでいた強化ポーション。戦闘なんてやった事のないユキでさえワンパンで迷宮区のモンスターを屠れる性能。今思えば絶対そのためのアイテムだった。

「…… てへぺろ？」

「可愛いから許す。」

「やった。」

どうせ、あの人なら詰みゲーなんて作らないだろうから多分再湧きありだろう。手元に一本あつたら再湧きなしだろうけど。

「ユキ、励まして？」

「…… あの人に勝ったら何でもひとつ言うこと聞いてあげるかどうか？」

「よっしやあ！ ヤツタルデエ?!」

いやらしい頼み事なんて論外だ。そんなのイエス娘ノータッチの俺からしてみたら下の下の外道だ。あれ？ 俺意外とユキに触れてない？

「難しいことは置いといて、取り敢えず行くぞ！」

いやあ、張り切るしかないでしょ？ こんな条件で。

と想っていた時期が俺にもありました。

正直に言おう。めっちゃ怖い。足とか腕とか至る所が震えているし前ほどの動けなようなものには無いが恐怖という鈍器に体を殴られているようだ。

「おや？ 思ったよりも早かったですね？ さてと…… 物語を進めに來たのでしよう？」

言葉では歓迎ムードだ。だがどうしようもなく悪寒がする。その原因のひとつに執事の顔が戦闘狂のそれだったからだ。

「昨日ぶりですね。相変わらず俺の足はブルってるんですがとりあえず一つだけ。」

「なんででしょうか？」

「愛娘の為なのでね。何度死んでも勝つまで挑み続けます。それだけです。」

自分の覚悟を決めるために敢えて声に出す。でも怖い！いや、目線だけで射殺されるかと思うぐらいには。

「美しい家族愛……いいですね……では、それを一層輝かせる為にもこの私を越えていきなさい。」

羊の頭上に体力のゲージが4本現れる。相変わらずゲージは真っ黒。かすかに赤いんだらうとわかるぐらいの濃さだ。

「シッ！……ッらあああ!!」

力任せに剣を床に叩きつける。そこには既に執事が居なくなっていた。ユキは家で留守番だ。ここでは一切の邪魔が入らない空間。2人の雄が戦う場。だからといって全力で戦えるという凶太い精神は持っていない。本番では全力が出せないとは良く言ったものだ。

「ふむ……基礎能力は高いようですね。でも技術がない。美しくありません。」

そう言っつていつの間にか後ろに立っていた執事が手を振り上げ、勢いよく振り下ろ

す。すると特殊能力なのだろうか？周りからマネキンのようなのっぺらぼうのメイドが5体出てきた。

「仲間かよ……」

そう悪態をつきながらも薙ぎ払いの要領で腕を動かしマネキンメイドに切りつける。否、気をつけようとした。

「……」

「ツ！くそツ！涙流すとかありかよツ！」

残り数c mで刃が届きそうだった。だがその瞬間マネキンたちは涙を流したのだ。咄嗟に無駄に身体能力が高くなった体で振るっていた刃を自ら止めてしまう。

「チツ」

「メイドには演技力も必要なのですよ？美しく暗殺するには相手を騙すことも必要です。そして貴方も優しい。人間を切ることは出来ないのでしょうか？ならばこちらが人間の演技をするまでです。」

生き物を殺すのに美しいというのはどういうことだろうか？殺したらポリゴンが飛び散るこの世界で特有の価値観なのだろうか？様々な雑念が頭をよぎるが、既にメイドたちの刃は自信に迫ってきている。早々に思考を切り上げ、回避する。

「へっ……」

技術も何も無い俺の動きに美しさなんて無いだろうよ。お前らみたいな

礼儀もないし俺とお前の常識も違う。けどな………？」

だからこそ行動で証明する。動き、外観が全てでないことを。当たり前のように抱いている人間特有の価値観を知らしめる。

「気持ちにだって美しさってのはあるんだよッ！」

それをユキに教えてもらった。今までその当たり前が出来ていなかった俺にその価値を、自信を取り戻させてくれた。何も無かった俺に理解をくれた。

「ええ……… 理解していませんとも」

「ッ！」

振り上げた剣を叩きつける前に弾かれた。それに驚き一瞬すきを作ってしまう。両手を上に上げたままの硬直。切ってくださいと言っているようなものだ。技術がない故の失敗。

「言葉の節々には色々なものが詰まっている。その中には勿論、美しさも含まれています。どれだけ自分を偽ったとしても当たり前前のように私たちにはわかるのです。だからあなたの本心も分かる。」

執事の猛攻と横からのメイドによる攻撃で話を聞く余裕が無い俺はあちこちに傷ができていく。この調子だとあつという間に体力がなくなりそうだ。もう2割なくなってきた。

「貴方は恐怖しているのではない。……いや、語弊がありますね。正確には私たちに恐怖しているのではないのです。」

その言葉だけは集中している意識の隙間を通り抜けすんなりと頭の中に浸透していく。

「娘さんが居なくなるのを、そばにいないことを怖がっている。私を倒せなければ消去されるかもしれないという恐怖。それが体の基礎胆力、思考を鈍化させている。」

心当たりはあった。ずっと考えないようにしていたことだ。この世界が不良品だと判断されれば改変が入る。それは街だったり、マップだったり仕様だったりと色々なものがあるが、その中にはユキも入っているのだ。この世界のプログラム群の一部であるユキが改変、消去される可能性も無きにしも非ずなのだ。俺の事をちゃんとサポートしなかった。不要なところまで干渉しようとした。こじつけをあげればキリがないだろう。

「……………」

「ほら、また動きが鈍りましたよ？」

指摘をされるも相変わらず口は動かさず、無口を貫いてしまう。

「娘さんに対しての感情は親愛ではない。依存です。」

「うらあああああ!!」



ユキと同じことを言われてもう堪忍袋の尾が限界だった。感情に力を任せ、どこにも向けれない自己嫌悪の念を消化しようとする無我夢中で殴り掛かる。だが、所詮殴打だ。毛すらも効いていないのは明白だった。

「ふむ……」

当然大ぶりの攻撃を避けられあっさりとした勢いあまり地面に転んでしまう。さつきから隙を晒しても攻撃してこないのはさしずめ舐めているからだろう。

「はあはあはあ……」

疲れるはずのない仮の体。それでも息切れをしてしまうのはまだ画像の体に慣れていないからなのだろうか？

無駄な思考をしている暇がないのは分かっている。でも考えてしまった。息切れして体が泊まっている今、思考までもがあさったの方向に向いてしまった。

「貴方は努力していたのではありません。自分より弱い敵を作業的に叩いていただけです。それは美しくない……自分の願望を、欠点を克服する意思が無くなった人は醜く、そして汚いものです。」

「チツ」

凶星だった。全くもってその通りだ。自分よりはるかに格下のモンスターを倒して技術なんて上がるはずもない。

「くそッ……………がああああ!!!」

「はあ……………成長しないですね。醜い。」

そういうと容赦なく俺の左腕をもぎ取っていく。

「あなたのスタイルは片手剣の両手持ち。片手無くなれば扱い切れない。貴方の負けです。」

そういうとあっさりと胸の辺りに手刀を入れてくる。周りのメイドもここぞと言うタイミングでナイフやら、ピックやらを体に突き立てていく。その状態で体力が残っているわけも無くあっさりとアバターが崩壊した。

「ッ……………があ……………」

まだ体が覚えている不快感に身を震わせ、鈍い悲鳴を出す。上には見慣れた俺の家の天井。そして隣にはユキが心配そうな顔でこちらを見ていた。

「あくと……………やられちまったわ。でもゲージ半分減らせたから勝機はある。つて事で2回目行ってくる。」

本当は1回も攻撃を当てられなかったとは言えない。

ともかく怖さは無くなったように思える。このままいけば勝てないことは無いだろう。まずは攻撃を当ててすることに全力を注ごう。

「大丈夫？」

「ツ…………… あ、ああ……………」

あの執事に言われたことが頭に引つかかる。そのせいでユキの問いかけにぎこちない声を出してしまった。ユキはそれを訝しんだのか俺のこころののステータスを覗く。覗いてしまった。

それを察した俺は一足先に謝ろうとする。

「…………… ごめん。少し、悩んじゃって……………」

「…………… ん。」

「俺はこのゲームがクリア出来ないって理由をユキにしたくないんだ。でも、あの執事にはそうだと言われた。」

「…………… クリア出来なかつたら私のこと大切に思っていないって？」

ユキはいつも確信をついてくる。自分でもその理論はおかしいとわかっている。でも割り切れるかは別だ。理性の感情は違う。

「ああ…………… 確かになって思っちゃまった。少しでも納得したならもう俺の負けだ。このゲームがクリア出来なければ……………」

「………… お父さんのぼーか。」

いきなりの罵倒。余りにも前フリがなかったために思わず目を白黒させてしまう。

「クリア出来ても出来なくても私に対しての感情って変わらないよね？」

「ツ……………」

それもその通りだった。

「自分の感情がわからなくなつた時にこれから起こる物事に結果を委ねたらダメだよ。人生経験はお父さんの方が圧倒的に多いけどこれだけは言えると思う。自惚れてるんじゃないけど、私は十分お父さんに大切にしてもらってるよ？だから不安なんてすぐ吹き飛ばし、お父さんのことを考えると幸せなんだよ？だから自分のことを嫌わないで？」

毎回思っていた。ユキ娘の前では情けないところを見せないようにしようと頑張っていた。でもそれは全てから周りで脆い俺の心の壁は簡単に決壊する。しかもそれは心を許している家族の前でほど酷くなるのは必然だった。結果、恥という恥をユキに見られた俺はどこかこんな関係が当然と思えるようになって来ている。

それが怖かった。当たり前のように娘に甘える俺が嫌いになりそうだった。頼りたい。悩みを話して欲しい。そう考える程にこの自己嫌悪は大きくなっていく。結果、触れられればすぐ爆発するような不安の塊を抱え、それを執事につつかれた。その瞬間

不安は爆発し、自身の心を闇に落とした。

『こんな俺は嫌だ。』と嫌悪した。

『当たり前のように娘に甘える俺は俺じゃない。』と拒絶した。

『そんなことのためにユキを産作んだたんじやない。と。』と後悔した。

『もつと頼って、もつと話して、もつと悩み話して欲しい。』と願った。

こんな俺は嫌だ。嫌いだ。否定したい。

否定したいのに怖くて否定できない自分が一番……

嫌いだ……と。

でも、その状態で、他ならぬユキが光をくれた。

感情は変わらないと言ってくれた。

未来に自分の感情の答えを委ねたらダメだと言ってくれた。

ユキが大切にしてくれてると言ってくれた。

不安なんてすぐ吹き飛ぶと、一緒にいれて幸せだと言ってくれたのだ。

「嫌わないで……か。」

今まで心の奥底に追いやっていた結果。当たり前のように無視して無いものだと思  
い込むようにしていたもの。

「ユキは……俺の事を頼りないと思うか？」

「…………… 思ってる。」

その瞬間全てが崩れた。唯顔には静かに流れる涙の感触があるだけ。四肢は冷たくなり、この世の終わりのように感じる。

「それはあんなに泣きついてきたり、情けないところを見ちゃったらね…………… 信用はできない?」

容赦ない言葉の攻撃が来る。頭が真っ白になった。何も考えられないほどに。

「あ……………」

か細い声しか出ない。全身が固まったかのように世紀を失い感覚は遠いくなる。

「でもさ? 期待はするよね。家族って多分こういうものでしょ? どれだけ失望してもその失望を取り戻して欲しいと思う。信用はしてないけど、信頼はする。」

信頼できない家族は本当の家族じゃないと続けるユキの顔は至って穏やかに笑っていた。

「だから、信頼させて? そして信用させて? 私はお父さんを裏切らないから。」

「…………… 証拠…………… 証拠が欲しい。」

それでも疑ってしまう。いつか愛想をつかして俺の元から離れてしまうんじゃないかと。その時はもうすぐじゃないのかと。

「…………… 怖い…………… んだよ?」

唐突に関係の無いような話が始まった。でもユキの表情は真剣そのもので横槍を入れる気にはなれない。

「こうしているうちにも私の寿命はあと僅かかもしれない。どんどん迫っているのかもしない。」

そこでやつと言いたいことがわかった。でもそれは俺から言ってしまうえば意味がなくなってしまう。ユキの覚悟が無駄になる。

「クリア出来なかつたら私が消えるかもっていうのは多分お父さんも気づいてるよね……多分、私の口調が変わってるのも気づいてると思う。」

確かに流暢に喋っている。今までのたどたどしい物ではなくあくまでも少しという範囲でだが明らかに変わっている。

「これが本当の性格って訳でもないし、むしろ元々の方が素なだけだね……」  
「な、なんで……」

「私が変わったとしてもお父さんは本当に私のことを見てくれるってことを確認したかった。正直に言うとお父さんが死んでこの家に戻ってきた時、心を読んで中身を理解した途端に嬉しくなったんだ。」

言葉とは裏腹に苦しそうな表情でそういうユキ。絞り出すように鳴るユキの呼吸音が家の中に響き渡る。



「ああ、私で悩んでくれてるんだなあ……って。私の外見じゃなくて私自身を見てくれているんだなあって自己満足した。汚れてるのは一緒だよ？ 醜いなんて思わない。そういうユキのも含めて同じなんだよ？ 私とお父さん。紛れもなく似た者同士の家族なんだよ。」

それでもと続ける。ユキは視線を落とし、顔を見られないようにする。その上で正面から俺にぶつかり、両手でお腹あたりの服をキュツと摘む。

「それでもさ……希望……持っていい？」

ユキは元の口調に戻りそう口に出す。ユキが押し付けている頭辺りがだんだん湿ってくる。

「……言ってみて？」

せめて促すことしか出来ない。細かく震えるその小さい体を抱きしめる。さつき、俺は不安に溺れそうだったのに今ではそれが霧散している。それどころか、今までよりもスッキリとしていた。原因はユキで間違いない。そのユキが今度は俺と同じく不安で震えている。ならばやることはひとつだ。

「……死に……たくない。消えたくない……」

ひと呼吸おいて涙ながらに訴えるであろう言葉を肯定する準備はもう整っていた。

「助けて……お父さん。」

俺がこの世界に来てユキが泣いた2回目の訴えだった。2回目の肯定。その言葉を口にする。

「任せろ。」

その一言の後には唯々ユキの嗚咽が響くだけだった。

「……………よし、気合い入れた。行くか……………」

ガゴンと音がなりボス部屋の扉が開いていく。中には案の定、羊の執事が居る。

「ふむ…………… どうやらその表情…………… 私の言葉を乗り越えたようですね。なんという親子愛…………… 美しい…………… どうやらこれは私も正々堂々とやらなければやらないようですね……………」

そう口を開く執事は腕をゆつくりと上に上げていく。それを警戒して剣を目の前に突き出す形で構えをとった。

ただそれは杞憂で次に起こしたモーションは指パッチン。乾いたいい音が部屋中に響く。音が止むか止まないかのタイミングで執事の頭上に何かが浮かび上がった。

「リバース……… バーサーカー?」

「ええ。あなた達の美しさを少し試させてもらいました。あなた達、芽は遂に蕾になった。狂った私が相手をしてその美しさを汚すだけでしよう……… なので、強化状態を解かせてもらいます。」

今思えばあの狂ったような戦い好きの笑顔はあの強化の影響なのかもしれない。

「……… 倒すためのキー回収が出来たってことか………」

そう小さく呟くと共にもう少しNPC（NPC）の話聞けばよかったと後悔をする。それでも精神的に前へ進めただけこの執事には感謝しなければならぬだろう。

「認めてくれた……… ってことで良いのか?」

「ええ……… 我が主。あなたの為にこの体、存分に使っただけですよ………」

何回も私の肩をええと言っていたのはこの事だったのだろう。分かりづらいヒントだ。でもそれもこれも全てが過ぎたことだ。

「行くぞ………」

「………」

もう言葉は要らなかつた。お互いに切りつけ、殴り合う。

「ツらあああああ!」

「ツ……… フツ!」

横に剣を薙ぎ払えば素早くしゃがんで難を逃れ、縦に叩き付ければ刀身の横つ腹を殴って逸らされる。その度にカウンターを入れられるがお互いに決定打にかける戦いだっただった。

「ツ！」

素早く手を振り上げ、そして下ろす。弱体化しているとはいえボスだ。動作が早いことには変わらない。

「ツ…………… またメイドかよ…………… オラツ！」

「ええ…………… 使用人全てで相手させていただきます。」

「…………… ツ、クソ！」

メイドを切ることは出来ない。これは精神的には無く、物理的にだ。メイド達が全体的に速度が上がっているのだ。おそらく操っている執事が正気を保っているがために操作の緻密さが増したのだろう。

「お前が弱くなったから行けるかもって気持ち返せツ！」

「いいえ、それだけでは美しくありません…………… 搦手を使い華麗に戦う。これが私の求めている美しさです。技術や身体能力など付属品でしかないのです。さて…………… そろそろ行きますよ？」

戦いながらも会話をしている時点で俺とは違う。俺は会話など十分にこなすことな

ど到底できないだろう。せめて問いかけて答えを聞く程度だ。考えて答えを出して口に出すなどしていたらあつという間にこの執事に取って食われる。

「さてと。さつきから思っていたのですが……あの小さいお嬢さんはどうなされたのでしょうか？」

「……ユキなら家で留守番だッ！」

自分から距離をとって質問に答えながら全力で前に踏み込みそして投げた。

「ツッピック?!」

初めて余裕そうな羊顔を歪ませることが出来た。驚きに染めた顔を見るだけで満足しそうになるが、それだけでは問屋が下ろせないのも事実。

「シヤラああああ!!」

「うぐつ……」

初めていい攻撃が入った。執事の顔に赤いダメージエフェクトが現れる。ゲージは一気に1ゲージと半分。元々のレベル差のおかげとクリティカルのお陰だろう。元々HPが高い敵ではないのかもしれない。モンスターの強さを表しているゲージの色は階層ごとのモンスターの種類比較で分けるんじゃないやなくて自分とモンスターの力量で色を変えた方が面白そうだ。後で進言しておこう。

「やり……ますね。ではこちらも……」

そうやって両腕を前に出し、自分の前で交差させる。その瞬間周りで沈黙を保っていたメイド達が俺の方に突進してくる。躲そうとするが隙間なくメイドたちが殺到している為、動けなかった。結果、

「うぐっ……」

ドゴツという鈍い音が連続で鳴る。痛覚はないが不快感はあるこの世界で鈍器というものはタチが悪すぎる。頭突きもまた同じだ。衝撃でクラクラするバツトステータス

に不快感のコンボは凶悪だ。だがそれでは終わらなかつた。

「メイド達…… 花を咲かせなさい……」

そう言った瞬間メイドたちの体の節々から赤い光が漏れてくる。それを認識した途端、体のあちこちにあの嫌という程味わつた不快感が襲いかかってきた。

「ガハッ…… 爆発…… かよ…… くそつたれえええ!!」

地面を転がり終わり、立とうとすると違和感がある。バランスがとりずらいのだ。それもそのはず。右腕が肩から先がないのだ。

「また右腕かよ…… ツあつぶねえ!」

「ふむ…… これを防ぎますか。」

ふらついている隙を逃すほど甘いはずもなく容赦なく手刀を振り下ろしてくる執事。

それを咄嗟に片手で剣を持って防ぐ。

「……………へえ。やつぱり剣で防御したらお前がダメージを受けけるんだな。」

「はは……ええ。当たりです。私だけ攻撃部位がダメージ通らないなんてそれは美しくない……………。我が主はこの状況でも冷静なようだ。」

「……………とか言ってるけどメイドたちを自爆させるのは美しいのか?」

「……………爆発は芸術です。美しいに決まっている。」

そう言い捨てた。だが、俺はそこで違和感を抱いたのだ。表情が一切動いていない。その理由はすぐにわかった。

「はっ、そんなん思うタマかよ。お前は。」

「……………はは。いやはや手厳しい……………」

多分だが、今……………いや、あの一瞬だけでも自分のこだわりを捨ててまで俺に勝たいたいと思ってしまったのだろう。美しさを捨てて勝利を掴もうと。

途端に執事が構えをゆっくりと確かめるように作り始めた。お互いに距離をとって剣激や戦闘音が鳴り響かなくなった中での行動。話は終わりだとその雰囲気物が物語っている。

「お互いの体力的にもこれで終わるでしょう。美しく勝ち、花卉を開かせるか、負けてその蕾を落とすか。さて……………最後の1合としましょう。」

「………… ああ。 そうだな。 終わりにしよう……………」

体感では途方もなく長い戦い。 でも外から見ればたった20分の出来事。 お互いに全力でぶつけ合った闘志には漫画であるような友情が芽生えていた。

以心伝心、とでも言うのだろうか？ なんの合図もなしに全く同時に動き出す。 その距離は15メートル。 あつという間に縮む距離だ。

「ツ!!!」

鋭い呼吸音が2人の口から漏れ出る。 最後はあまりにもあつさりとしたものだった。 崩れ落ちたのは……………」

「まじ………… かよ……………」

「そう………… になりましたか……………」

2人だった。 この勝負は引き分けだろう。 またもう1回挑まなければならない。 次は負けない。 そんな確信があった。 だが…………… 無慈悲にもテロップで流れるアナウンスは……………」

《Congratulations》

「は…………？」

「あ…………… 負けてしまいましたか…………… 楽しかった。 出会い方が違えば…………… ほんとう…………… に、あなた、の…………… 執事に……………」



いい切る前にゆっくりと散っていくポリゴン片は口部分に差し掛かっていた。

「ツ……茅場ア!!!俺はクリアしたぞ!………見てんだろうが!!!」

力の限り叫ぶ。自身の足が消えているのを近くしながら……何故か遅い体の崩壊をありがたく思いながら。唯々叫ぶ。

「なんの見返りもなしか?!お金を渡してはい終わりってか?!助けろよ!助けてくれよおおおおお!!」

支離滅裂な理論を並べ立て、自分を正当化させる。そんなにも必死な彼に執事は笑って見せた。

「ツ………」

もうわかる。お互い悟っているのだらう。執事……いや、1層ボス【Ilf<sup>イル</sup>ang<sup>ファ</sup>・Alb<sup>アル</sup>atle<sup>バト</sup>r<sup>ラー</sup>】は消えると。死ぬという概念もなく無慈悲にシステムによって消されると。

——また会えるといいですね………——

そう聞こえた気がした。叶わない願いとわかっていながら運命に抗えないことに歯痒くなる。そして全てがポリゴン片になったのを見届けて俺のアバターも消滅した。

ベッドの中でリポップした俺の隣にはユキが寝ていたので頭を優しく撫でながら複雑な感情を落ち着かせる。

「あゝ…………… 終わつたな…………… このゲームも今日が終われば出来ないのか…………… 製品版が出るまでユキとはお別れか?…………… いや、何とかしてスマホに移さなきゃ……………」

わざと色んな関係無いことを考え紛らわす。理性ではしようが無いと割り切っている。だが、感情はすぐに整理はできない。

「んう…………… おとう…………… さん?」

「あゝ、すまん。起こしたか?」

「ん…………… 大丈夫。執事さん…………… は?」

当然の疑問だろう。俺だつて同じ立場なら気になるところだ。当たり前のように聞いてくるあたり、俺が勝つたことを疑っていないのだろう。

「勝つたよ…………… ユキとの約束だからな。」

「ん…………… ありがとう。」

会話が止まる。でもユキは本当に嬉しそうに笑い、そして抱きついてくる。それだけ

で幸せでこれからの事など後回しにしてしまうほどの幸福だった。

俺が頑張っていたのはこのためなんだと。

そう、やつと理解出来た。依存していたっていい。ただそれが相手の自由を縛らなければ。執事の事はまだ割りきれていないが、時間が解決してくれるだろう。そして出来ればずっとユキの行く先を見届けて、いつかユキのことを理解してくれる人が居ればいいなと願うのであった。

## GGG編

## 18話 新しいハードと問題のゲーム

今、俺は猛烈に感動している。

なぜそんな始まり方をしたかはこの説明を聞けばわかるだろう。まず俺は胡座をかいている。そしてその上には柔らかい桃……いや、朋が座っているのだ。Tシャツを着た朋が。背丈の差によって朋の頭の上からでも目の前のものが見える。これだけいえばわかるだろう。そう。色々……見えるのだ。

「たっくん。これ見てよ。」

そう言つて差し出されたタブレットには大きくこんな見出しがあった。

『GGG、ガンゲイルオンラインの中で音信不通者多発』

こんな不穏な見出しに俺の顔は思わず眉をひそめてしまう。新しいハード『アミュスファイア』にはナーヴギアの時の反省を活かし、多彩な制限が掛けられているのだ。その上でのこの見出し。多発と言うだけにナーヴギアを政府に差し出さずに持っていたとしてもそんなに多くは無いただろう。ならば考えれることはひとつ。

「セキュリティの解除方法が出回ってるのか？」

「そう考えるのが妥当だね。それにしても……………」  
「ああ。情報屋の血が騒ぐ……………」

その見出しを見ただけでは何も判断出来ないが、真実を知りたいという欲求はどうにも切つても切り離せないらしい。アミユスフィアは2人とも持っているし、ナーヴギアも政府に渡した。もう処分されている頃だろう。この事件はマスメディアが用意したデマなのか？それともネットではばらまかれた真つ赤な嘘なのか。はたまた本当なのかは知らないが、この世界G.G.O.の中で何かが怒っているのは間違いないだろう。

「情報の裏付けだな。」  
「だな。」

楽しそうに笑う2人は無性に面白くなり吹き出してしまう。楽しそうな声が夜の街に消えていった。

『……………つてことなんだよ。』

電話の先にいるのはキリト…………… もとい、和人だ。相変わらずのイケメンボイスで相

談して来るのは一種の優越感を感じる。案件は当然GGO関連で俺もお世話になった菊岡さんが提案してきたらしい。

『病院でバイタルを監視しながら潜る。ってことらしいんだけどアスナにバレずにいられる自信がなくてな……』

「そこで情報操作と……」

『ああ。嘘までは行かなくとも真実にたどり着くまでは時間を稼げるだろうか？』

「ふむ…… 気は乗らねえな。実際、情報でアスナを騙す訳だし厄介事に首を突っ込和人を弁護できる自信が無い。」

実際SAOで色々とやらかしているのだ。自信をかえりみないやり方は一種の恐怖を感じる。せつかく出来た2人目の親友なのだ。このまま黙っていかせる訳には行かない。

「…… 俺も行く。お前一人だと何やらかすか分からん。」

『うぐつ…… お、俺だって進んでやらかしてる訳では無いんだけどなあ……』

「βテスターの罪を被る。女子を勘違いさせる万年タラシ。1人迷宮攻略にソロプレイ。挙げればあげるほどまだまだあるぞ。」

『わ、わかったわかった！それも相談しておくから。というか、今日俺も初ダイブだし、明日以降になるけど……ってタラシ?!俺がタラシだったらみんなタラシだろ?!』

相変わらずの鈍感っぷりにはある意味敬意を表す必要がありそうだ。アスナを始め、リズにシリカ。それに妹であるリーファ。もう何度ラノベ主人公か?!と突っ込みたくなつたことか……。当たり前のように優しい言葉をなげかる。そしてそのタイミン  
グは絶妙。ほんとに意識してないのか疑わしいくらいだ。俺より先に朋がキリトと出会つていれば朋は堕ちていたのだろうか?それだと俺はキリトを親友ではなく、敵として見なければ……。

「………… やっぱりお前は天性のタラシだ。ネットで晒すぞ?」

『いきなり口悪いな?!それはもういいだろ。それよりも、ハードはあるのか?』

「ああ、新しいのを買った。GGOをインストールもしてあるしなんなら今からでもあぞ。もう既にアルゴが情報収集に入ってるし、俺も今から潜ろうと思つてたところだ。」

え?という間の抜けた声が電話越しに聞こえた。

『………… お前、もしかして俺がこの事件のことを国から依頼されてるって知つてたのか?』

「んな訳あるか。和人なら首突つ込むだろうなとは思つてたけど半分は興味本位だ。アルゴにも血圧計は付けてもらってるし、アミュスフィアの方の計器も参照中だ。血圧が80を下回つたら無理やりにもアミュスフィアを引き剥がすし、なんなら今でも引き剥がしたいのはやまやまなんだけどな。」

『…なんて言うか、お前変わったな。』

それはそうだろう。最近やっと自分の愛しいという感情を制御する術を会得しつつある俺だ。いつもとは違い落ち着いてはいるだろう。

「そうか？ 取り敢えず俺も情報集めとくから進展あったら連絡くれ。」

『お、おう。取り敢えずはそれで行くか。相談の結果はまた電話する』

そう言つて電話が切れた。その途端に部屋が静かになる。アミユスファイアのファンの音だけが部屋に響き、ランプの色でアルゴが無事なのがわかる。

「… たたく。無茶するよ。ホント。朋も俺も厄介事に首を突っ込むつて言うのは同じ… か。」

「キー坊と同じつて言うのは何とも感想の出づらいもんだナ。」

「ツ?!」

体をビクツと反応させてしまう。隣で寝ている朋から声が出たからだ。いつの間にかランプの色は赤になっており電源が切れていることに気付いた。

「にやははつ、そんなに驚かなくてもいいだろ?」

現実世界に戻つてもロールプレイが抜けきつて居ない朋の体をお仕置と言わんばかりに強く抱きしめる。

「ちよ、い、痛い痛い!」



背中をパンパン叩かれるが本気では無いので照れ隠しなのだろう。痛くなるまでは締めていない。

「……お仕置だ。我慢して。」

「……ムウ……ならオレツチはこうダ！」

そう言つてなにか姿勢を変える朋。何をするのか身構えていたら首筋にチクリと痛みが走る。その後に皮膚がなにかに座れるような感覚を感じた。

「朋…… お前……」

「いや、だった？」

上目遣いに言われてはもう限界だった。感情を制御出来ると言つたな？あれは嘘だ。やっぱり無理だった。こんなに可愛い仕草をしてくれるのは俺にだけ。そう考えると途端に優越感。独占欲が頭の中を駆け巡る。

「はあ……ズルいよな。朋は。」

「それが私だからね。ここまで自分を制御できるようになるまで結構時間経っちゃったけど。」

最近のアルゴ…… いや、朋は俺にまでからかいが出来るようになってきている。さらに上達したのだ。前までは俺の行動一つ一つに冷静さを失っていたらしい。その為、からかいも満足にできず俺に撃退されていたのだが最近は顔を赤く染めるだけにと

どまるくらいに慣れたらしい。嬉しいのか、嬉しくないのか分からないが朋が成長したと言うならまあいいことなのだろう。

「最近は何の方が余裕なくなるからな……男としては余裕のあるところを見せたいんだが……」

「いつも余裕ある顔して色々こなす癖に何言ってるんだか……今でもその様子にドキツとさせられる私の身にもなつてよ……」

「ハイハイ。仰せのままに？カリーナ様。」

そう言うと軽く頭突きをしてくる。加減をしているのか、全く痛くないが、少し反省することにする。

「……なんか距離感を感じるから元の呼び方して？」

「毎回反応がいいからまだまだだからかい足りないんだけど……」

「さんざん私の事今までからかってたよね?！」

だからなのだが。これは中毒みたいなものでも当たり前のように常日頃から言葉遊びをしていると相手の断りづらいものを考えてしまう。これが結果的にからかいにつながるっているのだ。俺の場合は可愛い朋が見たいって言う方が大きいけど。

「ごめんごめん、辞める気は無いけど自重はするよ。取り敢えず休憩は終わり。入るよ?」

アミユスファイアを手にとって声をかけるなり、渋々といった様子で朋も頭に同じリング状のものを被る。

「リンクスタート」

2人同時に唱えた瞬間意識は現実世界から離れたのだった。

「へえ……ここがGGOの中か。画像では見てたけどやっぱり体験するのとじゃ違うな。感知的に、《ザ・シード》起因なのは間違いないな。コンバートもできるらしいし、リアルラック高めだな。実用性もある。流行るわけだ。」

廃れた感じの世界観は現実世界の面影を残しつつも独特な雰囲気醸し出していた。

「ハーくん！」

アルゴの声が聞こえる。どうやら迎えに来てくれた様だ。ほんとにおらにはもったいない気立てのいい彼女だと思う。

「おう。こつちでもアルゴなのか？」

「当たり前だ口？どんなゲームでも一定数の顧客がいるのが売りだからネ」

事実なのだから本当に頭が上がらない。仕事が出来るパートナーが居ると男の立場が危うくなるというのは本当だったらしい。

「あ、そういえばあそこでオイラナンパされ「よし、そいつ教えろ。なに、PVP推奨ゲームだろ？多少酷いことしたって問題ない。」早いナ?！」

間髪入れずに俺が制裁宣言をする。アルゴをナンパする気持ちは分からんでもない。だって可愛いし、美人だし、可愛いし可愛いし……でも実際にするのは頂けないなあ……

「いや、なに……現実っていうのを解らせてくるだけだ……」

「嘘！嘘だから！からかおうとしただけだゾ?！」

思わずずっこけそうになってしまふ。相手を倒すと意気込んでいただけに途端に恥ずかしくなり、視線を少し下げながら安堵の声を漏らした。

「つたく、良かったけど心配になるようなことは言わないでくれ。重いかもしれないけど何かあつたらつて考えると居てもたつてもいられないんだ。」

「ああ、わかったヨ。それに重いって思ってたらもうとつくに別れ話してるんだ。その気持ちは嬉しいからここままでオイラはハーくんのこと好きになっちゃったんじゃない

カ

全く嬉しいことを言ってくれる。欲しい言葉をいの一番に言ってくれる。それがどれだけ嬉しいか。それで俺がどれだけ救われたか。完全にあの荒れていた頃の俺と決別できたのはアルゴのお陰なのだろう。

「よし、行く……………う……………」

俺の視線の先には2人の美少女が武器屋らしき場所に入っていく姿だった。

「あゝ、早速浮気カ〜?」

その様子に気付いたアルゴがからかってくる。その言葉の中には一切のトゲがない事が俺への信頼だと思うと途端に背中がむず痒くなっていく。

「違うよ。ほら、あの黒い方を見てみる。」

「ん?黒い方……………あ……………なるほどネ。」

俺の視線を追い、見つけた途端にアルゴの顔が獲物を見つけた猫……………いや、鼠のそれになった。アルゴも気付いたようだ。そう考えているうちにアルゴは行動に移していった。

「その銃なんかは使いやすいわよ?」

「へ、へえ…… そうなんだ。」

アルトよりの低音ながら整った声で喋るその姿、身のこなし。全て取って見てもあいつにしか見えない。

「やあやあ、まさかこんなところに同じ女性プレイヤーが2人も居たとはナク?」

「ツ……」

その反応は相手に肯定の意を伝えているようなものだ。その事を理解していないだろうあいつは感情表現過多なこの世界において隠し通せるものでは無い。顔中冷や汗で凄いことになっている。

「あら? 珍しいこともあるのね。」

彼女が言っているのは多分2人も女性プレイヤーに会ったという事にだろう。うん。水を刺すようなことは言うまい。

「おい? アーちゃん。先に行くなよ。何かあったらどうすんだ?」

そう普通を意識しながらその一見女性集団にしか見えない中に自ら飛び込む。それにより、周りの男どもからさつきが飛んでくるが気にしない。人を恨むより自分を変えろと言いたい。

「いや、ほっとけなくてナク。特にそっちの初心者さんネ。」

「ほう……その心は？」

「にししっ……多分……」

そう言うてから言った数々は今までのアルゴのからかいの中で一番にえげつないものだったと思う。

「アーちゃんの風呂シーンを覗いたり、アーちゃんの裸エプロンとかケーキを作っている時に失敗して白いホイップクリームが鼻についたのを凝視してたり、それによつてはだけた服の隙間から見えてるものをチラ見してたり……」

多分俺があいつの立場なら死にたくなるだろう。それも結構ガチなレベルで。

「それがバレて次の日、頬っぺにでっかいモミジを付けて集合場所に現れてその横には顔を真っ赤にしたアーちゃんが……」  
「ああああ!!! わかったから! わかったからやめてくれええ!!」  
ぷっ…… あはははっ!!

なにこれ? 何? この天使。

このくんだり、最近やってなかったけどもう我慢できんぞ? その笑う仕草の一つ一つが俺の琴線を刺激するって言うことをわかってないのか? いや、アルゴのことだからわかってやってる節もある……

「あはは…… あく笑ったヨ。んでこんなとこで何してるんだ?! キー坊。」

「バラされた…… ハキにも聞かれた…… 死にたい……」

シヨックが大きすぎて話聞いてないぞ?こいつ。

「えっと……何が何だか分からないんだけど、取り敢えずあなた達いつもそんな感じなの?」

そんな感じ、とは俺たちの格好のことを言っているのだろう。俺がアルゴを後ろから抱きしめている形だ。俺に対してだけ、論理コードを解除しているのでコンバートしてもそのまま残るらしい。まだ裏付けのしていない情報だったのでついではいい成果じゃなからうか。まあ、俺はイチヤイチャしたいだけなんだけどな?」

「まあネ。ハーくんは自重できていると思ってるらしいけど意外と直ぐに限界くるから説得力がないんだヨ。」

「うぐっ……アーちゃん可愛すぎるのが悪いと思う。つと、俺の事はまあいいとして。うちのキリトが迷惑かけました。状況から察するに性別を偽ってたみたいで……」

「お前俺のなんなんだよ……」

そう愚痴るあの人……もとい、キリトを放っておきながらアルゴを離し、本当の女性の方に頭を下げる。

「え?!そのアバターで男?!嘘でしょ?」

「あはは……えっと、ごめんなさい。」



笑ったはいいものの居心地が悪くなったようで直ぐに謝罪を口に出す。最初からそうしてればいいものなんですから相手の気を逆撫でするような事を……

「ほんつとにお前は……アーちゃんを見習え。本当に悪いことした時はいの一番で謝ってくるんだぞ？涙目だな。それもすごい可愛くて……お前にも見せてやりたい。あの可愛い顔……普段の顔もめっちゃ可愛いけどなんか、涙目の顔って違った良さがあるよな……」

「は、ハーくん、話し逸れてるゾ／＼／＼」

照れで顔を赤くしながら俺の服を少し持ったままつんと引つ張ってくる姿はもう可愛すぎて頭がとかされそうだった。尻に敷かれようが知ったこっちゃない。来るならドンと来いだ。それくらいゾツコンだという自覚はある。

「ほら！ほらこれだよ！可愛いだろ?!俺のだからな?!誰にも渡さんぞ?!」

「ーはあ……出たよ。扱の発作。こうなったら落ち着くまで待つの一択しかないからな……ほんとに面倒だわ。まあ、那稀なきを前にしたら俺もあなる自信はあるが……ー

どっちもどっちだった。

まあ、そんなこんながあり無事買い物が終わる受付にも間に合ったのだった。

## 19話 問題の試合、心の戒め

「うぐっ……」

うめき声上がる。目の前の男の上には赤く染ったHPバーが浮かんでいた。

「うーん…… やっぱり感覚が少し違うな…… SAOの時より精密になってるせいか上手く狙ったところに打撃が通らん……」

今、俺は絶賛PVPをしているのだ。試合まであと1時間。それまでにこの世界に慣れなければならぬ。どういう思考で相手が動くのか。銃撃戦の経験が皆無な俺としてはどうしても間合いが狂ってしまう。

「素手ならダメージ入るかもって思ったけど少ねえのなんのって…… 当たり前だけど。」

「…… あなた、無茶な戦い方するのね。銃相手に素手で応戦するとか正気の沙汰じゃないわ。」

シノンがバカ長い銃を背中にこさえて近付いてくる。

「完全に間合いが剣のそれじゃないか。」

「剣使ってるお前に言われたかねえよ」

アルゴは今、情報屋の仕事をしているため近くには居ない。フレンドリストで常に居場所はわかってるので問題ないが……

「はあ…… そんなに心配ならついて行けばよかったものを……」

「しようがねえだろ。俺には試合があんだから。つてことで！とりあえず戻るか！」

そうして草原を後にした。

「建物の中に入ると辺り一面人だらけ。屈強な体と顔面の二拍子を持った人方だ。どれだけシノンとキルト、そしてアルゴがレアなアバターなのがわかる。」

「おっと…… 大丈夫ですか？」

そんなことを考えながら歩いていると足元で誰かに当たった感覚があった。

「ん、だいじよ…… お父さん？」

そこには愛しの愛娘。ユキが立っていたのだ。しかも開口第一声がお父さんだ。周りの視線と主にシノンの視線に耐えかねて急いでユキを抱っこしてその場を離れる。

「なんでお父さんは急いでるの？」

「えっと……俺の歳で子供がいること自体がおかしいって事……って分かる？」

「ん、結婚は18歳から」

「そう。女性は16からね。まあだから周りに俺がユキに無理やりそう呼ばせると勘違いされたって訳だ。」

実際はそこまで考えてる人はいないだろうが、ユキには論理的に伝えた方が伝わりやすい。これも最近学んだことだ。

「なるほど……わかった。じゃあ……お兄ちゃん？」

小首を傾げて手を後ろに組みながら行ってくる。要は可愛いのだ。

「ぶっ……え？ごめん、耳が変になったみたいだ。エラー修正したからもっかい言ってくれるかな？」

あまりにもいきなりのことと動揺が隠せずに吹き出してしまう。だが父親の威厳がある俺は務めて冷静にそう返した。

「お兄ちゃん？」

……ごめんなさい。死にます。

「ツハ！……意識飛んできた。娘からお兄ちゃんと呼ばせる外道になっちゃった……」

「?、自分から進んで呼んでるんだよ?」

もうやめて。俺のHPはゼロだから。とりあえず次くらったら死んじやう。

「も、戻るか!」

「ん。わかった!行こ?お兄ちゃん!」

あゝ……………この時間が一生続きますように……………

無事?この後死にました。

「お?戻ってきたな。」

「遅かったじや……………ない……………その子誰?」

おいおい、シノンのセリフ、メンヘラみたいになってるぞ?俺に気があるのか?ごめんなさい、アルゴという先約がいるから……………

「ウゴホツ……………な、なんでいきなり殴んだよ!」

「生理的嫌悪感があったから。」

純粋な顔で言ってくる姿に何も言えなくなる。そうこうしているとユキがいきなり俺の腰に抱きついてくる。背丈は中学生くらいなので普通にブラコンの妹くらいに思われるだろう。流れで決めた割には理にかなっている作戦かもしれない。

「お兄ちゃん、浮気ダメ。」

「ぶふっ……」

「してねえよ?!」

いきなりぶつ込んできたユキにキリトは吹き出し、俺は全力で否定させてもらった。

「つたく、あまりににいちちゃんを困らせるな……」

そう言つて頭を撫でてやるとえへ……と嬉しそうな声を出す。ほんとにどうした？ユキが壊れたのか？最近感情を出してくれるなあとは思ってたけど妹設定になった途端にギャップがすごいぞ？

「き、兄妹だったのね……変な緊張した。はあ……」

ほんとに迷惑かけます。シノンの姉御……あ、これいいかも。

「という事で姉御、俺は一足先に試合みたいなんできてきます。」

「ええ……つて姉御?!ち、ちよつと、それはどこから……」

転送が始まり外の声が聞こえなくなった。甲高い音が耳に届く。不思議なことに不快ではないその音に身を任せながら目を閉じる。

「行つてくる。待つてろよ。多分すぐ終わる。」

「わかつた。頑張つて?」

「ああ。」

外の音が聞こえないのにユキの声が聞こえた。多分幻聴なのだろうが俺にはわかつた。それは多分今まで育んで来た絆ゆえだろうと思う。アルゴもだ。多分、今アルゴは俺の背後に居るだろう。見なくても分かる。いて欲しいところにいるもいてくれる存在。俺が1番に愛する相手だ。この信頼を裏切ることはないだろう。

だから……

だから俺はその期待と信頼を裏切らないように今回も勝つ。それが攻めてもの恩返しになるのだから。

さつきまでのふざけた雰囲気は一転して今は落ち着いたものへと切り替えていた。

「さてと……… 何処だ？」

周囲の音に耳をすませる。キリト程の聞き分けはできないがやらないよりはマシだろうという判断だ。そしてその判断は間違っていないかつたらしい。

ビュツと風を鋭く着る音が聞こえる。その後が続いて銃撃の音。予測線は見逃していたが、関係ない。音さえ聞こえれば………

「なッ!!!」

綺麗に足が吹き飛んでいた。それもそうだ。銃弾は音の速度も超える。それが頭になかった俺はまんまと弾を受けてしまったのだ。

「つたく……… まだ剣の感覚で戦ってるな………」

言わ陰に隠れながらそう呟く。それは戒めであり認識の切り替え。そうなったらハキを止められるのはキリトがアルゴ。そしてユキに今は亡き茅場。それだけだろう。

「よし、理解した。」

岩陰から出ていくとすぐに赤い線が俺の方に伸びて来る。その無数の線はバラツキがあったのだ。

「へえ………」

その瞬間に全てを理解した。情報屋家業で培った自前の情報処理能力。それをフル



に活用しこのゲーム性を理解した。これがハキの強さの秘密。相手の動きの癖をすぐに見抜き、理解する。虚<sup>こはく</sup>白との訓練でそれに対応する実力を得たハキは今では片足を失いつつも佇まいを崩さず笑う余裕がある。

「つらあー！」

繰り返し出した拳は綺麗にみぞおちに入る。ダメージエフェクトはないが、確かにダメージは入っているようだ。

「ダメージ換算ちゃんとしろよ……ほんとに……」

しかしなんせ、ダメージ量が少ない。まあ考えてみればそうだろう。殴打と銃撃。どっちが強いかなんて目に見えて明らかだ。だからといってSAOの体術スキルを経験してきたハキからしたら理不尽に感じるのも無理は無いだらう。

「だからって諦める理由にもならないが……… なッ」

再び鳩尾に掌底を当てる。与えるダメージは小さくとも不快感はちゃんと感じているようでその場にうづくまる。そのまま首に攻撃を当てようと手を振りかざしたその瞬間、あるものが目に入った。

「ライトセイバー？」

そう。彼が取りだした物はレーザーらしきものが先端から出てくる黒と銀の棒だった。出てきた光は紫。それを見た瞬間、長年のシミ着いた動作をトレースした。そう、してしまっただのだ。

く剣がない……… ツ?!く

思わず迎撃をしようと腰の辺りに手を伸ばしたのが運の尽き。もちろんそこに件はなかったただその手は空を切るだけだった。

「しまッ………」

次の瞬間見事に左手を切られてしまう。慢心だ。エゴだ。自信から来る油断だ。その全てが相手に動きを読ませるまでに精度を落とした。

「もらったああっ！」

相変わらずあの世界であつたランカーたちの県筋よりは遅い。なつてない。だが、隙を晒したこの体制では防いでも次刃で仕留められる。もうなりふり構つてはいられなかった。

く速度弱体化ツ!!!く

相手の動きが遅くなる。それと同時に仮想世界には無いはずの頭痛に襲われるが関係ない。すぐ様、縦20cm程の腰のホルスターに手を伸ばし、前に突き出し………心臓に突き刺した

「なッ…………グゾッ…………」

呆気なく相手はポリゴン片になり、そしてそこに残されたのは…………刃渡り70cm程の刀身を持った銃剣だった。

「…………汚ねえ勝ち方…………」

そんな後悔を滲ませるような声を呟きマップ上から消えるハキ。平和ボケは彼の心の楔となり戒めとなった…………

——……………………お前は間違っていない…………——

## 20話 この世界を望んだ君は幸せを全身に受ける

ナイフ。そう言うともんなは納得するかもしれない。この銃剣。20cm弱のホルスターから出たのにも関わらず70cmの刃渡り。もう察しが着いているだろう。

「お前は間違ってる。ゲームは自分の持つていているものを全て使ってやるもの。ましてや、チートなんてしてないだろ？」

剣から声が聞こえる。もちろん、虚白だ。虚白の変形機能を使ったのだ。本来、”速度弱化”だけでここまで頭が痛くなることは無い。並列で使ったのだ。武器変形との同時利用。初めてやったからにはどんな副作用があるかは分からなかったが頭痛だけでよかった。

「やあ……ここからだ。」

結局まだ予選を勝っただけ。本番はこれから。それに違いはなかった。直に元の場所へ転送されるだろう。それまで待つだけだ。

「つと、戻ってきたか。このまま現実に戻ってもいいんだが……」

足を止めて後ろを見る。そこには誰も居なかったが心配だけする。何かが見ているという悪寒だけが自分の背筋を駆け巡る。それを察されないように言葉を紡ぐ。

「なあ？ ラフィンコフィン。いや………」

相棒<sup>ザザ</sup>

殺気が彼に似ていた。陰から見てくるという点が共通。勝算が無ければかかってこない陰湿さ。

彼だ。

そう確信した。元に何も無いはずの空間の筈なのにその言葉に反応して何か動く。光が歪む。

「そういう事か…… トリックは分からないが……… またてめえか？」

「……… お前、危険、殺る」

このゲームの利点である遠距離……… ではなく意外にもエストックという刺突専用武器を構えてくる。

「へえ、どこで手に入れたんだ？」

「情報屋に、タダで、教える奴は……… 居ないッ！」

その言葉を皮切りにザザが地面を蹴り距離を詰めてくる。

「おうおう、怖いな。あのイカした骸骨の仮面はもうしないのか？」

「……………」

無言だった。どんどん剣速が早くなっている。

「ふむ……鍛えてたのか。」

「ツ……………」

なぜ捌けるかが疑問なのだろう。簡単だ。刺突武器の強みは攻撃範囲の小ささにある。捌きにくいのと同時に、空気の抵抗が少ないため動きを最小化、剣速の増加などが比較的なぎ払い武器よりも簡単に出来る点にある。だが簡単に成長できる武器には才能と限界がある。

「ステータス値のほぼMAXを瞬間的に出せる代わりに才能にものを言わせる奴が多い！」

特にエストックなどの色物武器を使う場合は特にだ。昔モルテとか言う奴がいたが、あいつがいい例だ。

「刺突相手には刺突で返す。同じもので返すのが俺の流儀でね。」

適当なことを言いながら先つぽと先つぽを合わせて捌いていく。

「いいぞいいぞおー！もつとやれええ!!」「す、げえ……………」

様々な歓声。よく見て見たらその中にアルゴとシノンの姿も。キリトは試合中らしい。

「へえ…… ああ、そうか。俺を殺そうとする理由…… うん。」  
断片的なじょうひうをくみたてある仮説を立てる。

「お前が死銃か……」

「良く、わかつたな。半分、正解だ。でも。まだその時じゃ…… ない。」

エストツクを投げてくる。横からなぎ払って阻止するがそこにはもうザザの姿はなかった。

「なんだったんだ…… あいつ。」

「あなた、何者？」

シノンが声をかけてきた。あの監修の中からわざわざ抜け出してまで。その隣にはアルゴが。ユキはアルゴに肩車をしてもらっている。

「SAOサバイバー…… だけど？」

「サバイバーって…… まさか、アルゴさんもキリトも？」

「そうだけど…… ちなみにあんなチャランポランだがキリトも俺と同じトップランカーだったぞ。」

「あいつが?!…… あ…… コホン……」

声を荒らげたあと周りの視線があるのを思い出したのか、か細く後悔の声を出し顔を赤くしながら咳払いをした。

「まあ、とりあえずここは目を引くし……」

「アア、離れた方がいいだろうナ」

ユキが俺の肩に乗り換え、皆で歩き出した。ちなみにその姿を見た周りの男性達は血走った目でハキを凝視していたと言う。

「で……なんで席は足りてるのにあなたは膝にアルゴさんを載せてるの？」

そこには手に持ったフォークを握りしめて下を向きながら震えているシノンがいた。

「え？ダメ？」

「ツ……周りから視線を集めてるって気づかないの？」

「だってアルゴが乗ってきたんだし……」

「あなたから誘っていたでしょうが!!」

はあはあと息切れを強引に直しながらまくし立ててくるシノンに内心冷や汗が止まらない。怖い。怖すぎる。

「まあまあ、ハキは今に始まったことじゃ「あなたは抵抗しないの?!」」



食い気味に言ってくる。アルゴのフォローが玉砕した。俺の必殺土下座もアルゴが乗っている為できない。

「ああ……頭痛い……………」

「えつと……あはは……………」

おいキリトは笑ってないで何とかしろよ。

「はい。ご注文の品です。」

NPCが運んできたドリンク。シノンにはカプチーノ、アルゴはトロピカルジュース。ユキはりんごジュースだ。そして俺は……………おれ……………は……………

「えつと、ブラックコーヒー頼んだはずなんです……………」

「ええ、コーヒーでございます。」

目の前には綺麗なカップとその下にしかれている皿。カップの中に液体が入りながらも底が綺麗に見える。

「えつと、これコーヒ」「コーヒでございます……………」

それでもコーヒだと一点張り。

「えつと、いつからコーヒは透明に？」

「期間限定でございます。」

期間限定のコーヒが物の見事に透明ってなんだよ？

「えっと、コーヒーの香りがしないんですが……」

「周りのお客様も飲んでいらつしやいますので、匂いが紛れているのかと……」

おい、周りのコーヒーはとんだだけ激臭なんだよ？ 期間限定激臭透明コーヒーってか？  
ふざけんな

「色の着いたコーヒーひとつ。」

「品切れでございます。」

ッ……… こいつ……… プレイヤーだな？

「お前……… はあ……… わかった。」

指を鳴らす。コップの中の液体は見る見る間にいらのついたい匂いのする液体になった。脳内操作だ

「なっ……… ご、ごゆっくり………」

ざまあみるだ。ちやつちな嫌がらせをするからこうなる。そう。俺が勝つたのだ。でもこんな虚しいのは何故だろう。頭痛い……… ああ、このせいか………

「つと……戻ってきた？」

目の前にアルゴ、朋の顔があった。それどころかユキの顔もある……。なんで？  
「へっ？」

そんな間抜けな声をあげた朋達。理由は簡単。俺が抱きしめたからだ。ユキはタブレットだが……

「いやあ、積極的だね……」

と余裕をかましている朋を愛おしく思いながら情報を整理する。

「……赤目のザザ……それに死銃。カマかけたけど見事にハマったなあ。」

「ザザ、ね。あいつが今回の黒幕なの？」

「だと思うよ。もしかしたら生き残ってるラフィンコフィン全員がグルかもしれない。」

「そこは要観察だね。」

「お父さんのアミクスフィアのデータ……と、キリトさんから貰った音声……データ。

比較しても喋り方、違う……」

「ん……グルはほぼ確定か、それとも犯人はラフィンコフィンでは無いか……」

考えれば考えるほどツボにハマっていく。第1、択達は情報屋であつて探偵ではない。よつて推理は得意ではない。

「ああ！もう！……… 飯だ飯！」

「ぷっ、……… おじさんみたいになってるよ？今作るから待つてて。」

これだから朋には頭が上がらない。というか、夫婦みたいなもんだろ。こんな  
ん……… 幸せすぎて死にそう。

「あ、そういえば私も出るから。本戦」

「ツブウ！……… は、はあ?!」

口に含まれていたコーヒーをぶちまけてしまいそうになる。それほどの爆弾発言を朋  
はなんでもないように言ったのだ。

「だからさ？守ってね、あ・な・た？」

大きめのニットを着てキツチンでエプロンをつけるために腕を後ろに回している。  
そしてその姿のままこちらを向いて笑いかけてくる。もちろんほっぺたは赤い。

「っ………」

瀕死になった。死にそうになった。言うだけでは簡単だが、正直この可愛さに勝てる  
ものは他にないだろうと思う。自分の彼女だから補正がかかっている？お前ら、その言葉  
はこの姿を見てから言え！

「あ、ああ……… 守るよ………」

男は弱い。特に惚れた相手には。その事実を知らしめられた。くっ……… 可愛

い…………

「兄さん…………この人を殺せるんだよね？俺と一緒にになれるんだよね？」

「ああ…………勿論だ。たの、しみだ…………」

暗闇での会合は誰にも知られずに空へ溶けて行つた

## 21話

## 極悪チーミングそしてアルゴ、怒る

さて、今回俺らが参加する本戦。一緒に行動するのがこいつらだ。俺、キリト、アルゴ、シノン。……………これ、チーミングじゃね？って思ったわけ。それをそのままキリトたちに言ったら

「2人組で行動すればいい。俺とシノン、ハキとアルゴで。鉢合わせたらそれぞれ無視で。」

そう言ってきた。そのの方がマシとはいえチーミングには変わらない。そしてチーミングが2組居るとなれば過去一の泥仕合間違いなしだ。

「合図は……………あー……………まあ何とかしよう」

「「適当（なの）かよ?!」」

思わずズボラなキリトにツツコミをみんなでしたところで強引に話題を戻す。

「マップって事前にわかるのか?」

「ええ、マップはメールに添付されてたはずだけど……………」

見てみるとそこには1枚の画像があった。見落としてたとは俺としたことが……………」

落ち込みながらもそれに目を通し、案を出す。

「一旦ここで落ち合おう。敵がいたら殲滅で。できるな？」

「そこはキリトにおまかせで。」

「オイラはハキに働いてもらおうかな」

女性陣は俺らに任せると…… まあいいけども。

「ユキ、いい子で留守番してるんだぞ。」

頭を撫でながら言うのと気持ちよさそうに目を細めて返事をしてくる。

「うん。お兄ちゃんも頑張ってる。」

さて…… と。では行こうか。

ザザ、てめえはここで消す。

### 《転送開始》

自分の体が光に包まれ、ポリゴンのプログラムデータの数字と共に存在が薄れていく。ホルスターから銃を取り出し、剣を構える。

「よっしゃ、暴れるか。」

久しぶりのバーチャル世界での命のやり取り。戦闘狂ではないが、少し心が踊るものがある。普段のゲームでは味わえないこのスリル。

「つて心情になれればいいんだけどなあ」

…… そんな考えはすぐに消えた。言い聞かせなきゃやってけない。こんなゲームなどで。とりあえず合流が先だ。幸い俺は比較的合流場所に近いようでマップを開くと地形とぼつんと光る俺の位置が目に入った。

「おお……ん？」

近くで音が鳴った。ガサツ…… そんな異音。すかさずハンドガンを握りしめて剣<sup>虚白</sup>をふりかぶる。

「ちよ、ちよつと、やめてー！」

そこに居たのは水色…… いや、ライム色の髪を持つシノンその人だった。

「あ、……まじか。」

スナイパーというポジション故に移動速度が早い彼女は一直線に集合場所に来たのだろう。俺らと同じ集合場所に

「困ったわね、まさかあんたと同じ場所を集合場所にしてたなんて……」

「仕方ねえ…… とりあえずお互いパートナーと会えるまでツーマンセルだな。」



「それしかないわね。」

そうやって背中のでっかい銃を担ぎ直す。

「はあ…… シノン、動くな。」

そうやってシノンの肩越しに後ろの敵に数発発泡した。新調したハンドガン。調子はいいいみたいだ。それだけで相手は怯み逃走を図るが伊達にあのデスゲームをクリアした訳では無い。あの時に培ったVR世界の動き方をフルに活用して一瞬で移動して見事に剣で一閃。

「…… 驚いた。あのキリトより早いんじゃない？」

「ステータスのおかげでもあるけどな。まあ多分、技術はあっちが上だろうけど速さでは勝つてるとは思う。」

キリトは効率重視の動きに対して俺は無駄のない流れる動き。似て非なる思想の元導かれた我流の剣術である。もっと詳しく言おう。キリトはピンポイントで弱点をつける。俺はどこを狙おうと一定のダメージ量を与える。技術ではキリトの方が上だが、手数の方は俺の方が上だろう。

「さて…… と。シノン姉ちゃん、囲まれてるようだぜ？」

「ね、ねえちゃッ…… ああ、もう！ほら、さっさと行つてきなさいよ。」

「ねえ、扱いが雑なのはいいけどバックアップはしてね？」

「はあ……… 了解。」

そんな呆れた声出さなくても………

「早く合流しないと………」

絶賛キリトは走っていた。つまり………

「なんでこんなに集合場所が遠いんだッ！」

そんな愚痴を吐きながらどんどんスピードを上げていく。敵の攻撃を避けるように木々を避けてすり抜けるその姿はもう人外の一言だった。そしてそんな走り方をしたら………

「つ……… 敵かッ！」

人とのエンカウントも避けようがない。

「つ、急いでののニッ！」

「つ、ち、ちよっ、あぶっ！」

見事にぶつかり合いました。はい。それはそれは見事な放物線を描いてお互い吹っ

飛びました。それだけで終わればいいものの、キリトは今までの経験を生かして相手に剣を振るいに行こうとする。相手は起き上がる速さは凄かったものの、反撃の銃を構えない。

「なっ……き、キー坊?!」

「っ……アルゴか……驚かさないでくれよ……」

「こっちのセリフダ!」

速度的にはアルゴが上。速度重視のステータスなので当たり前だがその速度で当たっていたらダメージは免れなかっただろう。

「参ったなあ……」

「知らない仲じゃないだ口?」

アルゴの方からツーマンセルを申し込まれる。それを快く了承したキリト達は移動を始めた。

「……キー坊。」

自信無さげにそう呼ぶアルゴ。いつも元気でからかってくる彼女を知っている身としては違和感が拭えない。

「ハーくんは……」

「アルゴらしくもない。どうしたんだ？ 話なら聞くぞ？」

そう声をかけたのがいけなかったのか、それ以降何も喋らなくなった。躊躇している表情を浮かべ1人で一喜一憂している。紛れもなく彼が彼女を変えた結果だ。

SAOのベータテスト時代、SAO製品版の序盤の頃は取り繕った仮面を決して外そうとしなかった彼女だ。彼と関わるようになって少しづつ自然体だとわかるような行動が目立つようになった。情報屋として休みなく働くアルゴに彼がひとつ『休め』と言えば休む。『愛してる』と言われれば頬を緩まし、嬉しそうにからかう。典型的な仲のいいバカツプルだった。今は落ち着いたが、その分、彼女の素の部分が露見している。万人と一定の距離を保っていた彼女は1人……いや、2人にその内側に入ることを許している。

「(アスナがいなかったら俺も惚れてたかもな……)」

今はそれくらいに魅力的だった。そうしたのは誰でもない彼なのだ。だから応援したい。仲違いなどありえないと分かっているが、それでも気には掛けない。最近、彼らを見ているとふとそう思う。

「ハーくんは優しいよナ……」

ポツポツと語りだす。その声は消えそうな自信の無い声だった。

「それに強いし、かつこいいし……」

この時点で察した。自身の価値が分からないのだろう。当たり前のように寄り添ってくれる彼に疑問を持つている。アルゴも人間だ。どれだけ才能があろうが努力しようが自信をつける前に彼の方に目がいつてしまう。追いつけない気がする。相手のいい所はわかってても自分のいい所が分からない。誰しも経験したことのある感情だ。

キリト自身も経験したこと。有能なアスナに劣等感を感じ、なんで俺なんかと……と考えると続けているうちに不安が膨らんでいくのだ。

「不安、なんだろ？」

そう問いかけるとアルゴは小さくコクンとうなづいた。それを見て助けようと思った。昔、キリトも同じような事で悩んでいた時、ハキに助けられたからだ。言葉を選んでゆつくりと音を出す。

「昔、俺もハキも同じような事で悩んでいた。お互い相談しあっていたんだ。その大半は傍から見るとただの惚気にしか聞こえないかもしれないけど……」

そうキリトが言うるとアルゴは驚いたのか少し目を見開いた。ハキも同じことで悩んでいたとは思わなかったのだろう。あいつはアルゴの前で弱く見せるのが嫌らしいか

らな。

そこからはたんたんとその頃のことを喋った。

妖精の国の上空に浮かぶ高い塔の中で彼は唐突に声を出した。

「なあ、キリト。お前ってベータテストの頃からアルゴのこと知ってるんだよな？」

「ん？まあな。世話になってたよ。」

戦闘が終わり、キリトとアスナの家でゆっくりしていた頃のことだ。アスナはキッチンで料理を作っていますます夫婦みが増してきている。

「あの、さ。俺ってアルゴと釣り合ってるのかな？」

「…………… 初めてだな。俺に面と向かって弱音言うの。」

「初めてじゃねえよ…………… 多分。だけどな、今回、アルゴが夜な夜な電気をつけて色々とか紙に書いてるのを見つけてな。夜、トイレに起きた時に見たんだよ。そしてらな。びっしりと情報が書き込まれてた。死銃の声の特徴、被害にあった人達の共通点。」

まとめていたのだろう。今までの情報でなにか掴めないか、手探りで。デスゲーム時

代にもやっていたのを何回か見た。

「それ見て自分は何呑気に寝てんだ？ っつてな。自分の大切な人が身を削って努力してるのに無関係じゃない俺は頑張ってる気になって全部アルゴに押し付けてるんじゃないかって思った。」

「自己嫌悪か？」

ハキは黙った。顔は下を向き目元は見えない。アスナには秘密の内容だが、正直キリトは自分よりアスナの方がこの悩みは適任だと思った。だからアスナが戻ってきた時にはもう所々を隠して事情を話していた。

「……………ハキくんは今までアルゴさんに何を貰ってたの？」

「え……………？」

「好きとかそういう言葉だけでなく、行動でも行為を伝えてくれていたと思うの。」

静かにそう淡々と話すアスナは紳士にハキの目を見て向き合っていた。

「それどころか、好意を通り越して愛すらと貰っていたと思う。好意は見返りを求めるものだけど愛は見返りを求めない。アルゴさんから求めてきていないのならそれはもう愛だよ。」

ハキの脳裏に今までのアルゴが再生される。

「ハークン、ありがとう」はにかんだ満遍な笑顔で

「さすがハーくんだな！」何故か自慢げな顔でにしし……と笑いながら

「たまにはオネーさんに甘えてもいいんだゾ？」慈愛に満ちた、俺の事を心配するような顔で

『なんで？』

そんな疑問が頭に浮かぶ。全てはアルゴから貰っていた献身的な愛だった。ハキを愛する一人の少女だったから。だからその疑問が深くなった。俺のどこがいいのか？俺はそれに何を返せているのだろうか？そんな疑問が頭の中で暴れる。

「これで悩みが晴れないなら……多分、ハキくんは自分を騙してるんだよ。例えば……自分に自信がないだけとかね。」

「……ぞとと言うようにアスナは言葉を並べてハキを追い詰めていく。

「自分は仕事をしていない。自分では釣り合わない。これってさ、自信の無いだけだよ。ね？」

「ち、ちがッ……」

理由も考えも何も無く反射で否定しようとしてしまう。

「一言で言うね。ハキくんの悩みは贅沢だよ。」

「ッ……」

「普通の人だったらそんなふうには考えない。貰える好意や愛は貰って返すなんて考え



ない。その関係を維持しようと考えてそのまま時を過ごす。でもね、ハキくんはそれを問題だと捉えた。すごいよ？尊敬するし偉いと思う。」

アスナは少し微笑みながら話した。

「その性格を繊細だと言う人もいるけど、私はそうは思わない。相手を真剣に考えて、自分から変わろうとしてみる証拠だもん。」

1呼吸置いて少しお茶を飲む。

「男の人は分からないけど、女の人が愛を示すのは怖いし勇気が要るんだよ。この人は大丈夫、信じて大丈夫って確信がないとダメなの。」

アスナはキリトをちらつと見る。

「それに、アルゴさんもそういうハキくんの優しい所も好きだと思うよ。1番は話し合ってみるんだけど男の人って変なところで意地っ張りだしね。」

「いてっ……………」

アスナは隣にいるキリトの脇腹を小突いた。

「うん。ありがとう……………」

少し楽になったかもしれない。自分なりに接すればいいとわかっただけでも良かった。

「……………」

「……………」

「ん？どうしたんだ？」

「いや、泣くとは思わなくて……………」

アスナが困った顔をしてキリトはただ単に驚いている。そして問題のハキは……………

「あれ、ほんとだ…………… ツ…………… アスナ、ありがとう。キリトお前、いい嫁持ったな……………」

「よ、嫁ツ?!?え？あ、いや…………… / / / /」

「だろ？自慢のパートナーだ。」

そんなふうには惚気も見れたところで俺はある疑問を提示する。

「ところで料理はどうしたんだ？」

「あ……………」

「つてなことがあつてな。まあ、ハキは自分にはもつたないって思うくらいにはアルゴの事大切に思ってるし感謝してた。」

「そう…………… そう、なんだ……………」

あからさまにほっとした顔で胸の近くに手を固く握るアルゴの姿を見て力になれたか？と少しキリトもほっとした。

「所で……： そんなこと思ってたなんてナ。ハーくんのやつ、オイラが魅力のない相手を好きになる位軽い女だと思ってたの力……： 説教だナ」

一瞬で悟った。やらかしたと。

元々ハキに口止めされてた内容だけにアルゴがハキを怒ることはキリトにも被害が行く。

「そ、それは勘弁してあげても……：」

「ン？もう一回言ってくれるカ？キー坊。」

「い、いや、なんでもないです……：」

アルゴの背後に見える黒いスタンドから目を逸らしながらハキにエールを贈る。

南無  
なむ

## 22話 即興コンビネーション

さてと。どうしたものか……………

「敵よ。12時の方向。」

「あ、ああ……………」

横でスコープを覗いて周りを索敵するシノン、当たり前のように言うが、あの長い銃身を出して覗くその姿は……………

「アンバランス……………」

「なんか言った？」

「いえ……………」

どこでも男女では女の方が強いのだ。これはホントなのだ。考えても見てくれ。クラスで女子に文句を言う。女子泣く。そしてクラスの女子に言葉で滅多刺し。背筋が凍る思いになる。だが、男子は変なプライドのせいで泣かない。女子がどれだけ男子に悪口を言おうと許される。学校で教師がそれを発見しても男子が女子に言った場合鬼のように怒るのに女子が男子に言ったとしても注意だけだ。つまり……………

「男尊女卑……………ではなく、男卑女尊の社会なのだッ！」

「はあ……………」

ため息をつかれた。その点、まあシノンはクールだし、言っちゃ悪いがクールな人って学校で一人でいるイメージ強い……………」

「危険は少ない……………」か？」

「何バカのこと言ってるの？あまり変なこと言っていると両腕と胴体にグレネード括りつけて特攻させるわよ。」

うん、十分きついわ。なんなら集団よりダメージでかいかもしれない。心がえぐれた。逆らわないようにしなければ行けないな。うん。そう、俺は犬、忠犬だ。そう……………俺は……………犬……………」

「ワンツッ！」

「……………」

無言でグレネードを手に待ってこちらを見据えてくるシノン。さすがにここまでだと思ひあつさりと負けを提言した。

「待って?!いや、待ってくださいッシノン様!か、勘弁をッ!」

「ちようどこから50m先に敵が居るわ。近いわね。そういえば近接……………得意だったわよね?」

般若が見える。ついアルゴにするようになって煽ってしまった。それが運の尽

きだったようだ。

「え？う、嘘でしょ？ぎ……………ぎやあああああああああッ！」

悲痛な悲鳴の元、4つの爆発の音がフィールド上に響き渡った。

「うっ……………ひ、酷い……………」

「犬なら言うことを聞きなさい。」

「わ……………んじゃないです。ゴメンナサイソウイウコトジャンイデスネ。スイマセンデシタ。ダカラ、グレネード特攻だけは勘弁を……………」

すつかり俺は調教されていた。半分ノリなのだが、どうもこのノリはシノンに受けが悪いらしい。どうも難しいな。場を和ませようとすればきつくなる……………」

「……………そんなに私怖かった？」

「それはもう、背後に般若の化物が……………」

気づいた時には遅かった。シノンはずいぶん冷めた顔でこつちを見ていた。だがその雰囲気もすぐに霧散し、シノンが深いため息を出す。

「はあああ……ほんとに……いや、なんでもないわ。自覚はしてるから。」

そう言つてスコープを覗き直すシノン。それを横目にボソリとハキは言う。

「ふむ……でもそんな性格も嫌いじゃないけどな……」

ボソツと吐いたその声はシノンには届かなかつたようだ。まあ実際嫌いじゃないつただけで好きつて訳でもないからこつちとしても複雑なのだ。ただひとつ言いたいことは……

「クールにも色んなタイプがあるんだなあ……」

我が娘、ユキとシノンとを較べてしみじみ思う。口数が少ないか、性格が冷めているか。それだけの違いだがそれでも勉強になった。

「にしても……シノン」

「なに？」

「君、何歳？」

デリカシーも何もあつたものじゃなかつた。真剣な顔をしながら聞いた。彼女の顔はどんどん赤くなつて行き、無言で体を起こす。

「それが君の最後の言葉かしら？」

「ち、ちよつ、タンマ!!!ヘカートはやりすぎだろ?!お、おまつ、俺トマトケチャップになるぞ?!」

「なれば?」

もう般若どころじゃなかった。悪魔だ。正真正銘の悪魔。小悪魔?そんなの知らん。ただの悪魔だ。

「つ……………はあああああ……………15よ」

「なんだ。中学生じゃねえか。」

「ツ……………こんのツ」

年上感があるこの性格で圧倒的年下は反則だろうよ?俺のストライクゾーンはアルゴと決まっている……………ん?なんか話が変な方向に飛んだな。

「いつまで、俺は待ってればいいの?」

「あ……………」

後ろには敵が行儀よく三角座りで待っていた。咄嗟にホルスターからハンドガンを抜いて発砲。見事に相手はポリゴン片になりました。

「……………やったわ、この人やったわ……………」

「え……………いやつ、咄嗟にうつちやつただけ……………ご、ごめんなさあああああ

い!!!!」



全力の謝罪が響き渡ったとき。

「アルゴ、情報を買いたい。」

「珍しいナ？最近ご利用はなかったダロ？」

草むらでハイドしている中でキリトはそう声を上げた。第一、アルゴはこう見えて身持ちが硬い。信頼出来ない相手に客以上の行動をするかと言ったら否だ。それはキリトに対しても同じだった。アルゴはハキがいなかったらソロで行動してどつかでおっちんでたかも。と公言してるのだ。

「俺の質問を当ててくれ。」

「はあ？なんだよソレ。情報でもなんでもなイ」

「いいから」

「……………ハキの、ことか?」

ほんとに、この旧友は俺の事を理解してくれているらしい。

「ん〜内緒、だな。」

「はあ?!なんだヨ、ソレ!」

心底不思議だと言うような表情になり、そして飛び出して行った。

「アルゴ! バックアップ頼む!」

「え?! イヤイヤ、突っ込むのかヨ?!」

「だいたいあんたはッ「シッ……………」ッ?!」

ふざけた顔から一気に真剣な顔になり、人差し指を自分の口に持っていき、シノンの言葉を止めた。

「敵さんだ……………」

そう小さい声で教えてやる。走って場所を移動しているのだろう。武器を閉まって全速力で森の中を駆け回る姿があった。

「………… シノン、ヘカートをアイテムボックスの中に入れておけ。この距離でライフは重荷にしかならん。」

ギヤーギヤー騒いでいたおかげでもうその敵との距離は50メートルまで接近を許していた。

「でも、この距離ならまだ狙撃できないからしまえ。お前は俺が守るから。」ツ…………  
「シノンはサブマでバックアップだ。カウントするぞ…………… 3、2、1」  
『1』と言う寸前でそれは起こったのだ。

敵との距離は約20メートル。目算でそれを測った俺は飛び出そうとした。その瞬間。左の視界にある地面に砂埃がたった。それと同時に青いスパークがとほぼしる。それと同時に力が抜けたかのように敵が膝から崩れ落ちた。

「ツ…………… スタン弾……………」

「麻痺薬みたいなものか……………？」

そう聞くと隣で伏せている少女はコクンと頷く。そこから約15秒。黒いローブを着たアバターが出てきた。その顔には……………

「骸骨……………の仮面？」

「ザザか……………」

その黒ローブの男はわざわざハンドガンに持ち替えて空中に浮かぶ中継用のカメラに向かって口を開いた。その声はどす黒い物のように耳に残る声だった。

「これが死銃の力だ!!!」

はつきりと聞こえた。

パンつと乾いた軽い音と共に弾丸が吐き出され、胸へと吸い込まれて行った。

「相手の勝ちね。」

いや、そうじゃない。何故かわかった。そしてそれはその通りになった。勢いよく起き上がり、銃口を相手に向けて引き金に指をかける男。だがそれを見て尚、動かない。ザ。2人の間にテロップが出る。

《回線切れ。》

有り得ない。全くもって有り得ない。大会という大事な時に不安定な回線を使っているゲームマーが何処にいるだろうか。あまりにも不可解だった。

「なっ?!……………」

「偶然としては出来すぎだ……………」

回線切れが起こって当然だ。とても言うような行動。その前のセリフ。あの銃にわざわざ持ち替えた意味。ザザ。SAOサバイバー。

「考える……… かんがえろ………」

……… まず、多分重要なのは銃を持ち替えた点だな。あそこでスナイパーライフル頭にドカツとやれば1発で相手をダウンさせられてた。

どうしてもハンドガンじゃないとダメだった？

いや、そもそもスタン弾なんて高効果のアイテムが安いはずがない。そんな高い金を払ってまでする目的ってなんだ？ ハンドガンってあんな音か？ あんな乾いた音、運動会のピストルの合図でしか聞いた事が………

「いや……… それだ。」

ピースが繋がった。答え合わせは………

「ハキー！ あいつ、逃げるわ。撃つ。」

「っ、待て………」

思考を中止する。シノンの功をあせる声が聞こえたからだ。だが相手は腐つてもラフコフ。予測線がなかりうとも躲すだろう。その実力がなければとつくに討伐されているはずだ。

「ふう………」

「……… なんてとめたの？」

当然の疑問だ。一般的に見ればさつきのは好機以外の何者でもなかっただろう。背

中をスナイパーに向けていて、なおかつ、風は自分たちの後ろから吹いている。だが足らない。だからこそハキはこう答える。

「通じないから。」

「ツ……私の狙撃が「そういうことじゃない。」

「言い方が悪かった。訂正するよ。SAOサバイバーには不意打ちは通じない。」

そう。普段、見張りを立てるとはいえ野外で野宿をする時、誰かが寄ってきたことを敏感に察知しなければいけない。まだ回路結晶が出てこない頃、ランカーたちの寝泊まりは野宿が多かった。安全地域で休むのはもちろんだが多くははまだ路上で寝るという危険性を理解していなかった、というのが理由。だが安全地域とてモンスターの声はする。怖いという気持ちもあり、外ではゆっくりと休めないのだ。だからといって宿を取るにしても最初の頃には、宿代は痛手。お金が全て無くなるほどだ。

「経験の質が違う…… 命のやり取りを2年間続けてきたんだ。俺らは……」  
「…… ツ、スキヤンが来る。」

シノンには素早く端末を取りだし、ハキは見張りに戻る。もう連携が取れつつあった。元々の相性が良かったのかもしれないが自分の役目がわかつているその動きにシノンは少し眉を動かした。

最初に抱いたのは違和感だ。そこから疑念になり、最終的に不可解へと変わっていつ

た。

「黒マントがない?!」

スキャンに映らなかったことにシノンは驚きハキと同じ方向を見る。姿がないのを確認したハキは立ち上がりとうとするシノンを押さえつける。

「待てー!」

ハキは並外れた情報処理で規則的な自然音の中から歩く不自然な音を聞き分けていた。まだ近くにいと察していたのだ。

「まだいる……」

「いないわよ!あそこに遮蔽物はない。隠れる場所もないの!」

「ツ……いなくなつた……姿が消えた……透明化?」

事前に集めた情報ではそういう効果のものはボスクラスのモンスターしか使わないと言う結論に至つた。特異なアイテムがある?その可能性は捨てきれないだろう。しかしその情報がなかった。VRMMOで、トップを張る情報屋2人の収集能力を持つても把握できないアイテム。さすがに動揺した。

「なん、でツ……こつちに大量によつてきてる。敵が……」

消えかかっている赤い点を見ながらつぶやくシノン。ざつと見るに20は居る。それを見て下した決断は……

「移動するぞ……」

逃げの一択だった。

「ちっ……数が多い！」

「なんでこんなに……」

シノンは自前のサブマシンガンで応戦。俺も片手ハンドガンで片手ナイフで戦っていた。早々に引いた為に囲まれるのは阻止できたが数が多く、シノンとハキは反撃しながらの逃走の最中であつた。

「やつぱりライトセーバーより虚白の方が使いやすい。」

「ーたりめえだ。それより、後ろ来てるぞー」

後ろを振り向くと次々と切り伏せる俺に危機感を覚えたのか必死の形相で銃口を向けてくる姿があつた。それも3人

「やべっ」

そういつたのもつかの間。その敵の真横からぶつとい弾道を描きながら飛来する弾



に3人とも撃ち抜かれていた。

「にやははっ！アルゴ様のお通りだゾ!!」

「その割には何もしてないんだが?!」

飛び込んできた2人の姿をみた瞬間ハキは余裕の笑みを浮かべる。

「遅せえよ!!」

「これでも走ってきたんだ。文句言うな!」

銃弾を軽々しくライトセーバーで弾きながらそう返答してくる。一見、男子は俺だ  
け。敵さんからはハーレム男が女子に助けられているように見えるだろう。つま  
り……

「あいつぶつ殺すツ」「爆発爆発爆発」「爆ぜろ、我が腕かひなの中で……」「美少女さんにん  
だとおお?!」

ヘイトが集まりに集まりまくっていた。そこで俺はいい事を思いついたのだ。

「はっはっは!!!お姉ちゃん!やっておしまい!!!」

「はあ?!…… あんた…… 調子乗るんじや「後でコーヒ一杯」はあ……」

呆れたようなため息を出してからスナイパーライフルを構える。

「はっはっ!!次に、我が親友よ!君に前衛を託そう!!」

「俺は普通なのかよ?!」

え？普通じゃ嫌だった？じゃあ……

「オトコの娘？」

「間違っちゃないけど!!でもなんか釈然としない!!」

注文多いな。そんなこと言うならトッピングつけませんよ？オムレツにケチャップで『オトコの娘』って書くオプシントッピング。

「まあいい!!!そして最後に！我が愛しの嫁よ！やっておしまあああああいい!!!」

「に” やああ?!ちよ、ちよつと放送のやつ飛んでるんだゾ?!そんな大きい声出したら……」

「事実だから問題ないのだア!!!」

ゲーム中の全ての非リアプレイヤーを敵に回した瞬間だった。

「ぶっ殺すツ!」「殺殺殺殺殺殺」「我が腕の中で殺す慈悲もいらぬわ!!ぶっ殺してやる!」「くそがああああああああああ」

さらに怒りによって敵が強化されました。なんかシステムのありえないけど背後に修羅が見える……え？あれ俺ら勝てる？いや、勝つ!か、勝つし?!か、勝てるし?!

「あ、足ガクガクでもか、勝てるし?ビ、ビビッチャネエカラな?」

足ガクガクの歯ガタガタの剣ブレブレでお送り致します。

ービビんな…… よし、ならやる気出る言葉を俺が送ってやろう……… これ、勝た  
なかつたらアルゴに情けない秘密全てばらす。

「おうおう、化け物さんめ……… かまって欲しいのかい？ いいだろう。遊んでやる  
よ………」

ーキャラ変わりすぎだろ……… そんなに嫌なのか？ 今更何を知つても嫌いにな  
るてならないと思うけどな？ あのアルゴだぜ？ー

うるせえー！ そんな問題じゃないんですう！！これは俺の尊厳の問題なんですう！  
そんな言葉を心の中で言いながら体は自動的に動いていた。

使うことがなかった自分のライトセーバーをキリトに投げ渡す。二刀流の完成だ。  
これで鬼に金棒。猫に小判。俺は背水の陣……… ん？ なんか余分なのあるって？ 気  
にしない気にしない。

「さてやりますか。右頼むよ。キリト」

「ツ……… たりめえだ!!! うおおおおお!!!」

10人は残っているだろうか？ 相手もチーミングだ。こつちが不利に見えるだ  
ろう。でも相手が悪かった。

「アルゴ？ キリトに変なことされなかった？ 心配してるフリして変なところ触られた  
り………」



『<sup>ラブ</sup>愛の<sup>カオス</sup>混沌者』と

そしてこの大会を見ていたプレイヤーからはしばらく『女を女に取られた男』という同情の目線に晒されることはまだ知る由もなかった。

## 23話 ザザの手口

「なんだあ！言ってくればよかったのに……」

「お前が早とちりしたんだろ?!」

この味方は自分自身だけのはずの大会。何とここには4人のチーミングがいます。大会外ではだいぶ叩かれているでしょう。しかし……

「いや、ライトセーバー返せよ」

「どうせ使わないだろう？俺に使わせてくれよ。」

「何おう?!シノン直伝！グレネード人間ランチャー!」

「お、おい、ポケットに何入れ……どわあ!!」

ハキはキリトのポケットにピンを抜いたグレネードを入れてキリトを持ち上げ投げ  
る。

ドカアン……

「さ、さすがシノン……なんて凶悪な技を……」

「はあ?!それは私じゃない……とは言えないわね……」

よろよろと帰ってきたすすだらけのキリトが発した言葉を否定しようとした。だが、

先程ハキにしたことを思い出したのか急激に勢いは減速し、釈然としなさそうにしながらも否定を辞めた。

「うっ、うっ……」

「お、おい？キリト？あの、配信のやつ飛んでるんですが？……あの……」

「うっ……ハキに穢された……」

うおおおい?! やりやがったぞこいつ。ゲーム中の男、全てを敵に回す発言を！被害者は俺！おのれえ?! ……キリト……恐るべし！

「アハハ……ハーくん、これからどうするんだ？」

「……トリックが解けたんだ。ザザ……いや、ザザたちが行っている悪事がね。」

そう自信満々にドヤ顔をしながらアルゴに言うど呆れた顔でこちらを見てきた。

決着の時は近い。

あれから俺たちは元の計画通りのチームになり、別れた。

「アルゴ…… お前、このままりタイヤ……」

「するわけないダロ？ 第1トリックが割れたんだから危険がないことぐらいわかる。」

「いや、でも……」

なおも食い下がる。どうしてもまだ確信が持てない。こればかりは情報の裏取りができていないため仕方ないだろう。もしも違っていたら。あの画像の銃弾が本当に人を殺すのならば。そう考えただけで背筋が凍る。

「はあ…… ハキ。私はあなたを信じてる。ハキの情報分析能力の高さは近くで見えた私がいちばんよくわかってるんだから。」

「…… わかった。ならもう言わない。」

ゲーム内ということもあり、本来の口調に戻しつつも名前はプレイヤーネーム。少しカッコつかないなどアルゴも思ったのだろう。少し眉が下がっていた。

「ねえ、ハキ。君は言ったよね？ SAO、最後の攻略の時に。もう二度と大切な人を失いたくないって。」

「…… ああ」

「その大切な人の中に私が入ってるのは嬉しいけど、それは私も同じ。大切な人を失いたくない。大切な人が危険な所に行くのを黙って見てるのはあのとときで終わりにしたんだ。」



見透かされている。俺にまだ迷いがあるのを。アルゴの意見を第一に考えるばかりにその迷いを押し殺していることを。なんて健気だろうか。

なんて思いやりのある人だろうか？ここまで相手を考えられる人などそう多くはないだろう。

そのうえで自分の意見をしっかりと言葉にしている。

「はあ……アルゴは俺にはもつたいない女性だよ……」

「にししっ……ダロ？でもそんなオイラはハーくんと一緒にいたいのだサ」

かなわない。そう何度思ったことか。アルゴの心の内はわかるつもりだった。けどこんなことが毎日起こる度に思い直すのだ。理解しているのではなく理解されているのだと。

だから俺は彼女が好きなのだ。

最初は一目惚れという理由もない『好き』だったかもしれない。だが今となってはその一目惚れは間違いではなかった。正解かは分からない。でも最適解だったとは思う。だってこんなにもアルゴ…… 朋のことを愛しているのだから。

「…… 気を引き締めるぞ」

「りよーかい、ハーくん」



すぐさま赤い予測線が視界に出てくる。これが近接戦。銃で相手がまともに撃ってくる近接戦は2度目のハキ。初戦闘以外、速攻でねじふせてきたが故の弊害だった。このゲームでの経験が足りない。

あくまで天才《虎白》の指導の元、訓練した凡才なのだ。キリトのような適応能力を持つている訳でもない。飛び抜けたセンスや技術がある訳でもない。

それ故に

反応が遅れた。脇腹に1発貫ってしまった。次弾からは剣で弾くことが出来たがラスポスが残っている状態でHPが削れるのはまずい。

——腕！肩！次は右足ッ！——

脳内に響いてくる虚白の指示の元動く。そのサポートがあつたおかげか、ワンマガジン、数発受けただけでとどまる。

「クソっ……… ツらあああ！」

「チッ……」

虚白を投げる。それに驚いた敵はリロード仕掛けていたマガジンを離して回避を行う。

「へえ…… お前、サバイバーだな」

「……… だったらなんだ？お情けってか？」

俺の剣を投げる攻撃。あれはSAOではタブーだった。元々ある装備枠のメインウエポンを捨てるなど愚策も愚策だ。ソードスキルも使えなくなる上に完全に自分が無防備になるからだ。ピック如きで武器を持っている相手やモンスターを相手取るなどあのデスゲームでは誰もしなかった。

だがハキは違う。

最初からソードスキルなどに頼ってはいなかったハキは相手を切るためだけに自力で戦ってきたのだ。攻撃力バフはかからない。むしろ悪手なのにも関わらずどうしてそこまでソードスキルを使わなかったのか。

それは培ってきた自分の剣技が錆びるからだ。

決められた剣筋を辿るだけの剣で何が出来る。やがて壁にぶつかる。ありえない。本当の剣とは自由自在なものでは無いのか？決められたレールなどない。

水のように不確定に斬る。それが虚白の極意だ。

フォトンソードは展開にラグがあるッ！

そう思考したのは一瞬だった。相手がフォトンソードを取り出したが故の思考だったがハキは迷わずビーム部分が出てくるであろう場所に向かって剣を振り下ろす。

「なッ?!」

結果、相手の腕が切れた。展開は間に合わずガードは出来ずにその先にある腕を切り

落とされた。部位欠損。そのバットステータスは重い。特に剣を振れる利き手という点が痛いだろう。

「チツ……………」

腰に手を伸ばすが呆気なくハキが心臓部分を貫いた。後ろで見ていたアルゴも当然と言う表情だ。

「経験が浅いな。でも強くなるよ。俺なんかよりも……………」

S A Oのランカーの1人であったハキがそう言った。アルゴは否定したかったが空気を読んで口を噤み、私の前だからカツコつきたいのだろうと思考を読む。途端に愛おしく見えてくるのだからアルゴも相当だ。

「アルゴ、移動するぞ。」

「オーケーダ。ダーリン?」

先に行くハキの顔は見えないが耳が赤くなっているのを見ると照れているのが丸わかりだ。もう付き合い初めて結構経つものにも関わらずこういうところはウブなのは変わらない。

V Rは感情表現が大袈裟だということに感謝しながらアルゴはあとを着いて行った。

「ハキが言つてたことは本当だったみたいだな。」

「そうね。」

暗い中、キリトとシノンの2人は腹ばいになりながらそうつぶやく。その姿はまるで美少女の同士がお喋りしているようだが騙されてはいけない。片方は男だ。

端末に送信されてくる電波は洞窟の中までは届かない。そんな簡単な知識が何故出回つてなかつたのか。それは一重に試す人が居ないからだ。洞窟とはグレネードを投げ込まれれば瞬殺。良くて瀕死だ。そんな危険な賭けを大会で出来る人など居ない。

キリトが洞窟の外に出て端末を見てシノンがスコープで見張り。適切な配置だった。

「にしても、ステイブン……あと2人か……一緒にいる点はハキとアルゴだな。」  
「ええ。にしても確かに強敵だけどやけに神経質じゃないかしら?」

探りを入れてきた。キリトももう隠している必要は無いのではないかと思ひ始めてきている。このゲームに潜入してほぼ一緒に行動している彼女。否応も無くこの事件にもう巻き込まれていると言つていい………巻き込まれる?」

そこまで思考を進めた瞬間、ある仮説が頭の中に浮かぶ。

「シノン!……あ、いや、すまん………何か、何かハキは言つてなかつたか意味がわ

からないことや気になったことでもいい」

シノンがビクツと反応したことで自分の声が思ったよりでかかったことを悟る。咄嗟に謝ってから質問を続けた。

「え?と、突然言われても……」

「些細なことでもいい!」

いきなり詰寄るキリトにシノンは少し身を引きながらもその必死さに考えざる負えない。それが功を奏した。

「…… そういえば『偶然にしては出来すぎだ。』っていきなりつぶやいて考え込んだ……」

「いつだ?」

「ちようど骸骨の仮面と戦ってる相手がハンドガンで1発打ち込まれたあと直ぐに回線切れになったんだけど……」

それだ。そう思った。キリトの中でもパーツが揃ったのだ。

「シノン、大会の景品の住所打ち込んだよな?」

「え、ええ…… まさか家を回って大会出場者のアミスファイアの電源を切って回っているって言うの?それこそ無理よ。だってアバターを操作しながら侵入なんて……」

「1人ならな。」ツ……………」

シノンにはチートを疑っていた。VRMMOにおいてその可能性は限りなく低かった。その原因としてリソースのかたよりのある。

本来、部屋一個分ほどの機器が必要なナーヴギア。その小型化をするにあたって避けて通れなかったのが処理量の削減だった。

そのほとんどをサーバーに委ねることで脳波の信号を送るだけでよくなったのだ。チートとはプログラムを書き換える行為。つまりサーバーを書き換えるということになり、それは不可能に近い。

だがそれをシノンとキリトが知るわけもない。

ではなぜキリトが答えにたどりつけたのか。それは一重に菊岡の情報だった。

「……心して聞いてくれ。ここまで俺らと関わっているシノンはもう他人では無い。」説明が始まった。回線落ちした人が全員心臓が止まったことで死に至っているという事実、そしてその魔の手を選定するのはあの大会の大会の住所記入だと。

「そして多分やつは標的にシノン、君も入っている」

今、一人暮らしのシノンの部屋の中に誰かがいる。隣ですつと大会のモニターを見ながら。ただ淡々とその時を待ち続ける姿。それを想像した途端、表しようない恐怖がシノンの体を駆け巡る。

「うあ………ひっ………ああ………うあああああッ！「シノン!!」ッ！」



「アミユスフィアには脳波の異常を感知すると自動的にログアウトされる機能があるんだ！今戻ったらそれこそ危ない！」

見られた相手が逆上して反撃してくるかもしれない。いつもは気丈に振舞っている彼女。だが本物の死の恐怖の前ではこんなにも取り乱す。真正正銘、ただの少女だった。

守れる者が守る。これは必然だ。そして義務だ。綺麗事かもしれないが在り来りな言葉だけではこと足らない。そんな思考に背中を押され、気づけばシノンの頭を撫でていた。

「え……」

「命のやり取りが怖いのはわかる。本物の殺し合いだ。いや、一方的な殺しだな。だが、それは俺らの領分だ。S A Oで2年間も命のやり取りをしてきた俺らの。」

「……」

「シノン、自殺してロビーに戻っていてくれ。あとは俺らに任せろ。ロビーに行けばユキが居るだろう。その子に話しかけるといい。小さいが頼りになるぞ？」

そう優しく微笑む。その姿に正気に戻された。本来の彼女の性格が顔を出す。

下に見られていると。

保護される対象に見られていると。

それでいいのか？

そんな問いがシノンの心の中を流れる。先程までの自分を恥じる。みつともなくうずくまって、目の前の彼に縋って。まるでか弱い少女じゃないか？と。

だがそれは他ならない彼女自身が否定する。私はか弱くないと。殺しなんて怖くない。と。だつてもうしてるじゃないか。人殺しなんてと。

「ッ……行く。」

「え？」

「ついてく。じゃないと私は弱いつて自分で証明することになる。それは嫌。」

自分の意見を自由に言ったのは初めてだった。それは彼を信用しているのか？それとも場の雰囲気流されている？

だが、どつちにしろ悪い気分ではない。

怯えが消えてやる気の溢れるシノンの表情を見てキリトは説得を諦めた。あの表情は何度も見たことがあったからだ。

（……もう、止まらない……か。）

覚悟を決めた者の目。それは決まってみんならギラギラしている。やってやるぞと。そんな意思がむき出しになるのだ。

「……わかった。なら、シノンは後方のバックアップだ。近接戦は俺がやる。」

「ヘカートの弾が当たるわよ？」

先程のうろたえようはどこへ行つたのだらうか？片方の頬を釣り上げてこちらを煽つてくるシノン。それを見てキリトも覚悟を決める。

「ああ、望むところだ。全て斬り避けてやる。」

薬殺なんてさせない。そんな覚悟をキリトは再び固めるのであった。

決戦の時。それは唐突だった。もう大会開始から1時間。参加者の集中力も切れて隙が出てくる頃だ。

その中で彼らは待つていた。洞窟の中でじつくりと。

「ツ……上……」

崖をくり抜いたような構造の洞窟。天井と崖上の厚みはそんなにない。だからこそだ。聞こえた。

「……2人……」

「上ね。」

このままだと中距離から接近戦になるためヘカートは使わずにサブマで応戦するた  
めホルスターから抜く。キリトは両手に剣だ。

「ツ…… 目の前から敵影！」

シノンから小声の鋭い指示が聞こえる。正面を見ると黒装束の骸骨仮面だった。正  
真正銘、ハキが言っていたラフコフのザザ。

「ツ…… チツ…… シノン、応戦する！」

もう迷う必要はなかった。生き残っているのは5人。キリトとシノン。ハキとアル  
ゴ。そしてステイブ。決まりだった。

「ツはアアアアアアアアアアツ！」

キリトが切り込んだ。

崖上。視界が広いこの位置はザザを探すのにはピッタリの位置取りだった。アルゴ  
はVR適正が高い。視界は俺以上にクリアに見えるだろう。

「アルゴ…… 見えるか？」

「見えないナ。というか平和以外何も無いヨ。」

ここにとどまってからもう結構たった頃だろう。敵影がないことを見ると数は結構減ってきているらしい。

「さて……どうするか」

このまま待っているのも手だろう。しかし動かなければ次のスキャンで位置バレする。そうすると不利になるのはこっちだ。

「ッ……下?!……」

気づいたのは偶然だった。金属と皮が擦れた時に起きる独特な音。それを聞き取ったのだ。多分下にいる敵がホルスターから銃を抜いたのだろう。

「……」

静かにその時を待つ。ここは崖。飛び込んでくるなら正面からしかない。後ろは気にしないでいい。

冷たい風が頬を垂れてきた汗に当たり肌が冷える。

「……」

その時は来た。下で動く音が聞こえた。そして次に聞こえた音は……

剣戟の音だった。